

白い雲

プロローグ

初秋の風に吹かれながら・・ふと少年は空を見上げた・・
今にも雨が落ちそうな天気である。

山間から、少し下った平野部、のどかな稲穂の垂れ下がる季節・・少年は急ぎ足で家に向かった。

「駄目でした・・一個は・・ええ・・ええ・・ええ・・丈夫に一羽だけでも育ってくれば・・」

彼の名は香月一男・・地元E高校に通う、レース鳩愛鳩家であった。

電話の相手は彼（香月）の所属する、競翔連合会の副会長、支部長でもある川上真二氏だ。

電話は続く。いつもそうであるように、階段に座り込んだままの姿勢で。

「はい・・そうですね・・ええ・・あの系統でR系統（栗）に出たらな、そう思っています・・はい・・
順調ならば五日目にリング（足輪）装着しますから、その時にでも、又・・・はい・・失礼します」

やっと電話を置くと、香月は「ふーっ」と深いため息をついた。今にも降り出しそうな空・・昨日

まで夏を引きずった上天気だったのに……。

香月が何故、競翔に夢中になっているのか……この孵化した子鳩の電話をしているのか……
物語は三年前に遡る。

彼が中学生に通っていた頃、学校に一羽の鳩が迷い込んできた。その鳩は肩がだらりと垂れ下がりが、翼を痛めていた。ほとんど飛ぶ事も困難な状態にあり、薄汚れた体だが、非常に俊敏そうで、理知的な瞳をしたその鳩が、一目で神社仏閣に居る「土鳩」とは違うように思われた。小さい時から動物好きなのは、すぐさま鳩を抱きかかえると、不思議に鳩は全く暴れもせず、彼の手に収まった。

見れば、左足には鳩競翔連合会の足輪、右足にはピンクの番号の入ったゴム輪、更にそのゴム輪の下には愛鳩倶楽部、川上の住所管が装着されてあった……絹の様なふさふさした羽毛、ルビーのような眼をしたこの鳩がとても大事な鳩であるように感じた香月は、すぐさま、近所の動物病院へ連れて行った。

「うーん、私も動物病院を開設して長いが、鳩を診るのは初めての事だよ……よほど大事な鳩なんだろうね。人間で言えば、瀕死の重傷だ。最善を尽くして見るが、治っても恐らく以前のように飛べないだろうね……うん、一週間ここで治療しよう。預かっておくよ」

香月は急いで帰った。そして、ごそごそと自分の家の隅でやり出した。

「何やってんの？」

隣に住む、二つ違い年上の芳川浩二が、声を掛けた。

「鳩小屋」

「鳩飼うの？」

「うん」

香月があまりに楽しそうに言うので、兄貴分立場であるその芳川も、香月の鳩小屋作りを手伝った。一人っ子の香月にとっては、物知りで優しい面倒見の良い芳川は、本当の兄のような関係だった。

*我々が一般に眼にする鳩だが、姿形は同じでも三つに大別される

●土鳩・・・神社、仏閣に群れている鳩・・・元々は伝書鳩が野生化したもの

●鑑賞鳩・・・普通一般に飼われている鳩で、祖先はカワラ鳩

●伝書鳩・・・軍用に通信手段として改良された鳩で、帰巢本能の優れたもの

・・・・・・・・・・・・・・・・

つまり、香月の飼おうとしている鳩は、この伝書鳩であり、恐らく優秀なレーサー（競翔鳩）であろうと思われる。

だが、まだ芳川は、香月の飼おうとしている鳩がどのような種類なのか、まだ分からない。小屋だけ

はこの日の内に完成していた。

一週間後・・・香月が、嬉々として家に帰ってきた。両手には鳩が大事そうに抱きかかえられて・・・

「おっ・・・鳩がとうとう鳩舎に入ったな・・・」

兄貴分の芳川も気になっていたのか、鳩小屋を覗きこんだ。

「ほお・・・一男・・・伝書鳩じゃないか、こんな鳩を飼うつもりだったのか」

芳川は聞いた。

「う・・・うん」

香月は少し、齒切れ悪く答えた。

「怪我してるけど、凄い羽毛がきらきらしてる。凄い良い鳩なんじゃないかなあ・・・誰かから貰ったのかい？」

芳川の眼にも、この鳩が凜とした高貴な気品を感じたようだった・・。

「実は・・」

香月は理由を話した・・。

「そうだったのか・・」

彼は、それ以上の事は言わなかった。香月の喜びようを見て、この鳩に心奪われたその気持ちが理解できたからだ。もう少しこの鳩が元気になったら・・鳩の左足に装着してある住所管からして、車で三十分も走れば飼い主の所へは連絡できる距離だ。

そして・・日数はどんどん経って行った。香月が学校から戻ってきて、毎日鳩小屋の前に立つその姿を見ながら、芳川は悩んでいた。

・・恐らくこの鳩は優秀な競翔鳩に違いない。元気を取り戻した今、輝くような羽毛とその凜とした高貴な姿は、本当の飼い主である川上氏もきつと心配されているであろう・・と。

彼は意を決して、香月に言った。その気持ちが痛いほど分かるからこそ、手放すタイミングをこれ以上延ばしてはならない。香月が鳩を好きになったのなら、川上氏に申し入れて、分譲して貰える鳩がもし居れば、一緒に頼んでやろう・・そう考えた。

「一男、返さなきやこの鳩を・・・飼い主に・・・」

「・・・うん・・・」

「一緒に行つてやるよ」

「うん・・・」

この鳩に心奪われた香月の様子に、芳川も辛かったが、彼がダイヤルを回した。

「はい！川上精肉店ですが」

電話に出た声は非常に明瞭で、商売人らしい口調でありながら、どこかに優しい響きを感じさせた。芳川は正直に香月が学校に迷い込んだこの鳩を治療し、そして、元気になったら連絡しようと日延びしながらもこの鳩に心奪われ、今日まで連絡せずに居た彼の心情を話した。

「・・・そうでしたか。良く連絡してくれましたね。有難う、香月君が優しい少年である事に本当に感謝します。間違いなくその鳩は当家の大事なレーサー（競翔鳩）の一羽です。君が香月君の心を代弁してくれて、その心情も良く分かります。どうでしょう？もし、よろしければ、飼っていただけませんか？」

「えっ・・・本当に！」

芳川は予想外の言葉に驚いた。

「勿論です。そんな心優しい少年なら喜んで。どうでしょう？今度の日曜日にでも私の家に遊びに来られますか？」

「は、はい！」

もっと早く勇気を出して言えば良かった……。芳川はそう思った。

そして、鳩小屋の前で、やや元気を失っている香月に、その事を伝えた。

香月は恥ずかしくなった。自分の身勝手に日延びした連絡を咎めもせず、電話の相手を、そのまま家まで招いてくれると言う、愛鳩家の素晴らしい人柄に感動したのだ……。

出会い

人と人との出会いの中で、どれほど自分の心を揺るがす事があるうか・・・どれほど感激できる事があるうか・・・自分が相手にとつてどれだけ影響を与える事があるうか・・・人と人との出会いはまさに運命・・・素直で純粹に生き物と対して接してきた香月と、周囲の人望も厚く、優れた競翔家、川上氏との出会いはこうして生まれた・・・。

着いた所は、香月の家から芳川のバイクで、三十分程の所にあつた。表通りの、割りとにぎやかな通りの筋を二つ入った、狭い商店街の一角に「川上精肉店」の看板が見えた。四、五坪程のこじんまりして明るく、清潔そうな店内には客の姿は無かつたが、感じの良さそうな中年の婦人がその中に立っていた。

芳川が、

「川上真二さんはご在宅でしょうか・・・電話した芳川と申しますが」

婦人は笑みを浮かべ、

「ま♪、貴方が芳川さん。はい、はい。いらっしやい。そこの横を通つて裏に回つてね」

喜色満面で、香月にもここにこしながら婦人は見守った。香月はやや顔を赤らめながら、頭を下げた。

二人が裏を抜けると、立派な二階建て鉄筋の家があり、約三十坪ほどの広々した庭には松や植木が整然と並び、その一角には鉄筋の物置の上に、約三坪もある立派な鳩舎が二つ並んで建っている。二人は驚いてそれを眺めていた。粗末な香月の鳩舎など比べ物にならない立派な創りだからだ。一方の鳩舎には、四方を金網で囲んだ遊び場らしいスペースが設けてあるし、その中にはのんびり羽を伸ばした数羽の鳩が見える。鳩舎の外には無数の鳩が群れていて、どの鳩も素晴らしい健康的な美しい姿で、眼の前を飛び回っていた。

ようやく二人は玄関のチャイムを押した。

「はい」

中から、若い女性の声が聞こえてきてドアが開いた。思わず香月は「ドキッ」とした。非常に整った顔の色白美少女は、ほぼ同年齢であろう。そのまま何も言えずに立ち止まる香月の横から、芳川が言う。

「あの・・芳川、香月とも申しますが、川上真二さんはご在宅でしょうか」

「はい！お父さん、芳川さんと香月さんが来られたわ」

早口に少女は言うのと、小走りに奥に入って行った。すぐ、頭が少し白くなった中肉中背の、品の良い

目元に優しそうな川上氏が玄関に出てきた。電話の応対そのままに、いかにも優しそうな思った通りの人となり、芳川も香月もほっとした。出会い・・・とは当にこの事であろう・・・香月は、一目で川上氏に心を惹かれるものを感じたのだった。

「はじめまして、先にお電話しました芳川と申します。今日は香月君と一緒に邪魔させて貰いました」
「いらつしやい。良く来てくれたね。さあ、さあ・・・中にお入りなさい」

優しい笑顔そのままに、二人は部屋に案内された。そこには数え切れない程のトロフィーやメダル、賞状が並び飾られていた。書棚にも、これまたぎつしりと鳩に関する書物がずらりと並んでいた。2人は驚く目できよろきよろ見回していた。その様子に、

「ははは。驚いたでしょう？この部屋は私の鳩部屋と言うんでしょうか、本当は応接間として創つたのに、今では鳩に占領されてしまった。私自身は、こう言う飾りは余り好きでは無いが、やっぱり自分が競翔した鳩達が遠い距離を帰ってきて、それが入賞や優勝をしたりすると、隅っこに追いやるのは申し訳ない気持ちになるんですよ」

・・・ああ、この人は本当に鳩が好きなのだ・・・初対面とは思えぬほど2人は川上氏の話に引き込まれ、これまでのいきさつや、色んな話を聞く内、こんな人ならもつと早く連絡をすれば良かった・・・香月は

思った。

鳩用のバスケットに入れて連れてきた鳩を、川上氏に香月達は見せると、川上氏の柔和そうな顔が一瞬鋭いものに変わった。その瞬間には、香月も芳川も少しどきつとしたが、その大きな手は優しく鳩を包み込み、そして丹念に両手で羽を伸ばしたり、指先で触診するように鳩の体を触ったりしていた。やがて鋭い顔はにこやかな顔に戻り、

「良く・・・これだけの傷を治してくれた・・・物言えぬ鳩に成り代わり、深く感謝を申し上げたい。それもこんなに短期間で。君達がどれほど大切にしてくれたのか、充分に分かりました。有難う・・・この鳩が再び大空を自由に飛びまわる事は無理かも知れないが、こんな飼い主ならきつと大事に飼って貰えるだろう。」

香月も芳川も顔を赤らめた。ここまで言って貰えるほど大した事を自分達はやってないと思ったからだ。

そして、川上氏は書棚から一枚の血統書と、数枚の賞状を取り出した。

「これが、この鳩の血統書と、この鳩が入賞した賞状です」

二人は、目を合わせてただただ驚くばかりだった。川上氏は言葉を続けた。

「これは、競翔鳩ならずついてる血統書です。君達も幾らかは知っていると思うが、競翔鳩は通信に使われていた伝書鳩を更に幾世代も交配を重ねて、競翔と言う淘汰の中で残ってきた優秀な血を改良してきた、馬で言うならサラブレッドなのです。この鳩に装着している足輪は、唯一羽を世界中で証明するもので、血統書とは鳩の素性を明らかにするものです。……」

話に夢中になる川上氏の熱い言葉と、鳩に対する強い愛情を感じ取った香月だったが、それ以上にこれほど大の大人が熱中する鳩レースとは……興味を覚えた。同時に、鳩を飼育する責任も川上氏から教えられているような気がしていた。

この出会いと、川上氏の一人娘・川上香織と、香月もやがて人生にとつての大きな出会いとなった事は、まだこの日の集いでは知る由も無い。だが、川上氏はこの後二人を案内する鳩舎の中で、香月と言う少年が今まで出会ったどの競翔家よりも、超越した洞察力の持ち主と知る事となる。

「おっと……長話をしてしまったね……さあ！鳩舎の方へ行きましょう。色々鳩を見ながら説明しましょう」

玄関から表に出ると、二人が下から先ほど見ていた二坪ほどの鳩舎に、まず案内された。

「ここが選手鳩（レーサー）の鳩舎です。今は、表で遊ばせているので全ての鳩は見せてあげられませんが、ここには一才から五才までの鳩を五十〜六十羽入れてあります。この鳩達をレースに参加させている訳です。前面に取り付けてある、棒状のアルミ製のものはタラップと言つて、鳩が外から入れませんが、中からは出られないようにしてあります。競翔中にはもう一つ中にタラップを作つて、その中で競翔から戻つて来た鳩のゴム輪を外す事になります。・・又、君達が競翔に興味を持つて倶楽部でも入会したいと感じたら、その時に説明しましょう」

勿論二人にとってはまるで、別世界のような、矢次早の話でもあった。

「次に中の構造ですが、ご覧のように内部は止まり台、それも鳩一羽が止まれるスペースで作つてあります。何故なら鳩と言うのは非常にセクシヨナリズム（縄張り根性）が強く、この止まり台が無いと争いが耐えません。彼等（競翔鳩）にとつて、鳩舎の止まり台とは唯一の安息場所ですし、餌を得る唯一の場所も鳩舎の中です。それを子鳩の時から、繰り返し競翔家が訓練の中で習慣つける訳です。争いを起こす事は鳩舎の中でつまらない体力を消耗する事となり、いざレースでの失踪につながる事になるかも知れません。競翔家はそう言う点も充分把握しながら、又気をつけるべきでしょうね・・あ・・又、説教おじさんになっている・・あはは」

説明を受けながら、でも香月の脳裏には、これほど細心な注意を払いながら、科学的とも言える鳩舎

の設計にただただ驚くとともに、それ以上に深く興味を持った。それは彼が生きてきた、十四年の人生の中で、温厚で寡黙な少年だった自分に対する、心の中から湧き上がってくるような熱い感情と、出会ったばかりの川上氏と言う人物への、深い信頼に近い心揺るがず感動でもあった・・・。

「では、今度は種鳩鳩舎です」

今度は三坪ほどのスペースが二つに仕切られた、内部と、二つの金網で囲まれた運動場のようなスペースがあった。一つ、一つの巣箱は作りも立派で、先ほどの選手鳩の止まり台のような狭いスペースとは違い、個々が約六十センチ四方もある戸棚式であった。それは素人眼の香月にも理解出来た。

「二つに仕切つてあるのは、繁殖期以外には雄と雌を分離する為です。鳩は一緒にしておくとなに七、八回も仔を育ててしまいます。それでは年間に多くて、十六羽から二十羽もの子孫が増えてしまう訳ですが、その自然のままに繁殖させると、優秀な仔鳩の出現確率が下がってしまいます。そこで、優秀な仔鳩を得る為の人為的方法があります。優秀な親鳩から出きるだけ多くの子孫を残す為に、代理で仔鳩を育てる仮母と言うやり方もあります。優秀な親鳩からの卵と、仮母との卵を差し替える訳です。こうする事によって、優秀な仔鳩を自然産卵以上に得る事も可能です。鳩と言うのは雄・雌の仲は非常に良くて、生涯番になる事も多いですが、それも人為的に交配を変えるのです。これは、競翔鳩と言う特異な鳩飼育の一例ではあります」

・幾ら聞いても恐らく時間が足りない話になるであろう・川上氏もそこで話は中断した。

その鳩舎の中から川上氏は一羽の鳩を捕まえてきて、しばらく丹念にその鳩を触診していた。そしてその鳩を抱いたまま、戻りましょうと二人を先ほどの応接間に再び案内した。その前、香月は選手鳩鳩舎の中をじつと見つめていた。芳川が促すと、後から慌ててついできた。

再び雑談後、川上氏は無造作に書棚の中の木箱を取り出してきた。中を開けると、それは血統書であった。

無言で一枚、一枚血統書に眼を通して行く。やがてその中の一枚を抜き、しばらく考えている様子の後、

「うん！」

と頷くと、香月に微笑みながら、

「香月君、君に差し上げた鳩はイギリスのノーマンサウスウエル系×ブリクー系です。この血筋の鳩は非常に悪天候に強く、勇敢で、方向判断力に優れます。君の鳩は生後三年で、二才時に七百キロレースで連合会の二着に入賞しています。この時も非常に悪天候だった。君の所へたどり着いた時は三百キロレースの最中だったが、その前の百キロレースでも三位に入っています。このように君の鳩は、短距

離から中距離にかけてスピードが出る中距離鳩ですから、この雄に見合う血統には、長距離型の粘り強い在来種の雌が良い。この雌は勢山系と言って日本の国土に順応してきた優れた系統の鳩です。この鳩を差し上げよう。この配合で、仔鳩を作出して下さい。君が競翔に興味を持ったら、是非その時にはこの仔鳩達を参加させて下さい。中学生の君ですが、大勢同じような年の少年達も居ますからね」

芳川も香月も口を揃えて、それは断った。

「と・・・とんでもないです。聞けば聞くほど。こんなに競翔って大変だし、凄いなんだと分かりました。興味もあります。けど、それ以上にこんな素晴らしい鳩を飼育できるだけでも嬉しくて、頂いて良いのかな・・・とっている上に、又そのような鳩まで頂くなんて」

「君達のような少年だからこそ！鳩を愛してくださる方だからこそなんです。動物を飼う気構えは教えて出来るものじゃない・。それは自然と香月君達には備わっているからです」

・・・ここまで言われては、もう二人にはお断りできる言葉も無かった。何度も礼を言いながら、彼等は帰路についた。

二人が帰った後、香月が帰る前にふと言った言葉が気になって、その後、川上氏は慌てて鳩舎に戻った・・・

そこで・・・やはり・・・

川上氏は一人、応接間に座っていた。香織が入ってきた。

「どうしたの？お父さん」

「あ・・いや、何でもないよ・・。そう言や今日来た香月君は、香織と同じ中学二年生らしい。芳川君と言う高校一年の子と来たんだが、その彼に聞くと成績の優秀な子らしいね」

「ふうん・・」

香織は、それ以上もう言わなかった。すぐ応接間も出て行った。

実は・・この時川上氏は、驚いていたのだ。

・・・あの・・香月君と言う少年は現在八十数羽居る選手鳩の中から、一羽の些細な程度だったが、病鳩を見抜いてしまった。何と言う・・。全く鳩すら飼った事も今まで無かった少年が、この鳩飼育歴三十年の私でさえ気づかなかった小さな異変を・・。何かが違う・・あの少年は。

そう言う驚きであった。

やがて、芳川、香月によって持ち帰られた一番（つがい）の鳩は一坪の鳩舎の中に、二番の仮母達と飼われる事になった。川上氏のアドバイスを忠実に守り、粗末な鳩舎ではあったが、通風、換気などには充分な注意を払い、三番の鳩達にとつては余りある位のスペースであった。外敵の多い農村地帯なので、地上から一メートル鳩舎を持ち上げて、頑丈なほど鳩舎には外敵への気を使っていた。

突然鳩を飼い出した香月に、母親奈津子は少し心配そうに言った。

「お父さん・・今年は大事な中学三年生だと言うのに、大丈夫ですかねえ・・」

母奈津子さんの心配は、世の親なら当然でもあった・。しかし、父泰樹がこう言った。

「なあに・・あいつのこんなに生き生きしている顔は初めてだよ。日ごろから大人しい子で、親にも今まで全然心配させるような事もなかった。引つ込み思案で、学校の成績は悪くは無いが、友達も少なく隣の芳川さんとの長男、浩二君位だろう、あいつと遊ぶのは。変わったよ。あんなに明るく息子が変わったのも、きっと川上さんと言う方が素晴らしい人だからだろう」

泰樹は、遠くを見るような視線で、むしろ喜んでいる風だった。

「でも・・お金も掛かると言うじゃないですか、鳩のレースって。こんな大事な時期に」

「心配するな、あの子は日頃から忙しいわしらに、気遣って今まで、なんの無理も言わずに一人で過ごす時間が多かった。そんなあの子が一生懸命にやる事なら、黙って見守ってやろう」

そう言って、両親は又、専業農家である自身の田畑に出かけて行った。

香月は、この理解ある優しい両親にも恵まれていた。

仔鳩を收容する鳩舎も二坪のスペースで建設中であり、いよいよ競翔家香月が誕生する日も近い。季節は二月。仔取りには少し早い時期であった。芳川のバイクの後に乗って、この日も川上宅へ向かう香月だった。この頃は芳川も香月を送り届けては、又迎えに来ると言ったパターンで、川上氏宅へ一緒に入る事は無かった。

この日、川上氏は所用で出かけていて、三十分程して帰ると言った伝言を香織にしていたようで、一人応接室で待っている香月だった。そこへ、ほとんど挨拶程度で、口も交わした事の無い香織が入ってきた。茶と茶菓子を運んで来たのだ。美少女の香織は、父親の鳩狂いが少し嫌いでもあった。若い競翔家に時々、こんな意地悪を言う事もある。

「ねえ・・もしもよ？私が貴方の彼女だったとして、もう鳩なんか飼うのなんて止めて！って言ったら止める？」

実は訪れる高校生の競翔家の中には、香織目当ての者も多い。口を揃えてその子達は言う。

「勿論、すぐ止めるさ！」

答えを聞くと、香織は即、同じ言葉を間髪入れずに言う。

「そう！貴方にとって、鳩ってそんな存在なのね？馬鹿見たい」

自分の父親は、自分がどんなに懇願したとしても、絶対鳩を飼う事を止めはしないだろう。何が楽しくて、何が面白いのか良く分からないが、とにかく自分の好きな事を中途半端でなく、信念を持ってやっている父親は好きである。そんな答えを聞くと、父親のやっている事が否定されるようで、無性に腹が立つのだった。罪な少女であった。

香織は香月の真向かいに座った。そして、香月の顔をじつと見つめた。真近で香織の大きな黒い瞳に見詰められると、香月の顔も赤くなった。

「あ・・・顔に何かついてます・・・？」

「ぶー！！」

香織が吹き出した。

ますます香月は不安になり、自分の顔に手を当てた。

「やっぱり何かついてるんだ・・・」

とうとう香織は「キヤー、キヤツ、キヤツ・・・！」

と笑い転げた。

「あの・・・」

益々不安な顔の香月だった。

やっと笑いを沈めた香織だった。そして聞く。

「あー苦しい・・・ねえ・・・香月さんて、私と同じ中学二年生。来年受験でしょ？」

「はあ・・・そうですね」

「勉強しなくていいの？こんな時期から鳩飼い始めて・・・？」

「えっ・・・まあ。僕の場合地元の高校だし、それに普段勉強してればね。受験だつて騒ぐほどの事でもないし・・・」

「わあ・優等生なんだ・地元のE高校つて県下でも一、二番の進学校でしょ？」

「えっ・・・はあ、まあ・・・」

打ち解けて話を始めた二人だった。同じ年と言うのもある。香織が香月に興味を持っていた事もあるが、何より受験と言う人生最初の関門が二人に待っている。

「へえ・・・そうなんだ。おとなしそうに見えるけど、香月さんって剣道をやってるの」

香織は楽しそうにくりくり目を輝かせながら、聞いた。そして突然に

「ねえ、香月さんて、もてるでしょ」

大きく香月はかぶりを振った。

「そんな！・・全然だよ。僕なんか変に大人びてる奴って敬遠されてるよ、いつもクラスの隅に居るもん」

そして香織は例の調子で、常套文句を言った。

「じゃあ・・・もしも。もしもよ。私が香月君の彼女だったとして、今貴方が夢中になってる鳩なんか飼うのを止めてと言ったらどうする？」

香織が初めて喋った人間に対してこの台詞を言った後、少ししまった・・・と言う顔になった。香月自身に、微妙な心の揺らぎを感じたからかも知れないが、それは、無意識に出してしまったのだ。

ところが・香月は・・・

「確かに難しい質問だね。でも、上手く言えないけど、僕は川上さんのような立派な競翔家の下で、鳩レースを楽しみたいと思ってる。君は今、不幸せだろうか？きつと鳩にかける愛情以上の気持ちで君に接してくれてるお父さんだと思うよ。だって、僕にもこんなに気遣いしてくれる素晴らしい人だもん。とつても尊敬してる。そして君もきつとお父さんが誰よりも好きだし、鳩に夢中になってる川上さん自身を、君は見るのが好きなんだと思う。だから、止めない」

この誰よりも自分の気持ちを完璧に見抜いた香月に香織は、他の者と全く違う何かを感じた。当にこの時、香織の心は動いたのだ・・・出会いがここにもう一つ生まれたのだった。

香月が帰り、川上氏が鳩の世話をしている倉庫上の鳩舎の所へ、珍しく香織が上がってきた。そして：

「ねえ・・・お父さん、鳩を飼うのって楽しい？」

「おやおや・・・珍しく鳩小屋に来たと思つたら、何だい？急に・・・うん、凄く楽しいよ。父さんは鳩が大好きだ。どんな趣味にも変えがたいものが鳩にはあるんだ」

少年のようににこやかな顔になって言う父親に、香織は、それ以上何も言わなかった。そして、背を向けると

「お父さん……私。来年、神原市のE高校を受験する」

「え……お前……」

県下でも名高い進学校は、香織の学力では少し難しい。突然の香織の言葉に川上氏は驚いた。

やがて三月の初旬より作出シーズンも迎え、香月の鳩舎では現在六羽の仔鳩を得る事が出来ていた。仮母と言うテクニックを使う特殊な作出方法で、一挙に香月の鳩舎もにぎやかになっていた。この仔鳩達は九月から始まる競翔に向けて訓練を重ねられる。川上氏の細かいアドバイスを忠実に守り、香月の熱心な飼育管理によって、日増しに仔鳩達は逞しく成長して行った。

舎外訓練から、放鳩訓練の過程で徐々に成果が上がって行くのが実感出来た。一羽の落伍も無く、秋の競翔の準備が進んでいたある日の事であった。突然川上氏が香織と共に、香月の家にやって来たのだ。つた。

「やあ！」

「わあ……びっくりした！今日はどうされたんですか？」

「いや、近くへ来たもんだからついでにね。香織も寄りたいうって言うし」

香月と香織達の関係……実は、春休みに香月が家庭教師を兼ねて、川上氏宅へ通っていたのだ。すつ

かり今では仲の良い友達になっていた。川上氏が立ち寄ったのは、香月の両親とも会う為でもあった。家の中で、雑談する川上氏と香月の両親。香月と香織は鳩小屋の前で話していた。

「静かな所ね」

「農村地帯だからね。こっちは」

「新学期が始まって、テストがあつたでしょ・私、先生に褒められちゃつた」

嬉しそうに彼女は言った。一気に成績が全校で五十番も上がったと言うのだ。川上氏はそれが嬉しくて、お礼を香月の両親に伝えていた。初対面とは思えぬ、にぎやかな談笑が続いていた。

競翔仲間

そして、川上氏が二人の前に、にこやかな顔で現れた。

「いやあ、凄く楽しいご両親だねえ。私も、こんなお付き合いが出来るのは幸運だよ。香織の成績もぐんと上がって、今日は君にも感謝しに来たんだよ」

「いや、とんでも無いです。僕の方こそ香織ちゃんのおかげで、随分復習が出来ました」

もう、すっかり川上家と香月家の間柄は、一羽の鳩によつてこんな短期間に深い付き合いにまで発展していたのだった。

.....
川上氏が、香月鳩舎の初作出鳩を見る・・川上氏の鋭い触診は、アイサイン、竜骨、主翼、副翼、羽毛余す所なく見抜いていた・・。

「よく・・これだけ粒が揃ったね。初めて鳩を飼って、まして初めて秋に競翔をする者とは思えない出来だ。良くここまで育て上げたね」

これ以上に無い川上氏の言葉に、香月も体に震える熱さを感じた。

又、香月と川上氏の師弟関係とも言える深い間柄と、家族をも包容してしまった、一羽の鳩を巡っての不思議な縁……。

春・夏・季節は巡った。兄弟関係とも、親戚とも言える付き合いは益々深まり、香織と香月の間も、微笑ましい程の仲になっていた、香織の成績はうなぎのぼりに上がった。香月も見違える程明るくなり、クラスでも人気者に変貌するほどで、その成績も県下で指折り数える程の優秀さを發揮していた。そして・秋。香月が鳩に出合った季節から、もう一年近くが来ようとしていた。

香月は学生が資格ある、百キロレースの「文部大臣杯」の鳩の持ち寄りの場所へ来ていた。鳩レースとは、持ち寄った鳩を目的地から一斉に放鳩し、鳩舎に戻った鳩の番号付きゴム輪を外し、鳩時計で打刻し、その所要時間を放鳩地からの実距離で割り、分速〇〇〇〇・〇〇〇メートルで順位を表すものである。

さて・その日がとうとうやって来たのだった。集合場所は、連合会のA・B・Cブロックの内、Aブロック四十名が集まっていた。見知らぬ顔、今秋レースの初日と言う大羽数の参加。香月は少し不安になり、どこでどうやったら良いのか当惑していた。川上氏がその香月に気付く。

「やあ！」

声を掛けながら近づく。香月の肩をぼんぼんと叩くと、

「皆！この子が、この秋から私の倶楽部に入会して競翔を始める、香月君だ。中学二年生です。宜しくお願ひします。色々分からない事ばかりなので教えてやって下さい」

一斉に歓迎の拍手が沸くと、すぐニ、三人の学生競翔家達が集まつてきた。

同じ倶楽部に属する、北村雄一、佐野明弘、浦部和史の三人である。倶楽部は同じで東神原連合会、神原愛鳩倶楽部である。北村は高校二年生、佐野は高校一年生、浦部は中学三年生であつた。中でも北村は、学生競翔家のリーダー格であり、Jrの長を兼ねていて、面倒見が良くして学生達から「兄貴」と呼ばれていた。短く刈つた髪、黒々と日焼けした顔と、太い眉。性格は非常にはきはきして、負けず嫌いだ。対照的に佐野は長髪色白で、度の強い眼鏡をかけていて、非常に神経質で生真面目で、沈着冷静な性格だ。通称「ノート」と呼ばれる、連合会の博士と呼ばれていた。浦部は丸刈りで、背が低く赤ら顔の口数少ない少年だが、非常に鳩を大事にする連合会一の愛鳩家であつた。「うらちゃん」と呼ばれている。この三人が香月のライバルとなるのだ。三者三様の個性派であつた。

このブロックの学生競翔家は六名。二十才までに与えられる文部大臣杯資格は連合会で、二十名居る。このブロックに集まつているメンバーは、今はこの三名だが、Bブロックには、磯川則哉と言う優秀な学生競翔家が居ると言う。のちのち香月にとって、最強のライバルとなる男だつた。

P M七時、時報と共に、バシャーン・これを閉函と言う。鳩時計の打刻音が響く。時を刻みかけた鳩時計は、放鳩された鳩が戻つてきた時に打刻、そして開函時の打刻・いよいよレースは始まつたのだ・

その後、香月達四名の学生愛鳩家を乗せた川上氏運転の車は、連合会会長宅へ向かった。会長宅は川上氏の家から車で十五分ほどの場所にあり、造園業を営む広い園内には、所狭しと植木や鉢植えが並んでいた。既に辺りは暗くなっていたが、その一角に金網で仕切られた大きく立派な鳩舎が見えていた。家の中には既に大勢が集まっているらしく、にぎやかな声が聞こえる。中央に座っている体格の良い初老の人が高橋貢連合会会長であるらしく、川上氏にすぐ声を掛けて来た。

「よお！こんばんわ。どうだね？川上君」

「はあ、まあまあですね。どうも今年は悪天が災いしたのか、仔鳩の成長が少し遅れ気味のように感じるんですが」

「うん・・私の所もそうだよ、ところで、君の倶楽部の方に良い子が入ったらしいね」

香月がすぐ、会長、他のメンバーに挨拶した。

「おう！君か、なかなかの男前じゃないか。川上君の飛び筋の秘蔵鳩を譲られたそうだから、我々にとっても強力なライバルになるかも知れないな。はっはっは」

いかにも豪快に会長は笑った。盛大な拍手に迎えられて、座を取り、一人、一人と紹介される。この日集まったメンバーは、いずれも東神原連合会の中心的な強豪競翔家ばかりだった。

支部長の水谷勝氏・・この人は電気店を経営されている。副会長の渡辺茂夫氏・・鉄工所に勤務されている。そして、香月は正面に座る、長身の学生の視線を感じていたが、その男が磯川則哉と言う強豪学生競翔家であった。切れ長の目、鼻筋の通った顔、いかにも気の強そうな男に見えた。彼は、高校三年生。私立総合病院の一人息子であった。

やつと、笑顔を作るとその磯川が香月の横に来て座った。北村が、少し遠慮がちに香月の隣の席を譲った。

「やあ、香月君、はじめまして。磯川です。今聞いたんだけど、倶楽部長の川上さんから鳩を譲り受けたんだってね」

磯川の関心は香月の入会より、そちらの関心が高いようであった。

「え・・はい。僕の手元に川上さんの鳩が怪我をして迷い込み、それが縁で競翔を始める事になりました。これからもよろしく願います、磯川さん。その鳩の事ですが、貰ったと言うより、無期限でお貸しして貰っていると言うのが本当なんです」

その話を意外そうな顔をしながら、磯川は眉をびくびくと動かしていた。

「そう……。成る程。君は、俺にとつても最強のライバルの出現って事になった訳だ。何故なら、川上さんは連合会でも圧倒的な強さを誇る、ブリクー、勢山系、ノーマンサウスウエル系の飛び筋を駆使している方だ。ほとんどこれまで飛び筋が他鳩舎に出た事は無いんだよ」

香月が鳩を譲り受けたのが磯川にとつては、意外・心外のように、彼は言葉を続けた。この心外の意味は磯川が、川上氏に鳩を分譲依頼して断られた過去にあった。

「でも、俺も負ける訳には行かない。俺は来年受験を控えていて、今秋のレースで一時期鳩レースも中断するんだ。その意味でも今秋は、自信ある種鳩を導入して頑張つて来た。そして、この文部大臣杯はこの数年俺は一度も負けた事が無いレース。君も初めての競翔で、色々分らない事も多いだろうけど、北村君や今日のメンバー、そして、俺にも色々聞いてくれよ。じゃ！明日、楽しみだね」

そう言つて、磯川は帰つていった。横で居た、佐野がノートを開いた。

「凄い、ライバル意識だね、香月君。君に対する挑戦のようだ。磯川さんは今年ゴードン系を導入してる。これは恐らくこの近辺では初めてだね」

異様なまでに、初参加の香月に対して、長年のライバル心むき出しのような言動だった。それは、磯

川自身が打倒川上系を目指しているからかも知れない。事実、磯川は学生競翔家ではダントツの成績で、大人達の中でも上位優入賞に食い込む成績をあげていて、ハンドラーと言う、鳩の飼育、訓練を担当する人まで雇っている家は金持ちだ。総合病院の一人息子であり、自分の手に入らぬものは無いとさえ思うような気位の高い男だった。彼が、鳩レースをやり始めたのは、水谷支部長が磯川の病院に入院した時から始まる。いきなり外国の著名鳩を数羽飼うや、レースに参加。だが、途中の悪天候に祟られた三百キロレースで、ほとんど全滅の憂き目に合い、競翔鳩は良い血筋、良い環境、良い餌だと思っていた彼は、完璧に打ちのめされた。そこで、やはり日本の気候風土に合った在来種、そして最強鳩舎の鳩を導入すべきだと考え直し、川上氏の家に行ったのである・・・こんなエピソードが隠されていた。

・・そして、どうせ導入するのなら、川上氏の源鳩を譲れ・・・何十万、何百万出しても良いと・・・しかし、お金は要らないからと、川上氏は一羽の鳩を差し出した。ところが、

「いえ、僕は鳩をいただきに来たわけではありません。主流血統の記録鳩が欲しいんです。お金は幾らでもお払います」

愛鳩家を自負する川上氏に何と言う無礼で、身の程知らずな学生なのだろう・・・当然川上氏が滅多に見せる事の無い感情を露にしてこう言った。

「磯川君、帰ってくれたまえ。私の所へ来たのは君の間違いだったようだ。私は競翔家では無く、愛鳩

家だと思つている。自分の飼つている鳩は、家族の一員だと思つている。私はその家族を手放す事は、身を切られるほど辛いのだ。まして、私の家の源鳩や記録鳩は、これまで幾多の艱難を味わつてきた自分の分身でもある。それを金に糸目をつけないから売れと言つても、断じて売る事など出来はしない。一つだけ言つておくが、君は競翔鳩を何だと思つているのか？競翔鳩はレースの為の道具じゃない。競翔家にとって、かけがえの無い友であり、家族なのだ。君は、何不自由の無い恵まれた環境の中で育つたらしいが、同じ連合会の学生愛鳩家を君が見て、何かを感じたら、又ここへ来なさい」

思いもかけない川上氏の怒りに触れ、磯川は、何で川上氏がこんなに怒つたのか分からず帰つて行つた。

以来、有名鳩舎の鳩を導入して、自分の希望を打ち砕いた、川上氏打倒の執念で、ここまで磯川は競翔を続けて来たのだ。その自分に対して、自ら鳩を分譲したと言う香月に対して、めらめらとライバル心が沸き起こつたのは当然かも知れない。その態度にも出ていた。

川上氏が高橋会長宅を出る時に、香月に対して一言、二言何かを言つていた。終始川上氏は上機嫌で、香月は初の鳩レースの興奮で、車中の話もほとんど上の空であつた。

初レースの興奮で中々寝付かれず、朝方四時過ぎには香月は外へ出ていた。空には満天の星座の輝き。

「今日は上天気だぞ！」

香月は嬉しくなつて一人言・・放鳩の時間は六時半。まだ二時間以上もあるのだ。だが・・待ち切れ
ないで鳩舎の周りをうろろする。・・ようやく夜も白み始めて明るくなつて来た。

「おはよう」

芳川だ・・彼も氣になつたのか、もう起きてきた。

「まだ一時間以上も放鳩時間まであるじゃないか・・幾ら鳩が早く帰つて来たとしたつて、二時間もそ
うやつて空を仰いでいるつもりかい？」

同じく空を仰ぐ芳川に、香月も笑つた。初めての競翔・・こんなに興奮するものだろうか・・。香月
はもうわくわくとして、じつとしていられなかつた。

「ほら・・着替えて来いよ。一男」

そう言う芳川は、もうすっかり着替えて居たのである。

香月を促すと芳川は、

「あっ・・・！そうだ！」

自分も慌てて、家に戻って行った。

香月が着替えて外に出ると、芳川は電卓とノートを片手に何か計算している。

「何してるの？浩ちゃん・・・」

香月が聞くと、

「時間潰しさ。複雑な計算方法ってあるんだろうけど、鳩の帰舎時間と、放鳩時間を距離で割ったら、分速計算が出るだろ？その表を作ってるのさ」

香月も面白そうだと一緒にやり始める。・・・その時電話のベルが聞こえてくる。慌てて、香月が電話を取った。六時十五分に放鳩されたと言う、川上氏からの電話であった。時計を見ると、既に六時半。鳩はもう一斉に鳩舎に向かって飛んで帰っているのだ。今日は絶好の快晴・・・恐らく早い帰舎に違いない。・・・まだか・・・まだか・・・空を仰ぐ。芳川も同じだ。香月の母親が、呆れながらおにぎりを二人に作って持って来る。二人は、それを食べながら空を仰ぐ。

時計を見るとその時七時過ぎだった・・・

「あつ！浩ちゃん！あそこ！ほら！あんなに鳩が見える！」

興奮した香月の声。突如大きな声を発して指差した、帯状の黒い集団の先頭付近から2羽の鳩が急降下してくる。

「帰ってきた！」

香月の心臓は早鐘のように打つ……。一気に鳩はタラップに飛び込む、ゴム輪を外す、鳩時計に打ち込む。その間にも次の鳩が入ってくる。又打ち込む。芳川は外で、鳩笛を吹いている。もう続け様（さま）に吹いて居る。それは五羽がほとんど同時と言える帰舎だった。参加十二羽全て帰還したのは、それから三十分の間であった。その時何故か香月の胸に熱いものが込みあげていた。その様子に

「一男・・・泣いてるのか？・・・馬鹿だな・・・」

芳川は優しく香月の肩を叩いた。

「だって・・・生まれて初めてだよ、こんなに興奮したの・・・鳩が一生懸命飛んで帰ってきたのって、嬉

しいもんだね、浩ちゃん」

「・・・ああ・・・。競翔ってこんなに良いもんなんだな」

ようやく一段落した頃。川上氏から又電話が入った。こう言う心遣いが素晴らしい人なのだ。川上氏と言う人は・・・。

「どう？」

「はい！参加全部帰舎です」

「おお・・・素晴らしい・・・で、何時頃？」

興奮していて、香月は覚えていない。電話の所まで一緒ついて来ていた芳川が、ノートを差し出す。ちちゃんと帰舎時間をメモってくれていたのだ。

「はい・・・最初の打刻が七時十五分です、それから十分の間に計五羽打刻しました。全部戻って来たのは、七時四十分頃です」

電話の向こうの川上氏の声が高くなった。

「ええっ・・・？七時十五分だって？そりゃ、凄く早いよ。私の家の一番手が七時四十五分だからね。まだ後続が戻って来ている最中だよ」

川上氏の言う驚きは頷ける。分速千八百メートル以上の高記録であるらしかった。香月が恵まれて居たのは、広い平野部に位置する、鳩の帰舎コースに自分の鳩舎があると言う事だ。放鳩地からほぼ一直線にある香月鳩舎の立地条件は、これから先の彼の競翔人生に大きく作用する事になる。

香月には天佑があった・・・。何かに導かれるように・・・やがて大きな彼の人生の第一歩へと・・・確かにこの夜・・・向かっていた。

川上氏の車には、香月、浦部、佐野が乗っていた。佐野も浦部も、香月の鳩の帰舎タイムが早い事を知っていた。だから、話題は香月が何位に入賞しているかと言う事が中心で、通称ノートの佐野が、学生では、磯川以外は、香月の鳩がダントツに早いのだと言っている。香月にとって、早い、遅いと言う事よりも全鳩帰還・・・これが嬉しかったのだ。

高橋連合会長宅到着は、開函時間の、七時十分前だった。

「早く！早く！」

と言う声の中から聞こえる。既に全員集まっている。その中には磯川の顔も見えるが、話題の中心は、もっぱら磯川のタイムのようで、時間が迫っているので、挨拶も情報も仕入れる暇も無く、一斉にバシ

ヤーン・・今度は開函の時間が来た。集計の間に、磯川がにこにこ顔で香月達の前に来た。

「やあ！香月君。初めてのレースだから、八割も帰舎していたら上出来だ。何羽帰って来たの？」

嬉しそうに香月は答えた。

「はい！全部帰って来ました。それも、一番目の鳩の帰舎から30分以内に全て」

磯川の顔が少し曇った・・驚いた様子でもあった。

「ほお・・それは凄い・・で・・何分頃に打刻したの？」

「最初の打刻が、七時十五分です。それから立て続けに十分の間に五羽打刻して、それで止めました」
「えっ！・・」

それまでにぎやかに談笑していた場が、静まり返った。磯川の顔面は蒼白になったまま、そのまま言葉
葉を失った。

「わあ！・・それじゃ、香月君が、初レース初優勝？それも、もの凄いタイムで！」

一斉に場が沸きあがった。とてつもなく早い帰舎なのだ、初めて香月も知ったのだ。

磯川は、言葉を選びながらも、香月のタイムと自分の鳩舎の帰舎タイムとの比較を始めた。

「すると・・・君と俺の鳩舎は約七、八キロ離れている訳で、俺の一番帰舎が七時二十七分だから十二分差・・・誤差があるとして・・・でもまだ分からない訳だね・・・」

平静を装うと、磯川は冷静に分析していた。確かに、磯川の帰舎タイムもかなり早そうだ。でも、香月の連続五羽が入賞しているのは、確実でもあった。佐野が耳打ちしていた。

審査員の資格を持つ水谷支部長と、渡辺茂夫審査委員長によって、文部大臣杯の集計が始まった。文部杯参加総数は連合会で、三百二十四羽。一般のレースは、ほとんど無打刻で参加総数は三千三百九十羽だった。しかし、何人かの参加者もあり、その打刻鳩数は約百十羽・・・かなり集計に時間が掛かりそうで、何人かが分担して作業集計に追われていた。

その間、川上氏を中心とした本日の百キロレースの話題が持ち上がった。残りの者がその回りに集まった。

「今日は高気圧が放鳩地からこちらに張り出して、絶好の競翔日和であった。予想以上に高分速のレースとなったのは、この天候と、若い競翔家達がここ数年ライバル意識を持って、互いの鳩質向上に努め

て来たからだ。もしか・・・して・・・今日の分速予想からして全国杯の可能性も高い。香月君、磯川君のタイムは飛びぬけて速いので、期待出来そうだね・・・」

全員の目が磯川、香月に向けられた。磯川は、自分以外の優勝は無いと言わんばかりの顔をしている。話が進んでいる間に計算は終了したようで、算盤十段の水谷氏の脅威の計算力によって、高橋会長の立会いの元、発表が行われた。分速千八百メートルを超えた鳩が三羽出たと言う、大きな拍手が沸いた。

第一位	香月一男鳩舎	70A A A 0 0 1	B♂	分速1845・798メートル
第二位	香月一男鳩舎	70A A A 0 0 3	BC♀	分速1838・920メートル
第三位	磯川則哉鳩舎	70A A B 3 2 4	BC♀	分速1812・217メートル
第四位	香月一男鳩舎	70A A A 0 0 6	B♀	分速1786・576メートル
第五位	香月一男鳩舎	70A A A 0 0 8	B♂	分速1766・031メートル
第六位	香月一男鳩舎	70A A A 0 1 0	BC♂	分速1734・678メートル
第七位	磯川則哉鳩舎	70A A B 3 4 4	S♂	分速1700・504メートル
第八位	北村雄一鳩舎	70A A B 9 7 6	DC♂	分速1686・987メートル
第九位	佐野明弘鳩舎	70A A C 7 5 6	R♀	分速1678・990メートル
第十位	磯川則哉鳩舎	70A A B 3 4 8	DC♂	分速1675・652メートル

以下十四位まで分速千六百メートル台であった。六位までに五羽。この分速は全国優勝の可能性も秘めていて、並居る強豪を押しつけて、一般を合わせてもダントツである香月の初レースの完全優勝は、

一躍連合会中に知れ渡った。

川上氏にして、最高の当り配合と言わしめた、香月鳩舎の雄親源鳩となる『パパ号』。川上氏の現役最高レーサーだった雌親・香月鳩舎源鳩『ママ号』絶対に他鳩舎には出ぬ鳩とも言わしめた、勢山系のママ号こそは、川上氏の源鳩である、すみれ号（実在）の直孫にあたり、のちに香月の文部大臣杯での血統図公開において、連合会中が大騒ぎするほどの鳩であり、川上氏現役最高のレーサーであったのだ。この鳩は五百キロ郵政大臣杯連合会優勝、東日本Nレース千キロレース連合会優勝、総合三万四千五百五十九羽中総合八十二位の飛び筋中の飛び筋でもあったからだ。しかし、卓越した川上氏の選鳩眼は、この鳩は息の長いレーサーに育たぬと、香月の所へ譲った。パパ号との交配で、きつと結果が出るに違いない・・・と初めて門外不出の川上系を香月に、血筋分家として・・・勢山系こそ川上氏の最高の主流・・・その川上系最高血筋を分譲したのには、やはり香月少年がただならぬ子と見抜いたからでもあった。

「わあ！」

一斉に大拍手が沸いた。蒼白の磯川は

「次のJrレースの結果を見てからだ。君の真価が問われるのは」



源鳩パパ号

精一杯、強がりを残して磯川は帰って行った。

初参加で、初優勝。それも全国杯に手が届くか・・・と言う快分速。のちに香月鳩舎主流種鳩となる一流競翔鳩を、香月は次の二百キロレースにも参加させた。皆を驚かせたのは、これだけでは無い。このJrレースでも香月は優勝した。磯川は二位だった。他にも三、五、六位に入賞し、三百キロレースでも強豪の大人達に混ざり、三位入賞、四百キロ、四位、五百キロ七、九位に。たったスタート十二羽の少数参加鳩舎なのに全ての参加レースに入賞を果たし、もう中堅どころか強豪と言える成績を残したのであった。川上氏は三百キロ〜五百キロのレースを全て優勝。三百キロ、一、二位。四百キロ、一、二、四、八位。五百キロ一、二、三、六位と圧倒的な強さであった。まさしく川上ファミリーの独壇場とまで連合会では賞賛された。最終のレースで磯川も四位に食い込む健闘を見せたものの、香月に文部、Jrと負けたショックは大きく、この秋レースを最後にしばらく鳩レース中断となったのである。

十二羽中香月の鳩舎には九羽の選手鳩が残った。過酷な秋のレースに六羽・・・後日帰りも三羽居た。同一兄弟の中で三羽しか、失踪鳩を出さずに残ったのも特筆すべきものだ。

そして・・・やはり、この「ピン太号」は文部大臣杯全国優勝の初栄冠を手にした。まだまだピン太号は主力として、息の長い素晴らしいレース鳩となつてゆく・・・初配合の初雛・・・初レース・・・この巡りあわせ・・・香月は、やはりレース鳩によって人生を大きく変える事となるのだ。



ピン太号

白川老人

既に、高校生活は始まっていた。香月は高校生になった。香織も同じE高校に入学。香月と香織の交際も始まっていた。見違えるほど明るくなった香月は、今やクラス委員長を務め、拓さんの友達に囲まれる毎日であった。取り分け香織の存在も目立って、香月、香織のカップルは同級生もうらやむ間になつてもいた。

春のレースで、香月は早くも千キロレースに参加。三羽記録鳩を出した。ピン太号も千キロを記録した。

「いいかね？香月君！君の鳩は短距離、中距離ではこの四期とも素晴らしい成績なのに、七百キロ、千キロレースは入賞していない。本来はきつと中・長距離で活躍できる筈なんだ。この原因は・・・」

「原因は？どこにあるんでしょう・・・」

「いや・・・まだ君に無理だったね。もう何年も競翔やっていた子に喋ってるように、私は熱くなつてた」

川上氏は、笑った。

「いえ！教えて下さい。どこに原因があるのでしょうか？」

「困ったなあ・・・まだ競翔四回の子に口が滑ったよ・・・」

「是非！」

香月の視線は、川上氏の戸惑いを拒否していた・・・。

「しよがない・・・君には鳩レースを楽しんで貰う立場の私が、まるで、煽るように言つて・・・君の・・・レース間訓練が少し気になっていたんだ。いや・・・悪いと言ふ訳じゃない。レース間が一週間、二週間しかない現実で、五百キロレースから七百キロレースには、いかに早熟の血統の君の鳩でも、疲労がピークになる頃だ。その訓練はまだ生後一年の若鳩だから、必要ないとは言わないけど、そのせいかも知れないね・・・まだ競翔一年と半年の君に、こんな事言う私も口が滑つた。許してくれたまえ」

「いえ！参考にさせていただきます」

競翔を始めてまだ秋・春・秋・春・・・四回のシーズン・・・香月が既に、強豪と言つても過言で無い成績を残している事と、このベテラン競翔家さえここまで、言わせてしまふ、非凡さが確かにあるようだ。

又、大学受験していた磯川も無事大学の医学部へ合格したようだ。北村は進学せず家業の酒屋を継ぐそうだ。そして、これまでスクラムを組んで鳩レースをやつてきた芳川も、東京の大学へ合格して、香月の周囲も大幅に変わつていた。しかし、もう、一人ぼっちの孤独な彼では無かった。競翔には学生の友人が回りを囲み、香織と言ふ仲良い異性の友達も出来、学校でも友人達に囲まれる毎日であつた。

そんなある日の事であつた。香月はここで運命的な出会いをする。彼の将来を決定する大きな出会い

であった。その前にこんな事もあった。

この日・・いつものように、訪れた川上氏宅の前で香月は立ち止まった。

この日、香月が、いつものように訪れた川上宅の中からは、大きな声が聞こえていた。

常日頃非常に穏やかな人柄で、怒声を発するような川上氏ではない。どうやら、もう一人と口論している風であった。玄関の戸を開けるのに躊躇していた香月だった。その時、上気した顔で川上氏が玄関を開けた。香月が驚いた顔で立っているのに気付くと、すぐ笑顔を作り、

「やあ、香月君来ていたのか。丁度良い。君も鳩小屋に来たまえ」

この来客は、どうやら競翔関係の者らしい。それにしてもあの剣幕は・・？香月は後をついていった。若い競翔家で、二十五、六才位で、がっちりした体格をしていた。この競翔家は、近くの連合会で素晴らしい成績をあげている、トップ競翔家の佐伯道年と言う著名な人であった。実は、この人の鳩が川上鳩舎に迷い込んできたのを氏が連絡をとって、今日訪問となったらしい。鳩舎の前に立つと、川上氏が又大きな声で言った。

「佐伯君！君はトップ競翔家だが、見たまえ！私の鳩舎にもたくさんさんの鳩が居る。だが、一羽たりと、私はこの鳩達をレースで失いたくない。私製管（住所管）とはその為に左足に装着しているのだ。今深刻化している迷い込み鳩対策だが、どんな鳩であろうとも、我々は鳩を飼っている。その愛鳩精神無く

して、いかに優秀な成績を残そうが、意味は無い！君が迷い込み鳩は駄鳩と決め付けて、処分するなどと言う発言は、多いに私の競翔観に反するのだ！一羽の鳩すら大事に思わぬ者が、果たして立派な競翔家と言えるのだろうか。聞きたい！」

上気した川上氏の顔は、見た事の無い厳しいものであった。香月は黙って聞いていた。

「確かに言われる事は正論だと思います。しかし、私は競翔をやっています。その競翔自体が鳩の優劣を競う順位の序列である以上、必然的に我々は優秀な血統で、優秀なレーサーを作出し、他鳩舎より優れた鳩を育て上げなければなりません。そうしなければレースには、到底勝てません。そのレースの途中で、ついて来られぬ鳩は当然失格として、切って当然では無いでしょうか。鳩レースそのものが大羽数参加で、最終レースでは、僅か数羽残すような淘汰のシステムである以上、その迷い込み対策として、確かに私も私製管を装着しては居ますが、だからその鳩が、他鳩舎に迷い込んだ時点で既にその鳩は落第。確かに愛情は必要でしょう。しかし、その建前論で、こんな厳しい淘汰の競翔を続け、成績をあげる事、維持する事など出来ないと感じます」

磯川にも似た、激しい闘志を秘めた競翔家だった。その理論も彼個人の持論で、それはそれで筋が通っているように香月にも思えた。だが、何か釈然としないものも、心に沸いていた。

川上氏は、今度は静かな口調で言った。

「佐伯君・君は大きな勘違いをしているよ。こんな小さな動物を我々は飼っている。このかけがえの無い小さな動物は、見知らぬ遠い地へいきなり連れて行かれ放たれる。人間などの勝手な思惑など何も知らず、彼等は一生懸命自分の鳩舎へ戻つて来るのだ。時には命を賭けて・・。鳩にも伴侶はあるんだ。ひたむきに、その家族の元へ飛び続ける彼等の姿を想像した事が、君にはあるか？なんと可哀相な事を我々はやってているのだ・・そう思う事が何度もあるよ。確かに・・レースとは君の言う順位を競うものだ。だが・・忘れてならないのは、彼等を人間の欲望の道具にしてはならないと言う根本なのだ。私達に出来る事は、彼等に住み良い環境を与えてやり、適切な訓練をし、彼等の秘めたる能力を最大限に引き出してやる、トレーナーであるべきだ。迷い込み鳩が駄鳩だと決め付ける前に、自分の落ち度が無かったか？住み良い環境だったか？そう考える必要もあるのではないのか？」

川上氏の目に涙をためた、鳩に対する思いを感じて、香月の目頭も熱くなった。佐伯青年も流石に心を揺るがされたようだった。

しばらく、無言で何か言いかけて、又佐伯は考えていた。川上氏は鳩舎の中を凝視したままだった。そして・・

「あの・・私は川上さんに憧れて、目指して競翔をやってきました。失礼の言葉は重々お詫びします」

佐伯は、そう言った。

川上氏が振り向いた。

「いや・・分かってくれたのだね。有難う」

それはもう優しい柔和な、いつもの川上氏の顔であった。

「川上さんの愛鳩家の姿勢は私の連合会でも、良く聞いております。ただ、川上氏に追いつけ、追い越せのレースに私は夢中になって、大事な事を忘れて居りました。勿論、私も鳩が大好きです。だから私製管を装着して居ります。けど・・こんな近くの鳩舎に迷い込むなど・・私には初めての経験、だったものと、この鳩はレースでも成績が良くありません。三百キロレース最中に何で、ここに迷いこんだのか・・それで、処分と言う言葉を使いました。言葉は悪かったです、実は私の鳩舎にも迷い込み鳩は多くあります。然しながら、その鳩達は全て健康とは限りません。土鳩も迷い込んで来るのです。その鳩がもたらす大事な選手鳩達に蔓延する重大な病気・・その危険もあります。だからこそ、心を鬼にして処分する事もあるのです。自分は、病気の蔓延を何度も経験しているからです」

「む・・それは・・」

川上氏が言いかけた、その時、香月が言った。

「あの・・・僕ごとき学生が生意気かも知れませんが、僕が競翔を始めたのは、川上さんの鳩が怪我をして迷い込んだのがきっかけです。そのおかげでこうして、競翔にも参加し、鳩との出会いが嬉しくて、楽しくて、そして川上さんに、一杯競翔を教えて貰える喜びを噛み締めて居ります。僕にとつて鳩と言うのは家族であり、友達です。だから、僕の鳩舎に迷い込んでくる鳩は必ず、別棟に建ててある鳩舎にまず隔離して、それから病気の有無を確かめて、連絡できる鳩舎には連絡します。連絡できない鳩は、近所の子供達で欲しい子にあげていますし、何日かして自分で帰って行く鳩も居ます。僕が川上さんからいつも教えていただいている『愛鳩家であれ』と言う言葉はそう言う事だと思っんです。あの・・・よろしければ、その鳩を僕に下さいませんか？競翔に使って見たいです」

「えっ・・・？」

川上氏も佐伯成年も、目を見開いた。

「差し上げるのは、全く抵抗も無い。喜んで・・・でも・・・君は今・・・競翔に使うとか言わなかった？」

佐伯氏は驚いたように聞いた。

「はい・・・言いました」

「おい・・・おい。香月君・・・君は鳩も見て無いし、その鳩は選手鳩だよ。そう簡単に君の鳩舎に慣れる

筈が無い」

川上氏が言った。

「いいえ、分かります。あの鳩でしよう？」

香月が川上鳩舎内の、その鳩を指差した。川上氏も佐伯も目をくりくりさせた。香月が続けて言う。

「僕の鳩舎に慣れなくて：佐伯さんの所へ戻ってきたその時は、この鳩を飼ってくださいませよね？」

「そりゃ・・勿論・・」

「あー良かった」

「あははは。面白い子だな、君って」

佐伯氏は笑った。川上氏も微笑みながら、鳩舎の中からこの鳩を捕まえてきた。香月は嬉しそうに丹念にこの鳩を触った。

70 A C D 1 3 4 5 B メス・・。

「聞いた話なんですけど、佐伯さんの鳩は、ハンセン系ですよね？」

「うん、そうだよ。その鳩もその血筋だ。少しブリクーの血も入っているけど」

「やっぱり！川上さんの主流はブリクーですよね？ノーマンサウスウエルは何分の一かで、勢山系が半分の血ですよね？」

「ああ・・・そうだよ。君の所はノーマンサウスウエルが半分、勢山が二分の一、シオン系が二分の一だ」
「ほお・・・では、思い出しましたが、この子が香月君？あの文部杯の」

佐伯成年が言った。

「そうだよ」

川上氏が答えた。嬉しそうに香月は鳩を触っていた。

「種鳩にするの？」

佐伯氏が、再び念押しするように香月に聞いた。先ほどの聞き間違えたと言いたげだった。しかし、
香月は、

「いえ！選手鳩として使います」

「あつはつは。佐伯君。この子は並の子じゃないよ。きつと考えがあるのだろう。E高校でもトップを取る子だ、きつと何か考えがあるのだろうか」

こうして、一瞬にして佐伯成年と川上氏は、この日こんな葛藤があつたのに、和解していた。まるで香月に影響されたように。佐伯氏もまた一流の競翔家であつた。

このBメス・・実はのちに大活躍をする香月鳩舎の長距離鳩になる事を、この日の誰も知らない。香月以外にこの鳩の資質を見抜いた者が居ないのだ。

後に・・・ムーン号と名づけられる優秀な競翔鳩との出会いであつた。

佐伯成年が帰つて行つた。尊敬する川上氏の潤む眼を見た時、やはり彼も愛鳩家であつた事を悟つたのだ。

「ああ・・・そうだった。今日君が来たら、是非案内したい所があつたんだよ。香織も待っている。おい！香織！」

川上氏の言葉に香織が外へ出てきた。

「もう・・・お父さんたら！さつきは、あんなに大きな声を出して。香月君、びっくりしたでしょ」

ふくれっ面で、香織は言った。

「いや、何とも無いよ。お客さんはここにこして帰ったんだもん」

香月は答えた。放鳩籠に先ほどのBメスを入れたまま、香月、香織を乗せた車は、やがて大きな日本庭園を思わせる古風で立派な家に着いた。

「・・・なあんだ・・・白川のじいちゃんの家だったの」

香織はがっかりしたように言った。

「嫌なら車の中に居なさい。私達は鳩の事で来たんだからね」

「いじわるね！お父さんは！」

鼻に皺寄せながら、香織はついてきた。

出迎えた人は、七十過ぎの真つ白な顎鬚を長く伸ばした老人だった。この人はS工大の名誉教授もされていた、白川正造と言う、著名な学者であった。連合会の顧問をされて居り、数年前から体も悪くされて、今は自宅での読書三昧だと言う事だ。香月にはまだどんな人なのかも想像出来なかった。奥さん

も二年前に他界され、子供も居ないので、通いのお手伝いさん以外に、広大な屋敷には他に人も居なかった。

三人の顔を見るなり、顔をくしゃくしゃにして、出迎えた白川老人だった。

「おお、香織ちゃん、久しぶりじゃないか。益々美人になったなあ、もう高校生になったんだってねえ」
「お久しぶり、おじいちゃん」

ぴよこんと頭を下げて、少し照れ加減に香織は白川老人を上目で見た。

「ドンちゃんは元気？」

その香織が聞く。

「ああ、元気だよ。おーいドン！」



ドンとは？香月が目をぱちくりしていると、

向こうから、一目散に走ってきたのは、シェットランドシープドックの「ドン」と言う雄犬だった。香織に、嬉しそうに尾を一杯振りながら飛びついてきた。

「きゃあ♪ドンちゃん、大好き」

香織がドンを抱きかかえると、どうせ、鳩の事だから、私は、あっちでドンと遊ぶと走って行った。そんな様子をまぶしそうに、にこにこしながら眺める白川老人だった。川上氏が、

「今日は私の倶楽部に入会した、香月君と言う子に鳩を見せていただこうと来ました」

「はじめまして、香月です」

「おお、これは又、香織ちゃんと同じ位の年かな？良く来たね」

優しそうに、眼を細める白川老人に、香月は小学校の頃他界した祖父の優しい笑顔を思い出した。

「香月君、この方はね、稀世の名鳩『白竜号』の作使翔者でも知られる、動物学者の白川さんだよ」

「えっ！では、あのGN千百キロレース二年連続総合優勝の！」

「そうだ、まさしくその稀代の銘鳩の使翔者だ」

「白川さん、この子も非凡な競翔家ですね、初参加で、文部杯の全国優勝した子です」

「おお・聞いてる。どうりで、並の子では無い目をしていると思ったわ」

香月は少し顔を赤らめた。こんな著名な方に認めて貰っているとは嬉しかったのだ。

川上氏が白川氏と談笑している間を待ちきれずに、香月は一礼をすると鳩舎に向かった。大きな庭園にはサツキの花が満開に咲いていた。大きな堀にも、色とりどりに大小の錦鯉が泳いでいる。向こうには香織とドンが遊んでいる姿が見える。

白川氏と川上氏の話はこうであった。

「中々のハンサムじゃないか、香月君は礼儀も正しいし、香織ちゃんとお似合いじゃのお」

「はっはっは。それはまだ早いですよ。でも、彼は不思議と人を魅了する力がある。成績も非常に優秀で、E高校でもトップらしいんですよ」

「君がそこまで、惚れ込むだけの子には違いないのう」

白川氏も、一目で香月を気に入った様子だ。

白川氏のプロフィールを先に・白川氏はベルランジエ系を使翔され、日本鳩競翔連盟の専務理事も勤めて、指折り数えられる人物であった。今の川上氏が連合会で圧倒的な強さを誇る以上に、白川ベルランジエ系は、俗に白川系と称され、門外不出の日本一の血統である。氏が長年改良してきた独自の血統でもある、その強さは、一々十位までをも独占する、束になって帰ってくるスピードバードであり、悪天にも強かった。川上氏も連合会中から目標にされているように、打倒白川系を目指して、競翔を続けてきたのである。競翔、又、心の師とも言える間柄であった。

「お前さんの若い時以上の目をしとる・鳩に例えて悪いが、動物は目じゃ。澄んだ正直な優しい目じゃ。」

大層白川氏は香月を褒めた。川上氏も、それには同感と頷いた。

偉大な競翔家の所には近年訪れる人も減ったが、川上氏は月に二度、今も訪れている。

十坪もある広々とした鳩舎には、多くの鳩が群れていた。香月は、その何百羽の中の頭抜けた一群を眺めていた。・・その香月が、硬直した・・。

白川氏、川上氏が鳩舎の前で、微動だにしない香月の後ろに立った。

「どうだね？凄いやつだろう・・ここには二百羽程のレースで活躍した選手鳩達が居る」

川上氏が言う。

「あゝ・・二引き・・(Bオス)・・」

香月が指差した鳩こそ、奇跡の超銘鳩と称される、GCH「白竜号」であった。白川氏と川上氏はお互い目を見合わせた。

「その鳩・・・こそ、白竜号だ・・・。驚いたな・・・ここには二百羽以上も鳩が居るのに」

川上氏は流石に驚いていた。香月には全く予備知識も無かった筈だ。白竜号を知ってる人は多くても、この中からその鳩を見つけるのは至難の業だから・・・。

「もう一羽・・・あの鳩・・・」

香月は再び指差した。

「ほおっ・・・」

今度は白川氏が声を上げた。

「その、RCPなら、CHネバー・マイロード号じゃ・・・」

白川氏の二大著名鳩を、予備知識も全く無い香月が、苦も無く選び出したのには、流石に二人は驚いた様子だった。



白竜号



ネバーマイロード号

「どうして、二羽が分かったのかな？」

白川氏が聞いた。

「二羽とも、この中では、血統が恐らく違うのではないかと・・・？」

「何と！この大羽数の中で血統の違いを見抜いたのか・・・へえ・・・」

川上氏が言った。

白川氏が聞く。

「どこが違うと感じたのかな？」

「目です・・・」

その言葉に納得したように、白川氏も川上氏も頷いた。

「このBオスこそ、参加二万数千羽と言う、日本一の選りすぐられた優秀な鳩群が参加する千百キロGNレースで、もつとも遠い千二百キロ地点にありながら、二年連続快分速で総合優勝した奇跡とも言わ

れる、超銘鳩、白竜号だ、日本鳩界、いや、世界競翔界の至宝とも言えるだろう」

川上氏は上気した顔で言った。

「そして、このRCPも、千キロGCHレースに六年連続参加、限らない道を歩み続ける鳩と称され、千キロ以上七年連続連合会優勝、全て総合三百位以内入賞の、CH鳩「ネバー・マイロード号」だよ」

説明を聞きながら、香月は大空にこの二羽が羽ばたく勇姿を想像していた。

「だが・・世間は超銘鳩と言うが、この鳩達の影に隠れた選手鳩が、猛訓練に耐え切れず多く犠牲になつてしまった。極度の限界を超えた使翔に耐え切れず、死んでしまった鳩も多い。現役を引退した今も・・このマイロードのように卵も産めなくなった鳩が居る」

悲しそうに白川氏は言った。徹底した白川流使翔は猛訓練によつて、残つた鳩だけを競翔に参加せると言う厳しい少数精鋭主義を貫いていたからだ。だからこそ、圧倒的な強さを誇つたのである。

「白竜は、古い日本輸入の血統で、アイザクソン系の純血だ。確かにベルランジエ系とは血統が違う。マイロードはオペル系の真髓、二代目源鳩「ダブルB」の三重近親だ」

白川氏の説明を補足するように川上氏も言った。

「このような、濃い血筋の鳩を選手鳩に使う卓越した手腕があったればこそ……マイロード号は素晴らしい成績を残したんだよ」

熱く語る川上氏の横で、幾分低い声で、白川氏は言った。

「よさんか・川上君・今はもう、そんな昔は忘れて好きな鳩とのんびりしている身だ」

しばらく無言であった、彼等だが……突如香月はこう言った。

「白竜号とマイロード号の交配の卵を僕に下さいませんか？」

突然の無謀な提案に、白川氏も川上氏も笑って言った。



ダブルB

「何を言う。この鳩達はもう老鳩。まして、説明を聞いていなかったのか？マイロード号は酷使のせいで卵も産めないメス鳩になっているんだよ」

川上氏の言葉に、更に説明をするように白川氏が言う。

「君のような洞察力の鋭い子なら、どれか一番をあげても良い。それを種鳩にすれば良い」

川上氏が白川氏の顔を見た。決して、そんな事は自分であっても言ってくれる事はなかった氏であるからだ。川上氏は、白川ベルランジエ系を使翔したい夢を長年持っていたのであった。

この香月の提案は・・・まさに彼の今後の人生と、まだ生まれぬ奇跡の鳩に翻弄される出来事になる事を・・・この日の誰もが想像もしなかった・・・。

「無理には言いません。でも・・・」

香月の突飛な願いを川上氏も、少ししつこいよ・・・と、咎めようとした時だった・・・。

「分かった・・・君ほどの子じゃ・・・ただし、二羽とも老鳩じゃ。一回だけなら、気の済むようにやって見るが良からう」

「えっ・・・？白川さん・・・いかに香月君が提案しようと、私には」

言いかける川上氏を制するように、白川老は言った。

「ええのじゃ・・だが条件もある」

「なんでしようか？」

「君の学校が夏休みに入ってからにしないさい」

「えっ・・良いのですね、そしたら！」

香月の目がきらきら光った。満足そうに白川老は頷いた。交互に香月、白川老の顔を眺める川上氏だった。非凡は非凡を知ると言う・・私が、凡庸だから二人の考えを見抜けぬと言うのか・・。

「ねえ、お父さん！もう帰ろっ！」

ドンと遊んでいた香織が戻ってきた。そのドンは嬉しそうに香月にも飛びついた。

「おお、よし、よし」

香月はドンの頭を撫でた。

「へえ・・・ドンが、白川さんと香織以外の初対面の子にこんなに愛想が良いのは初めて見たよ」

川上氏は、見ていた。白川氏は笑った・・・。

「お前・・・どえらい子を連れてきたのお・・・」

「えっ・・・それは、どう言う・・・？」

川上氏にはその言葉は、全く理解できずにこの日はこうして過ぎたのだった。香月が佐伯氏から貰って持ち帰った鳩・・・やがて、次代のエース種鳩ともなる、ムーン号

人と人との出会い、その幾千万、幾億かの出会いの数の中で、一体どれほど自分の人生に心揺るがす、そして揺り動かされる出会いがあるうか。人間と人間、或いは動物でも、その瞬間の中に突き動かされる情感も又ある。この日の香月少年には佐伯氏、白川氏、ムーン号、白竜号、ネバーマイロード号、ドンと言う大きな人生の出会いがあった。川上氏、香織との出会いとともに・・・。

この日以来、香月は毎日、白川宅へ訪れる様になった。学校から戻るとすぐバイクにまたがり香織を乗せて、家に送った後、雨の日も一日も欠かした事が無かった。もう夏休みもすぐになるこの日曜日、川上氏が白川宅を訪れていた。

香月が忙しそうに向こうで何かをやっているのを見ながら、白川老の体調を何気無く気遣っている川上氏だった。

「どうです？香月君はまだ諦めていませんか？」

「いや、いや・・諦めずなんての話では無くなるかも知れん・・ひよつとしたら・・」

嬉しそうに白川老は言う。

「ご冗談を・・あはは」

川上氏は笑った。そこに夏の日差しが感じられる、暑い日であった。

「なんの冗談であるものか・・。あの子が思うようにさせてくれと言うので、黙ってわしも見て居った。だが・・あんなに勝気でオス鳩を寄せ付けなかったネバーが、今は白竜と仲むつまじく居るのよ」

「ほお・・でも・・」

「まあ、聞け。ちゃんとした方法を香月君は考えた上での話じゃ。それに感心したのよ」

嬉しそうに目を細める白川氏の顔を眺めながら・・この気難しい所もある白川博士が・・？こんな孫を見るような優しい顔になって・・そう思っている所へ香月が走ってきた。ドンもじゃれながらついてくる。

「あつ、川上さん、どうも」

頭を下げる香月に、

「一体・・・白竜とネバーにどんなマジックを使ったのだね？香月君」

川上氏も感心があつて聞いた。

「あ・・・その前に・・・この前の佐伯さんの鳩、選手鳩鳩舎に慣れましたよ」

「えっ・・・？」

川上氏は、一ヶ月足らずで現役競翔鳩がそんなに簡単に鳩舎に慣れるものか・と言う顔をした。

「ふおふおふおふお・・・その辺の事もこのカップリングと関係あるかも知れんのお、川上君」

愉快そうに白川老が笑った。

「白川のじいちゃん！まだ内緒ですよ！」

香月が言う。

「し・・しらかわの・・じ・・い・ちゃん？」

たった一ヶ月余の間に一体何事が起こったのだろう、小さい頃よりこの家にお邪魔していた香織がそう言うのなら分かるとして・そしてドンのかなつきようも・・？川上氏はますます、首を傾げるばかり・・
出会いは、年月をも超越して既にこんな関係さえも築いたというのか・・。

「どう・・言う事なんでしょうか？この関係は・・？」

おどけたように、笑いながら、川上氏は白川老に聞いた。

「聞いてみたら良からう・・まず、この子に」

白川老は、微笑みながら言った。ツバメが目の前を飛んで行く。青い空に白い雲が浮かんでいた。
川上氏が苦笑いしながら、

「どうやったの？佐伯君の鳩」

「別段変わった事はしていません。ただ、あの鳩はまだ一歳にもなってなかったですよ。ハンセン系の血も入っていますし、少し晩生のような感じを受けたのです」

「うむ・確かに」

川上氏は頷いた。

「それに佐伯さんは、大羽数を飼育されていますし、ひよつとして、選手鳩鳩舎には十分な安住できるスペースが無かったのでは？そう考えました」

「うむ・。彼はレース淘汰主義で来たからねえ」

「それで、ちょうどピン太号と交配して見ようと、番にしました」

「なるほど！もう説明は良い、分かったよ。香月君」

白川老が笑った。

「あつはつは。この子はお、動物の心が分かるのじゃ。ドンがすぐなついたのも持って生まれた才能じゃ」

川上氏も大きく頷いた。

「まさに・・・」

白竜号とネバーマイロード号の交配過程について・・・

ニ羽を一坪の鳩舎に移す。中を二つに区切った。仕切りは金網だが、最初の一週間は黒い布で覆った。そして鳩舎全体を暗くして、いきなり大羽数の広い鳩舎からの環境変化にストレスが溜まらぬように気遣った。しかし今まで多くの鳩と暮らしていたニ羽は一羽きりになって。「グー、グー」と喉を鳴らしていた。一週間して黒い布を取ると、両方の鳩は互いを意識しだした。その日からニ羽の鳩には少しづつ脂肪分の多い餌を与えて行って・・・もう老鳩の白竜号に求愛のポーズが見られるようになった。だが、ネバーは呼応しない。香月は再び黒い布で仕切りをした。今度は鳩舎を明るくして、そして一週間・・・ネバー号は白竜号を意識しだしたのである。そして、仕切りを取った現在・・・

ベテラン競翔家の川上氏は、ここまで聞いて全てを理解した。たった競翔を始めて、二年も満たない子が、こんな高度なテクニクを誰に教わる事なく自分で考えたのである、動物学者の白川老でさえも感心するほどに。驚きは付き合ってきた川上氏をさえ、凌駕する香月の秘めたる才能はどんどん開花して行くこうとしていた。

香月が又忙しく向こうへ行った後で、白川老はこう言った。

「あの子の祖父は、小学校の時に他界されたそうじゃ。わしの目を見てじいちゃんそっくりだと、それで、じいちゃんと呼ばせてくれと、ゆうてくれた。それが嬉しくてのお・・・」

白川老の目に涙が滲んだ。

「まさしく、人を魅了する力があの子には備わってるんでしょね。私も、あの子の才能がどこまで開花するのか見届けたいと思います」

「これも、縁じやろうて・・・。」

「で・・・気になりますねえ・・・どうやって産卵させるのか・・・」

「然り！・・・あはははは」

白川老が元気を取り戻し、明るくなった事を川上氏は喜んだ。香月の毎日の訪問は白川老に対する思いやりも含んでいるのかも知れない・・・そう思った。

が・・・思惑は思うようにはなかなか進まなかった。

そんな夏休みに入ったある日、珍しく香織が香月のバイクの後に乗って、白川宅へ来た。そこへ、役場の人らしいネクタイ姿の中年が、何度も頭を白川老に下げながら出てきた。

「じいちゃん・・・」

「おっ・・香織ちゃんも彼氏と来たのかな？」

「いやだあ、香月君はお友達よ、ね、香月君」

顔を赤らめて香織は、又ドンと池の方に走って行った。香月も頭を下げながら、鳩小屋の方へ。

「御孫さんですか？微笑ましい、お似合いの綺麗な二人ですね」

男が言った。

「いやいや・・わたしには子は居らんで、孫も居らん。ただ・・孫同様には思っているし、そう言う付き合いもしてきた」

役場の人らしい男は又深々と頭を下げながら、帰って行った。

白川老は一向に卵を産もうとする気配を見せないネバーが気になっていた。香月の後に立ってこう言った。

「無理じゃろうかのお・・」

ところが、香月はにこりとして答えた。

「いいえ、まだ産まないですよ。夏ですし、体力の消耗もしますし、秋を目標にしています」

「ほ・・では、それも計算上の事かのか？」

「いいえ・・そんな気がするだけです」

「わっはっは。君は面白い子じやのう、香織ちゃんを呼んでおいで、スイカでも切ってあげよう。君の家から貰ったもんじやがの、ふふ・・」

二人は広い縁側の池を見ながら、良く冷えたスイカを食べた。微笑みながら白川老が言う。

「ほんに似合いじやのう、二人はこうやって見ていると御内裏様とお雛様のようにじゃ・・」

「だからあ！私と香月君は、仲の良いお友達なんだって！」

香織が頬を膨らませながら言う。

「ほほ、まあ、良い。香織ちゃんの成人式位はわしも見たいからのお」

白川老の言葉に鋭敏に香織は反応した。

「いや！そんな話。白川のじいちゃんは、ズーっと、ズーっと長生きして私の子供を抱いて貰うだもん、そんな近い話なんて！」

香月が、香織の剣幕に少し驚いていた。

「そうですよ、じいちゃん。僕もここにズーっと通うつもりですから」

「有難い話じゃ、ほんに嬉しい事じゃ、二人にそう言ってもらえるとうう」

白川老は益々目を細めた。

「ところで・・・？香月君はE校ではトップらしいが、将来は何になるつもりかのかの？」

「はい・・・ここへ来て思ったのですが、僕は動物病院の医師になりたいな・・・そうあれたら・・・と」

「えっ・・・？そうなの？香月君」

香織が香月の顔を覗き込んだ。少し不安のある顔でもあった。

「いやあ・・・まだ漠然としか・・・来年二年だしね。少し考え始めたところさ・・・君は？」

「私・・・？私は保母さん！」

「決まつてるのか、香織ちゃんは。それは素晴らしい事じゃのう」

「子供が好きだから・・・でも、香月君はもつと別の道へ行くのかと思っていたわ」

黙って聞いていた白川老だが、奥の部屋へ入っていった。まだまだ幼さの残る香月と香織の将来像もやがて現実と言う壁がやってくる。

白川老が奥から出てくる。

「香月君、もし、役に立つなら、こんな資料もある。使ってくれ」

それは、分厚い動物医学の資料であった。香月が漠然に考えているのも、やはりこの白川老の言動から随所に見える博識な知識と、その数々の功績を知ったからだだった。

「有難う御座います。実は・・・僕は、香月系を作りたいと今思っています」

「ほほお・・・なるほど・・・では、君はS工大を指すと言うのかな？」

「ええっ・・・！」

香織が声を上げた。S工大と言えば、中央の国立より更に難しい・・・と言うより、研究機関のような

大学であり、学力だけでは決して入れぬ大学であった。

「まだ、決まっていますませんが、ここへお邪魔する内に白川系に興味を持つようになりました」
「なら・・・！」

白川老が言うのをその先の言葉は必要ない、と言うように香月はかぶりを振った。

「いえ、僕はまだ競翔歴一年の競翔家です。白川系を使翔できるほど経験はありません。それに、川上系さえ全く雲の上の存在だからです」

「ふむ・・・謙虚な言葉ではあるな・・・。だが、君はもつと凄い事を提案しておるぞ？」

わはははと白川氏は笑った。香織はしげしげと香月の顔を見た。自分が果たして香月の彼女だとしてこの荒唐無稽とも思える、進路志望に対して、ついて行けるかどうかなのかと・・・。

実はこの日から数日後・・・川上氏が白川宅を訪問してから、少し様相が変わり始めていたのだった。時は、急速に風雲を告げようとしていた・・・。

この日は珍しく、午前中に香月が全国旺文社模試試験の為に、白川宅には来ないとの事で、川上氏が白川老から、呼ばれていた。最近は客間で話しをする事も少なく、競翔家としての付き合いが主の二人であったが、白川氏は絶大な信頼を川上氏に寄せていた。川上氏も実の親以上の気持ちで白川氏に接し

てきた。

「今日は少し肌寒いのお・・・」

白川氏の体調は、決して良いとは言えなかった。

「少し、数日の猛暑で、暑気あたりされたのでは・・・？」
「のお・・・」

白川氏は、言葉を選ぶように言った。

「あの子・・・香月君の事なのじゃが・・・」

「はい・・・？」

「S工大を目指すというところ・・・」

「私も香織から聞きました。しかし・・・幾ら県下でも優れた成績の子でも・・・」

「・・・あの子なら、何とかなるかも知れん。明確な研究材料がある」

「競翔鳩ですか？血統を作ると言う・・・」

川上氏は、少し曇り顔で言った。

「のお・・・」

再び白川氏が言う。

「はい・・・？」

その言葉が、少し重たく感じた川上氏は今度は低いトーンで、同じ返事をした。少し雨がばらつき肌寒い日でもあった。八月もそろそろ終わりに近づく・・・この日。

「わしは・・・もう永くは生きられん」

「そんな・・・」

悲しい目をして、その病状を知っていた川上氏は白川氏を見詰めた。目頭が熱くなっていた。心情派の川上氏であった。

「知っておったか・・・」

「なんとなく・・・」

「わしは癌に冒されておる。身寄りも居ないので、告知を希望した。もう一年と余命も無いと宣告を受けて居る」

「でも・・・しかし！」

川上氏の頬に涙が伝う・・・言葉にならなかった。

「人は死ぬ・・・早いか遅いかの違いじゃ。で・・・今日呼んだのはお前に辛がって貰う為でも、わしがお前に哀れを請う為でもない。託したいものがある」

白川老が、分厚い資料を手渡した。

「こ・・・これは？」

「白川系の全血統図と、何通かの手紙が入っておる。わしの死後これを開封してくれ」

「そ・・・そんな。」

「まあ、聞け。わしは大学で唯一やり残した事は・・・白川系の完成じゃ。その血の研究じゃ。その思いが、伝わったのか・・・香月君と言う少年が現れた」

「では、彼に？」

「いや・・白川系はお前に託したい」

「ええっつ！」

川上氏は驚くと同時に、四肢が震えていた。

「香月君は香月系を作ると明言した。それはきつとわしにも出来ぬ事を、あの子は考え始めたのだろう。白竜、ネバーの交配もまるで、わしの無念が伝わったように・・」

「無念・・？」

そう言つて白川氏の顔を覗き込んだ川上氏であつたが、見る見る白川氏の顔が蒼白になつた。

「大丈夫ですか？お顔の色が優れませんが・・」

「大丈夫じゃ・・。あの子は・・恐らく天才じゃろう」

「はい。私もそう思っています。常人を飛び越えた何かがある」

「ネバーを抱いた時・・じいちゃん、なんで、ネバーを千二百キロGNレースに出さなかつたの？と、そう聞いた」

「でも、それは、白竜と言う・・」

「結果はそうじゃ、その白竜の天分をわしは見抜けなかつたのよ。白竜こそ、千百キロGC H向きの鳩

であった」

「ほう・・初めて聞きました。そんな事」

「あの子は、見抜いた、一瞬で。・・そしてこう言った。『じいちゃん、ネバーは完璧なレース鳩ですね。白竜号すら飛び越えた最高傑作です』と。・・」

「そんな事を？確かにネバー号は素晴らしい鳩ですが。・・？」

川上氏はまだ白川氏の言葉が見えなかった。

「あの子が興味を持ち始めたのは、オペル系と言う近親で固め続けた系統なのじゃ。それで、香月系を作りたいたいと言うようになった」

「なるほど。・・」

川上氏は頷いた。

「わしは。・・ドキリとした。この子の澄んだ目は全てお見通しなのでは無いかと」

「優れた洞察力は私も認めて居ります」

「いや・・そんな事ではない。あの子が聞いたのは『じいちゃん、なんで、ネバーを不向きな千百キロ GCHレースに六回も参加させたの？』その言葉じゃった」

「それは・・ネバーだからこそ。成し得る資質があつたからでしょう。だからこそチャンピオンまでなつて。日本中の皆がその素晴らしい資質を認めています」

意を決したように、白川氏は言った。

「言おう・・。わしは、自分の競翔人生の中で、一方は白川ベルランジェ系と言う目標と、もう一方の中で、超銘鳩『ミイニユエ号』を作ろうとしていた。それは、オペル系の真髓と言われた『ダブルB』の三重近親の交配の中から生まれた突出した一羽のメス鳩によつて、念願が適うか・・と言う期待を抱かせたのだ」

「それは・・しかし、白竜号と言う」

「いや・・白竜はわしの猛訓練の中から育つた優秀な血かも知れないが、伏兵に過ぎなかつたのだ」
「・・・・」

川上氏は黙つた。天下の比類なきGCHの超銘鳩を・・？伏兵と言うこの老人を・・。

「わしの悲願はCH、N、GCH、GNの四大レースに一桁入賞を果たす事だった」

「・・それはGNで白竜号による、二年連続優勝を果たされているじゃないですか。この長距離不利と言われる東神原連合会において、最遠隔地でありながら、二年も連続総合優勝など、奇跡と言われる偉

業ですよ」

「それも、天佑・・そのレースはネバーが参加予定だったのだ」

「ネバーは記憶によりますと、その年は余市の千キロNレースに参加していませんね、確か総合二百五十六位だったような」

「そんなもんじゃなかった・・ネバーの実力は」

「・・この後も次年度にGCH・・以降、百二十四位、二百四十二位、百八十九位、二百八十七位、百四十六位、二百七十六位と六年連続総合上位入賞。やはり再遠隔地である東神原連合会において、又こんなメス鳩でありながら、飛びぬけた素晴らしい成績を・・」

「ネバーが取るべきだったのだ・・GNは」

川上氏は少し、白川氏の頭がおかしくなったのか？と顔を見上げた。

「わしは・・オペル系の集大成とも言えるこの鳩を手に入れた時、今までのわしの競翔人生の集大成の時が来るのを予感したのだ。それまで、築きあげてきた白川系など、まるで、無意味であったように・・その為に猛訓練で淘汰した鳩には本当に可哀相な事をしてしまった。全てはネバーと言う最高傑作を育て上げる為に。その白竜が参加予定だったレースは日程の都合で、ネバーは参加できなかった。その前の余市Nが思わぬ悪天になり、恐らくネバー一群はもつとも遠いコースを飛び帰ったのである。連合会でじゃ一位になっても総合では東コースの連合会が上位を独占したのだ。わしの歯車はそこでまず狂

った」

「狂った？総合三百位以内に入賞させて・・・？」

「そんなもんじゃない・・・豊かな副翼、柔らかい筋肉、絹のような密集した羽毛、姿・・・どんな銘鳩であらうと霞む完成されたものじゃった」

「確か、品評会でも五年連続一席でしたよね。素晴らしい鳩です」

「わしは・・・一羽の鳩で四大レースの一番入賞・グランドスラムを狙って居った」

「ええっ！」

初めて聞くその言葉に川上氏は仰天の声を上げた。

「じゃが・・・伏兵白竜に先を越されたネバーには、これでもか、これでもかと言う挑戦しかなかったのじゃ。香月君はその資質を千二百キロにあると見た。まさしくネバーは千二百キロ向きの鳩でもあった」

「なんと・・・」

川上氏は・・・絶句したままだった。そんな奇跡を起こそうと、この偉大な競翔家が考えていたなど思おもつかなかったからだ。

「わしは恐いのだ・・・白川系が完成した時、それをあの・・・優しい子がわしのように狂ってしまう事が・・・」

だからこそ、お前に託したい」

「私は・・・白川さんに人生の師として、偉大な競翔家として、目指してきた事をお忘れか？」

川上氏の目に涙が光った。声が震えていた。

「分かっておる。その為の川上系と言われる一群を作ってきたのであろう・・・」

「なら！何故・・・？」

「もう、わたしには残された人生は僅かであろう。その中で、心残りはネバーと白竜号だけだ。お前しか居らん。あの子に辛い目はさせたくない」

「・・・貴方は、香月君に白竜、ネバーの交配を約束させたじゃないですか。何で・・・？」

「いや、あの二羽は違うのだ。わしが思うに卵を産んでも、無性卵であろう。気の済むようにさせてやろうと思っておるだけじゃ」

「そこまで・・・考えて居られたのですか？」

「死にゆく者の願いじゃ。お前の川上系は連合会で通用しても、中央鳩界の強豪達には通用しない。分かって居る筈だ」

「でも、私は競翔家である前に、愛鳩家であります」

「分かって居る。ゆえに頼む」

こんな会話は交わされていたその時・・・香月と香織は・・・

「やあ、待っててくれたのかい？」

香月の試験が終わるのを待っていた香織であった。

「ねえ、海行きたい」

「海？・・・うん。今日はじいちゃんが来客あるので遠慮してくれって言ってたから、いいよ」

そのまま、海までバイクを走らせた二人だった。

香織が裸足になって水際まで走って行く。まだまだ暑い夏の終わりであった。

海岸でしばらく遊んでいた二人だが、大きな松の木の下で、座りながら・・・

「ねえ・・・お父さんから何か聞いてない？じいちゃんの事」

「いいえ？何の事？」

「うん・・・聞いて無かったら良いんだ・・・」

香月は遠くを眺めていた、横顔を眺めながら香織が言った。

「ねえ・今度は私が聞いても構わない？」

「ああ・・・」

「S工大・・・本当に受けるつもり・・・なの？」

「出来れば」

「農大だつてあるじゃない、獣医学部」

「うーん、でも何か違うかな・・・とか」

香織は海を見詰めながら、少し無言であつた。

「ねえ・・・じいちゃんの事・・・なんで？」

再び香織が、その事を聞いた。

「え・・・ああ、なんとなく、体調は優れないとは聞いているんだけど、時々苦しそうなんだ」
「そうなの・・・お父さんは何も言ってくれないから」

再び無言の二人だつた。

「ねえ・・・」

「うん・・・？」

「私と香月君の関係って？」

「えっ・・・友達だろ？」

「じゃなくて、もっと特別のものとか？」

「・・・好きか嫌いか、付き合っているかって事？勿論前者だし、付き合っている・・・と思うんだけど」

香織は、いつに無く真剣な表情でもあった。

「相川さん・・・」

「相川？ああ、あの新聞部の？」

「そう、私に付き合って下さいって」

「・・・で？何て答えたの？」

香月が少し不機嫌そうな顔になった。

「妬いてる？」

「そう言う訳じゃ・・・」

むすつとして香月は答えた。

「あんまり鳩の事ばかり夢中になってると、はいって・・・答えちゃうぞ」

香織はいつもの明るい笑顔で、海に向かって又走り出した。香月も後を追いかけた。

こんなまだまだ幼い二人の交際で、人生設計すら出来ていないその中で、時は既に進行していた。

香月が秋のレースに参加させた鳩は第三回目の交配、源鳩ボス号とママ号の仔十羽であった。が・・・文部杯、Jr杯はなんとか優勝した香月も最終の五百キロレースで八位に一羽入賞しただけで、過去四回の競翔をいずれも下回る事になった。この最終レース八位の鳩がのちの『マル号』この年の優秀鳩はこの一羽であろう。初代の当り配合も三年続けてはなかなか難しいものでもあった。

交配の難しさはこのように、同一の血では競翔と言う過酷なレースでの成績を支えるのは、難しいのである。

それから・・・香月に沈みがちの日は続いていた。白川氏の健康が優れぬのであった。通いのお手伝いさんに、床の世話をしてくれる看護師さんがついていた。それでも、香月の白竜号、ネバー号の交配の

応援をしてくれる・・・。

そんな、もう初冬の日であった。ノート佐野から香月に電話が入った、連合会中の動向は彼に聞けば良いと、そう言われる情報通でもあった。

「磯川さんが復活するようだよ、春のレースから」

「そうなの！又にぎやかになりますね」

香月も喜んだ。

「凄い鳩だよ・・・磯川さんの種鳩」

「どう言う血統ですか？」

「ペーパーマン系のヨーロッパのチャンピオンだよ。現役レーサー。その中でもバルセロナINレース千百キロレース総合三位に入っている銘鳩『インデント号』直仔、七百キロN総合優勝、十二位の『パイロン号』直仔を導入している。その他にも現役レーサーが何羽も！」

磯川らしい思い切った導入だが、これは特筆すべき近代の飛び筋でもある。その中でもインデント号の主流飛び筋は、頭抜けて居ると聞く。又、パイロン号は最強の中長距離競翔鳩と言われる不世出の銘鳩でもある。

「凄いですね・・・」

香月は、感心していた。しかし、香月の声が小さかったので、電話のトーンが低かったのか、佐野が聞く。

「どこか・・・電話の調子でも悪いの？」

「いいえ・・・どこも」

「君の所も秋は今ひとつだったようだね。当り配合ってゆうか、そう言うのって難しいよね」

「ええ・・・でも、春にはピン太やこの秋の五百キロ八位が居ますし、佐伯さんの所の鳩もなかなか良さそうだし、それとピン太とその佐伯さんの所の子鳩四羽がすごく面白そうなんですよ」

「ハンセン系だね、佐伯さんの鳩・・・きっとブリクー系と合うと僕は見ていた」

流石に研究家の佐野だ、さぞかしノートにはびっしり書き込んでいる事だろう。その電話を切った後。香月は川上宅へ向かった。

「よお！」

川上氏は、ここにこといつものように対応した。

「あの・・聞きたい事があります」

「ん？なんだね？」

「じいちゃんは・・」

「白川さんは少し体調が優れぬようだね」

香月はじつと、川上氏の顔を見詰めた。澄んだ、何事をも偽らぬその目は川上氏に何かを訴えるように悲しい光を湛えていた。

「僕が白竜と、ネバーに夢中になっっているから。それが原因で・・秋には産卵の気配はありましたが、無理でした。当分中断しようと思っっています」

「そうか・・それは仕方が無い。老鳩だからねえ・・だが、君と白川さんの健康とは全く関係が無い。むしろ君の訪問を喜んでいた位で、私からも礼を言うよ」

川上氏は頭を下げた。

「いえ・・実は、凄く気になっていた事なんですが・・じいちゃんは、どうして、ネバーを酷使したの

でしょうか？」

おお・・・と言う顔に川上氏はなった。白川宅での話がつながったのだ。

「・・・なんで、そう思うのかな？」

「白竜号のGNは二年連続で好天気恵まれ、スピードバードの白竜号は、勇敢なその血と、優れた方向判断力でどの鳩よりも鳩舎までの最短距離を選び、それも最遠隔地でありながら脅威の二年連続総合優勝をしました」

「その通りだ。白竜号については君の主観通りだ・・・私もそう思う」

「一方ネバーはその恵まれた天性の体、特に体を覆い隠せるほどの副翼を駆使しながら、高空まで浮かび気流に乗って、最適の条件を探しながら、鳩舎に向かう典型的な長距離鳩です。むしろ、この日本の地こそ狭すぎると思える、超長距離鳩だと思えます。優れた状況判断力も備わって居ると思います」

「・・・そこまで、君は鳩に触っただけで、分かったと言うのか・・・まさに！私も同感なのが、一体君って子は・・・」

川上氏は非常に驚いていた。既に香月の天分、競翔家の資質は、頂上を駆け巡るが如き成長を見せ始めていた。

「もう、ワンチャンスだけ下さいと言ったら、無理でしょうか、じいちゃんに」

「私が答える事ではない・が、それは白川さんも望む事でもないのかな？」

「僕が、白竜と、ネバーの交配を続ける事がじいちゃんの健康を蝕むようで、最近痩せて行く顔を見るのが辛いんです」

川上氏の胸が詰まった。香月は何かをその鋭敏な感覚で、感じ取ろうとしている。

「それでは、私からお願いしところ、もう一度。白川さんは大丈夫だ、春になったら良くなると思うよ。それより磯川君が復帰するようだね。ペパーマン系の飛び筋を導入したようだ。スケールが違うねえ・」

川上氏は話の方向を転じた。

「僕も佐野さんから聞きました」

「あはは。私もだよ」

二人は笑った。

「君の所の交配も三年は続かなかったようだが、春は初代交配もいるし、なかなか君の所も陣容が揃っ

ている。私も春には、今回は大羽数参加できそうだよ」

この時点で、川上氏が既に、白川系の一部の種鳩を自鳩舎に導入している事を香月は知らなかった。川上氏も、今度の磯川の導入には相当警戒していたようで、競翔家としての彼自身の変革も・・何かが大きく変わろうとしていた、初冬の事であった。

年が明け、連合会の新年会に向かう川上氏の車中には、佐野、浦部、香月が乗り込んでいた。話の中心はやはり、磯川のペーパーマン系導入であった。

「とにかく、凄いです。春には五十羽くらい参加予定だと聞いています」

佐野の言葉であった。導入は去年の春から始め、四番からの仔鳩はいずれも、ペーパーマン系、一部ア
ンダーソン系のそれも記録鳩2羽を交配用に導入しているらしい。

「今年は連合会もにぎやかになりそうだね。ところで、今年から、秋の七百キロGC（グランドカップ）
が復活するのと、春の千キロのQC（クイーンカップ）、それに、三百キロレース、五百キロレースに
十連合会合同のダービーが春、秋に追加になる。レースも分散できるようになって、盛り上がりそうだ
ね」

川上氏が嬉しそうに言った。

「秋の七百キロは・・悪天続きが重なって、放鳩地の関係で、若鳩の帰還率が悪いって中止になっていたんじゃないんですか？」

大人しい、浦部が言った。彼は決して悪天のレースには鳩を参加させない。ジャンプと言う形でのレース参加をしている。彼は少羽数参加だが、長距離には、成績をあげている学生競翔家でもある。

「うむ・・その事も検討されて、今年からコースを変更するそうなんだ。来年以降は秋の西コースの千キロレースも復活するようだね」

川上氏が答えた。

「もう一つ、僕の情報では、ポイント制導入で、連合会の優秀鳩舎賞を設定するのをこの会で謀るとか？」
情報通の佐野らしいで言葉であった。

「そうなんだ。でも、それは大羽数参加の鳩舎が有利にならないように検討しなきゃね。色々な意見は

私の耳にも入っているが、少し皆の意見を聞いてからだ」

香月は終始無言であつた。磯川のペーパーマン系は恐らく台風の目になりそうだな・・・そう思っていた。会には、連合会のメンバー百二十五名が全員集合していた。

高橋会長の挨拶が始まる。磯川がにこにこしながら、香月達の横に座った。

「頑張っているね、香月君」

「とんでもないです。それより磯川さんの所、凄い血統の鳩を導入したそうですね」

「ああ、俺なりに研究したんだ。自信もある。非常にも出来も良いし、スピードバードだから、まだ文部、Jrの権利が残っている間に君と勝負したいしね」

「いえ、いえ・・とんでもないです。」

「佐野！君の情報では、佐伯さんの鳩も香月君の所に居るんだってね」

佐野を呼び捨てにする親分肌の磯川は、確かめるように聞いた。

「え・・ええ。」

「川上さん、佐伯さんと言ったら、この近辺地区の連合会では最強の人達で、その血を君が使翔すると言うのは、僕にとってもやはり警戒ナンバーワンだ。楽しみだね」

相変わらず、自分の競翔は戦い・・・それだけ言って場を離れて行った。

「ねえ・・・又恐い人・・・帰ってきたね」

佐野がペロりと舌を出す。香月もおかしくなつて下を向いて笑つた。
会長の話がここで、今年の展望に移つた。

「で・・・今年の春には三百キロレースで、十連合会合同ダービー開催。五百キロレース地区ダービー開催すると言う事で、我が連合会も参加でよろしいですか？」

大きな拍手が沸いた所で、

「賛成多数と言う事でこの案件は決定しました」

水谷書記が答えた。

「次に・・・今年の秋にも上記レースが追加と、秋の七百キロGC・・・これは仮名で、今スポンサーを募

っている所です。何社か、協力したいと申し出ています。その七百キロレースがコースも変更して復活します。その参加ですが」

そう高橋会長が言いかけた時に、磯川が手を上げた。

「はい・・磯川君」

「その参加には、若鳩以外もOKと言う事ですね？」

会場がざわざわした。通常は秋のレースは若鳩主体で行われるからだ・・磯川の質問の真意は、次の案件を見越しての発言だったようだ。

「規定は無い・・だからそれは自由です」

「分かりました」

磯川はにやりとして、座った。香月は磯川の方を見た。彼は自信たっぷりの表情を浮かべていた。

「では、この案件も決定と言う事で次の提案事項ですが、今年からポイント制導入で、連合会の活性化と、鳩質向上のために最優秀鳩舎賞と、準最優秀鳩舎賞の提案をしたいと思います」

会場がざわついた。なるほど・・・磯川はその為には選手鳩を春、秋使おうと言うのだな・・・。香月はそう思った。議事進行で、高橋会長の隣に座っている、川上氏が切り出した。

「どうぞ、忌憚りの無い意見をちょうだいします。案件はポイント制を導入と言う事になってますが・・・」
磯川が手を上げた。こう言う場には、理論も討論も長けている男であった。

「その場合、距離、総合、参加羽数など、どうなっていますか？」

川上氏が答えた。

「この案件では、百キロ優勝で、一十十点。全国順位での得点は十十百点。二百キロレースでは、十一十二十点。以下距離に準じて同じです。ただし、三百キロダービー、五百キロダービーは、総合百位までの得点を百十十千点として、三百キロレースなら〇・三・五百キロレースなら〇・五点として、プラスして行く事になります。ただし、七百キロ地区Nレース、九百キロQC（東神原連合会では千キロになる）千キロCHレース、千百キロKCレース、千百キロGCHレース、千二百キロGNレースの総合レースの扱いですが・・・？」

川上氏がそこに少し論点があるかな？と言葉に少し疑問符をつけた。

「その件であります」

水谷氏が、言葉が続けた。

「この方式ですと、大羽数参加の鳩舎が有利になると、先ほどから川上氏から指摘を受けました。又、鳩質向上の面からもちたずらに大羽数志向を強めると、失踪鳩問題に絡めて、射幸心だけに傾く懸念も指摘されまして、今少し検討いただきたいのです」

少し会場がざわめいた。

「必ずしもそうはならないのでは無いですか？」

磯川が言う。

「どうぞ、意見を」

水谷氏が磯川を指す。

「冒頭に言われたように、近年鳩質の向上と言う事もあるように、このポイント制導入は、各鳩舎がそれぞれに精鋭を育てると言う事になり、必ずしも大羽数参加鳩舎が有利にはならないと思います。それなら、大羽数参加となる、近距離こそ、学生にとつても有利でもあります。参加数×順位・・・例えば、千羽数参加で、二位なら千・二で、五百点。こう言う方式に改めてはどうでしょうか？」

又会場がざわめいた。確かに・・・それなら近距離参加の鳩舎でも高い得点があげられる。

「今の意見はどうでしょう？」

川上氏が聞く。賛成多数で変更された。こう言う事には抜群の才能を發揮する磯川だった。

「本件は可決されました。残る四大レースプラスQCが増えた事と、Nレースの扱いを一案として提出します。七百キロレース地区Nレースは、総合順位三百位まで。一位は三千点、以下十点。千キロのQC、千キロのKCレースは参加する連合会数も他の長距離レースと比べて少ないのですが。この順位は総合百位までで切り上げたいと思っておりますが」

「それは、今後もCH、GCH、GNレースの巨大化を分散したい狙いもあり、参加羽数も増える傾向にあります。特にQCは、非常に帰還率も高い放鳩地ですし、申し込み連合会も多いと聞きます。同じ扱いでよいのではないでしょうか？」

長距離鳩を育てる事では全国的に名高い、連合会の最古参で、RCH『道上カイザー号』・千キロ三回、千二百キロニ回優勝の使翔者道上氏が言った。なるほど・道上氏はQC、KC、GNレースを狙っているのだな？香月はそう思った。この意見も拍手で、賛成された。連合会ではやはり若い競翔家の台等で、活性化しているように感じた香月であった。

会が終わわり、高橋会長宅での数人の座談会でもやはり、新設のQC、磯川のペーパーマン系の話題が出ていた。集まったのは、川上氏、道上氏、香月、佐野、浦部、水谷氏であった。

磯川のペーパーマン系は、近年の飛び筋・その中であって、中心的なレーサー導入はやはり、衆目が注目する大きな話題であった。かんかんがくがく・話題は尽きなかった。近隣の連合会でもその話題は大きかった。果たして・？この日本の気候風土、地理条件に合うのかは、未知数でもあった。だが、磯川も突出した優秀な使翔家・十分に勝算あつての導入だろう、香月はそう思いながら、話題の続くこの席を早々と退散した。

さて・・・そうする内に春のレースは始まった。いつもなら短距離は、調整訓練程度にしか扱わない大人達も、文部杯の若者に混じって鳩時計を打刻する風景は、「最優秀鳩舎賞」の設置が、いかに大きな

ったかを物語っていた。香月と磯川、連合会の強豪達・・本当の意味での競翔は、今からスタートするのだ。

会員数百二十名、参加羽数六千八百羽と言う、連合会創始以来最大の百キロレースの幕が切って落とされた。当日は曇り、無風で低気圧が通り過ぎたやや遅い午前七時十分に、放鳩車から一斉に解き放たれた鳩群は、空の雲に負けない黒い塊となって、旋回する。その中で、旋回もせず、一直線に帰路を指した十数羽が居ると、放鳩委員から報告を受けた川上氏だが、その鳩達が果たして？川上氏の鳩か、磯川か、香月の鳩達なのかは、十時前後であるだろう帰舎予想時間の打刻までは知る由も無い・・。

しかし、香月にはある程度の確信があった。香月の鳩舎の血統は、ノーマンサウスウエル系の血を濃く引き継ぎ、悪天に強く、勇敢で、方向判断力に優れていた。数年前にゴードン系を使翔し、常勝を欲しいままにしていた磯川を初参加で破ると、五シーズン、百キロ、二百キロでは圧倒的な成績を収めた香月鳩舎だからだ。

ようやく体調を戻された白川氏に、ネバー、白竜号の世話をお願いし、香月も充分な管理と訓練を重ねていた。川上氏も百十羽の大羽数参加で、今春に掛ける意気込みは、どの鳩舎も強かった・・。外に出て、空を見上げた香月だが、その瞬間、明らかな陰が写った、鳩だ！それも十数羽の一群。低空で飛んでくるその中で、一直線に香月の鳩舎に向かう鳩達。口笛を吹く。日頃の給餌の合図に素早く鳩達は反応し、三羽同時にタラップに入った。香月は手際良く、ゴム輪を外すと、三羽同時に打刻した。やはりだ・・思った通り、今の一群が先頭集団に違いない。食い込んでいた・・トップ集団に・・。今日のような天候には抜群の成績を見せる香月鳩舎の血統だ。

時計を見る・・八時半であった。百キロレースとしてはまずまずの分速で、千四百メートルは恐らく出ているであろう。再び空を見上げる香月の頭上には、百羽程の一群が見えた。その後ろに第二、第三の集団が続いている。だが、先頭集団から十五分遅れで、第二集団が帰舎。今度は四羽ほぼ同じに打刻、結局もう一羽を打刻して、香月は打刻を中止した。帰舎状況からして、かなり分速が荒れているような、そんな気がした香月に、川上氏から程なく電話が入った。

「どう？何分だったの？」

「僕の所は八時半前後でした。三羽同時です」

「やはり・・その辺が先頭集団かな？私の所が、八時三十五、六分だよ。二羽だ」

香月と川上氏の鳩舎は十キロ離れている。ならば、ほぼ同タイムと言える。優勝争いの顔ぶれが見えてきた。その電話の直後、ノート（佐野）から電話が入った。ノートもこの距離はいつも上位に顔を出す、強豪鳩舎だ。そのノートだが、いつものトーンのやや低いぼそぼそと言う声ではなく、かなり高い明るい声でもあった。

「やあ！佐野です。香月君の帰舎タイムは何分なの？今他のジュニアの連中に確認をとったんだけど、兄貴（北村）とウラちゃんは八時五十分頃らしい。僕は八時三十八分に打刻したよ」

彼は、他のメンバーと比べて、圧倒的に早い自鳩舎のタイムに声が弾んでいるようだった。彼も上位に食い込んでいたか・・・香月はその気持ちを損なわないように、少し曖昧に答えた。

「そうですか。僕の・・・所は、三羽同時にタイムはしたんだけど・・・。八時半過ぎかな？・・・ええ・・・先頭集団が十数羽見えたんですよ。多分、その一群が上位でしょう」

佐野もやはり香月が、上位に食い込んでいる事を聞くと、ややトーンが落ちたが、上位の入賞は間違いないと自信を深めたようで、そこで電話を切った。

香月鳩舎の全鳩帰還は、夕方四時になった。この最後にゆうゆうと一羽帰って来た鳩は、昨年の千キロ記録鳩であり、短距離のレースはいつも、夕方に帰ってくる変わった鳩だ。まだ、少し早いが川上氏宅へ向かう香月であった。川上氏宅へ着いたのは、五時少し前。陽はもうかなり西の方に傾いたが、川上氏は、まだ鳩舎の方へ居るようだった。香月が階段を昇って行くと、

「えっ？もうそんな時間か・・・」

と、まだ空を仰いでいる。どうしたのか・・・？香月が聞いた。

「どうされたんですか？空を仰いで・・・」

「うん、まだ帰ってない鳩が居るんだよ。それも昨年の千二百キロGNレース連合会の唯一羽翌日記録の鳩なんだ。いつも遅いと言っても、もう帰っている頃なんだが・・・」

川上氏はこのレースに百十羽参加させていた。しかし、あろう事か、未帰還が昨年度鳩舎の中で、最長距離を記録した鳩とは。川上氏の不安は同時に香月の不安にもなった。陽が落ちると川上氏の鳩舎ではタラップを閉める。外敵に襲われるからだ。もう、暗闇が押し迫っていた・・・その時「バサッ・・・」と言う音と共に、一羽の鳩がタラップに降り立った。

「帰ってきたか！・・・心配させて・・・」

川上氏の表情は緩み、鳩舎に鳩を呼び込んだ。しかし・・・その鳩はこんな短距離レースなのに異常に疲れていた。川上氏は鳩を抱きかかえると、口から泡を吹いていた。

「やはり！そうか！」

川上氏は大声を出した。そして同じ言葉を繰り返した。

「やはり！そうだ・・・ああ・・・病気にかかっている・・・」

沈痛な表情になり、川上氏は言葉を続けた。

「なんと言う不明・・・日頃から、あれほど、健康には気をつけていたのに。もう少しで大事な選手鳩を失う所だった。許してくれ・・・私の不手際だ」

薬を与え、隔離鳩舎にその鳩を移すと、香月にこう言った。

「香月君、私の大失態だ。今シーズン、今の鳩に期待する所が大きかったので、ついこんなレースに訓練のつもりで出したんだ。今春、この鳩はレースを断念しなければならない。鳩に申し訳ないよ・・・」

川上氏の鳩舎には何百羽も居るのだし、こんな小さな異変に気付かないのは仕方が無いでしょうと、香月も言ったが、川上氏は、我が子が病氣したように、自分を責めていた。川上氏とは、こう言う人物なのだ。尊敬して止まない競翔家なのだ。香月はこの川上氏の一貫した愛鳩家の姿勢が嬉しかった。

香月は言った。

「でも・・・僕も競翔を始めて、もう三年になりますが、こんな川上さんを見るのは初めてです。鳩を愛する姿勢は日頃より尊敬する所ですが、人間の管理能力にも限界があるのでは無いでしょうか。一日中

観察出来る鳩舎なんて、ハンドラーを雇えるような所ならそれも可能でしょうが、あくまで、愛鳩家、個人で楽しむ競翔と言う枠内にあつて、僕らは一日を鳩舎の管理に費やせる筈も無いのですから。そこにどれだけ万全の体制で臨んだとしても、やはり無理が生じます。まして、川上鳩舎は二百五十羽も飼育されている大羽教鳩舎なんですから」

川上氏に、香月が意見らしい事を言ったのは初めてだった。それは、川上氏も笑みを浮かべ、深く頷いた。

「・・・確かに・・・。君の言う通りだ。現在の飼育羽数は過去最多。同じ規模の高橋会長の所も、近くハンドラーを雇うらしい。私の所はそんな余裕は無いし、自分の鳩を他人に管理して貰うには、少し抵抗もあるしね。君の言う通り、今春後、少し選手鳩群を減らして見ようと思つている所だ」

ここにも、最優秀鳩舎賞新設の影響があるのかも知れない。だが・・・それには、理由が隠されていた事を香月は知らなかった。

「おっと！開函時間は八時だったね。大至急で行かないと間に合わなくなつてしまう！」

思わぬ長話になつて、大慌てで、高橋会長宅へ向かう二人であつた。着くと同時に開函時間が迫つて

いる事もあり、挨拶もそこそこに、二人はラジオの時報を聞き入った。「バシャーン！」やれやれ・そんな表情で二人はやつと腰を落ち着けた。

今日の記録羽数は二百余りの羽数になると言う。それでは時間も掛かるだろうと言う事で、計算が終了するまで、コーヒーを飲みに行く者、帰る者、結局その場に残ったのは、数人の顔ぶれであった。そして・そのメンバーは恐らく上位に食い込んでいる者。連合会でも強豪揃いであった。磯川が・佐野・水谷氏・が。

その磯川は香月に少し頭を下げただけで、隣に座っている水谷氏としきりに話をしてる最中であった。佐野が例の如くノートを抱えてやってきた。もう香月のタイムはジュニアの連中に知れ渡っているらしく、ノートには、かなり早いと思われる鳩舎のタイムに☆印がついていた。それによると、八時四十分までに打刻しているのは、川上鳩舎二羽、香月鳩舎三羽、佐野鳩舎一羽、高橋鳩舎二羽、水谷鳩舎一羽、渡辺鳩舎一羽、何と磯川鳩舎六羽の計十五羽であった。これが香月の目撃した、先頭集団である。それにしても・十五羽の中に、六羽と言う磯川鳩舎の突出した記録は・。香月も、この中のメンバーも驚いていた様子であった。

川上氏が、会長の高橋氏にしきりに話かけている。どうやら、ここへ到着するまでに車の中で、話していたハンドラーの事らしい。会話の邪魔をしては悪いので、少し香月は川上氏達から離れて座った。その様子を見て、磯川が香月の所へやって来た。佐野と三人で、鳩談義となった。

磯川は現在医大に入っているが、まだ、ジュニアの資格はある。佐野は今春高校を卒業して、家の家業である仕出屋を手伝っている。「ノート」の異名は健在で、彼に聞けば、連合会のありとあらゆるデ

一タが取り出せる程几帳面で、情報家。無くてはならない存在でもあった。この話題の中心は磯川が導入したペーマン系で、創始者ペーマン氏は百二十八連勝と言うとてつもない大記録を打ち立てた人物で、優勝鳩同士しか仔を取らない徹底した厳選主義で、磯川の理想からすれば、まさしくパーフェクトな血統であった。その磯川鳩舎には、勿論二人もハンドラーを雇っている。手強い最強のライバル復活は、その話の随所にも、自信と言う言葉として伺われた。

集計が終わったようだ。ジュニアから発表された。佐野のノートにはほぼ一致していた。

ジュニア文部大臣杯レース

一般レース

一位	香月鳩舎	一位	川上鳩舎
二位	香月鳩舎	二位	川上鳩舎
三位	香月鳩舎	三位	高橋鳩舎
四位	磯川鳩舎	四位	水谷鳩舎
五位	磯川鳩舎	五位	渡辺鳩舎
六位	磯川鳩舎	六位	川上鳩舎
七位	磯川鳩舎	七位	川上鳩舎
八位	磯川鳩舎	八位	川上鳩舎
九位	佐野鳩舎	九位	川上鳩舎
十位	浦部鳩舎	十位	高橋鳩舎

となっていた。ジュニアの三十位までも混戦で、

この時点での香月鳩舎の得点が百十四点、磯川鳩舎が百二十点
今度は連合会の総合順位が発表された。

一位	香月鳩舎	十一位	渡辺鳩舎
二位	香月鳩舎	十二位	磯川鳩舎
三位	香月鳩舎	十三位	磯川鳩舎
四位	川上鳩舎	十四位	佐野鳩舎
五位	磯川鳩舎	十五位	高橋鳩舎
六位	川上鳩舎	十六位	川上鳩舎
七位	磯川鳩舎	十七位	浦部鳩舎
八位	磯川鳩舎	十八位	川上鳩舎
九位	高橋鳩舎	十九位	川上鳩舎
十位	水谷鳩舎	二十位	高橋鳩舎

以下、三十位までが発表された。たかが、百キロレースと思う無かれ。

六千八百羽数と言う総合レース規模。尤も多い羽数の多いスタートレースで、分、秒を争って打刻した競翔である。三十位までの入賞は誇られる成績であった。

この時点での得点鳩舎順位（ジュニアはジュニアレースの分も加点される）

一位	香月鳩舎	851点
二位	磯川鳩舎	636点
三位	川上鳩舎	422点
四位	佐野鳩舎	137点
五位	浦部鳩舎	84点
六位	高橋鳩舎	62点
七位	水谷鳩舎	41点
八位	渡辺鳩舎	29点
九位	北村鳩舎	18点
十位	小泉鳩舎	13点

続く週に行われた、ジュニア杯でも香月が一位、二位、五位。磯川が三、四、六、八、十位であった。総合連合会順位においては、川上鳩舎が一、二位。香月鳩舎が三、四位。磯川鳩舎が五、六位。高橋鳩舎が七、八位。川上鳩舎が九位、磯川鳩舎が十位となった。

この順位は、距離が進むにつれ、変化して行くであろう。

レースは徐々に距離を延ばし、やがて七百キロのグランプリレースを迎える。この時点で、得点順位

は大きく変動を見せる。

一位	川上鳩舎	3684点
二位	高橋鳩舎	3140点
三位	磯川鳩舎	2960点
四位	香月鳩舎	2826点
五位	水谷鳩舎	1643点
六位	渡辺鳩舎	1426点
七位	細川鳩舎	1326点
八位	桐生鳩舎	1282点
九位	須藤鳩舎	1186点
十位	加地鳩舎	1010点

流石に連合会のベテラン会員は、徐々に中盤から上位に食い込んで来た。その中で、磯川と香月のジュニア勢の上位ポイント獲得は立派なものであった。

この七百キロレース以降は、合同の総合レースとなり、その総合順位の得点は加算がある事から、下位の得点順位の者でも、充分に今から逆転はあり得る訳で、一気にトップも可能なのだ。このGPレースは、参加連合会百五十連合会。四ブロックに分けられ、その合計羽数が八万羽になる巨大レースだ。

香月達、東神原連合会はAブロックで、総羽数三万羽と言う、四ブロックの中でも特に大きいレースであった。その他ブロック順位を更に総合する事は無いが、名実共に、Aブロックが日本一の最大で、権威あるレースと言える。

各鳩舎は、二週間後に迫るAブロックのグランプリレースの調整に余念が無かった。香月鳩舎では、百キロレースに二十二羽スタートして、ここまで十四羽。失踪鳩八羽、のち四羽後日帰還と、過去最高の参加が出来そうであった。ちなみに川上鳩舎は百二十羽スタートで、現在七十八羽ストックと、今春の百キロレース以降は上天气に恵まれて、各鳩舎ともかなりの選手鳩をキープしており、それも、各鳩舎が鳩質向上と、飼育管理に近年勤めてきた成果でもあろう。川上氏の企画が成功しつつある事を窺わせた。

ただ、磯川は、この春季レースは全て生後一年以内の若鳩。七百キロレース終了後、どの程度の鳩をいかに早熟のペパーマン系と言えども、参加になるかは未知数だ。この七百キロレース如何に掛かっていると言つて、過言ではない。

まして、千キロCHは、非常に難コースとして知られ、最終の稚内GNレースへの登竜門として位置づけられている重要なレースだ。ここを経験している鳩と、回避して参加させた、千キロのGCレース経験鳩との帰還率を比しても圧倒的な違いがあると言う。そのコースは少し視点を変えて見直そうと言う動きもあつて、急速に協会の方で検討中と言う話だ。そのビッグイベントを前に、巨大レースの幕開けが、GPであった。誰もが最終地、最高の日本競翔界のあこがれとして夢見る、千キロ以上の記録鳩しか参加資格を得ない、GNレースは、このGPが第一の登竜門として位置づけられる。使翔歴三十年

の川上氏でさえ、昨年はGNに三羽参加、唯一羽連合会翌日記録と言うレースなのだから・・・。

香月は、今春そのGNへの参加資格を持っていた。

昨年香月はGPで、連合会十位に入賞した。それまでの六百キロレースまでは順調に来ていた彼も、そのGPの難しさと厳しさを知っている、それは、レース間訓練の回数が多さと言う指摘を恩師川上氏から受けて、今春には修正している。又、このレースは巨大連合会参加故に、コンマ数秒単位での順位が争われ、その中で遠隔地にある東神原連合会は不利と言われている。鳩レースは「見えないレース」なのだ。鳩が帰舎するまで、ひたすら飼い主は待ちわびる。だからこそ、その鳩達に最善の管理するのは、競翔家の手腕一つと言っても過言では無い。

レース鳩は帰還するまでの、自然の脅威、外敵の脅威と戦わねばならない。厚い雲は視界をさえぎり、強風、気圧は、コース変更を余儀なくさせる。空腹、体力、知力・鳩達の懸命な姿を想像出来てこそ、やっと、競翔家であると言える・・・川上氏はいつも香月に、そう言う。あの・・・初参加の初帰還の百キロレースの感動を忘れまい・・・香月は胸に誓っていたのだった。南北に長く、気候の変化が大きく、高い山脈が連なり、何度も海を越えるような地形の日本。その中で、何十年と築かれてきた鳩レース、そして競翔鳩の英知は、在来系と言うその日本の風土・環境に適した血によって飛躍的に改良され、その優秀さも証明されている。だが、それも近年のスピードボードの台頭によって、徐々に変わりつつあるのも現状だ。

そして・・・七百キロGPの開催日がやって来た。この日の為に調整を重ねられた鳩群。どの鳩も素晴らしく見える。香月の参加は十四羽。調整も万全だ。東神原連合会の参加鳩数は三千百羽。このレース

まで天候に恵まれて、好調な帰還率であった為に、過去に無い大羽数参加となった。今年は、持ち回りの連合会が、風巻連合会となっていて、学生である香月は持ち寄り場所へは時間の都合もあり、同行出来なかったが、今年のAブロック参加鳩数は、三万六千四百五十七羽と言うかつて無い大羽数と言う事だ。余りの数なので、このAブロックでの総合順位の他に、近隣単位連合会の地区Nと言う集計を設置したと言う。新たな総合レースがもう一つ生まれたのだ。そのブロックD地区に神原連合会があつて、中でもやはり最大羽数の一万四千四百三十二羽の地区N優勝も掛かつていた。ひよつとしたら、千キロレース以降の順位、得点よりも、GPレースで、決まってしまう可能性もある最優秀鳩舎賞であつた。

だが・・・思惑とは裏腹に、GPレースは、予想外の悪天候に遭遇した。持ち寄り日から曇天となり、二日目には東の方から張り出した低気圧の影響を受け、膨大な参加鳩数を管理する放鳩委員も、五十名の人数とは言え、一日延びれば、飼料、水の管理等。決断を迫られる状況になりつつあつたのだ。場合に依つては、雨天決行もあり得る。刻々と迫る判断に放鳩委員長に掛かる重圧は、大変なものがあつた。体力を消耗させるような事があつては、このGP以降のビッグイベントを控えて、失踪鳩を増大させる事に繋がる。だが、日延びさせても体力の消耗が懸念される・・・これからのレースに影響を受けさせてもならない・・・どっちにしても、ギリギリの判断が迫つていたので・・・。

状況は良くならない・・・太平洋から張り出してきた低気圧が厚い雨雲を作り、放鳩タイムギリギリまで待つて、順延が決定された。七百キロレースは当日帰還ギリギリのレースである。朝の十時に放鳩しても、帰舎は夕方五時前後になる。七百キロレースの記録は放鳩から三日目まで。このレースに参加しているのは、各鳩舎の精鋭達だ。ここで無理をさせてはならない。放鳩委員長の冷静かつ正確な判断が

要求されるのだ。放鳩歴二十年、ベテランの西岡正人氏は、このレース以後の全レースの放鳩委員長を務める。一日延びれば、管理は大変を極める。放鳩車、二十数台の大型トラックに、地元競翔連合会の応援が駆けつけて、手分けして、狭い放鳩籠に閉じこめられてストレスの溜まった鳩達に餌やり、水やり……。西岡委員長は、眉間に皺を寄せたままだ。地図を広げ、気象庁、各方面に連絡を取る。幸いな事に、天候はこの日が最悪で、幾分明朝から低気圧が北上し回復する見込みとなって来た。少し雨が残るだろうが、これ以上鳩を狭い放鳩車に閉じ込める訳にはいかないし、放鳩委員達の負担も大きい事から、一睡もせずに、明朝放鳩の準備にとりかかった。

川上氏より、香月に電話が入った。

「いよいよ明日、大レースの放鳩になるようだ。天候からして、早朝の6時〜7時になるに違いない。帰舎タイムも相当に遅くなると見てよい。夕方六時前後だろう・・・」

この予想は的中した。放鳩当日小雨で霧が立ち込める最悪の空模様であったが、ここより南の帰路は、徐々に天候が回復との予報の下、西岡放鳩委員の「放鳩！」の合図と共に、三万数千羽の大羽数は、一斉に飛び立った。一直線に飛び立った鳩達は、霧の中に見えなくなっただかと思えば、又放鳩車の真上に戻って来る。幾つもの一団は、巨大な雲となって、旋回する。放鳩時から二十数分。鳩の群れはやつと見えなくなった。明日になれば又天候が崩れると言う気象予報であった。この何十にも分かれた鳩群。そして余りにも放鳩してからの旋回時間が長い。この事から難レースが想像された……。結果は夕刻に

は判明するのだ。放鳩タイミングは経験でしかない。この放鳩委員長に掛かる責任は非常に重い。しかし、日本中を探しても彼以上の適任者はどこにも居なかった・・・。

「今、放鳩だそうさ。午前六時半。君が学校から戻って来てからでも遅くは無い。慌てなくていいよ」
勉強が手につかなくなるだろう香月に、川上氏は朝一番に連絡を入れていた。しかし・・・当の香月には、そんな心遣いも、昼過ぎまでは待てなかったようだ。香織と一緒に昼食の後、仮病を使つての早々の早退となった。

「あれえ？朝、あんな元気だったのになあ・・・」

担任が不思議がった。香織は一人、笑いを堪えていた。

しかし、当の香月としたら、実に真剣な事であったのだ。こんな悪天候の事も予想して彼は訓練をしていた。それも単独放鳩による悪天での短距離訓練を繰り返して・・・。それも、春休みに地元に戻ってきた芳川に手伝つて貰い、緻密なデータも取つてある。余談ではあるが、十分間隔で、六時間もかけての訓練を何回も・・・。その中で、十羽の鳩は確実にこれまでのレースにも結果を残してきた。データと言う科学的な裏づけ・・・。香月が目指す、新しい使翔の方向なのだ。

香月が家に戻ったのは二時過ぎだった。放鳩から既に、七時間が経過。空には雨雲が立ち込めていた。

鳩は今ごろどの辺りを飛んでいるのだろうか・・？不安な気持ちは隠せなかった。

川上氏の最速予想帰舎時間は夕方四時。そのタイムだと分速が千三百メートル出ている計算で、このような悪天候では、そんな高タイムが果たして望めるのであろうか？なら、香月が今鳩舎で待つ二時とは、到底考えられない程早い帰舎となる。空を見上げる香月の視界に入るのは雨雲のみ。鳩が帰ってきて、鳩舎の真上に現われない限り、現認出来ない程の雨雲だった。そんな川上氏の飛びぬけて速い帰舎予想よりも、香月は、何と！それよりも早い三時〜三時半前後と予想していたとは・・。彼はそう予想した上で、学校から帰宅していたのであつた。恐らく彼以外の脳裏では誰もが予想できなかった筈。そう、香月は過去何度も悪天候を飛びぬけてきた鳩群を、過去の記録からシミュレーションしていたのだつた。それは、前年度の風巻連合会の立石鳩舎が、小雨が降る悪天候の最悪のコンディションの中を唯一羽、分速千四百メートル台の快記録で優勝した鳩も、ブリク系の血筋だ。自分の血統と比較して相似点もある。又、ここ数年の気象条件、分速、過去上位入賞鳩舎の血統を分析し、それなりのデータを作成して予想時間を割り出したものだ。

だが、それはあくまで、香月の鳩舎が優勝にからむであろう最速の場合の予想タイムとして。彼が二時間前に待つのは彼なりの根拠があつたの話なのだと言う事だ・・。

時計を香月が見ると、三時を差していた。風巻連合会が今年もGPを制するとして、ほぼ放鳩地から一直線にあたる香月鳩舎は、立石鳩舎から三十キロ遠方にあたる。昨年優勝タイムだと、二時四十分。風巻連合会が打刻したら、香月鳩舎が三時帰舎ならば、優勝を争えるタイムとなる。そんな事を考える香月の頭上に、いきなり二羽の鳩が視界に入った。それは余りに突然で、机上の計算に過ぎなかったこ

の予想が？驚く香月だったが、紛れも無く、それは香月の鳩であった。一羽が先にタラップに飛び込む。打刻する、もう一羽はなかなか鳩舎に入ろうとしない。相当に疲れているようだ。ようやく打刻したのは一番の鳩を打刻してから、五分後。又その鳩達は昨年のGC千キロの記録鳩達であった。わくわくどきどきするそんな鳩舎では無かった。突然に前触れもなく戻ったレースであった。

しかし、後が続かない。やはり難レースを実感させる。こんな優秀な競翔鳩すら、疲れ切った姿に、ようやく冷静になり香月は分析を始めていた。後続鳩舎は四時であった。川上氏が予想した、最速タイムでの鳩舎は、これまで三羽。又間が開き、四時半に一羽。五時前に一羽。五時過ぎに一羽。もう薄暗くなった六時前に一羽の計七羽であった。非常に帰還率の悪い、そして、ばらつきある鳩舎に、やっと参加中半分の五割の鳩舎に……。いかにスピードボードで無いと、当日戻れないレースであるか、感じた事は無かった。改めて血統が大事であると、痛感したこの日の香月であった。いつもなら七割は当然戻ってきてもおかしくないと香月は自鳩舎を分析した。選手鳩達の力量を思えば。

夕方六時半にタラップを閉めたその時刻に、川上氏から香月に電話が入った。

「やあ、香月君。今日は早退したんだって？あはは。やっぱり君は居ても立っても居られなかったんだね。今日のレースは予想通り、荒れているようだ。私は今タラップを閉めた所なんだが、君も閉めたんだろう？やっと私の所も先刻二十羽目が戻って来たところだ」

「二十羽ですか？・・少し悪いですね」

「君の所は？」

「七羽です」

「ほお・・・！七羽帰舎・・・。じゃ、連合会でも君が三人目だね。五割帰舎したのは」

「そんなに・・・皆さん悪いんですか・・・？」

「ああ、非常に悪いよ。当日帰還したのは、悪天の中でも分速千メートル以上出さなければ、戻って来れないって事だから、成鳩にとつては、きついレースのようだ。その分若鳩は、そこそこの分速で戻っているようだからね」

川上氏はいつもなら香月の帰舎タイムを聞くのに、高橋会長のゴードン系の話やら、帰舎数やら、雑談が先であった。

「あの・・・それで、打刻は・・・？」

「ああ・・・。一番手が、三時半位かな？その後四時前後に五羽。後は、ばらばらで、最後が六時半だったよ。予想よりは、帰舎タイムが早かったので驚いているんだが、風巻連合会の小川さんの所が二時四十五分らしい。今の所飛びぬけて速いのはその鳩舎だ・・・おっと、ところで？君は？」

成る程・・・川上氏は自分の所が上位に入賞は無理だとの判断で、気がタイムに向いてなかったのだな。競翔家らしい川上氏の一面も見えて、香月も微笑んだ。

「はい・・僕の所は、少し意外なタイムだったんで、時計を開けて見ないと分からないんですが、二羽同時に帰舎したタイムは、三時五分頃で、もう一羽が五分ほど遅れてタイムしました」

「ええっ！三時五分？それは早いよ！それじゃ、風巻連合会より早いんじゃないか？今日は開函が延期になって、明日の晚九時に変更になったから、今から、問い合わせして見るよ。そうか・・君が早退したのは、そう言う読みがあつた訳だ。秘密訓練かな・・？」

川上氏の言葉に自分の内心を看破されて、香月は少し気恥ずかしさが湧いて来た。だが、三万数千羽と言う参加数・・敢えて入賞だと言う言葉は、二人の口からは出なかった。

その香月に電話が又入つたのは、父、母に少し小言を言われながら食事を済ませた後で、風呂から出た八時頃であつた。電話は佐野であつた。佐野も去年は千キロに二羽記録し、七位に入賞させた。力をつけてきた若手である。彼も十六羽GPに参加させていた。

「やあ、こんばんわ！今、色々確認をとつて、ある程度把握出来たんだよ」

「いつも参考になりますよ、佐野さん」

香月は、佐野の情報の的確さにいつも感謝している。

「じゃあ言うよ。連合会の当日帰舎の数は、二百羽を少し切っている。当日二桁帰舎させたのは、水谷

さん、川上さん、高橋会長の三人しか居ない」

「・・・そんなに？それで、佐野さんは？」

「僕？僕は六羽記録したよ。良い方なんだよね。君も七羽で、良い帰還だつてね。それより、君のタイムは連合会の中でも特に早いよ！僕の計算で、連合会で、千三百メートル前後の分速は二十羽位だね」

「それで、その鳩舎は？」

「ああ、君が三羽。川上さんが九羽、会長が三羽、水谷さんが二羽、磯川さんが一羽、北村さんが一羽、渡辺さんが一羽、それに僕が一羽だよ」

「二十一羽ですか？」

「うん。でも、その中でも君の二羽と川上さんの一羽、磯川さんの一羽がかなり早いけど、その又中でも君の二羽は特に早いんだよ」

「でも、大羽数のレースですからね。まだまだ他の連合会でも早い鳩達が居るでしょう」

「それもね、聞ける範囲で聞いて見たよ。僕の情報では、風巻連合会の小川鳩舎、中川連合会の前川鳩舎が君に近い。情報的には、その位だけど、毎年優勝鳩を出しているのはこの二つの連合会だからね。君の上位入賞は充分考えられるよ」

佐野らしい情報収集力に感心しながら、香月は別の返事を返した。

「でも・・・僕としては、明日何羽帰って来るのか、その方が心配なんですよね・・・」

「君らしい・・・ね。でも、磯川さんだつて、二羽きりなんだよ。川上さんも同じ事言っていたけど、師弟の関係つて、帰舎率も同じなんだね。あ、余談だけど、磯川さんは一晩中鳩舎をライトアップしとくらしいね。タラップも閉めないまま」

「それこそ、彼・・・らしいですね。それじゃあハンドラーさんは、今晚徹夜ですよ。あ・・・浦部さんは？」

「あはは、磯川さんらしいよね。あ、その浦ちゃんだけど、七百キロが悪天と読んでいて、全鳩六百キロでストックさせているらしいよ」

「やっぱり・・・こちらも彼らしいですね」

「やっぱり・・・つて？」

「浦さんが、三百キロの持ち寄りに来なかったんで、ひよつとしたら、七百キロGPを外すつもりだったのかな・・・そう思っていました。天気図には詳しい人ですし、七百キロの状況を見て取り止めたのかなと」

「うん、浦ちゃんは、悪天候を非常に嫌っているから、そうしたんだろうね。かなり今年はストック選手鳩を持っているよ。去年七百キロで六羽ストックさせているし、千キロの記録鳩が一羽、後日帰りが二羽。今年の六百キロ記録が八羽。全部で十七羽残しているからねえ。特に超長距離には力を入れているから、渡辺鳩舎に良く通っているよ、浦ちゃんは」

愛鳩家として、連合会でも指折りの渡辺、浦部鳩舎だった。悪天候のレースには参加させない主義で、

長距離系の血統はスピードこそ余り出ないが、着実な帰還率を誇り、後日帰りも多い。浦部は渡辺氏型の競翔を目指したようだ。

「狙いは、新設のK C、そして千二百キロGNですね」

「ああ、手強い存在だよ。彼ほど、鳩舎管理、鳩のコンディションを第一に考える者は居ないだろうね」

浦部も就職して、以前のような、大人しい少年から、社交的な若者に変わりつつあった。彼に力強く芽生える、競翔家としての成長。これまでのレースに裏つけされたもの、社会人となって、新たに金銭的に導入出来る競翔鳩など。東神原連合会は飛躍的に会員の向上が見られるようになっていた・・・。

佐野からの電話で、本年度の東日本GPの行方が見えつつあったが、香月は翌朝五時半に起床した。既に薄明るい空はしていたが、まだ乳白色の霧が立ち込め、昨日より更に悪い天候であった。日没までに鳩舎の近くまで帰っていたら、今朝帰る筈・・・そんな香月の思いからであった。また、昨年の千キロ記録鳩が一羽帰っていないのだ。この鳩は、悪天候の時の鳩舎は遅いのだが、その機知を悟ると言うか、小雨でも降れば、外で遊ばせていても、すぐ鳩舎に飛び込んでくる鳩だった。どんなレースでも疲れた表情すらせず、ケロっとして戻ってくる。非常に聡明な超長距離向きの鳩であると香月は期待している一羽であった。この鳩こそ、文部杯全国優勝した、「ピン太号」香月の尤も大事にしている鳩であった。そのピン太号が・・・六時過ぎだった。

「帰ってきた！」

案の定だ。昨夜の雨にも関わらず、全く羽毛は濡れておらず、ケロつとした顔で、すぐ鳩舎に入ると餌をついばみ始めた。香月は自分でコンディションを整えられる、こう言う鳩こそが、優秀な競翔鳩であると思っっている。源鳩、パ号と、ママ号との最初の子、そして初めてレースの参加させた文部杯で、全国優勝した鳩。まさに、香月鳩舎を象徴する代表的競翔鳩であった。

この日、学校から戻って来ると更に二羽の鳩が鳩舎していた。この二羽まで打刻すると、香月は鳩時計を持って、川上氏の家に向かった。十四羽中、十羽記録。香織が待っていた。

「どうだったの？香月君」

香織が聞いた。

「ああ、三羽帰って来たんで、全部で十羽だ。まあまああって所かな」

「そう、良かったわね。学校でもそわそわして落ちつかなかったから」

「はは・・・。ところで？お父さんは？」

「何かねえ・・・すっごい気難しい顔をして鳩舎の方に居るの。私が戻ってきてからも一度も下へ降りて来ないのよ・・・調子が悪いのかしら・・・」

「じゃ・・ちよつと見てくるね」

鳩舎の方に行き階段を昇つて行くと、やはり小雨の降る鳩舎の前で傘も差さずに川上氏が立っていた。香月が近くに来たのも分からない様子であった。香月が声を掛けた。

「川上さん・・」

「おつ！・・驚いた。香月君、何時・・来たんだい？」

「今しがたですが、気づきませんでした・・？」

「ああ・・そうだったのか」
「どうされました？」

「ああ・・今日は十羽戻つて来たんだが、全部若鳩なんだよ。私は六百キロでストックしなかったから、七百キロには五十六羽参加させた。鳩舎は全部で今の所三十羽と、五割以上は戻ってきているんだが、昨年千キロ記録鳩が三羽、千キロ記録鳩が二羽戻つて来てないんだ。どうも、今年は百キロレースの時の千二百キロ記録鳩と言ひ、凄く記録鳩の鳩舎が悪いみたいだよ・・」

「僕の所でも、今朝例の文部杯の千キロ記録鳩が戻ってきましたが、この血統はそう言う悪天を避ける傾向にあるのでは？」

「そう言う傾向はあるよ。しかし・・いくら悪いと言つても、もう二日目の夕方だからね。昨日鳩舎の近く百キロ圏内に戻っていれば、今朝鳩舎できた筈。それが、未だに戻つて来ないとなると、事故か、

或いは帰舎コースを大きく迂回して、海側を通った可能性がある」

「それは・・・？」

「ああ、七百キロレースは丁度、山際の放鳩地だから、山際を通って帰るのが普通だが、経験鳩は、悪天を避けて、高度を低く、海岸線を迂回して帰るケースがある。気圧の低い山際のジグザグコースを忌避して、安全である海岸線を通るコースだね。」

「成るほど・・・乱気流ですね？」

「その通り！君には全部説明の必要はなさそうだ。だが・・・」

「だが・・・？」

「今日のような小雨まじり、まして昨日からの雨では、羽毛が濡れて、飛び続けるのは困難であろう。晴天の時ならそのコースは安全なんだが、このような状況の中では、一流の選手鳩は自分の体力と相談しながら、どこかで休む事となる。と・・・なると、選ばざるを得ないのは、街中なんだよ」

「あつ・・・」

香月は声を上げた。自分の読みはそこまで及んで無かったからだ。

「君は流石に察したようだね。都会の街並みで羽休めをするのは、電線、高いビル群、それにビル風と言われる乱気流。危険は一杯なんだ、更に・・・」

言いかける川上氏より前に香月が答えた。

「カラス・・・ですね？」

「それを知っているのか、君は」

川上氏が驚いて香月の顔を見た。競翔を始めて、三年目の若者がそんな事を知り得るのか？そんな驚きだった。そこまで、彼の口から出るとは予想もしていない言葉だったからだ。

「僕は、白川のじいちゃんからの資料で、色んな事を学びました」

「そうか・・・白川さんの・・・」

納得した川上氏だったが、むしろ川上氏の眉は一瞬曇った。それを悟られまいと思ったのか、川上氏は鳩舎に向き直って、言葉が続けた。

「都会のカラス・・・実にやっかいな鳥だ。この鳥は鳩をも食う。隼も危険だが、このカラスはもつとやっかいだ、集団で襲う」

「はい・・・」

競翔を重ねれば重ねるほど、記録鳩は、自ら安全な帰還コースを選択し、身に付けた自己管理能力で体を休める術を知っている。無我夢中で、自分の体力にものを言わせ、少々の無理をも承知で戻ってくる若鳩とは違うのだ。幾多の困難に生き抜いてきた現役レーサーは、競翔家にとって自鳩舎の顔、競翔家の力量全てを映し出す鏡なのだ。艱難辛苦を味わってきた友なのだ・・香月はずっしりと川上氏の言葉の意味、そして今の心情を悟っていた。

「案外・明日ケロっとして戻って来るかも知れませんね。記録内の範囲ですし」

「そうだね、そうでなくちゃ、今年のレースが終ってしまう、ほとんど」

川上氏も香月の気遣いが分かったので、明るい顔をして言った。

「ああ、そうだ。君の所は今日どうだったの？」

「今日三羽で、十羽帰還です」

「ほお！良いねえ。特別訓練が良かったようだね」

「大した訓練でもないんですが・・小雨の降る日を選んで、十キロ、十五キロ、二十キロの訓練をレス前にやっただけですから」

「今春の君の強さが分かったよ。一見無駄なように思える訓練も、君にはきつと裏づけがあつての事だろう」

川上氏は香月を褒めていた。どこまで、伸びるのか、この若者は……。川上氏は嬉しそうにその顔を見た。

「さあ・・・じゃあ、行くか。これから先のレース、君がGC狙いか、GN狙いなのかは分からないが、GPの主役は君である事に間違いはない。」

そう言う川上氏に、香月が少し迷ったように言葉をかけた。

「あの・・・ちよつとお待ちいただけますか？」

「うん・・・？」

「実は、お話したい事があって、少し早めに来ました」

「ああ、いいとも、時間は充分にある。下へ降りようか？」

「いえ・・・ここで。他でも無いのですが、例の交配の事です。白川のじいちゃんがどうしても答えてくれませんでしたので、お聞きしたいのです」

「・・・どう言う事かな・・・？」

「白竜号とネバー号は、ほとんど同じ年ですが、何故、千キロと千百キロに分けて競翔させたのでしょうか？」

「それは・・ネバーが千キロ向きの鳩で、白竜が千百キロ向きの鳩と見たからじゃないのかね？白川さんが。」

「それは、少し合点がいかないんです。白川のじいちゃんともあろう人が、ネバーの血統であるオペル系を、超長距離系のチャンピオンで結集されたまさに源流の最高傑作でもあるその鳩を・・・もう少し詳しく言えば、千三百キロ以上の優勝鳩で固めたその血統の最高血筋を何故？千キロに固執させたのです」

「・・うむう・・」

川上氏は返答に困った。

香月は続けた。

「次に白竜ですが、これも純アイザクソン系ですが、白竜号の従姉妹の鳩や従兄の鳩が、最近ヨーロッパのオーマンと言う鳩舎において、バルセロナINレースで数万羽中総合優勝を飾っています。又中距離のレースでも数々の賞金レースで、見事な成績をあげているスピード系でもあります。最近、ヨーロッパの鳩協会の新聞をとっていますので、問い合わせましたら、やはり「ファイアースピリット号」と言う銘鳩が居ました。それは、白竜号を含む、ほとんどの飛び筋の源流にあたります」

「・・良く調べたね。でも、それと君の言う疑問とは必ずしも重ならないんじゃないのか？狭い日本、そこには、色んな地理的条件、そして、個々の競翔鳩の資質がある。長年培われてきた白川さんにしか

分かりえない条件がその時あったのではないのだろうか？そして、それは私にも知りえぬ事だよ」

「確かに競翔二年ほどの僕には、分からない事だらけです。それで、白竜号のレース成績を調べました。その時の気象条件と」

「聞かせてくれるかい？」

「前年の千キロレースでは白竜号は連合会六位に入賞しています。若鳩からの記録を調べましたら、四百キロ二位、七百キロ優勝、三位と言う記録が残っています。それに対して、ネバーは短、中距離では一度だけ六百キロ九位と言う記録があります。他に入賞はありません。当然この二羽は同年代の鳩ですから、同じようなステップをたどり、同レースの千キロに参加されるのが普通だと思っんです。ところが、同年に白竜号が千キロレース（現GC）六位、ネバーが千五百キロ（現GCH 連合会優勝）に参加させられました。ネバーの記録は総合で百八十二位の素晴らしい結果ですが・・・どうも、この二羽の参加が不自然なのです」

「・・・分らないが・・・？」

「ネバーの記録、七百キロレース以後の分速を調べましたら、常に千百メートル台の安定した分速です。それはどんな悪天でもほとんど変わりません。それに対して、白竜号は、七百キロレースの分速が千二百メートルから千三百メートル台が二度、千メートル台が一度（この時は悪天）、又千キロレースでは分速千メートル台でしたが、千二百キロレースでは二年連続で、千百メートル台の分速（二年連続総合優勝）。現在の高速レースにおいても千百メートル台のGNレースは快分速です。でも・・・その時ネバーがそのレースに参加されていたら、どうだったのでしょうか？」

「・・・実に興味のある話ではあるが・・・時間が来てしまった。道中で続きを聞く事にしようか」

川上氏は、胸中が締め付けられる思いがした。この・・・少年は全てを見切っているのではないかと。

途中寄った北村の家で、鳩時計だけ預かり、風巻連合会の桜田会長宅へ向かう二人だった。

「一つ、私から質問するよ」

川上氏が少し難しい表情をして言った。

「はい・・・」

「先ほどからの君の意見だと・・・ネバーの方が白竜号より優れていると言う事になる」

「いえ！とんでも無いです。両鳩とも銘血の結晶。稀代の競翔鳩です」

「なら・・・両雄並び立たずと言う事がある。そう言う事ではないのか？」

「いえ・・・前にも言いましたが、ネバーは完璧な競翔鳩です。きっと白川のじいちゃんはネバーに期待していたと思うんです」

おっ・・・川上氏は、とうとうこの子がその本質に迫ってきた・・・そう悟った。なら、尚更の事自分

は白川氏の思い、無念を封印しなければ・・・そう思った。

「君の大胆な推理は感服するよ。だが、果たして仮に白川さんがその力量を見ていたとして、何万羽と言う大レースの参加の中で、圧倒的な白竜号の大記録が生まれるとは想像出来ないだろうし、千五十キロのこれも大レースの中で、ネバー号は最遠隔地にありながら、常に〇・一パーセントと言う総合順位に六回も連続して入賞するなんて事も想像も出来なかったであろう。競翔は、常に千変万化する自然の摂理の中で行われるものだ。それに対して、トレーナーの期待と競翔鳩の体力、能力のバイオリズムが一致してこそ、成し得る記録だと言うものだ。何故？君がそこまで憶測や推理をする必要があるのか？」

「重要な事だからです。仔鳩の将来にとって」

川上氏は、とんでも無いよと言う顔で、香月を見た。

「君には幾つも驚かされる事があるが・・・まだ、生まれても居ない鳩の事を？それが実現する可能性も低いかも知れないの？」

その話の途中で、車は桜田会長の家に到着した。

香月が突き動かされる、その原動力とは一体何なのだ・・・？白川氏の思いと、香月の運命が何かに導かれるように交錯する。川上氏は、未来に待ち受けるその運命を、心の隅で不安として広がっていた：

この夜、大勢の人に囲まれて香月は色んな話を聞く事が出来た。集まっている人達は、毎年GPで上位に顔を出す常連であった。その中でも、風巻連合会の吉住昇と言う初老の競翔家は、特に川上氏と親交があるらしく、親しそうに話かけて来た。

「よお、どうだい？川上君」

「こんばんわ。いやあ、今年はさっぱり駄目ですよ。厳しいですねえ・・・」

「ははは。何を言うとする。連合会では常勝しているそうじゃないか、相変わらず」

「いえ、今年は百キロ、四百キロ、そして、この七百キロと三つ落としました。今年の連合会は嘗て無い程の盛り上がりようでした。いやいや、私も気が抜けませんよ。今日ここにきている、香月君と言う若手No.1で、連合会でも屈指の強豪も居ます」

川上氏に紹介されて、やや顔を赤らめながら、香月は吉住氏に挨拶をした。

「恐縮します・・・。吉住さんのお名前は良く存じております。香月と申します。初めまして」

「おう！君の噂は聞いているよ。佐伯君は私の愛弟子とも言える間柄だね。君の事を随分と褒めていたよ。文部杯の全国優勝はこの地区では君が初めてだ。君のタイムは川上君からも先ほど聞いたんだが、ひよっとしたら、このD地区N総合優勝の可能性も高い。前川君と言う中川連合会の一羽が近いタイムと聞いているが、上位は決まったようなもんだね」

香月鳩舎の上位入賞は現実味を帯びて来たようだ。その他の幾人かと言葉を交わし、帰路につく川上、香月であった。今度は川上氏から話を切り出した。

「ところで・・・例の交配は続けるつもりかな？」

「えっ？ええ・・・勿論！」

香月は意外な事を聞くものだ・・・そんな怪訝そうな表情になった。聞いた川上氏が、そんな香月の返答にもっと困った顔をしていた。

「当然・・・？そう聞こえたのだが・・・？」

「はい・・・六月の予定です」

「予定だつて？じゃあ・・・君は産卵の期日まで決めているって言うのかい？」

呆れたような川上氏の顔だった。そして言葉だった。

「卵は・・・得ようと思えば、もっと前に可能でした。僕はでも、敢えて分けたんです。両鳩を。そして、それは、僕の疑問を解決してから。又、ネバーの体調を万全に持つて行く為に・・・だから六月なんです」

「・・・何故？」

「両鳩の血統から・生後三年から真価を發揮する筈です。だから生まれた年はレースを参加させずに、次の春からが、理想だからです」

「・・・そこまで・・・？だから、私に聞いていたのだね？両鳩の真価を・・・だが・・・優秀な仔鳩は、何十羽の中の一羽。その産卵が成功したとして、君が望む結果は万に一つだ。」

香月はその言葉に黙っていた。送って貰った自宅で礼を言ったその時、やっと香月がその理由を言った。

「川上さん・・・僕は強運・・・運命つてものを感じるんです。白竜号の何か燃えきっていない思い。そしてネバーの無念・・・そんな訴えが、胸に届いてきました。白川のじいちゃんの家初めて訪れた僕に、そう聞こえたんです。そして、それは、僕の夢想でしょう。でも、夢想でも良い。僕は万に一つに賭けたいのです・・・。」

「・・・おおっ・・・川上氏は胸の奥で、張り裂けそうな感情をただ、押し殺していた・・・。」

希望

香月の七百キロGP連合会優勝、D地区N総合二位が決定した。

その他、連合会五、十六、二十四位となり、総合順位で、一躍トップに立ったが、続く東日本GC千キロ、東日本CH千五十キロ、東日本GCH千キロとやはり大羽数入賞の川上鳩舎が香月のポイントを逆転し、トップに立った。香月はGCHに参加はしなかったものの、GC連合会二位、総合三百二十四位、CH連合会三位、総合二百十八位と素晴らしい成績を収めた。そして、若鳩ばかりで春のレースを臨んだ磯川も、七百キロでは帰舎が八羽と振るわなかったものの、CHでは、七百キロの帰還鳩全てを参加させ、連合会四、六、七位と入賞させた。彼はペーパーマン系に自信を深めたようだった。参加全てのレースの入賞と言う快記録が続いていたのだ。

その記録に満足した彼は主力である、パイロン号直系を更に導入したと言う。その磯川もポイントレースは堂々の四位にランクしている。秋のレース如何によっては、まだまだ逆転もあり得る位置であった。

そして・・・この年最終のファイナルとなる日本競翔界最大のイベントGNレースを迎える事となった。香月鳩舎の参加羽数は三羽。川上鳩舎が八羽、高橋会長は何と二十二羽、渡辺鳩舎十六羽、浦部鳩舎が二羽と、連合会でも三百四十羽の参加となっていた。七百キロレースで、三日目には記録鳩が五羽同時に戻ってきて、やつと川上氏もこのGNに最終調整が終り、一気に七百キロからジャンプの期待の一群がいる・・・その最終段階を迎えた日曜日、今春のレースを報告する為に川上氏と香月は白川氏の家に来

ていた。もう、初夏を思わせる昼下がりであった。

何かが違う・・香月にはそう感じた。談笑している川上氏と、白川氏から離れて、ドンと一緒に鳩舎に向かった香月であった。木陰になった一坪ほどの鳩舎に移動している白竜号とネバー号だった。しきりにドンが香月にじゃれついて来る。その餌、鳩の様子を一つ、一つ点検している香月が言葉を発した。

「やっぱり・・何かが違うぞ・・」

丁度つぶやいたその時、後ろから白川氏が声をかけた。香月の後を二人はすぐついて来た様だった。

「何が・・違うのかな？」

「ネバーです。何時からあの動作を・・？」

「うん・・？あの動作って・・羽ばたきの事かね？」

「はい！」

「そう言えば、この二、三日しきりにやっているが、それが何か？」

川上氏と白川氏は分からん・・と言う表情で顔を見合わせた。鳩なら当り前の事じゃないか、羽ばたきなんて・・。二人はそう思った。

「やった！そうですか！やつと、始めましたか！もう大丈夫です。ネバーの体調は万全になりました」
川上氏が喜ぶ香月の様子に怪訝そうに聞いた。

「・・・何が、そんなに重要な事なのかね？」

嬉しそうな顔で香月が振り向いた。

「はい！理由は二つあります。ネバー号はこれまで、あの広い鳩舎の中でもほとんど羽ばたきする事は無かった筈です。違いますか？白川のじいちゃん」

「・・・言われて見れば・・・ほとんど見た事は無かったようだが・・・」

「きつとネバー号にとって、狭い鳩舎の空間は生きると言う、競翔と言う世界の実感が無かった筈・・・そう思いました。この動作はネバー号が生きる、飛ぶと言う気力の表れでは無いでしょうか？生きていくと言う実感の無いネバー号にとって、卵を産むと言う事も、異性に心を動かす事も無かった筈」

二人は黙って聞いていた。香月の思いが、まるで夢想のような、実態の無い理論に思えて、言葉が出なかつたからだ。

「ネバー号は生き返った。そう思います。その行為を僕は待っていたんです。もう、一つの理由は、この鳩にとつてのテリトリーがこの鳩舎となった事です。不安の無い、居心地の良い空間になった事です。人間がいかに居心地の良い空間を提供しても、ネバー号ほど強い帰巢本能を持った鳩を認めさせるには、待つしかなかった。そして、その意識を無くして人為的な交配を行っても、恐らく無性卵しか得られなかった事と僕は思います」

「君は・・・我々の思念を飛び越えているよ。及びもつかない考えだ」

川上氏はそう答えた。生態学を知り尽くしている白川氏さえ、想像も出来ぬ事だった。

「君は・・・香月君は、動物の心が読める・・・君しか居るまい・・・この仔鳩を得るのは」

二人は香月に鳩舎を任せ、池の方へ戻った。大小の綺麗な錦鯉がさつと、二人に寄って来た。

「白川さん、しきりに香月君が少し前にネバーと白竜号の使翔方法を聞いてきたんですよ・・・」

「あの子には・・・見えるようじゃ。あの二羽の心が」

「それ以上ですよ・・・その仔鳩の将来像すら描いているようです」

「・・・何と！」

白川氏は絶句した。

「言うたら、いかん！わしの思いは」

曇り顔の白川氏は、川上氏に言った。

「はい！分かって居ります。しかし・・・あの子にはネバーの資質が完璧に分かっているようです」

「わしは・・・ネバーが生まれた時・・・わしの今までの白川系はなんだったのか・・・そんな思いがした。体まで覆い隠せる程の広い副翼、絹のような密集した羽毛、柔らかい筋肉、そして、その理知的な方向判断力、暗い所でも判別できるのでは？その動体視力の良さ・・・バランスの取れた美しい栗色のその姿。どんな今までの銘競翔鳩すらも超越するような、均整の取れた競翔鳩なのだ。その輝きは今も確かにある。そして・・・わしは心を奪われたのだ。ネバーに恋するわしがそこに居た。魅了されてしまったのだ」

「はい・・・香月君も白川さんが、この鳩が一番好きな筈だ・・・そう言っていました」

「見抜いたか・・・やはり。なら！尚更・・・」

「私が香月君に返した答えは、両鳩の資質を見極めた白川さんの使翔法にあったんだと言う事です」

白川氏は暗い表情で答えた。

「・・・違う。確かに白竜号は英傑には違いない。だが、それほどの力を秘めた鳩とは見抜けなんだ。あの鳩は中距離向きの鳩で、むしろ千キロだろう、真価を發揮するのは」

「確か・・・六位でしたね。」

「その程度の力しかかわしも見ていなかった。ただ、血統的に見て、遅咲きの鳩とは見て居ったし、もっと長い目で見れば、結果が出るであろうとな」

「では・・・？何故両鳩を分けました？」

「全てはネバーオンリーのレースにする為に。自鳩舎の中だけでも、ライバルになる選手鳩は消したかったからだ」

「・・・そこまで、徹底されたのですか？でも総合百八十七位・素晴らしい成績でしたね。千五キロ」

「そんなもんじゃいかんのだよ。そんな非凡の鳩と言う粹では計り切れない鳩なのだ。ネバーは・・・前にも言った筈だ。今は四つのレース。来年は五つのレースになるらしいが、今のGC、CH、GCH、GNのレースでのグランドスラム、総合優勝を一羽の鳩で狙って居った」

「今更ながら・・・聞けば、聞くほど身震いますよ。白川さん・・・」

「狙って出きるもんじゃやない。だが、わしはそれだからこそネバーにそれまでの競翔人生を賭けて、鍛えてきたのだ。それは、それほど完成された鳩だからだ」

「・・・貴方と言ひ、香月君と言ひ・・・私が凡庸だからでしょうか・・・理解不能です」

「お前が手にして見れば、分かるであろう・・・。お前が絶対の信頼を置く自鳩舎のエースに期待を賭けるのと、そう大差は無い事だ・・・だが・・・」

「結果は完全に裏切られた・・白竜号と言う伏兵にですか？」

「ああ・・白竜の真の資質を見抜けなんだわしの不明。ネバーを酷使したわしの不徳、多くの選手鳩を道具のように酷使したわしの大罪・・全ては狂ってしまったのだ。わしの異常な執着が」

白川氏の顔色が少し悪くなった。

「お疲れでしょう。少し主屋の方に戻りましょう・・・」

白川氏の心情を悟り、川上氏は言った。

「わしは・・一羽の偉大な競翔鳩を手にしたばかりに、全てを失ったのだ。それまでの鳩に賭ける情熱、愛情・・全てを。失って初めてわしは思った。こんなわしのような思いを他の会員には、させてはならない。競翔は素晴らしいものなのだ。だから白川系を封印し、全ての一線から引いたのだ」

「なら・・何故？その思いを香月君に託したのか？」

川上氏は、少しきつい調子で、白川氏に言った。又その白川系を自分に託した白川氏の真意とは？・・。

「あの子の澄んだ瞳が、わしを正道の・・競翔の喜びを・・引き継いでくれそうな気がしたからだ。そ

して、それはお前にも言える。だからこそ、見守って欲しいのだ。このわしの可愛い子(鳩)達を是非……」
「お……お……」

川上氏の目からは涙が溢れた。全てを今……理解した。白川氏は、託そうとしたのだ、二つの自分の分身を、正道な競翔として。

「わ……分かりました。私の命に代えても守り抜きます。見守ります。お約束致します」

しばらくして、香月が主屋に戻ってきた。機敏な香月はすぐ聞いた。

「どうされました？重要なお話でしたか？」

「いやいや……もう話は済んだよ。君の方が良ければ、お暇しよるか？」

川上氏が答えた。

「ええ……あの……白川のじいちゃんにお話があるんですが……」

香月の敏感な視線は、白川氏の表情を読んでいた。すぐ笑顔を作り、白川氏は言った。

「おう！なんだ？わしに出来る事かな？」

「ええ・・他でもないんですが、今両鳩の仕切りは完全に取り外しましたので、そこで、GNが終るまで、飲料水に牛乳を少量入れていただきたいのです」

「ほ？牛乳とな？わはは。面白い、良かろう！」

「君の考えは突飛過ぎて、私には理解できないよ。ははは」

「異論など、無かろう？ここまで完璧に読んできた香月君の管理を」

「はい・・ありません。では・・このへんで・・」

頭を深々と下げながら、川上氏は目線を白川氏に送った。それは、白川氏も十分に理解していた。川上氏は全てを許容すると約束したのだ。白川系を使翔すると・・。香月を見守ると・・。残り少ない余命の白川氏に、出来るだけの事を自分はやるのだと・・。そう決心したのであった。

この夜は、一緒に川上氏宅で食事をしようと言う事で、香織との時間を持ってやった川上氏らしい配慮があった。あんなに我儘で勝気な娘が香月に出会って、県下でも有数の進学校に入学し、元々明るかった娘ではあるが、人に対する思いやりも持つようになり、実に香月に対しては控えめで、従順な所が見える。この変貌ぶりは、香月の大らかで、純粹な温かみのある性格からであろう。素直に娘の成長と二人の交際を双方の両親は喜んでいた。

楽しそうに食事をしながら、しきりに香織が香月に話かける。

「ねえ、香月君、夏休みになったら私、海に行きたいな」

「良いけど、まだまだ先の話だね」

「だって、去年も生徒会の夏季活動があったり、剣道の合宿もあったでしょ？それに、最近学校でもお昼ご飯一緒に出来ない事も多いんだもん」

「ああ、二年になつて、クラスも変わったし、学級委員長になつて、時間が少ないからね」

それまで、黙って聞いていた香織の母親、恵子さんだが、

「ねえ・・香月君。貴方は県下でも常に一桁の成績らしいけど、将来どこを目指すのかしら？」

川上氏がそれを制した。

「止さんか。そう言う話は、又にすれば良い。まだ二年生になったばかり。ゆっくり考える時間はある」

香月は微笑したが、食事の後の茶の時間になつて、

「あゝ・・先ほどの件ですが・・地元の高校に入学する前に僕は、色々考えたんです。やはり僕は一人息子だし、両親が農業をしている事もあって、遠くへは行けないと思うんです。僕は、隣市にある、S

工大獣医学部を受けたいと思っています」

川上夫妻は目を見合わせた。S工大は中央のN大や、国立のY大が一流と言っても、そんな比では無く、一種の研究機関のような、いきなり大学院へ行くような学校でもあり、優秀だからとか、そんなレベルで入学できる所では無いからだ。白川氏から、聞いていた筈の川上氏ではあったが、はつきり本人の口からその言葉が出た事によつて、むしろ、将来の自分の娘婿になるかも知れない香月に、親馬鹿と
言うか、不安が先に立った。

大きく・何かが変わろうとしていた。香月と運命の子鳩・白川氏・この運命と言う波の中で、
否応なく何かが導かれるような・そんな気がしていた。

そして、最終GNレースは、香月が愛鳩「ピン太号」を連合会二位に入賞させ、この一本に絞つていた浦部は、堂々連合会優勝を飾つたのだつた。新たな強敵が香月鳩舎の前に現れた。

回顧・希望

そして・・香月のカップリングと産卵は成功した。

だが・・二個の卵が揃った頃・・ネバーは卵を抱かなくなった。そして・・白竜号の燃える瞳からは、輝きが失せてしまった。この事に気づいた同時期・・白川氏の体調は悪くなり、寝込む日が続いたのだ。つた・・そんな初夏の夕刻・・。

突然の香織からの電話が、風雲急を告げる・・

「香月君・・おじいちゃんが・・白川のおじいちゃんが！」

涙声は擦れて聞き取れない。

「何だつて！ どうしたの！香織！香織！」

昼過ぎからの胸騒ぎは・・この事？香月はやつとの事で、白川氏が危篤と言う事を聞き取ると、両親に急を告げ、夕刻の道を、香織を乗せ、バイクで走った。香織の目は真っ赤・・二人は一言も発しなかった。風邪をこじらせていたと言う心配が、まさか危篤に繋がる事だとは・・。二人の顔を見て、真っ白い顎鬚で、くしゃくしゃの笑顔でいつも迎えてくれた、優しい白川氏の命が？何故・・突然に・・。

白川氏の家にたどり着いた時。周りを覆っていた重苦しい雰囲気は現実となっていた。高橋会長、そして・・・川上氏が香月達を見て・・・首を静かに横に振った・・・

「いや・・・いやあ！じいちゃん！いやああ！」

香織が枕元にうつ伏せて、大声で叫んだ・・・。

「な・・・なんで？じ・・・じいちゃん・・・う・・・う・・・ううううう」

香月はそれだけ言うと、嗚咽を漏らした。川上氏も肩を震わせて泣いた。高橋会長は、真一文字に結んだ口が震え、目からは大粒の涙が零れた・・・。

「おじいちゃん！おじいちゃん、香織よ！分かる？ねえ、ねえ！」

現実が信じられない香織が、何度もその体を揺する。幼少の頃から可愛がって貰った白川氏である、大好きな血こそ繋がって居ないが、優しいおじいちゃんであった。その病気は、二人とも知らなかった。だから突然のこの現実は、到底受け入れられない出来事なのであった・・・しかし、偉大な老競翔家の死に今・・・二人は、直面している・・・。

「香月君・・・白川さんは、最後の最後まで・・・君に仔鳩の事を・・・」

そこまで言うと、川上氏の肩は大きく揺れて震えた。

「う・・・ううううう・・・あ・・・あああああ」

香月はもう耐えられなかった・・・声を上げて泣いた。その香月、香織の様子につられて周りからも嗚咽が一斉に漏れた・・・。

人は言う・・・たかが競翔鳩に命を賭けるなんて・・・鳩って可哀相じゃないか、遠くの地に連れて行かれて、人間の勝手で道具にされて・・・大の大人が鳩なんか夢中になって・・・と。だが、ここに一生涯を鳩に賭けた、その素晴らしい競翔家が居た。それは、きつと鳩を愛し、その素晴らしい競翔と言うものを理解し、動物と人間との触れ合いを誰よりも大事にし、その喜びを人にも分け与えた人であろう。そしてその功績はきつと次代の競翔家に引き継がれるであろう、そんな榮譽ある、誇らしい死なのだ・・・。葬儀の全責任を負って、川上氏が弔問客、応対を引き受けた。香月、香織も一睡もせず、昨夜から泊まっている。その香月が、鳩舎の前に来た時・・・

偉大な競翔家の死に殉ずるかのようには、大鳩舎に戻された、白竜号、ネバー号はその日仲良く肩を寄せ合ったまま絶命していた・・・。

「なんと言う・・・ああ・・・う・・・うううううう・・・」

香月はその場で再び泣き崩れた。側に居た香織も一緒に又、泣いた。ドンが分かるのか、悲しそうな声でくーん、くーんと鼻を鳴らすのだった・・・。

なんと言う運命・・・。生涯連れ添った友と逝こうと言うのか・・・。

わずらわしい人間関係よりも、自分の愛する動物達と本当に幸せな生涯を過ごした人であった・・・。この二羽も棺に・・・。二羽を棺に入れた時、高橋会長も大声で泣いた。滅多に人前で涙など見せる筈も無いような、豪快で、愉快な会長であった。余りに言い様の無い・・・競翔家の死ではないか。この二羽の死は後年、川上氏が手記を発表している、死したネバー号にはこの直後GCHの称号が授与される事となる・・・。

葬儀が悲しみの中終わった後、葬儀委員長の川上氏、高橋会長によって、遺言状が開かれた。

まず、一通の手紙には自分の死を知っていた白川氏によって、所有の不動産の全てを市に寄贈される事が書いてあった。それは既に生前処理済みでもあった。そして、もう一通が開かれた。遺言状は、白川氏の所有する全ての鳩の譲渡を川上氏に依頼する旨が書かれてあった。遺言状を読み上げる川上氏の声は震えていた。香月には愛犬ドンが託されていた。

・・・白川氏が他界して数週間が立とうとしていた。川上氏は白川鳩舎の秘蔵鳩を引き取る為に、香月と共に、一部もう改築中である白川邸に向かった。川上氏は、既に収容する鳩舎を改造していて、三坪

のスペースを設けていた。まだ胸は重く、氣力の沸かない香月であった。卵は、秋中旬に孵化させる予定で、飼料の中に保存してある。

「香月君・・・元気が無いようだが、余り気を落とすんじゃないよ。あの人の死は辛い・・・けど、幸せな人生を歩んだ人なんだ。君の事を最後まで心配していた白川さんの為にも、君は仔鳩を無事孵化させて、希望を叶えなきゃ。いつまでもそんな顔をしていたら、きつと白川さんも悲しむよ」

きつと、自分を責めているのだろう、香織からも香月の様子を聞いていたが、彼の心情を悟り、川上氏も優しく言った。

「はい・・・でも、僕は忘れられそうにありません。卵を得てから、白竜号も、ネバーも輝きを失ったようで・・・じいちゃんにまるで付き添うように逝ったあの二羽を・・・。僕は仔鳩を作出しちゃいけなかったのでは・・・と」

「香月君！これはね・・・これは運命なんだよ。人との出会いも、鳩との出会いも。人生なんて誰にも先なんて分かるもんじゃない！どう自分が生きたかなんだ。白川さんも両鳩もきつと幸せに生きたに違いない。それは君が、居たからなんだ。託させる君が居るから安心して逝ったのだよ。だから、君は今から受け継ぐんだ、次代を」

潤む目で香月は、川上氏に言った。

「今から・・・ですか？」

「そうだ！今からだ！」

短い言葉に集約された意思・・・これが、過酷な運命の幕開けへの序章でもあった・・・。

川上氏が自鳩舎に白川ベルランジエ系を収容した際に、それ以外の血統は倶楽部の学生競翔家に譲るとの白川氏の遺言通り、その中の二羽の鳩を香月は貰ってきた。その血統はシューマン系で、この二羽を香月鳩舎の異血導入とするつもりであった。香月鳩舎も同交配三年目を迎え、同じ血では、何年も当り交配は出来ない壁に突き当たろうとしていた。この二羽は、まさに香月にとつてうってつけの異血導入と思えた。さて、香月の持ち帰った鳩だが、その成績を見て、まず、香月自身が驚いた。白川氏使翔では、白川系と、恐らく白竜、ネバー号以外に無いであろう千キロ連合会優勝を二羽とも記録していた、取り分け優秀な競翔鳩だったからである。更に生後五年と若く、白川氏が最後に使翔した鳩達でもあった。恐らく、白川系異血導入への、試し腹・試験的に導入された競翔鳩であったのだろう。川上氏も、良い狙いだね・・・香月にそう言った。

又二羽とも非常に栗色の美しい鳩で、その姿も綺麗な雌鳩であった。

この二羽に《のちの最重要種鳩》(リリー号)(マロン号) さっそく「ピン太号」を。グランプリ総合二位の「グランプリ号」を交配させる事に決定した。ピン太号とグランプリ号は、源鳩に代わる第二代



グランプリ号

の種鳩候補になった。源鳩も既に作出のピークを過ぎて交配を見直す時期に来ていた。今春、源鳩交配は八羽の仔しかとつていない。その出来も期待できるようなものでは無かったのだ。

そして・・来期、自鳩舎の選手鳩と、白川系を駆使してレースに臨む川上氏であったが、この時から、川上氏は自鳩舎の種鳩を徐々に関西のある鳩舎に分譲し始めて居た事は、誰も知らなかった。

川上氏から、残りの主流血統を他鳩舎に全部譲るのだと、香月に電話が入ったのはそれから数日後の、日曜日だった。

「どうだい？交配」

「はい、すぐ鳩舎に慣れて、それぞれカップリングも成功しました」

「うむ・・それじゃ待っているよ」

川上氏がこれまでの主流を分譲すると聞いて、少し動揺があった香月だ。近隣の連合会の人達がそんな事を聞けば、大騒ぎして大勢が駆けつけるだろう。しかし、何故？今までの主流を・・？

川上氏宅に着き、白川鳩舎から譲り受けた六十数羽の白川系の一群を手にとったり、特徴などを聞きながら、改めて白川系が、日本の気候風土に適した交配を重ねられながら改良された頭抜けた血統である事を、認識した香月であった。この血統の特徴は、短距離から長距離にかけてオールマイティーなピードバードだと言う事だ。説明する川上氏の顔も上気しながら熱が入った。嘗ては日本一、全国一と知れ渡った血統である。

「どうだい？これだけ粒の揃った鳩達はまず居ないだろう。これからの競翔はやはりスピードが主力となつて来るだろう。何羽参加させて、何羽戻らすと言つた時代は、もう過ぎたのかも知れないね。私の主流血統は、長距離向きで、悪天候には強かったが、好天候のスピードの出るレースでは弱かった。放鳩の技術も年々向上し、好分速のレースが続出する展開になつてきている」

香月には川上氏が言い出さない、その本当の理由を悟つていた。白川系と川上鳩舎主力とは異血統である為、今までの使翔法では同結果は望めないのである。白川氏の遺志を継ぐ為には血統の一本化をしなければならぬ。その川上氏の心にある辛さを香月は分かっているからだ。そこで敢えて、競翔結果でしか知り得る事の出来ない白川系を、川上氏はどう捉え、どう使翔しようと言ふのか聞いて見た。

「あの・・・僕も余りベルランジェ系の特徴については知らないのですが、良ければ、お伺いしたいのですが」

「君が知らない？ふふふ。君はとづくに研究済みであろう、敢えて聞くと言う事はヒントになる事を私から探りたい・・・そう言う事かな？」

笑いながら川上氏は答えた。凶星されて、香月も正直に打ち明けた。無論隠し事など一切無い師弟の間柄である。

「類似点は、旧主流と比べて、方向判断力に優れている。勇敢でもある。更に、血統の固定化が1羽の銘鳩に集約されるのでは無く、数羽の一群によつて固定されてきた事であろう。これは、近親によつて固定化された血統よりも、鳩質（体型、能力）のばらつきが生じる訳だが、逆に考えれば、比較的改良し易い血統とも言えよう。数々のレースで淘汰された一群の中で、第二代、第三代の精鋭を作つて・・・そうした血統に更に白川氏は日本の在来系である、南部系、今西系などと交配させて、その中から三重数年に渡る徹底した少数精鋭主義で、淘汰を繰り返し、完成させてきた血統なのだ」

「現川上系とどう違いますか？」

言い出さない川上氏に、敢えて香月は質問をぶつけた。

「私の主流血統のノーマンサウスウェル系は勇敢で、悪天候でも強い。それは、頭抜けていて、実証されても居る。だが、白川系は更に、その上を行く。私がどんなに改良して頑張つても遠い存在だった。近年私はブリクー、ハンセン、そして、勢山系を導入しているが、改良を重ねて得られたのは、結局の所在来系である勢山系一群の飛び筋なんだ。それが主流なんだよ」

苦しい胸の内を香月は敢えて聞こうとしている。これまで築きあげてきたこの血統を、放出する無念はいかばかりか。それを素直に香月が受け止めてあげたかった。

「では・・・何故その白川系に自鳩舎の血統を交配して、新しい可能性を探らないのですか？」

川上氏の顔が曇った。

「君は、私の真の狙いを見抜いているようだね・・・。残念なんだが・・・私の血統では全てにおいて勝てない。特に晴天のレースでは。使翔法が全く違うのだ」

「あっ・・・」

香月はこの言葉に川上氏の競翔家としての別の姿勢を見た。連合会では通用しても、中央の鳩界には通用しない。川上氏はその卓越した手腕を誇りながらも、やはり中央の連合会には一歩及んでいなかったのだ。

「分かったようだね。私だって、自鳩舎の艱難銀苦しした鳩を勿論手放したくは無い。しかし、やっぱり私も競翔家なんだね。いつまでも頂点を目指して行きたいのだ。そして、それが、偉大な師に一歩でも近づく為に・・・その遺志を継ぐ為に」

川上氏の目に光る涙を見た時、香月は改めてその決意を見た。何と言う・・・素晴らしい人なのだ・・・

この人は・・総身がしびれるような感動を覚えた。白川系を託されると言うのは、自らも白川氏使翔法を貫くと言う事。その決意無くして、川上氏は使翔など出来はしない。愛鳩家の姿勢だけでは、使翔仕切れない程重く、大きなものを託されたのだから。

「だがね・・私も選手鳩だけは分譲したくない。この中から残った鳩は君も言った通り、白川系との異種交配となるだろう。しかし、私の血統は白川系の中に埋没するだろう。これは非常に競翔家として、悔しい事なんだが、白川さんの鳩舎に居た、二百数十羽の鳩のどの血統をとつても、私の旧主流血統では苦戦を強いられるだろう。それほど・・偉大だったのだ、白川鳩舎とは。この白川系を自分の鳩舎に置いて私も実感している。それは、実は今春のレースにも既に使ったからだよ」

「えっ？」

香月は驚いた。

「昨年より、白川さんから依頼された配合で、四羽既に導入していた。その鳩の仔鳩が既に今春のレースを戦い、君のレースには負けたが、五百キロレースまでの私の鳩舎の一着、二着だ」

川上氏は既にもう白川系を使翔していたのだ・・香月はもう、何も言う事が出来なかつた。その選手鳩が、早熟で、図抜けた鳩だと言う事は言わなくても分かる。来春の台風の目になるのは間違いない事

だ・・・。

この日、関西から人柄の良い、*新川さんと言う人がトラックに乗って川上氏の所へやって来たのは午後をかなり回つての事であった。

*修二の青春 閃きの中で

恰幅の良い、いかにも人の良さそうな新川さんは、家具屋さんを営まれている方だが、数年前奥さんを交通事故で亡くされてから、競翔を中断していたとの事で、関西では有名な強豪競翔家であった。自分の鳩を全て処分してしまつて、数年間は、全く中断していたのだが、やはり競翔鳩が忘れられなくて数年来の知己である、川上氏に一ヶ月前に電話してきたそうだ。その電話では何羽か譲つて欲しいとの事で、既に何羽か分譲しているが、この人なら・・・川上氏は新川氏のお人柄を良く知っていて、関西でなら自分の血筋が合うのでは・・・そう決断したと言う。

「いやあ・・・わしは幸運ですわ。川上さんに主流種鳩を譲つて貰えるなんて」

童顔のように、恰幅の良い腹でにこにこして新川さんは言った。大きなトラックは、鳩舎が丸ごと入りそうな放鳩車であった。並の人では無い、香月も思った。

「丁度・・・どなたかに・・・思っていた矢先・・・それが競翔を再開される新川さんなら私も安心だ」

お互いの知己は、和やかに談笑となった。

「しかし・あれでんなあ・わしも自分の鳩を他所に出す時は、大声で泣いたもんです。よくぞ決心してくれました。有難い事ですわ。絶対この血統は関西で活躍します」

「私も正直辛い・ですが、思い切った鳩の入れ替えをしなければ、決断が鈍る」

川上氏は新川氏と固く握手した。香月もこの人なら間違いないだろうと思った。・愛鳩を手放す時泣いた程の愛鳩家ならば・。

「それに・私が関西の鳩舎に譲るのは、是非、稚内GN千三百キロを・その夢を託すのですから」

香月は、納得した。この人なら・川上鳩舎の主要血統なら成しえる事であろうと・思った。

新川氏が、何度も礼を言いながら帰った直後の事であった。

川上氏の真意を感じ取って、香月は正直に気持ちを打ち明けた。

「僕・正直言って、川上さんが、純白川系の後継者になるものだと思っていました」

「・なるほど・外れては居ないと思うが・今年のレースに白川さんに言われる交配で、言われる

ままにレースをした。流石に非凡な成績を残した……が……。私は、私の白川系を作りたいと思ってる。それは故人の遺志でもきつとあつた筈と思うのだよ」

「はい……きつとじいちゃんは川上さんに更なる改良を託したのでしょうか。僕は嬉しいです。尊敬します。師匠……」

初めて香月が川上氏を師匠と呼んだこの日……熱い思いが川上氏に過ぎつた。目が潤んだ。

「あ……申し訳ありません。じいちゃんを思い出させるつもりでは……」

機敏な香月は白川氏の事を思い出させる……その言葉が足りなかった事を謝った……。

「いや……そうじゃ無いんだ……新川さんと同じ……心境だったのだ」

「そうだったのですか……その気持ち、お察しします」

川上氏の痛い程の心情を悟り、今まで育ててきた競翔鳩を手元から分譲するこの川上氏の強い信念と、決断にも敬意を表したかった。

「あ……言い忘れたが、香月君、君の選んだシューマン系はダークホースかも知れないね」

「えっ・？」

香月は驚いて聞き返した。

「あの鳩群の中で、その二羽を選んだのは意図ある事かな？」

「い・・・いいえ！全く・・・綺麗な体形の美しい羽色でした。意図は全くありません。どの鳩を選んでも遜色なかったです」

「ふ・・・ふふふ。君って言う子は・・・。しかし、あのシューマン系は白川氏が導入して二腹しか仔鳩を取つてない鳩で、私もこの二羽が参加したレースでは惨敗したよ。殆どが九百メートル台の分速のレースの中で、二羽ともダントツの千百メートル台で、しかも最遠地にありながら、近隣地区では圧倒的な、ぶっち切り・・・総合でこそ、順位は落としたものの、それも当時参加連合会の距離の制限がまちまちで、結局八百五十キロの範囲であった地区が上位を独占した中の、総合上位だったからね。私もこのままこの二羽が以降のレースに参加していたら、どんな大記録が生まれたか想像できない位だ」

「・・・そうなんですか。・・・でも、結果は分かりませんが、僕は綺麗な鳩が手に入って嬉しいです」
彼らしい率直な意見を言った後、香月は香織を連れて近くの公園に出かけた。

公園のほぼ中央に大きな池があり、一本の楠木が植えられている。丁度その木陰の下のベンチが二人



公園

の指定席だ。香織は最近香月が部員になっている剣道部のマネージャーをやっていて、倶楽部のマスコットガール的な存在だった。香月は中学校の時には県大会で準優勝するほどの実力の持ち主だが、当初はたまたましか練習に顔を出さない香月と、先輩部員との間で揉め事もあったのだが、

「スポーツは体を鍛える為のもので、試合するための活動ではありません」

その意見が、理解ある先輩によって、不規則な倶楽部活動参加になっていた。

「ねえ・・香月君、今日の大会どうなったのかしら・・？」

本来なら、マネージャーである香織も行動しなければならない大会である。それを香月との時間を優先し、欠席したのだ。だが香織も、そう言う部活に本格活動はしていなかった。E高校はやはり進学校であり、勉学を優先されるからだ。

「大丈夫さ・・あいつ（木村）が居る限り」

「木村さんて、香月君と中学校は県大会で優勝を分け合った程のライバルだったんでしょ？本当なら、香月君も大会に出ているって当然の実力なのに・・・」

香月が剣道部に所属できているのは、この木村と言う男が強く先輩諸氏に推したからでもあった。しかし、練習にもたまにしか顔を出さない香月は、試合には出さない条件を、剣道部の部長にはつけられた。

「チームは和が大事だよ。僕は試合には出たいとは思わない。それより君は行かなくて大丈夫だったのかい？」

「私？私は香月君と一緒によ。その為に入部したんだもん。時間が取れないでしょ？二人の・・・」

「あ・・・ああ・・・色々ごたごたしたからね。」

「ね、約束しようか・香月君の夢と私の夢・・・叶いますようにって。この楠の木に今から誓うのよ」

「ああ、いいとも！けど、君の夢って？」

「私ね・・・漠然としてただけど、高校を卒業したら、短大へ進学し、保母さんになるの」

「いいとも！今から誓おう！」

二人の関係は益々深いものとなって行く。
週が明けて、香月は担任に呼ばれた・・・進路の事であった。

「どこを希望したい？香月君」

「はい・・・S工大獣医学部を希望します」

担任の顔が凍った。

「・・・それは・・・極めて難関中の難関だ・・・君の学力なら、国立である中央のK大農学部獣医学科や、N大も可能だろう？何故？」

「僕も考えました。でも、僕の両親は小規模の農業をやっていて、中央の大学へ行くには負担も大きいです。又、調べましたら、S工大のような設備は整っていないし、それ以外には条件の当てはまる所は無いんです」

「だが・・・S工大と言えば、国家の特殊研究機関・・・改めて、他の大学からも入学し直す者も居る位で、一浪、二浪は当り前の所なんだよ？学業云々じゃなく、どう言う研究目的かを問われる所だ。君はそれを持っているのか？」

「はい・・・」

「うーん・・・君程優秀な学生だから、私もS工大は出来るならば、もう少し考えた方が良いと思う。来週でも君の両親と話して見よう・・・」

頭を下げて香月は職員室を出た。そこへ香織が待っていた。

「進路の話？」

「ああ・・・やはり考え直せって・・・」

「香月君の夢の第一関門だもんね・・・で、用事があるって言ったのは？」

香織が聞いた。

「うん。そろそろ倶楽部活動を止めて、本格的な受験体制に入りたいと思うんだ。スケジュールを決めて・・・」

「私も、頑張らなきゃ！」

「じゃ、行こう」

「どこへ？」

「今から退部届を出しに」

「ええっ？」

余りに性急な香月の行動に、香織は驚きながらついて行った。

ところが・・・剣道部の顧問、杉村先生と、三年生の辻村主将と木村からは、強く留意を求められた。

辻村はきつい調子で言った。

「とにかくね！香月君、勝手過ぎるよ、君！剣道部に在籍する以上、規律や伝統があって、いかに君個

人の理由があつても、変則的な倶楽部参加にしてもだね。都合の良い方向に勝手に自分で決められたんじゃない、俺も主将としてたまつたもんじゃないよ！」

「申し訳ないです。けど、僕は将来の夢の為に今から準備しなくてはならないんです。辞めさせて下さい」

「それを言うのなら、君は一年の時に結論を出すべきだった。確かに君の変則的な倶楽部参加は、文句を言う者も居る。けど、去年のインター杯での成績で、木村と並ぶ実力の君には試合には出さないと言う事だったが、是非、今年、来年と秋のインターハイには出場して貰いたかった。その俺の気持ちも分かってくれよ」

辻村は、香月の実力を買っていた。周りの雑言も押さえてきた。それは、香月も良く知っていた。木村が言った。

「この秋だけでも、参加してくれよ、香月君」

「有難う！木村。でも、僕が出場する事はきつと、来年主将を受ける君にとって、倶楽部運営に採め事を起こす事になる。それならば、今退部したい」

香月の決心は揺らぎないようで、でも、だからと言ってすんなり退部を認める雰囲気では無かった。その時、一緒の香織が言った。

「お願いです。香月君の退部を認めて下さい。私は自主的に勝手にマネージャーをしたりしているから、正式な倶楽部員では無いですけど、香月君はよくよく考えた上での結論なんです。今も先生の所で、進路について話してきました。彼の目標はS工大獣医学部・学校で習う知識より、もっともっと幅広い知識を吸収しなければ受からない大学です。どうか、お願いします」

やっと、その時顧問の杉村先生が口を開いた。

「ほう・・S工大・・我が校から過去にもストレートに入学した者は居ないと聞いている。国立K大卒業者でも不合格になるほどの学校だ・・それは、大変だね。どうだ？辻村君・・こう言う事なら引き止める訳には行かないだろう」

「そ・・それは・・」

辻村が口ごもった・・。

「香月・・俺は君に借りがある」

木村が言った。

「何？借りって・・・」

「中学校の時の県大会の決勝戦だ」

「ああ・・・君に負けたね」

「いや！あれは・・・君が捻挫している足を庇ったからで、俺は勝ったと思っちゃいない」

「それも実力だよ、過去の話だ」

「決着をつけよう！」

「え・・・？」

香月が木村を見上げた。それは、ライバルと称された、剣道の決着・・・木村の香月に対する心配り、暖かい思いやりの送る言葉でもあった。香月は彼の気持ちを悟った。顧問の杉村も、それを理解していた。

「認めよう・・・私が審判をするよ・・・良いだろう？辻村君、香月君」

「願っても無い事です。異存ありません」

香月は答えた。辻村も説得困難と諦めたようだった。

木村は全国インター杯で準優勝した実力の持ち主。一方の香月は、高く実力を認めながらも、公式戦

には一切顔を出さなかった陰の実力者。香月と木村の試合は瞬くまに学校中に知れ渡り、次の日の放課後の剣道場には、大勢の生徒達が集まっていた。

香月の人気が証明されているようで、盛んに女生徒の声援が飛び交っていた。試合は正式のものと同様、二本先取で決まる。副審を辻村が勤めた。大勢が固唾を飲んで見守る中、試合は始まった。だが、誰もが、全国インターハイで、一年生ながら個人競技の準優勝を遂げた木村の勝利は確実と見ていたし、香月への声援は、むしろ善戦して、頑張つてと言う応援でもあった。県下では無敗、インター杯の個人戦決勝で敗れたものの、惜敗だった。今年には優勝候補ナンバー一の木村は、学校のスターなのだ。それに対する香月には実戦がほとんど無い。誰もその香月の剣道の実力は知らない・・・いや・・・正確には二名、香月の勝利を信じて疑わなかった者が居る。香織・・・そして女子剣道部の女武蔵と称される、香月と同じ中学校出身の、村上和美であった。

「うりゃああ！」

激しい気合と共に始まった試合は、木村の上段からの面が強烈に振り下ろされる。紙一重で避ける香月の中段からの胴、小手の連続技を木村が竹刀で払う。全員が、

「おおお——！」



と言う驚きを發した。両者、戦前の予想を覆す全くの五分の戦いであつた。次から、次へと繰り出される木村の多彩な攻撃のどれもが決まる寸前、紙一重で香月は逃れる。又激しい気合と共に、香月の抜き胴、小手が強烈に入ると思えば、木村も紙一重で交わす。まるで、中学校時代の県大会決勝戦のようだと、村上是思った。

これほどまでの実力がある香月に、誰もが驚いた。人が驚くほどの天分を持ちながら、香月は人前で、それをひけらかせる事は無かつた。それを知る村上だったが、大人しかつた彼が、高校に入つて、驚くほどの変貌を遂げた事・それは傍らで、必死の応援をしている川上香織の影響だと感じた。集まつた生徒はもう、どちらを応援するでもなく、試合に集中していた。香織は自分の胸の中から沸いてくる熱い思いを感じていた。自分の彼が・・これほどに大きい男なのだ、今更ながら認識したのである。香月の、一挙手一頭足見逃してはならないと言うように試合を見守っていた・。

場内に響き渡る気合と共に、その時木村の上段からの横面が決まつた。

「一本！」

の声と共に、館内は沸いた。時間が経過しているので、十分間の休憩を取ると言う事で、村上是腰を浮かそうとしたが、そこで思いとどまつた。誰よりも早く香月の傍らに駆け寄つた香織のその姿に、自分が出る幕は無いと悟つたのだ。村上は、中学校の県大会決勝戦で、善戦空しく破れた香月の試合後の顔を知っている。その負けて悔いなしの爽やかな、白い歯を見せた笑顔に心奪われ、それからの片思い

であつた。同じ高校を屈指し、そして、同じ剣道部に入った。しかし、彼女と香月の距離はむしろ中学校の時より遠くなつた。傍らに、男勝りの自分など到底敵いそうに無い、可愛くて、明るい・・そんな彼女が居たからだ。

香織は、すぐタオルを濡らすと、香月の大粒の汗を拭う。香月の左の額は、今の横面を受けて赤く腫れていた。

「大丈夫？香月君」

心配そうに聞く香織。

「大丈夫・・でも、強いなあ・・あいつ・・。俺も死に物狂いで掛からなきゃ、気合で負ける」

少し離れた木村の方は、辻主将に言っていた。

「彼は強いです・・俺が今まで対戦したどの相手よりも・・恐ろしいほどの気合ですよ。先ほどかろうじて避けた小手は強烈でした。まだ腕が痺れています」

そう言って差し出した、木村の右腕も真っ赤に腫れていた。

「惜しい・・・何とかならんものか・・・」

辻村は未練そうに言った。後輩の剣道部員の中にも、香月の部活動を心良く思つて居ない者も居たが、誰一人香月の実力を認めない者は居なかつた。

そして・・・十分の休憩が終り、今度は香月が、木村得意の上段からの面を竹刀ごとはね上げた、振上げ抜き胴が鮮やかに決まり、再び館内は大歓声に包まれた。嘗てこれほどすさまじい試合があつただろうか。どちらが武蔵で小次郎か。実力は全く互角。延長の又延長・・・そして、それでも最後だという顧問の言葉で再開した間際の事であつた。再三香月の小手に悩まされて来た、木村の捨て身の払い胴が決まつた瞬間、大きな歓声と共に、全員が二人に走りよつた。もう、どちらが勝とうがそんな事はどうでも良かった。両者の力を尽くした戦いに全員は感動を貰つたのであつた。

ふらふらになりながら、でも、二人の間には爽やかな笑顔が零れた。村上の目から滂沱と涙が零れた。自分が好きであつた、その爽やかな笑顔だつた。

香月は木村に手を差し出した。

「はあはあ・・・有難う・・・やっぱり君は強かつた・・・払い胴見事だつたね」

「はあはあ・・・君こそ・・・俺が今まで対戦したどの相手よりも強かつた」

大きな拍手に送られて、香月は香織の肩を借りながら館内を後にした。しばらくは立ち上がれないほど、剣道部室内の香月は疲れていた。

「香織・・俺は恵まれている・・今日こそそれを思った事は無い」

「貴方が何事も純粹で、全力だから皆が応援してくれる・・私こそ・・有難う・・」

香織の目から大粒の涙が零れる。

「どうしたの？」

「ううん・・なんでも無い。こんな素敵な彼が居て・・幸せ・・」

そう言って、香織は肩の頭をもたれかけてきた。

唇を寄せ合った二人。しょっぱい汗の味がした。

誕生

二人で過ごした夏が過ぎ・・香月と香織、そして競翔鳩、一つの転機が訪れようとしていた。本格的な受験体制に入った香月であったが、保存していた例の卵は、やっと仮母によつて産声をあげようとしていた。

そんな日、秋の競翔前の事であった。突然、佐野と、磯川が訪れた。どうやら、秋レース前の敵状視察のようであった。それは落ち着かない佐野の様子からも窺われた。

磯川は一通り鳩を観察していたが、余り多くを語らなかつた。それに反して、佐野からは次から次へと質問が飛び出してくる。

「香月君の所、秋は八羽なのかい？」

「ええ」

「少ないね、幾等種鳩が少ないと言っても、選手鳩からも仔が引けるだろうし、もっと参加出来ると思つていたよ。で・・？白川さんの所のシューマン系は、春かな？」

「ええ、そうです。でも、同交配が三年目を迎えていますので、親鳩も繁殖のピークを過ぎてい8ますから、余り仔を取らないようにしたんです」

「それは、あるね。当り交配も三年目を迎えたら。でも、工夫すれば、学生愛鳩家は他鳩舎から親鳩を借りて来る事も出来るし、そう言う事も一方法だと思ふよ。他鳩舎も見てきたけど、秋は凄いい羽数にな

るよ、ねえ、磯川さん」

佐野が口数の少ないこの日の磯川に、確認を求めた。

「ああ・俺も十二羽の親鳩から三十羽仔を引いた。二次に回った分を含めると、来春は、四十数羽になる。一応の結果も出たから、後は工夫すれば数十シーズン交配については大丈夫だろう。それより、君の所も種鳩が六羽と言うのは寂しいよね。それに・・秋に参加する鳩を今見ているけど、どうも・・羽の色艶が良く無い。出来が悪いんじゃないのか？」

磯川は鳩に関して、一流の目を持っていた。香月も正直に話した。

「ええ・・どうも、秋は駄目見たいです。同交配を三年続けた事と、源鳩のピークが過ぎた事が原因です」

「君ともあろう競翔家がその手を打たないなんて事はあるまい。何かあるのかい？」

「はい・・実は、大学受験の為にこの秋から三シーズン、少し競翔は控えようと思っています」

「そうなの・・。大変だね、君も」

そう言う話になれば、磯川は良い兄貴分である、自分の受験時にダブらせて同情した。

「でも・・残念だね、香月君。この秋は西コースの七百キロN、千キロのDCカップが復活するし、五百キロレースでは、十連合会の合同レース、賞金レースも開催される。君の所も、結果如何によつては、最優秀鳩舎賞は狙える充分な位置だからね」

佐野が言った。

「今年の秋は俺もこんなチャンスだから、狙うよ！しかし・・春は君も分からないね。現役選手鳩も居るし、栗毛・・二次鳩達の粒が揃っているから・・」

一流の磯川の目は、今秋を捨てても、来春には・・そんな香月の期待を見事見抜いていた。

仔鳩誕生の前に、この年最後の参加となった香月の秋の百キロレースを回想する。

持ち寄り場所には凄まじい羽数が集まった。参加用紙に次から、次へとゴム輪が入れられて行く。年々増大して行く東神原連合会は、今や若竹の勢いで伸びる強豪連合会となっていた。香月は先ほどからゴム輪の番号を書くのが忙しくて、他の会員達と話をする間もなかった。会員達はあちこちで固まり、ゴム輪を入れている。その中で、香月の背後から

「おおー！」

と言う、どよめきが上がった。
続いて、高橋会長の張りのある大きな声が・・。

「何だよ・・おい！誰だ？こんな成鳩を一杯参加させたのは？」

秋レースは若鳩の登竜門と言われる。通念上、西コースの長距離が毎年行われている連合会なら話も分かるが。今年秋初設置の西コースだ。充分な準備は出来ていない筈だ、どの鳩舎も。

驚きはむしろ、嘲笑に近いものであった。だが・・その嘲笑のどよめきは、その後沈黙した。
どうしたのだろう・・？香月は前の佐野と顔を見合わせた。答えは高橋会長の例の声だった。

「おい・・おい。この鳩・・全部川上君のかよ・・」

背後が静まり返った。どうにか、放鳩車も出て行った後、鳩時計のセットに、集団が秋の前哨戦とも言える舌戦が飛び交っている最中、遅れてきた川上氏が到着した。その間もなく閉函時間が来た。「バシャーン！」すぐ半数の会員は帰ったが、高橋会長はすぐ川上氏に質問した。

「川上君、一体秋はどう言う事かな？ほとんど、旧主力は放出したと聞いたが、七割が成鳩じゃないか」

「いやあ・・秋には殆ど間に合いませんでしたのでね。それで、成鳩を注ぎ込んだんです。深い意味はありません」

「そんな事は無い。君程の男が、何の目的も無く、成鳩を持って来る筈が無い。何かあるんだろう？」

重ねて高橋会長も聞いた。香月もそう思っていた。

秋の成鳩参加は、何故・・一般的にやらないか・・それは鳩の換羽の時期だからだ。丁度この時期には主翼の十枚目が抜け落ちると言う事で、成鳩にとつては不利である。春のレースを主体に考えるなら、秋は調整程度の短距離にとどめるか、全く参加させないと言うのが一般的だ。

「主翼の十枚目が抜けているでしょう？不利だと思うですが・・」

香月が言った、磯川も同じ事を言った。

「俺もそう思います。経験鳩を秋に使うのは、他でも聞きますけど、スピードの面からは不利ですよ」

川上氏は微笑しながら答えた。

「果たして・・？不利だろうか？秋は天候が不順だし、経験鳩の方が有利な事もある。条件はあるよ、

幾等でも」

磯川が、続けて言った。

「経験鳩は無理をしませんよ。悪天になれば、俺のペパーマン系は、断然強いです」

高橋会長が、皮肉まじりに言った。笑いながら・・・。

「おいおい・・・少し自意識過剰だな。秋はなあ・・・分からんよ。私も何度も苦い経験をしている。スピードがあっても、恐さを知らない若鳩は、正反対に飛んで行く事だってある。わはは」

全員が苦笑した。高橋会長は、ちゃんと場を取り持つてくれている。負けじ！と磯川はやり返す。

「勿論、方向判断力に優れている血統だからこそ、悪天候に強いと言えるんです。会長の所のゴードン系は、俺も以前飼っていましたけど、まだ日本での実績が少ないでしょう？この秋の結果が出てからですよね？全ては」

香月はその時疑問を一生懸命考えていた。そして、突然声を出した。

「あつ！そうか！そうだったんですね？」

会長も磯川も周囲も驚いて香月を見た。

「川上さんの所では、春のレースが終了した時点で、主翼の二枚を抜いたんですね？そうすれば、秋には全部生え揃う事になる」

川上氏は微笑みながら答えた。

「見抜かれたね。その通り。秋に参加させるつもりで、千キロ以上の記録鳩以外、後日帰りも含めて、全鳩主翼の二枚を抜いた」

会長がその答えに、首を傾げながら・・・言った。

「でも・・・何故、そこまでして？若鳩だけでも、君なら充分通用するだろうに・・・」

川上氏はそれを否定した。

「レースに負けたくないからですよ。こう言う若手も急速に伸びて来ているし、最優秀鳩舎賞設置発案者の私が旗を振って先導しなければ。私はその為にも今年、このタイトルは全力で狙いたい」

居合わせた全員の顔が引き締まった。追われる立場・連合会を支える立場で、川上氏は、自分の信念を曲げても、競翔に全力を示すと言うのだ・。口にくそ、出さなかったが、磯川のパイロン号直系は、台風の目になる事は、香月、川上、全員が知って居た。

当日は薄曇、向かい風の悪コンディションの中、やや遅れた七時に放鳩となった。こう言う向かい風のレースは思いもかけない結果が出る事もある。帰舎予想時間に鳩舎の前で待つ香月だったが、十五分前に驚くべき速さで、数羽の鳩が飛んで行ったのは・。一体なんだったのだろう。時計は八時十六分を現在差していた。分速の望めるレースでは無い。空には乳白色の雲に時折、強風が舞う・。最悪のコンディションだ。待っている香月の鳩舎は八時三十分であった。

「遅い・。遅すぎる・。」

一人言をつぶやく香月だった。タイムはしなかった。八時二十分には、香月鳩舎の真上を一群が通り過ぎて行った。予想していた事とは言え、又、十分に訓練が出来たとは言えない今秋の香月鳩舎であった。いっそ、春に回そうか・。彼は思った。全鳩が戻った時点で、香月は今秋を早々と諦めた。打刻は

しなかつたものの、川上氏と、同行して開函に付き合う事になって、車内で、打ち明けた。川上氏も考えを肯定した・・・。

川上氏の打刻タイムだが、若鳩の一羽が早かつたのと、全部で八羽打刻した中で七羽が記録鳩と言う事もあつて、入賞圏内に居るのは確実と見られていた。八時十分頃だと言う打刻タイムだが、八羽の打刻した時間が二分前後と言うのだ。流石に実力者である。

開函場所の会長宅では、既にほぼ全員集まっていたが、香月が鳩時計を持ってない事に佐野が不思議そうに尋ねた。

文部杯常勝の香月が・・・何故？そんな疑問であつた。

「どうしたの？時計・・・」

「打ちませんでした」

「何で？」

「とても打刻出来るタイムじゃ無かつたです。八時三十分に一羽。その後夕方にやっと最後の一羽ですから・・・」

「そう・・・意外だね・・・君程の鳩舎が・・・見せて貰つた時も出来が悪いって聞いていたけど・・・」

ところで、来ている筈の磯川が見えない。佐野に香月は聞いた。

「ところで、磯川さんは・・・？」

「まだまだよ。まだ少し時間があるからね。でも・・・皆、肝を潰しているよ・・・あのパイロン直仔群は凄
い・・・ダントツで、五羽同時に帰舎したそうさ。そのタイムが八時二、三分と言うから、この悪天の中・・・
本当に凄いいよね」

香月が当然その事を知っているかのように、佐野は言った。香月は実は全くその情報を知らなかった。

「そんなに・・・早いですか？やっぱり・・・見間違いかと思った一群がそうだったんですね？若鳩とは
言え、この逆風の悪条件の中、そんな分速で戻ってくるとは・・・」

「あれ？知らなかったのか・・・。余りの差に他の会員達も今晚は大人しいだろ？川上さん位だよ・・・次
に近いのは」

話し合っている所に磯川が入って来たが、時間スレスレで、間も無く開函となった。

三腹仔を取れば、その内一羽は必ず優勝鳩が生まれるだろうと、太鼓判を押されてインデント号血筋
より、更に濃い血筋として導入した血統である。脅威のペーパーマン系のそれもほとんど源鳩に近い、パ
イロン号直系・・・。香月も身震いする思いがした。果たして、白川系とどちらが、速いのか・・・それは
来春になって明らかになるだろう。今の香月では到底太刀打ち出来なかった。

結果が出たのは九時前だったが、やはり一位～五位まで文部杯と合わせても、ぶつちぎりの成績。強

い磯川が完全復活したのだ。六位に川上氏、七、九位を又磯川、十位に川上氏と、十羽中八羽と言うこの一番参加数が多い東神原連合会の百キロレースを圧勝した磯川であった。

そして、続く二百キロ、三百キロでも磯川の勢いは止まる所を知らず、一位から三位、又一位から四位と上位を独占した。やっと四百キロレースになって、川上氏が優勝。だが、二位、五位を磯川と、その後を川上氏が六、八位と言った具合にレースは進んで行った。川上氏が鳩の休養を取ってジャンプ方式にしたのに対して、磯川は全レース、全鳩参加であった。四百キロレースで一矢を報いたのは、ようやく疲れを見せてきた、磯川鳩舎に対して、川上氏の手腕の勝利と言えるだろう。そして、五百キロレースになって、川上氏は三十数羽残った選手鳩を全鳩参加。これは若鳩八羽に対して、成鳩二十六羽であった。成鳩に関しては、一羽落伍しただけの見事な帰還率であった。若鳩はあれほど、主力を放出した中で、よくぞ、ここまで残ったと思える成績でもあった。

そして、五百キロの高松宮杯が開催された。連合会で千二百羽参加。最優秀鳩舎賞は予断を許さぬ、僅差となって、川上氏はこの五百キロに狙いを絞っているようであった。川上氏をここまで追い詰めたのは、三百キロ十連合会合同レースで、磯川が、六千六百羽中総合優勝、二位、三位と独占した事で、当に圧巻であった。パイロン号直系の恐るべき優秀さは、誰もが知る事になった。恐らく、パーマン系の導入が近隣の連合会でも相次ぐ事であろう。

川上氏がこの高松宮杯に、自鳩舎の短距離のエース「アイ・ブルー号」を投入して狙っていた事を、香月だけが知っていた。過去五百キロ優勝三回、四百キロ優勝二回、二位四回。三百キロ優勝二回、二百キロ優勝一回、二位、五位。百キロ優勝三回、二位二回と言う脅威的な数字を残している鳩だ。今秋

は、百キロレース参加（六位）の後、一気に四百キロレースに参加。その四百キロを今秋制したのもこの鳩であった。この血統は川上氏の旧主流とは違い、デルバー系の銘血を受け継いだ、世界最高分速を記録した「デントロイ号」（実在）の孫に当る。アメリカのロジャースミス氏が一九六八年に出した三百マイルレースで、分速二八〇〇・一八二メートルと言う驚異的なスピードを出した鳩である。この鳩はその後、種鳩として生涯を閉じたと言う事であるが、その後も多数の子孫が大レースで優入賞したと言う事は余り聞かない。ただ、デルバー氏が二十八羽と言う一群の六百マイルの優勝鳩ばかりを交配して、五十数年に渡り、改良し、淘汰してきた血統であり、多くの銘鳩が誕生している。子孫には、このようなアイ・ブルー号のような突出した成績を残す鳩が出現している血統である。

十羽の内、一羽でも優秀な仔鳩が出来たら、まず、その交配は成功したと言える。それほど鳩の交配は難しいし、当り交配なんて言うのは、偶然の産物、所詮人間の思惑通りには行かぬものである。

五百キロレースに投入した川上氏使翔、短距離のエース、「アイ・ブルー号」と言えど、鳩レースに絶対などあり得ない事なのだ。

深夜の二時頃まで受験勉強の為に起きている香月に、毎夜、十二時に香織から電話コールが鳴る、現在なら携帯電話だが、当時の状況で執筆していますので。五百キロのレース結果について、何度も電話を掛けようかと思つた香月であったが、とうとう恐くて聞けなかった。「チリン・・」電話が鳴った、香織からだ。すぐ香月は持ち上げた。

「もしもし」

「今晩は早かったわね。ベルの音鳴った？」

「勿論！チ・リンだったかな？はは」

「ふふ・で？今日の調子は？」

「まあまあつて所かな？可も無し、不可も無し・・・」

「私も一区切りついた所・もうすぐ寝るわ」

「あ・・・」

「うん？何？」

「いや・別に」

「ふふ・鳩の事でしょ？」

「えっ・はは・まあ・・・」

「結果でしょ？言いかけて止めた事」

「君のお見通し・・・。電話が無い所を見たら・・・やっぱり？」

「私より、鳩なのね、今は・・・」

「止してくれよ・・・いじめないで」

「ぎやはは。じゃ、プレゼントあげるわ」

「えっ！じゃあ！」

「凶星よ！本日の結果お知らせします。川上真二所有の「アイ・ブルー号」十五連合会、一万三十四羽
中見事総合優勝に輝きました模様であります」



アイブルー号

「う・・・うおおお！やった！でもそれなら何で電話を？」

「お父さんがね、年甲斐も無く興奮しちゃって、十一時頃帰ってきて、飲めないお酒飲んで、香月君に知らせておいてくれたって。もう、子供のようにはしゃいじゃってね。顔が真っ赤っ赤になっちゃって・・・あんなに嬉しそうなお父さん、初めて見るわ」

「そう！そうなの！やったねえ・・・やつぱり「アイ・ブルー号」だよ。凄い鳩だよ。君のお父さんね・・・その鳩に今までの競翔人生全てを賭けていた・・・そう言っただけで過言では無いレースだったんだよ。新しい事に挑戦するには、玉砕か成功の二文字しかない。けど、君のお父さんは経験と言う自分の勇氣と信念を守ったんだよ。僕には凄く分かるんだ」

「私にはその意味が良く分からないけど・・・貴方も勇氣を貰ったって解釈で良いの？その喜びは」
「ああ！最高のプレゼントだよ」

「貴方に元気が戻って良かったわ、お休み、香月君」

「ああ、お休み。一言・・・お父さんに明朝・・・僕が信念を貰ったって、伝えておいてくれる」
「・・・はい」

その翌週の事であった。ついに・・・例の交配の仔鳩が誕生する・・・

七百キロ西コースは、高橋会長が連合会優勝、六千五百羽中総合二十四位、川上氏も連合会二、四、六、七位に入賞した。磯川も三位には入賞したものの、連戦参加のペーパーマン系も、かなりハードな西コースは、疲れが出ているようだった。この時点で、磯川は秋のレースを中止した。川上鳩舎の第一回

最優秀鳩舎賞はやつとこれで確定的となった。

そして、最終千キロDCレースは、川上鳩舎が、難レース連合会唯五羽翌日帰りの中、これも愛鳩「シユウ号」が優勝、総合五十九位に入賞したのであった。

そして・・例の仔鳩が誕生したシーンから、二週間後の事であった。川上氏が、香月の家に訪問する事になった。子鳩を見たいと言う主旨でもあるが、香月の両親とも話があるそうで、家では慌しく、母親奈津子が部屋の掃除をしていた。外ではすっかり香月家の家族となった、ドンが楽しそうに走り回っている。ドンは非常に訓練された賢い犬だ。

「おーい！ドン」

香月が呼ぶと一目散に掛け戻ってくる。頭を撫でながら、香月が言う。

「今日はね、君の好きな香織ちゃんが来るよ。良かったな」

「ワン！」

言葉を理解しているのやらどうか分からないが、嬉しそうにドンは尾を振る。広がった田園風景の中で、動物も人間もおおらかになるのだろうか・・。

川上氏は何回目かの香月宅訪問であったが、この日は先に家に入った。香月と香織が外でドンと戯れ

ていた。用件は、仔鳩の事もあるが、最近特に学校の先生の訪問が多くなった、香月の進路の件である。川上氏来訪は、母親奈津子からの電話でその相談の事も兼ねていた。

父、泰樹が型どおりの挨拶の後、こう切り出した。

泰樹…「いやあ・・・本当に良いお付き合いをさせて貰っています。私達も、いつも感謝しています。今日お越しいただき少しお話もしたいと思うのですが・・・他でも無いのですが、こいつが、一男の進路について非常に心配してしまいましたね。こんな相談を貴方にはご迷惑とは存じましたが」

川上…「いえいえ、とんでも無いです。こちらこそ、本当に良い息子さんと、家内ともども感謝しているんです」

奈津子…「実は・・・再三、担任の先生から呼び出しがあつて、私も何度も学校に行ったり、熱心な先生ですから、しょっちゅう家にもおいで下さったり、希望の大学以外のパンフレットを貰ったり・・・私は息子が進路を決める事については、何にも、口出しはするつもりは無かったです・・・けど・・・」

川上…「お母さんの、そのお気持ち良く分かります。私も同様です。私も息子同様にも思っていますから」

泰樹…「有難う御座います。私は中央の都市で仕事をしていました。一男が小学校の時に、事故で突然両親を亡くして、それから、家族共々こちらへ戻つて来て、慣れない百姓を始めました。何とか現在、土地も増やし、果樹も栽培し始めて少しは生活の方もゆとりが出来ました。私は子供に夢を押し付けるつもりは無いですが、出来る事であればやはり、S工大受験で苦労するよりは、中央でしっかり学んで

欲しいと思っっているんです」

奈津子…「苦労しました。この人と必死になつて、やつて来ました。主人は、大手の商社に勤めていたもので、その人脈のお陰で契約農家で、果樹を栽培するまでになりました」

川上…「苦労、良く分かります。それで・・・」

奈津子…「S工大進学の事を聞けば、聞くほど、一浪、二浪なんて当たり前。そんな苦労をして欲しくは無いし、もし入学出来たとしても、あの子が目指す、将来の方向が不安なのです」

川上…「お子さんとは良く話し合いましたか？」

泰樹…「話はしました。先日亡くなられた、白川さんと同じ道を・・・そう言う事です。学者になつて、食つて行けるものなのかどうか・・・不安でもあります」

奈津子…「白川さんのように学長まで勤められた人ならいざ知らず、同じ道を目指すならば、大学課程、それから大学院、博士課程・・・それらを含めてこれから、まだまだ長い道程があります」

川上…「・・・確かにそうですね。親として、不安は同じです。でも・・・あの子なら・・・そんな希望を持つたりするんです。この頃特にそう感じます。S工大は確かに特殊な大学です。でも、優秀ならば飛び級もあるし、在学中に現役で、博士号を取得出来るとも聞いて居ります」

奈津子…「そう言うお話は、他の大学や、研究施設から再入学した人達が、研究した結果として、あるとは聞きました。ですが、一男は、まだ十七歳です。人生経験も、一般知識も、勉強だけでは無い幅広い教養や、弁論も必要と聞きます。それが、不安で仕方が無いのです」

川上…「私の方からも、もう少し多方面の方に聞いて見ましよう。ただ・・・香月君は明確な研究課題を

持っています。その資料は白川氏から頂いた筈。きつとお役には立てると思いますが・・・」

泰樹：「反対を押し付けるのは親としてしたくないんです。優しい子で、何一つ、今まで私達が心配する事は無かった。私達の仕事を気遣い、大人しく本を読んでいる子でした。それが、貴方に出会い、お宅のお嬢さんに出会い、明るく、積極的な子に変わりました。本当に感謝しております。この不安は、やつと私達が親として、あの子をどうにかしてやりたい、その応援の心配でもあるんです」

川上：「はい。私も、もう少し、知り合いの人に聞いて見ましよう。ご両親の気持ちは良く分かりました」

そう言って、外に出た川上氏は、楽しそうにドンと遊ぶ子供達の姿に目を細めた。白川氏はこの香月に何を託そうとしたのか、その遺志を香月はどう受け止めようとしているのか。不思議な運命の糸が自分の周囲で、絡まるのを、川上氏は感じずには居られなかった。

年が明け、いよいよ梅の花が咲く頃になると、一斉に競翔家達の新しいシーズンが始動する。

白川氏から分譲された種鳩群から作出された子鳩達。激しく昨年度ポイントレースを争った、恐るべきパイロン号直系群&パーマン系。昨年度大羽数帰還させている、会長のゴードン系。そして、いよいよその真価を発揮するか、川上氏使翔の、白川ベルランジエ系&ノーマンサウスウェル系記録鳩群。強豪が若竹の勢いで伸びる東神原連合会。中でも香月の所属する神原愛鳩倶楽部は、その中心を担う強豪が目白押しである。

香月にとって、初めてベールを脱ぐであろう、例の子鳩。それにシューマン系。第二代の種鳩となる

か、「ピン太号」「グランプリ号」この春は大きな意味を持っていた。二次鳩と昨秋の帰還鳩を合わせると、香月も過去最高の参加鳩数になるだろう。今秋の競翔を中断する香月にとって、この春は、非常に大事なシーズンでもあった・・・。

この春には、風巻連合会より移籍してきた郡上鳩舎がいる。七年前に記録した、千百キロGCHレースで、五十六羽の大羽数記録は、誰にも破られていない大記録である。東神原連合会に居を移した事で、このような日本全国でも屈指の鳩舎が参加と、東神原連合会三強と言われる、川上、高橋、磯川・・・他にも、水谷、渡辺鳩舎と、昨年度を上回る参加数にどの鳩舎もなるであろう事は予測されていた。香月にとつては、競翔人生最初に訪れた大きな転機であった。密かに期待をしているシューマン系&ピン太とグランプリ号の組み合わせの仔鳩は、予想外の出来の良さで驚いている。

早熟で、初競翔時のノーマンサウスウェル×勢山系の当たり交配より、むしろ出来が良いのでは無いかと思える程であった。この春に備えて、単羽訓練を重ねて来た。その方向判断力の素晴らしさは、確信に近い手応えを感じていた。ただ、それが即競翔結果につながるなんて想像が出来る程今年の東神原連合会は、そんな甘くは無い高レベルであろうが・・・。一分一秒を争う、大羽数・・・。過去香月は競翔の度に一つのテーマを設け、試して来た。今回のシーズンにおいても、例外では無く。それは、帰舎に對する徹底した呼び込み訓練である。競翔鳩は、早くに帰舎しても、なかなか鳩舎に入らないと言った事が良くある。それは近くに鳩の遊び場や、休息場所、高い建物があつて、そこで羽を休める習性がある等々・・・。これは大きなロスタイムだ。まず、そこで、五分、十分帰舎が遅れたら、勿論レースには勝てない。香月は、この地味とも言える入舎訓練を徹底して行ったのだった。入舎が悪い鳩は、一日で

も2日でも餌を抜いた。香月は鳩舎に居る鳩の分量だけ餌を与えた。愛鳩家と、競翔家・・その境は勿論あるだろう。だが、根本の愛情を忘れる香月では無論無い。

そして・・いよいよ合同訓練の五重キロより春のレースが始まって行く。又、例年正月に行っていた、連合会の総会が、この五十キロの合同訓練の日に行われる事になったのだった。大人数を収容する為に市民会館の一室の大広間を借りて行われた。冒頭の高橋会長の挨拶から始まり、今年度からの新しい試み、又新放鳩地二箇所を追加。新会員の紹介と会は進んで行く。会員増ともなり、懸念される開函規定の変更と、新審査委員の増員。分担して行う開函場所の選定。いつに無く細部に渡っての議案にも、高橋会長の言葉に熱が入っていた。

続いて昨年度の、各レースの表彰となり、第一回最優秀鳩舎賞となった、川上氏には割れんばかりの拍手が沸いた。

昨年度二位の磯川鳩舎が、銀の楯。三位の高橋会長が、胴の楯。香月自身も途中まで競り合ったとは言え、この三名が、昨秋のレースをほとんど総なめにした程の大活躍だった。その香月も、グランプリ号での地区総合二位授賞には、大きな拍手が沸いた。競翔三年目を迎える、まだ若干高校二年生である彼が、並居る強豪に混じっての大金星なのだから。

長い総会も終了し、気の合った会員達が会長宅へと向かう。磯川が居る、佐野の姿も見える。それに新加入の郡上氏も・・・。お茶が出されてから、会長がいつもの豪快な声で、笑いながら、

「ははは。とにかく今年も始まったな。年々増大する羽数には、私も喜ばしい限りだが、果たして、例

年のような競り合いになるかどうか……。白川氏の所の鳩も学生達に廻っているし、川上君の所も白川系への入れ替え。又ここに来て居られる郡上氏も風巻連合会の強豪だった御仁だ。とにかく競翔が終って見ねば分からんよなあ、今年は意外な鳩舎が活躍しているかも知れんぞ」

続けて、川上氏も、

「……全く。恐らく大荒れの混戦模様になるでしょうね。最初の百キロレースからして、合同レース並の七千数百羽の参加となるでしょうし、こればかりは、結果が出て見ないと予想もつきません。数秒の争いですから」

・・全く同感と、集まった会員達も会長も頷いている。そこへ新加入の郡上氏が、人柄の良さそうな笑顔を浮かべながら

「同感です。私等は端から短距離は諦めていますので、訓練も長距離に的を絞った自由舎外にしています。何しろ大羽数ですので、ハンドラーと私が分担しても、なかなか短距離に照準を絞った訓練等は出来そうにありません。ようやく数が整理されて来た七百キロあたりから、適性に合わせた調整訓練を行っている次第です」

日本鳩界広しと言えども、この人の長距離に対する姿勢と、その突出した記録は、追隨を許さない。長距離の大羽数記録で、今年の最優秀鳩舎賞をもぎとる程の、強豪加入であった。

今年の春には、成長著しい若手の浦部、佐野も居る。長距離には、注目される二人であった。その二人が、郡上氏の話に傾きながら聞き入って居た。言葉の随所に流石に一流の競翔家と思わせる部分が感じられ、特に今年の東日本GCHは本命二重丸の強い人であった。この日の会長宅へ集まっている二十数名は、いずれも今年のレースを左右する強豪揃いである。各々、黙っては居られず、次から次へと会話を華が咲いて行く。その中でも、やはり特に磯川の言葉は、昨年度実績の自信漲る力強いものが感じられた。

「そりゃね、浦部君。君は確かに昨年度、連合会でGNを制したよ。でも、それは、予想以上に七百キロのGPが悪天だったと言う事もあるだろう。特に、前年度までの記録鳩は、ほとんどGPに投入されていたから、思わぬ悪天で、調整が万全では無かったとも言える。悪天を予想して、六百キロでストックした君の読みは当たったものの、手腕だけでは常勝って言うのは難しいんじゃないか？要はどんな条件であれ、常にトップ集団を形成する血統が、重要な訳だし、今年は俺も昨年度のCH鳩三羽を投入するつもりだ。そこで証明される筈だよ」

そこへ又高橋会長が口を挟む。

「おいおい。今度は、千二百キロのGNかい？そりゃ、幾等ペーパーマン系が優秀だと言っても昨年度は、やつと連合会でも翌日五羽きりだ。それも分速八百メートルそこそこ。GCHとGNは距離こそ百キロと言つても、その難しさはわしも長年やつて来て骨身に沁みて知つている。むしろペーパーマン系を投入するのなら、千百キロのGCHだと見るが・・わしはそれが順当と思うが、どうだ？」

磯川は負けていない。

「いえ！俺は三羽投入するつて決めていますから。それに後日帰りも居ますから、GCHにはそちらを投入します。昨年度の最優秀鳩舎賞をもう一步で逃したのも、最終レースでのポイントが取れなかったからですから」

会長はおどけたような仕草をして、太鼓腹をさすっている。

確かに・・昨年度の快進撃は、今年も台風の目になる所と、衆目の一致した見方ではあるが、相変わらずの強気一辺倒の発言は、鳩界の大先輩を前にして失礼・・香月は少し眉を曇らせた。浦部は一言も言い返さなかった。磯川と対照的なその性格は内に秘めた強さがある。そして、その手腕と読みは、連合会でも高く評される若手に成長していた。そこへ、香月には特別なライバル心を向けている磯川が、話を切り替えて来た。

「ところで？香月君。やはり春には粒を揃えて来たね。昨秋見せて貰った鳩とは段違いに仕上がっていたよ。中でも栗系統の鳩は、特に見逃せなかった。放鳩車に乗せる前に全鳩触らせて貰ったけど、良い出来だよ。でも、一羽その中で、栗系の少し変わった羽色の鳩が居たけど、恐ろしく筋肉が柔らかかった・・その鳩だけ血統が違うね。印象深かったよ」

川上氏より香月に目配せがあつた。白竜とネバーの仔鳩がその鳩だとは、言える筈も無かつた・・。

「ああ・・栗系統の鳩ですか？あれは白川さんの所から来たシューマン系と、僕の記録鳩を掛けた仔鳩群ですよ」

磯川より早く、先ほどから磯川のやりとりをにこにこしながら聞いていた郡上氏が、声を上げた・。

「ほお！シューマン系？じゃあ、白川さんの最終レースとなつたあの西コース千キロの優勝鳩の？」

「ええ・・良くご存知ですね」

「私もあの西コースに挑戦したんだが、とにかく難しいレースだね。若鳩で挑戦するのは、早熟で、且つスピードの出る鳩じゃなきゃ、最終の千キロまでは持たない。かと言って、専門に西コースを攻めるには、成鳩では更に困難だ。台風の季節だし、余程の血統じゃなきゃ、西コースを制する事は出来ない。それで、注目してたんだよ。恐らく日本でシューマン系を使翔したのは白川氏だけだろうね」

「・・・じゃ、その記録鳩を香月君が持っている訳だ。なるほど・・・。今年もやはり君が強敵になりそう
だ」

会長が笑い飛ばした。

「おいおい、まるで、香月君しか眼中にないようだな。川上君やわしや、何と言つても、郡上氏
で蹴飛ばされて無視されたんじゃ適わんぞ。わはははは」

流石の磯川も感づいて、照れ笑いを浮かべた。郡上氏も笑みを浮かべて、

「いやあ：東神原連合会には良い若手が拓さん居るねえ。磯川君や香月君の名前は知っていたが、
成る程、成る程。こう言う若手が居るんじゃ、ベテランとて嫌でも燃え上がらざるを得ませんな」

川上氏が続けた。

「全くです。私も最近ではうかうかとして居られません。とにかく磯川君も香月君も学生と言つて
も、全レースに優・入賞を果たしてくる強豪中の強豪ですからね。それに今年の他の若手にしても
分かりませんよ。中・長距離あたりには私も重大なポイントを絞っています」

川上氏の言葉には、必ず裏づけがある。常に狙った過去のレースにおいても、優勝を逃した事が無い程。それだけ自信と、実績のある競翔鳩が居ると言う事なのだ。ここまで川上氏がはつきり言う言葉に秘める思いは並々ならぬ事であろう。郡上氏さえも、一瞬ピリつとしたものを顔に見せた・・・。

あつと言う間に、もう百キロの持ち寄り日となった。集会場所も二箇所に分けられて、大羽数に対処する為、おおわらわであった。天気予報によると、明朝は、絶好の天気で、数秒、或いは、コンマ数秒の白熱した接戦の展開が予想される。とにかく早く帰って来た鳩をいかに帰舎させ、打刻するかが、勝利の分かれ目だろう。そして・・・明朝放鳩された鳩は、実に脅威の分速によつて記録されるのであつた。少々追い風の高気圧が影響して、その一番の帰舎は、例の仔鳩であつた。放鳩時間、六時二十分。そして、香月が打刻したのは、七時六分であつた。全く予想も出来ぬ展開のこのレースは、十分までに三羽。数分置かずして、次々と栗の一群が帰舎したのだった。

「早い・・・恐ろしく早い・・・」

香月は感じた。例の仔鳩の分速は二千メートルを下るまい。その三分後の三羽にしても・・・いつもなら香月鳩舎の頭上を通る鳩群は全く見えなかつた。僅かに十五分前後に五十羽程の集団が通過はしたものの、帰舎コースは、香月鳩舎より山際を殆どの鳩は取つたと思われた。香月自身、この百キロレースに優勝と言う確信を持った。過去のレースでも、一直線の帰舎コースを辿るならば、香月鳩舎の真

上を通過するのだ。山あいのコースを辿れば、それだけ、タイムが遅くなる。しかし・・シューマン系との配合の一群が、相当なレベルである事を彼自身が予想しては居たが、例の仔鳩は生まれ月から言えば、春に、間に合うか合わない二次の若鳩・・これ程の実力を秘めて居たとは・・香月は身震いした。そして同時に・・まずい・・そう思った。優勝すると、愛鳩雑誌には、血統図を掲載しなくてはならなくなる。そして、その事は、仔鳩の将来、自分の競翔にとつて、どのような話題を巻き起こしてしまうかも知れないのだ。奇跡の超銘鳩の実仔を公表してしまう事への大きな不安が・・。そこへ全鳩帰還した時間に、川上氏から電話が入った。

「やあ、どうだい？今日は相当な分速が出ているようだね。分速千八百メートル台の記録が、続出しているようだ。君も百キロは強いからね。早かったんだろう？」

「・・・それが・・」

「・・どうした？悪かったのかい？」

「いえ、そうでは無くて・・逆なんですが・・」

「なんだい・・それにしては声が沈んでるじゃないか。君の所が早いのなら、喜ぶべきだろ？」

「はあ・・ひたすらまずい結果です」

「お・・おいおい・何がまずいの？どうしたの？」

川上氏が呆れたように訊ねた。人をからかうような子じゃ無い筈だが・・。

「ええ・・最初の打刻が七時六分なんです。それから十分までに三羽追加して、その二分前後に二羽計六羽タイムしました。その六羽全部栗系です」

電話の向こうで、一瞬川上氏の声が詰まった。

「・・え？なんだって？それは、途方も無く君が早いよ。全部栗系・・するとあのシューマン系だね・・ほお・・」

「それが・・心配しているのは、その栗系の中でも・・例の子鳩が・・一番早いんです」
「何・・？」

再び川上氏の声が詰まった。

「予想外です・・」

「血とは言え・・老鳩同士の子鳩がそんな英傑であつたとは・・・あ・・」

川上氏が、言いかけて、言葉を繋いだ。

「全国杯に乗る事になるやも知れない・・そして、血統の公開だね？君が今、心配している事は」

「はい・・その事です」

「迷う事は無い、種鳩にしたら良い。全国優勝したら当然じゃないか」

「でも・・」

「とにかく、今から会員達の結果を聞いて見よう。それから又、話しようじゃないか」

今から受験を控えて、この春が競翔中断になる。香月がこの仔鳩を得たのは、奇跡に近い事。更に、その仔鳩を使翔する事は、香月にとつては、目に見えない運命のようなものによつて、義務つけられたような不思議な感覚でもあった。まるで、香月の登場を待っていたかのような白川老人、白竜号、ネバー・マイロード号。そして、脅威の力を見せつけた、この仔鳩。香月すらまるで、予想も出来なかつた、凄まじい運命の意図が・・・。

再び川上氏からの電話のベルが鳴るまで、香月の脳裏には、優勝の予感より、重苦しいものが渦まいていた。

「香月君、やはり君の所がダントツに早いよ。優勝どころか、そのタイムだと日本記録に匹敵するか或いは、新記録かも知れないね。一位から六位は、勿論独占だろう」

「そうですか」

香月の言葉は沈んでいた。川上氏は言葉をつなげる。

「例の仔鳩の血統書なんだが、私も君の進路への障害の事や、雑誌の取材等も考えて見た。白竜号は「シロベ号」ネバー・マイロード号は「クイーン」とすれば良い。その成績も公表しなくて良い。足輪番号だが、白川氏は独自の私製管を付けているから、そちらの白川何号と言う番号にすれば良い。両鳩の親鳩についても、相当数の仔鳩を得ているから、それで血統書を見ても、気づく者は居ないよ。その愛称を知っているのは私だけだからね」

「そんな愛称が？」

香月の言葉に明るい響きが戻った。

「その喜びようを推察すると・・・案の上・・・君は色々先の事を考えていたね？で・・・君がこの電話までに出した結論を聞いたところか？」

全てを川上氏に悟られていた香月であった。同時にこれは、川上氏の問題でもあったからであるが・・・

「はい・・・この百キロレースを棄権しようと思っていました・・・」

「香月君・・・！」

川上氏の言葉が、重く突き刺さるような抑揚を持っていた。

「はい・・・」

香月もそれを感じた。



「私は言った筈だ。鳩はただひたすら、一目散に鳩舎に戻って来るのだと・・・それは人間の欲望の為では決してない。彼等（競翔鳩）の本能がそうさせるのだ。それによって、順位がどうか、人間によって勝手に決められたルールがあるからでは無い。そのひたむきな彼等の羽ばたきを資質として認めてやるのが、我々競翔家の姿勢なのだ。どんなにそこに待ち受ける結果があつたとしても、君はその全責任を負って競翔に参加させているのだ。違うかい？」

初めて香月に対する川上氏の叱責であつた。

「はい。その通りでした。僕は恥ずかしい。責任の所在を間違えていました」

「分かってくれば良いんだ。ただ、君の動揺は私とて良く分かる。で、その仔鳩はどうするの？」

「はい。この百キロで中断させます」

「それが・・・良い」

実はこの香月の言葉は、川上氏が文部杯全国総合優勝と、日本記録鳩としての栄冠を持って、稀世の超銘鳩による夢の交配・・・この世に唯一無二の血統なのだから、種鳩にする為の中断と理解した。それは、当然の受け止め方でもあった。しかし・・・香月は、全く違う事をこの時点で考えていたのだった・・・後に川上氏も驚愕する事になる。

夕方には、朝の件の事でお詫びをしながら川上氏と一緒に持ち寄り場所の一つである、清水寺に向かう香月だった。道中では、川上氏が、

「なあに。全国優勝と言っても、発表は何ヶ月も先の話だ。それに、親鳩の愛称が絶対に他の会員に漏れる事も無い。雑誌の取材は当然あるだろう。君の場合二回目の全国優勝になるかも知れないからね。それは大きく扱われるだろうが、私もその時には出来る限り援助するよ」

「有難う御座います。僕は動転していました。まさか、この百キロレースで力を出し切るとは予想もして無かったので」

「若鳩にある、無鉄砲と言う感じかな？レースの経験を積み、鳩舎までの力の配分が分かるようになる。それが経験鳩の強さでもあり、又脆さでもある・・・がね。それにしても、秘めた血統の凄まじさを感じたよ。」

「この百キロで中断して良かったです。体も充分に出来て無かった若鳩ですから」

「そうだね。良い決断だったね」

この会話の前提が互いに違う事には、勿論二人は気付いて居なかった。

既に、到着した清水寺の本堂では、強豪達が顔を揃えていた。この場所に集合したのは八十名程であった。川上氏と、香月の入室で、それまでの場が一瞬静然となった。各鳩舎の情報交換もほぼ済んでいる事だし、川上氏があちこちに問い合わせた事で、話題はむしろ川上氏の優勝と言う事であったらしかつた。佐野からの電話が鳴る前に川上氏があちこちに電話した事で、佐野のノートは、もうデータが完了しているようだ。既に来ていた磯川も佐野も、少し離れた場所に居て、眼で合図しただけで、香月には喋りかけて来なかった。佐野は一般。磯川には学生と言う事で、文部杯とJrレースの権利があるが、彼自身の年齢が二十才を過ぎたと言う事で、権利を放棄して一般参加になっている。二人にとつては、文部杯の香月の帰舎は、直接興味は無いよと・・そんな感じであった。ただ、この場所に、H高校三年生の山田道之鳩舎と、K中学三年生の渡辺鳩舎の長男、渡辺一志の顔が見える。

佐野のノートでも、星印がついている心境著しい学生競翔家だ。特に、強豪渡辺茂夫氏は、親子同一鳩舎だ。息子の名前（一志）で、この春からエントリーされていて、これは、そのまま強豪が、学生に混じった形だ。早めに本堂に到着した事で、色んな情報を得る香月だった。・・渡辺鳩舎は新血統を導入しているらしいね・・佐野が香月の側に近寄つて来て言った。その佐野も香月の帰舎のデータが無い事に、聞こうと声を掛けた時には既に、開函時間であった。新役員である佐野は、集計係なので、忙しく計算を始めていた。香月が山田に声を掛けた。山田は大柄で、柔道をやっているせいかな、顔立ちは大柄で、一見恐そうな感じなのだが、優しい気性の持ち主だ。この日はにこにこ嬉しそうに言った。

「白川さんの所から二羽頂いて、その鳩達から、六羽仔を引いたんだけどね。凄く出来が良いんだよ。俺も短距離はいつも諦めていたんだけど、今朝はもう、凄く早い帰舎でね。びっくりしたよ」

「何分だったんですか？」

「ああ、十六分だったかな？二羽」

「早いですね。それだと、山田さんと僕の家は、五キロ位離れているから・千八百メートル以上は分速出てるでしょう」

「ああ、そうなんだ。皆に聞くと、全国杯の可能性だってあるよって聞いて、もう舞い上がっちゃってね。・・あ・・そうだ。香月君の帰舎を聞いて無かったね。何分頃なの？」

「それが・・あんまり正確には覚えて無いですけど、六、七分だったかな？」

「ええっ！じゃあ、さつき話題で盛り上がっていたのは、川上鳩舎じゃなく香月君の所？」

その山田の声が大きかったので、場は静寂した。その静寂の場に磯川の視線があった。彼が香月の所へすぐ来る。

「君の所・・だったのか。途方も無い快分速を出したのは！あの栗だね？勿論」
「は、はい」

磯川の言葉が余りに早口で、有無を言わせぬ詰問調だったので、香月は少し声を小さく答えた。

「白状したまえ、あの筋肉が異常に柔らかい栗は、どんな血統なんだい？」

少し遠くから川上氏が見ている。場の中心は香月となっていた。香月が答えた。

「実は、白川さんの所から卵で貰っていました。シューマン系とは別です」

「やはり・・今までの君の血統や、シューマン系の筋肉とは全く異質の、俺が体験した事が無い柔らかさだった。」

「どんな血統？」

この場に居合わせた、水谷氏が訊ねた。白川鳩舎の血統は、どれもが超一流の飛び筋だ。一般競翔家には、今回は全く分譲されて居ない。学生達が、駆使するその血統は、どの鳩舎から優入賞が出るかも知れないと、一般の強豪達は予測している。

「僕も詳しくは知らないんですが・・オペル系の血を色濃く受け継いでいる鳩だと思えます」
「オペル系・・ははあ・・成る程・・すると、ネバーの異父母系統かな？それなら良く分かる」

水谷氏が頷いた。

「それなら、ネバーの子って線もあるのでは？」

磯川が間髪を入れずに言うその言葉に、香月はドキッとしたが、それは水谷氏が明確に否定した。

「磯川君達は知らないだろうが、ネバー・マイロード号は、メス鳩でありながら、延べ二万数千キロを飛んだ鳩。そのせいで、中性的で雄鳩を寄せ付けないと、白川氏が生前言っていた。あそこまで酷使された体では、子孫を残す事など困難だろう。又、とても子孫を残せる歳でも無いよ。老鳩過ぎるし・・それに死んだじゃないか・・白川氏の棺に白竜とネバーと一緒に・・なんか運命的だったよなあ・・同じ日に」

その言葉に再び会場に静寂が訪れた。生前の香月と、白川氏との深い交流を全員が知っているからだ。水谷氏も言った後、しまった・・と言う顔になった。磯川はもう、話題には突っ込まなかった。香月の顔が深く曇ったからである。川上氏が助け舟を出した。

「ところで、皆さん、今日は高気圧が張り出して、おまけに少し追い風の抜群の競翔日和だった事もあるって、素晴らしい高分速が続出しています。初参加の一志君も、お父さんの血統を引き継いだ事もある

だろうけど、かなりの高タイムで、十羽打刻しているし、山田君も例の白川さんの所の血統の子鳩が調子良いみたいだね。これも三羽、高タイムで打刻している。こんな良いスタートが切れて良かったよね」

場は再び雑然となって行った。集計まではまだまだ時間があつて、三箇所の集計を又これから行うと言う事で、川上氏と香月は帰りの道中に居た。

「申し訳ありませんでした」

香月が車中で川上氏に言った。

「君が謝る必要なんか無いじゃないか。あれは水谷君が悪いよ。言葉を選ばなきゃ・・ね。流石に、私も君も辛かったよなあ・・」

思い浮かぶのは、優しくて偉大な白川氏の笑顔であった。だから、泣くまい・・香月は耐えたのだ、あの場を。その気持ちは川上氏も同じだった。水谷氏も意図して言ったのでは無い事を承知しているが・・。

翌週の二百キロレースの持ち寄り場所で、もう結果は会員達に届いていたが、川上氏から百キロレースの成績が発表された。

「もう、周知の事だと思えますが、文部大臣杯は、香月鳩舎が、日本記録を上回る快分速記録の二〇一六・五二四メートルで優勝しました。その後も一九八二・六二四、一九四〇・五一一、一九三二・六八二メートルと、圧倒的に四羽が他を引き離して、六位まで独占しています。七位が、渡辺一志鳩舎、八位が、山田道之鳩舎、九位が八田義久鳩舎、十位が尾藤健一鳩舎です」

おおっ！と言うどよめきが上がった。いずれも、千八百メートル以上の快分速であったからだ。当に分・秒の打刻タイムであった。

「続いて、一般の方ですが、こちらも分速千九百メートル台が三羽出ています。一位が磯川鳩舎で、一九六二・二八六メートル。二位も磯川鳩舎、分速一九五六・一九四メートル。三位は川上鳩舎、一九二八・三六五メートルと、Jrには及びませんが、他の地区でも千九百メートルの分速は出ていないと思います。以下、四位、桐生鳩舎、五位、柳鳩舎、六位、服部鳩舎七位、川上鳩舎、八位、佐野鳩舎、九位川上鳩舎、十位、水谷鳩舎・以上はベスト十です。なお二十位まで分速千八百メートル台です」

ほおっ・・どよめきが上がった。過去に無い高分速のレースであった。しかし、それにしてもこれだけの大羽数、学生とは桁が違う参加数の中で、磯川の一、二位や川上氏の名前があるのは、やはり血統なのだろうか・・。鳩は一般に時速百二十キロ〜百四十キロは出すと言われている。だが、この狭い日

本の中で、この東神原連合会のような放鳩地から一直線に帰舎コースが位置する所は稀だ。それだけに二年前に香月が記録した、「ピン太号」の文部杯全国優勝は、地域的有利と言われる。香月鳩舎の位置が天佑と言われる・・・しかし、それは、この誰もが成し得なかった、二度目の授賞濃厚の記録の前には沈黙せざるを得なかった。他の会員達も・・・それに近い数字が出た、この百キロレースであったのだから・・・。

香月自身は今回のこのレースをこう分析した。

・・・追い風の気流に乗って、その天性の副翼の密度と完成されては無いが、柔らかい筋肉によって、上空高く舞い上がり、戻って来たのだ・・・と。そして、それは何を意味するか・・・子鳩は天性の長距離鳩の資質を生まれ持つていと言ふ事だ・・・

そして、この二百キロレース・・・次代の種鳩候補、「ピン太号」「グランプリ号」の仕上がりも良い。そして、シューマン系の「リリー号」「マロン号」との交配も大成したようだ。シューマン系の特徴が強く出ているが、第二代、三代となった時はどうだろう・・・香月はそんな事も想像していた。秘めたる資質は、その天分を持って生まれた子鳩に匹敵するスピードをシューマン系は有している。嬉しい伏兵だと香月は思った。帰舎訓練、単羽訓練も功を奏しているのだろう。

その二百キロの持ち寄りには、磯川始め何名かが香月のシューマン系の若鳩に触った。磯川が言う。

「あの・・・栗はストックしたの？」

「ええ」

「そうだろうね。そうするよね」

他の学生達もそう言った。香月はにこにこして頷いた。

「それにしても、この栗群は、ペパーマン系に匹敵する筋肉だね。又少し違った羽毛だけど」

取り分け磯川は、熱心に触っていた。

そして、二百キロレースも好天気恵まれて、やはりJrの優勝から四位を香月が独占した。二位から六位の香月鳩舎の鳩の順位が入れ替わっただけで、圧倒的に他の学生競翔家の鳩を引き離していた。一般では、川上氏の「アイ・ブルー号」が又しても、優勝した。ただし、磯川も二から四位と入賞し、かなり混戦したこの距離だが、上位三十位以内にはやはり常連達は顔を揃えていたのだった。ただ・川上氏が、このレースで、「アイ・ブルー号」で、優勝はしたものの、上位を独占すると言った今一つの冴えが感じられない。白川系の使翔が未だ掴めてないのだろうか。周りはそう思っていたようだ・。氏が平然としているのが、何となく不気味・磯川はそう感じていた。

いよいよレースも三百キロからになって来ると、合同レースやダービー等も加わり、賞金レース等も各団体が開催されている。そちらは一羽当たりの参加料も高いので、特定の人達によって運営されているようだったが、東神原連合会では、賞金レースは得点外としている。参加、不参加を強制するものは無かったが・・。

その三百キロレースになって、香月は磯川の参加羽数が三十六羽と少ないのに少し疑問を感じた。ジャンプ方式かな？春は大レースが目白押し。当然そう言ったジャンプ等は、競翔テクニクの一つである。しかし・・・それは違った。この三百キロレース香月は四位に入賞。磯川は優勝した。しかも毎週発刊される「週間競翔」によって、磯川の鳩が、賞金レースで堂々と四千三百羽中総合優勝を飾ったのを知ったのは翌週の事だった。一般の競翔は「運輸大臣杯」そちらも連合会優勝。そして、一羽参加料千五百円もする賞金レースに・・・。

「ご存知ですか・・・？磯川さんの・・・」

香月が川上氏に言った。

「ああ、知っている。どうこう言える立場では無いし、彼も成人しているのだから・・・とは思いますが、私自身は邪道だと思っている」

「僕も同感です。確かに素晴らしい鳩が参加されていますけど、日本の今の風土には馴染みません。後年こう言うレースが欧米や、ヨーロッパ各地のように増えて来るのでしょうか？」

「分からないが、賞金レースには、協会に所属していないプロのような連中が大勢居るし、手段として、鳩の売買を目的として行って居る。磯川君の場合、それが運輸杯だったら、十連合会の総合優勝だったよね。それが私には残念なんだよ。彼の場合自分の鳩の力を誇示しようとしているように感じる。そん

な世界じゃない。そんなもんじゃないんだよ。鳩競翔と言うのは・・・」

「でも・・・なんで急に？」

香月には疑問があった。

「その事か・・・」

「知って居られるのですか？」

「聞いた話だが・・・彼がパイロン号直系を導入出来たのは、*ブローカーを介してだ。プロと言うのは、外国じゃ常識になっていて、当然優秀な血統の鳩は高く売買されるから、そのブローカーもかなり現地の事情に詳しく、オークションを通じて手に入れる仕組みが出来ているそうさ。彼はそのブローカーを通じて導入したそうだが、何百万と言う大金が動くと言う。それはそれで、私は個人の勝手で、個人が幾等鳩に金を出そうが、構わないじゃないかと思ってる。事実彼は導入以来素晴らしい成績を上げているからね。しかし、今回のその賞金レース参加には、その人物との導入にあたっての取り決めがあったらしいんだよ。何でも、もうパイロン号は死んでしまつて、その直子群は数倍にも値段が跳ね上がった手に入りにくくなつてしまつたようなんだ。そこで、昨秋の西コースで、総合三位までを独占した中の一羽を今回の賞金レースに出して、優秀さを証明した上で、その鳩を譲渡すると言つたね・・・しかし、まさかそれが総合優勝するとは思わなかつただろうけど。そんな銘鳩をみすみす手放すなんて・・・惜しいと思わないか？もう引退させてしまふなんて」

「・・・複雑なようですね・・・。でも、一つだけ磯川さんについて川上さんの誤解があります」

「・・・と、言うとは？」

「彼の眼は、やはり今の所、川上さんや僕に向いていると言う事です。今春のレースが好調に来てると言う事もあるでしょうが、ペーパーマン系は、百キロ〜三百キロの短距離には強いですが、昨秋のように、四百キロ〜七百キロの中距離には難点を持っています。昨秋の四百キロ、五百キロを落としたのはそのせいです」

「ほお・・・断言できるほど、君には確信があるんだね？聞こう」

川上氏は、日毎に遅しくなつて行く香月に眼を細めた。

*隻眼の竜

「はい・・・先頭集団を常に形成する勇敢で、スピード豊かな系統なんですけど、非常に短期間で、作られて来たせいとか、神経質な鳩が多いようです。それは近親による弊害と見ます。やや疲れて来た中盤頃には、早く帰舎してもすぐに鳩舎に入らないのです。それは、磯川鳩舎の構造にも問題があるのです」

「ほお！君の理論は整然としている。磯川君の鳩舎の構造は別として、私もペーパーマン系・・・そのパイロン号直系群はそう見る」

「ですから、これからある、四百キロレース以降・・・川上さんにレースをpushさせられたら彼はきっと疑問を抱き、そして研究するでしょう。それがある限り、きっと賞金レースには向かないでしょう」

「私が磯川君を押さえるなんて、どうして予想出来ようか？」

川上氏は目をぱちぱちさせた。香月は、自分をも既に驚かせる競翔家に育っている。それも高次元の理論を持って……。感心しながら聞いていたが、その磯川を自分が押さえる所には、苦笑した。

「僕はこう見ます。磯川さんと川上さんが決定的に違うのは……一括管理と、個別管理でしょう……。そして、それは、今春の川上鳩舎の狙う七百キロレース以降の照準にあります。ですから、自由舎外にしているのでしょうか？四百キロレースからは主力を投入される筈……と見ます」

川上氏の顔が少し硬直した。

「……うむう……驚いたよ。そこまで私の狙いを見ていたのか……」

「だって師匠のやり方を参照するのは弟子として当然じゃないですか」

「わっはっはっは！君には負けたよ。君も四百キロにはエースを持ってきそうだし……ね」

二人は大きな声で笑った。大きな、春……成長の春であった。どこまで駆け上って行くのだろうか……この若者は急激な勢いで……川上氏はその成長が嬉しかった。

四百キロレースは、曇天で、大陸から低気圧が張り出した、今にも雨が落ちそうな空模様であった。

三百キロレースまで好条件に恵まれて、参加羽数も五千八百五十六羽と、この時点までは帰還率も高かった。これまで白熱したレース展開だったが、こう言うレースにぶつかると、鳩の優劣は顕著な形になってくる。方向判断力に優れたレーサー（競翔鳩）が、こう言うレースを制するのは言うまでも無い。それに、四百キロレースはこれから後の大レースの為に重要なステップとなる。殆どの主力はこのレースに投入されるのだ。ここで、今春のレースの行方が決まると言っても過言では無い。

このレースの持ち寄り日の事、香月は磯川に、放出鳩の事を尋ねた。

「ああ、その放出鳩は、昨秋の十連合会合同レースで、総合三位。今年の賞金レースの総合優勝の鳩だよ」

「その鳩は、BCのメスだったですよね？」

「その通り。アンダーソンの血が四分の一入っている鳩だ。」

「惜しいですよ。今からの鳩なのに・・・」

「まあ・・・でも、他にも居るからね。昨秋の総合一位、二位も居るし、今年の運輸大臣杯の優勝鳩も居るしね。それに、出した鳩は、純血じゃ無かったから・・・ね。」

「・・・そうですか？・・・ところで話は変わりますが、僕の所では、このレース前からハチミツを与えています。磯川さんは？」

「ははは。まだレースは序盤。五百キロを過ぎたら、後はGPだから、その期間に調整すれば良いよ。君は師匠に似て、慎重派だね。まだ短距離なんだから、それほど、過敏に対応する事は無いと思うよ」

香月は、もうそれ以上磯川にはもう聞かなかった。

天候が悪いので、八時になつての放鳩だった。農林大臣杯、このレースは、全国杯のレースの一つだが、山沿いのコースになるので、過去全国杯の授賞はこの地区では一度も無かった。分速も極端に落ちるこのレースは、若鳩の登竜門と言われ、東神原連合会独自の放鳩地であった。過去に白川氏から提案された放鳩地で、難コースであった。この放鳩地を毛嫌いする会員は居る。代表的な会員の中では、渡辺鳩舎、浦部鳩舎がある。彼等は今回参加していない。しかし、この東神原連合会独自の四百キロレースを実施し出してから、経験鳩はその後のレースに於いて、高い帰還率を誇るようになった。忌避する者、敢えてここを選ぶ者。今は後者が圧倒的になつていた。

帰還コースは山際をジグザグに通るので、実際飛距離は、六百キロ近くになる、磯川が見逃しているのは、この点だ。その為、香月は磯川に先程の質問をぶつけたのだったが、これが好天の時なら、さほど問題は無い。海沿いのコースを辿るからだ。しかし、この悪天を制する鳩こそが、その競翔鳩としての素質を証明する事となる。川上氏、香月は勿論その理由を知っているし、ベテラン会員達にも、この説の信奉者は多い。香月はこの難関を制する為、飼料にも工夫を凝らし、レース前に高価なサプリメントの実を六十パーセント近く混入し、レース後にも体力が残るようにしておいて、二重、三重の試みを施していた。残念ながら、磯川はその点を見落としているように思えた。が、それでも、優秀なペーサーマン系の事だ、結果は出て見ないと分からない事ではあるが・・・。

そして・・・香月鳩舎の一番目の帰舎は、二時少し前となつた。すぐ呼び込んでタイムしたが、相当ぐ

ったりと疲れている様子。実際距離を六百キロだとすると、この曇天の中、分速千六百メートル近くで飛び帰った事になる。香月の計算通りなら、この鳩は分速千二百メートルを出していて、優勝圏内に入っている筈だ。しかし、予想外に帰舎は良くて、三十二羽参加中、二時半までには十六羽が帰っていた。タイムしたのは五羽。いずれも、ピン太×リリー、グランプリ×マロンの仔鳩達であった。

二時半過ぎにはその親鳩、ピン太とグランプリ号が仲良く帰還した。二羽とも流石に経験鳩。戻ってきて餌をついばむ余裕で平然としていた。両鳩の仕上がりは非常に良い。悪天には決して無理はしないで、自分の鳩舎位置を正確に掴んでいて、マイペースで戻って来る。今年は二羽ともGNに投入予定だ。

三時過ぎに佐野から電話が入った。佐野はこのレース頃から神経質になり、次に控える大レースに備える為に、各鳩舎の帰舎状況、情報収集を強化している。三時までに帰還した鳩は次に控える大レース、GPの入賞圏内に入る鳩と見て間違いないからだ。佐野流は、やはり競翔家としては、間違い無く一流の眼を持っている。

「やあ・君の所は何羽？今日は分速の方はそこそこのようだよ。大体早い所で、千百メートル位だ」

「そうですか。僕の所は今二十四羽です」

「おお！良いねえ！確か三重二羽参加だったよね。凄い帰舎率の上に、早そうだね、今の時間に二十四羽も帰っているのなら」

「早いのが、二時少し前です。十分頃までに五羽打刻してそれで、止めました」

「早い！それは、今まで集めた中で、一番だよ。やっぱり君かあ。それだと千二百メートル出ているよ

ね」

「どの程度今の時間で帰って来ていると、佐野さんは予測されます？」

香月はこちらの方に興味があつた。自鳩舎と、全体参加鳩数との帰還比率が自分にとって重要だから。

「え・・・と・・・。今俺が集めた数で、五百二十四羽だね。この位の時間に居ないと、とても七百キロのGPは入賞出来ないからね・・・あ！そうだ。川上さんの所もかなり現時点での帰舎率が良いよ。今四十八羽帰舎している。参加羽数が意外と少なかったけど・・・六十八羽参加で、四十八羽だから良いよねえ・・・十羽タイムしている、分速も君に近いかな。十羽も打刻するって事は、かなり入賞を意識しての事だよ
ね」

「ところで・・・？会長や、郡上さんは？」

「ああ・・・会長や郡上さんは、ジャンプ方式だから、次の五百キロの郵政大臣杯（当時）に主力を持って行っているようだから、参加は少なかつたよ。渡辺鳩舎、ウラちゃんは、参加して居ない」

「今年は、KCや、QC等がありますからね。成る程・・・有難う御座いました」

電話を切って、なんとなく会員達の今春が見えた気がした香月だった。この日は早めに川上氏宅へ行く香月だった。四百キロレースからの集計所は、一つになる。会長宅近くの自治公民館だった。川上宅で香月は少し話をしたかったのだ。

「よお！君にやられたようだね。餌・栄養管理・君程私も行き届かないが、一応結果は出てるようだね」

「磯川さんの名前が出てこなかったですね」

「悪かったようだよ。この四百キロは」

「磯川さんには、レース前に調整法について少し聞きました。やはり、四百キロを過ぎてからと考えていたようですね」

「まあ・重視している人も居れば、この四百キロは通過点。そう考える人も居るだろう。それは、個人的に視点が違う事だからね」

「あの・分譲鳩が投入されていたら、こう言う結果では無かったでしょうに・・・」

「あー、あの十連合会総合三位、賞金レース総合優勝の？確かに素晴らしい良い鳩だったよね。でも・結果は分からんよ」

「いえ・他の異腹の調子が悪かった所を見ると、逆に結果が出ていたと僕は思いますが・・・」

「？・根拠を見つけているって解釈で良いのかな？君の事だから」

「憶測に過ぎませんが、あの鳩だけアンダーソン系の血が入っているんですよ。」

「ほお・少し興味があるね、聞こう」

「あの鳩の祖父に、サンセバスチャンIN総合優勝、三位の超銘鳩、イン・コアー号が居ます。イギリスの新聞を今取り寄せていますけど、それに詳しい紹介記事がありました。確かにペーパーマン系の特徴

を受け継いだ鳩ですが、あの一羽だけは、羽毛、筋肉が別でした。恐らく、アンダーソン系の血が濃く出ているのでしょう。これから、どんな活躍を見せた長距離鳩であるか分からないのに・・・」

「ほお・・・！それが、この四百キロレースの重要性和君は見ているんだね。それは私も同感だ。この四百キロは、長距離鳩、つまりGNにとって、重要な地だ。白川氏が提唱されてから、飛躍的にGNレースの帰還鳩が増えた。私は白川氏の遺産と考えているんだ」

川上氏と香月の見方は一致していた。だからこそ、香月は磯川に・・・そうですか？・・・そう言ったのだった。

又、香月はこうも言った。

「磯川さんが四百キロレースで敗退するのは、川上さんがご存知では無かったですでしょうか？」

「ふ・ふふ。何を言う。競翔は未知の世界。見えないレースが何故私に見えると言うのだ？君にはそれが見えるとしても言うのかい？」

川上氏は笑った。

「予測は出来ていたと思うのです。それは、僕は白川系の真価が中距離から長距離にあると見ていると同じです」

「私の使翔する白川ベルランジェ系を、君が研究していたと言う事かな？その予測は、正直ドキリとする指摘でもある」

川上氏は驚いた顔だった。

「いえ・・とんでも無いですが、僕は今までのデータを自分なりに判断して言っているだけです。それは、川上さんが、新年の会で仰られていた事と総合して合致します」

「聞き逃さないねえ・・本当に君には驚かされる」

「束になって戻ってくるって言う白川系を、短距離ではまだまだ体力を温存させておいて、競翔が途中で盤から真価が発揮するように調整を持って来るのでは・・と思っていました。それに対して、僕が使翔するシューマン系は、若鳩と言う事もありますが、筋肉が少し硬いですから、スピードレースが続けば疲労が蓄積されます。だからこそ、磯川さんの、ペパーマン系もそうすべきだと思ったのです。つづく、こうして見ると、白川系は、オールマイティな競翔鳩ですよ。その疲労回復力が非常に早いようですから・・」

「君って子は・・私以上に白川系を知っているね・・その通りだ。だからこそ、レース前訓練は多目にして、その他は、強制舎外訓練を止めて、自由舎外訓練を今年には実行した。疲れを残している鳩はジャンプ方式にしている。君は私の参加鳩数からそう見たんだね？」

「はい」

香月には、その人の言動や、蓄積された現データを正確に把握出来る機敏な頭脳と、その「天性」の洞察力がある。川上氏は、自分の持てる全てを傾注しなければ、今後この若者にはもう競翔では勝てないだろう……。この時、本当にそう感じた。

集場合所に着いた香月と川上氏であったが、磯川は無言であった。既に、情報は届いているようで、この場にはベテラン競翔家の顔が多かった。今回は集計も早かったようで、すぐ成績が発表されると、磯川は口を真一文字に結んで、この場から出て行つた。磯川の成績はそれほど悪い訳ではない、十三、十六、十九位であった。ペーパーマン系を使翔して初めて、十位内入賞を逃したのはこの時ではあったが。

香月が優勝から、五位までを独占。しかし、その後を川上氏が、六位から十二位まで・その後も、十四、十五、十七位と、打刻した鳩の全てが入賞した。このレース、師弟の二人がほぼ独占の形だったが、川上氏はこの四百キロレースには、最初からまだ比重を置いていないと香月は見ている。しかしそれで居て、十羽一団で帰って来る白川系の、凄まじい血の底力をひしひしと感じていた。

続く五百キロレースでは、高橋会長が優勝、川上氏が二、三、四位。渡辺鳩舎が五位、桐生鳩舎が六位、郡上鳩舎、七、八、九位、柳鳩舎十位であった。香月はこのレースには主力を参加させて居ない。昨秋の二次鳩と、後日帰りの鳩十二羽を参加させていたが、十二羽中二羽記録と散々な成績だった。三シーズン目を迎える源鳩同士交配の子鳩はほぼ全滅状態。生まれ持った資質だけは、管理だけでは如何ともし難かった。それに比して、シューマン交配の直仔群は、二羽落としただけで、順調過ぎる程の成績だ。現血統との交配が成功したと言える。シューマン系の血の濃さが結果を出しているとも言えるが、

その親鳩の一羽である、グランプリ号は、三百キロレースで三位入賞と、絶好調を維持しており、記録鳩群は一羽も落伍していなかった。

そして、又全国杯の六百キロ衆議院議長杯。このレースは、過去に白川氏が全国優勝を達成している放鳩地で、かなりの好天に恵まれれば分速の出るレースであった。五百キロに比重を置いた鳩舎、六百キロに比重を置いた鳩舎。思いはまちまちであろうが、今春の香月はこの六百キロレースにポイントを置いていた。結果が良ければ、四百キロからジャンプしてきた鳩は、GP七百キロまで、二週間の期間があつて、十分に参加可能。調整も出来る。ちなみに、この五百キロレースでも磯川は、十六位に入賞させただけで、今までの冴えは見られなかった。佐野の情報によると、帰舎は常にトップ集団だが、入舎が悪いそうで、それが原因らしかった。それをどう克服するか・香月はそれとつくに実行していた。仮想自鳩舎のペパーマン系に比する、シューマン系交配鳩達で・。磯川はきつと今、齒噛みしている事であろう・香月はそう思った。もう一つ原因がある、今春のレースが、百キロから三百キロまで、高分速レースだった事だ。体力を相当消耗しているに違いない。高分速のレースが続けば続く程、帰巢本能に負けて、体力がついて行かない。だからこそ、香月の疲労回復策があつた。鳩の能力が互角ならば、トレーナーである、競翔家の手腕が、差となつて出てくる。

そして・案の定、磯川は六百キロレースに全鳩を参加させて来た。二十四羽だった。磯川のスタート羽数から比すれば、かなり少ない参加羽数だ。一方香月は、三十二羽参加で、二十二羽現在残している。それに、後日帰りの鳩も数羽ストックしているので、持ち駒は香月の方が優位に立った。ただ、磯川が無策でこのレースに臨んで来たとは思えないが、徹底した実力優先主義の彼からすれば、その中で

上位を狙える鳩だけ残れば良いのだ・・きつとそう考えている筈。香月の使翔法とは全く違い、対照的だ。香月は、今年度の最終レースにピン太とグランプリ号を投入予定である。この六百キロレースから一気にジャンプしようと考えている。このレースが終れば、二羽は今春の今までの結果を見ても、過去のレース成績を見ても、第二次種鳩候補の予定である。昨春浦部が行ったジャンプ方法を参考にした。彼は見事、日本最高のチャンピオンレース、GNの栄光あるレースに連合会優勝させたのだから。

香月が片時も忘れないのは、「小さな命を預かる競翔家にとって、ほんの小さな鳩の異変を見逃すな。それが動物を飼う者の義務」・・川上氏の持論だ。香月は万全の体制で、競翔をやっついて、愛鳩家の姿勢は不変で無ければと自分に念じている・・。

七時ジャストに放鳩された鳩は、三時に姿を見せた。かなりの好タイムである。それも、ピン太×リリー、グランプリ号×マロン号の仔二羽が同時に飛び込んで来た。今春八羽残っている仔鳩の中でも特に、雌親の特徴を強く受け継いでいる二羽だった。早熟の血統で、筋肉は少し硬いのだが、徐々に四百キロあたりから、かなり筋肉が柔らかくなってきて、長距離鳩向きの体質になっている。その二羽が一番手の帰舎だ。続いて、今度は三羽が同時に帰って来る。この鳩達も同じ交配の子鳩達だ。この五羽を香月はタイムした。

成鳩群は、四時頃にばらばらと姿を見せ、全ての記録鳩群が当日帰舎した。帰還率も素晴らしいレース模様になり、五時頃にシューマン系の二羽が戻って来たが、この二羽はどうやら、短距離タイプのようだ。香月は思った。両鳩ともこれまで、上位入賞をしてきた鳩達。筋肉がやや硬く、竜骨が短い。体形も先に帰舎の五羽と比べ、やや大型で、雄親の勢山系の特徴が出ているせいかもしれない。それ

にしても、このレース香月は十八羽参加させて、十五羽を当日帰還させている。記録範囲は翌日もある
ので、明朝帰還もあるかも知れない。明朝帰る位の鳩ならば、五百キロのストック鳩と、後日帰り四羽
と共に八百キロQC、九百キロKCに挑戦させるつもりだ。ピン太とグランプリ号の悠々の帰還を見て、
GNにこのまま余力充分で参加する決意を新たにした。香月は入賞と言う事よりも、極めて帰還率が良
い事に大満足であった。この日の五時過ぎに佐野から、電話があつたが、自鳩舎の帰舎タイムと帰還率
の飛びぬけて良い事を改めて確認し、川上氏からは、記録のゴム輪十個を受け取っただけで、高橋会長
宅へ一人向かった。

会長宅でも、数名が居るだけで磯川さえもレースを諦めているような顔で座っていた。そのまま時計
を預けて帰ろうとした香月だったが、ふいに磯川から呼び止められた・・・。

大激論

「香月君、ちよつと待つてくれないか、少し話しがしたいんだ」

いつもの磯川の勢いは無かった。余程このレースが悪かったのだろう。

「ええ・・良いですけど、何か？」

ある程度の予想は香月にはついていた。

「君には分かっていると思うが、今日、自分の所は最悪の状態だった。鳩の帰舎はまあまああの時間だったんだが、中々鳩舎に入らない。四百キロを過ぎてから特にこんな状態が続いている。去年は一度もこんな事は無かったし、予想も出来無かった事だ。一体どうしてなんだろう・・」

気落ちしている様子。磯川と言うプライド高い男が、香月にアドバイスを求めてくるのは初めての事である。四百キロから好調を維持している好対照の香月に、そのヒントを聞きたかった模様だ。こんなに早くライバルが脱落しては、困る。香月はこの競翔前からとくに磯川鳩舎の分析をしていた事ではあつたのだが・・。座ろうとした香月に高橋会長が、

「ちよつと待つてくれ。二人とも春休みだから、少し位時間はあるだろう？良い機会だから、私も若手のホープ二人の考えを聞かせて貰いたい」

伸び盛りの若手の二人を暖かい目で見守つてきた会長だ。これからも若い人のリーダーとして大きく育つて欲しい。そう高橋会長は思つていた。そして・・・大激論の火蓋は切つて落とされた。

いつもの豪快でおおらかな会長の顔ではなく、厳しい顔で、二人を向かわせる形で座らせた後、間に入るようにして会長が口を開いた。

「まず・・・私から聞こう。その前に、私が何故こう言う事を君達に聞くのかを説明しよう。先に磯川君にまず聞きたい。私は前から君の競翔家としての姿勢に疑問があつた。しかし、それは、個人の考えや、取り組み方の違いであつて、他人がどうこう言えるものじゃ無いし、結果として、君はこの東神原連合会でも指折りの成績を残している強豪だ。しかし、私の目から見る君は一本気で、負けず嫌いで、とにかく本当に競翔家としてやつて行けるのか心配だったのだが、香月君が入会してからの君は、誰の眼から見ても、そも鳩に關しては、非常に研究熱心で一流の眼を持っていると私も再認識するまでに至っている。今、多くの東神原連合会会員達の中でも一、二位を争うライバルと言える二人だ。これは、凄く良い事だと思ふのだ。こう言うお互いのやり方を研究し、レベルアップを目指すのは。ただ、今日君が香月君に意見を求めなかつたら、私は何も言うつもりは無かつた。お節介かも知れんが、君と香月君の

鳩に対する取り組み、姿勢は全く違う。きつとそこで自分達の意見をぶつけ合う事はヒントにつながると思う訳だ。だから、今日の所は、私の質問形式を黙って受けてくれないか？」

磯川も香月も、こんな真剣な表情である会長の顔は初めてだ。黙って頷いた。

「それでは、まず聞こう。君達にとって、競翔鳩とは何だ？香月君から聞こう」
香月「かけがえの無い存在。自分のパートナーです」

磯川は少し、香月の顔を見た。鼻で少し笑った。

磯川「勝敗を決める競翔の為に鍛えられた、エキスパートです」

「もう一つ質問する、では、競翔とは何だ？」

香月「夢です」

磯川「栄光です」

「全く対照的だね。では、その理由を聞こう」

香月「夢と言ったのは、自分が競翔鳩と同化してしまふ事です。自分が鳩のように、大空を飛べたならば、きつと今現在、競翔と言うものを見ている僕は、違った視線で色んな事が分かるかも知れない。僕自身なんか比べものにならない小さな競翔鳩が、何百キロ、何千キロも自鳩舎目指して飛び帰って来るんで

す。それをたった、数時間で、数日で。これを夢と言わずには居られません」

磯川がすぐ言った。

「君はロマンチストだね」

「磯川君！ 反論無用。後で話は聞こう。君の答えは？」

磯川「勝敗を決める、所詮競翔とは優劣の世界です。競翔鳩の優位そのものは持って生まれた資質によって決まるもので、俺達はそれを競翔によって判断し、更に、次代に伝えて行くトレーナーです。栄光とはそう言うもので、限られた優秀な鳩に評価を与えるもので、それは常に動物の世界では優性のサイクルが支配しています。競翔鳩は特に顕著なものでしょう」

「ふむ・更に聞こう。では、その競翔に勝つにはどうすれば良いか」

香月「根本は愛情です。これが欠ければ、確かな判断が欠如し、全てに於いてマイナスです」

磯川「絶対的なものは資質。血統ですよ。そして、競翔家に求められるのはこれを見極める正確な目です」

「なお聞こう、その全てを総合して、競翔するとはどう言うものか？」

香月「今も言ったように、根本は愛情。鳩と自分を同化する事。そうすれば、その鳩の力量、資質が見えてきます。鳩舎の作り方、訓練、飼料、健康管理。自分が見逃さない細心の注意を払って、その鳩の持つ個性を的確に見抜く眼を養い、個々に応じた訓練をする事です」

磯川「勝つ為に競翔している訳で、勝てない競翔鳩を育てて、それは何の為に飼うの？俺はいつも勝つ、勝てる鳩を育てて、勿論、鳩舎・構造・飼料・栄養バランスなんて、当然の事で、どんな駄馬に高価な飼料を与えたって、サラブレットにならないように、限られた競翔鳩だけが、訓練され、鍛えられ、その資質を十分に引き出せば良い。駄馬が百二十パーセントの力を發揮しても、サラブレッドの三十パーセント程度の力にも及ばないように、優れた一つの血統をより同一条件の元に、一括した管理の中から、抜きん出る鳩こそ、それが、血筋じゃないか。鳩競翔の中で、勝ち残って行く血統じゃないか。今までの競翔の中で、土鳩や鑑賞鳩から優勝したなんて話を聞いた事も無いし、記録を作って来たのはほんの一握りの優勝な血統じゃないか。それが競翔鳩の歴史だよ。精神論や、根本論を、今ここで話してどうするんですか？会長」

磯川は少々興奮していた、色白の鼻筋の通った顔は少し上気していた。それは、精神論を全面に出す香月に対する反論のように思えた。香月は、ここで、磯川に反論した。

香月「そうです。血統は大事ですよ。言われるように土鳩を飼ったってレース鳩にはなりません。では、今シーズンの磯川さんは、ご自分の不調をどう認識されて居られますか？」

磯川「不調だって？俺は今シーズン三つも優勝しているんだぜ？それに全レース入賞もしている」

香月「ええ、三白キロレースまでは・・・しかし、四百キロからは、十位内入賞はありません」

磯川「だから、それは入舎が悪いんだ。鳩はいつもトップ集団で帰って来ているんだ。仕上がりだって

悪いとは言えない。むしろ、好調と言えるじゃないか」

香月「それはおかしいですね」

磯川「何がおかしいんだ！」

磯川の剣幕に会長がなだめた。

「まあまあ・・磯川君、落ち着きたまえ。熱くならないで、香月君の話も聞けよ」

無然とした表情だったが、磯川は気持ちを落ち着けるように言った。

磯川「では・・聞こう」

香月「鳩の入舎が悪いのは、疲れとは考えられないですか？」

磯川「それは距離が長くなればね、多少は出てくるだろう。でも、それは四百キロや、五百キロ位の距離での話では無いだろう」

香月「いえ・・それは間違いですよ」

磯川の顔がピクツとなった。

磯川「君が断言する、その納得出きる理由を聞こうじゃないか」

香月「百キロ、三百キロまでのレース間隔は一週間しかありませんでした。特に、今年は好天で、分速の高いレースが続きました」

磯川「それが、好調と言うものじゃないか。俺は三連続優勝した。飛び帰る時間が短ければ、短い程鳩も休息日数・時間が取れるじゃないか」

香月「それでは、少し質問しますが、二百メートルを全力で走ると、四百メートルをゆっくりのペースで走るのは、どちらが疲れると思いますか？人間に例えて」

磯川「それは・・・二百メートルの方だろうか」

会長は、一変して今度はここにこして二人の会話を聞いていた。

香月「そうです。鳩のレースにも当てはまりませんか。」

磯川「人間と鳩とは違う。それに、一週間もレース間隔があるのだし、問題は無いだろう」

香月「それが、間違いだと思うのです。磯川さんは医者の方だし、もっとそう言うものに詳しい人だと思っていましたか・・・？」

磯川「おいおい・・・俺は臨床の方だし・・・そんなに重要な事なのか？走ると飛ぶのでは、筋肉の違いもあるだろう」

香月「僕は獣医学部を希望で、来年受験します。専門的には今答える事は出来ませんが、鳩と人間だか

ら違うと言うのは、説明不足で納得も出来ない答えです。もう一つ質問しますが、鳩の連続飛行時間はどの位だと思われませんか？」

磯川「君の言わんとする事が理解出来ないよ」

先程の剣幕は収まったようで、磯川は苦笑していた。会長が言う。

「わはは。面白そうだから、わしも仲間に入れてくれるかい？」

香月「ええ、どうぞ。会長も答えて下さい。これは非常に重要な事ですから」

「うむ・大体長距離となると、七百キロが当日帰還出来る距離だから・それを時間にとすると、十二時間位かな？」

香月「磯川さんは？」

磯川「ああ・その位だろう・」

香月「当たり前です。それが限界と考えて良いでしょう。人間と違うと言われましたが、鳩はこんなに小さい動物なんです。渡り鳥のように考えたら大間違いです。人間が連続して走れても、せいぜい、二、三時間が限度でしょう。その疲れがどの位残ると思われませんか？大抵の人はそんなに走れば、四、五キロは体重が落ちると言われます。体重の約十分の1が消耗するんですから。鳩の重さって大体四百五十グラムから五百グラムです。それが一レース飛び帰ったら、五十グラムからひどい鳩で、百グラム近く落ちます。ご存知ですか？」

磯川・会長「知らなかった・・・」

香月「それだけの運動量があるのですから、回復するのは大変な事ですよ。一週間あればと言われましたが、体重だけ回復しても、全力で走り抜けた筋力が元に戻っていると思われますか？」

磯川「それは・・・分からないが・・・しかし、少々の疲れが残る位の方がかえって好結果に結びつく事もある。それに俺は、レース中は自由舎外にしているからね。かなり回復出来る筈だ。優秀な競翔鳩は自分でそれをコントロール出来る筈だ」

香月「その通りだと思いますが、論点に戻しますと、今春のレースは高記録の続出から始まりました。すなわちいきなり百メートルを全力で走り、その後十分の休憩を挟み、その後も二百メートルを全力で走り、今度も二十分位の休憩後、三百メートルを全力で走ったようなものです。少々タフな人なら、可能でしょうが。しかし、問題は四百メートルをその後走るとなったら、どうなるでしょうか？」

「かなりしんどいだろうな」

磯川「そうだろうね」

香月「でしよう？ 充分な休憩があつたとしても、いきなり全力で走ると、マイペースを守って走るのでは、違います。一度にエネルギーを消費してしまえば、それだけ疲れると言う事です、筋肉が」

磯川「ちよつと待った！ しかし、四百キロレースは分速千二百メートルを切るレースだった筈だ。君の言う通り疲れが残っていたとして、鳩はペースダウンして飛び帰った事になる。だから、次の五百キロには影響しない筈だ」

香月「そこ・・・ですよ。間違いは。磯川さん、四百キロは山間のコースを辿りますから、分速の出ない

レースって事は承知されていますよね？」

磯川「ああ、四百キロは難レースだ。いつも、この四百キロは分速、帰還率共に落ちる」

会長も頷いた。

香月「今、言われたように、山間を選ぶしか鳩に帰還コースはありません。つまり四百キロと言っても、山間のコースはジグザグです。もし、逆に飛んで、海辺のコースへ迂回したとすれば、殆ど倍の距離を飛ぶ事になります。余程の事が無い限り、鳩舎が位置する方向である、この山間コースを飛ぶ事でしょう。つまり地図を見て、計算すれば、最低六百キロを飛ぶ事になります。分速千二百メートルを逆算して見ると、実際スピードは分速千五百〜千六百メートル位出ている事になります。つまり、短距離そのままに又四百メートル走を全力で走ったのです。それまでの三百キロレースまでが高速レースだったから、その勢いで」

磯川「・・・・・・」

「うーうーむう」

会長は腕組みをした。香月は続けた。

香月「鳩は疲れますよ。今までのペースでこの難コースを飛んだのですから。だから僕は四百キロ後、

五百キロには、三百キロレースでストックした鳩だけの参加にしました。これは僕なりの考えかも知れませんが、これが好天のレースだったら、もう少し展開も違ったでしょうが、磯川さんの鳩は百、二百、三百、六百、六百と飛んだのと同じ訳ですから、疲れていると言うのが僕の理論です」

磯川「君の言う通りだとしよう。成る程納得出来る内容だった。が、しかし、俺の入舎が悪いのどう繋がるのか、なら、他の鳩舎も条件は同じじゃないのか？」

香月「磯川さんの場合、三つあると思うのです。これは今春のレース前から僕が予測していました。勿論独説ですから、否定されても結構ですよ」

会長が言った。

「いやあ、川上君も言ううとった。君の理論は科学的な裏付けがある、惹きつける力がある。聞かせてくれよ、是非」

磯川「認めるよ、さっきの話。お願いするよ、正直に」

香月「又激論になると思いますが・・・それでは・・・」

「続けてくれ」

香月「磯川さんの鳩舎は高台の病院の屋上にあります。最近、病院の増築をされたでしょう？」

磯川「ああ、去年から増築工事をやっついていて、今年の二月にやっと完成したよ」

香月「ほぼ鳩舎と、同じ高さになりましたよね、増築館が。鳩は自由舎外ですか？強制舎外ですか？」

磯川「どちらでも無いね。ある一定の時間は強制だが、別館の方が出来てからは自由舎外の時にそっちへ行つて良く遊んでいるようだね。勿論病院だから糞の事には気を使っているがね」

香月「どうやら、それが、入舎状況の悪さだと思ふんです。原因の一つ。疲れは納得されていますから、つまり、お分かり頂けたと思うのですが、二として、鳩はつまり別館で休憩すると言うのが習慣つけられたのでしょうか」

磯川「あつ・・そうか！しかし・・君は俺の鳩舎に一回来ただけなのに、見抜いているなんて、恐い奴だなあ」

「ははは、どうやら決定的な三つ目の原因を香月君は見抜いているようだな。わしの所のハンドラーが予測した事と符号するやも知れん。香月君聞かせてくれ」

磯川「えっ！会長の所でも予測していた？じゃあ俺が今シーズン苦戦するつて事を？」

磯川は驚いて訊ねた。

「いやいや、そうじゃ無い。わしとて競翔家の端くれ。どこの誰が、どんな鳩を持っているか、どんな活躍をするかどうかなんて、予測もするだろう」

磯川「聞こう・・」

香月「血統を重視されている磯川さんだから、ペパーマン系の特徴は良くご存知だと思います」

磯川「無論だ。徹底的に研究したよ、導入前に。」

香月「素晴らしい血統ですが、どんな血統にも必ず弱点があります。どこにあると思われませんか？」

磯川「その言葉は心外だね、創始者ペーパーマン氏の徹底した「優勝鳩しか仔を取らない」理論で、無敵の百二十八連勝は知っての通りだ。ここニシーズンの俺の活躍を見て貰っても証明済み。どこにも弱点は見当たらないよ」

香月「そう思われますか？」

磯川「全天候型で、スピードがあつて、勇敢だ。欠点を探すのが難しい位だ。」

少し無然とした表情で、磯川は言った。

香月「心外かも知れませんが、聞いてください。ペーパーマン系は、チャンピオン鳩達の集合です。その固定までには、兄弟や、親子交配を数多く行っております。しかし、その程度の数代の歴史に於いては、鳩質が揃った一群にはなりません。様々なタイプの鳩が生まれて来ております。過去にペーパーマン系を導入した鳩舎はその一群のタイプで、使翔し、そこから派生して多くのチャンピオン鳩を又輩出しています」

磯川「む・しかし、それは競翔鳩の歴史が浅いせいで、どんな血統にも言える事だ。多かれ少なかれ、タイプの違う鳩は当然生まれて来る。特に近親交配には、全く異種のタイプも出現して来る」

香月「その通りです。中でも、磯川さんの所のパイロン号直系は、当代一の飛び筋だと言えます。これは突出していると思います」

磯川は少し機嫌が良くなった。

磯川「それで・・・？」

香月「鳩質が小粒で、揃うと言うのは、パイロン号を頂点として、その代に到るまで近親交配が繰り返して行われて、言い換えれば、パイロン系と言っても、差し支えないでしょう」

磯川「確かにそうだ。血統書を見ても、パイロン号が三つも四つ出てくる鳩も多い。しかし、それは、厳しい競争淘汰によって、残った血筋。それも、優勝鳩しか仔を取らない徹底した作出法だよ」

香月「つまり・・・問題なのは」

磯川「問題？」

香月「そのパイロン号直系群が、近親で、それも数年で作られた系統の一群だと言う事です」

磯川「弊害も多いが、血が濃く出た鳩は頭抜けたものが多い。異種交配しても殆どタイプが崩れない」
香月「論点が逸れました。近親交配に話を戻しますと、その為に鳩自身非常に神経質な個体が多いと言う事です」

磯川「逆に、言い直すと、頭の良い鳩も多いと言う事だ」

あくまで、磯川は自鳩を持ち上げていた。

香月「それは鼻頂目では無いですか？」

磯川「事実を正確に言ってるだけだ」

又、磯川の顔が上気した。会長が二人の顔を交互に見る。あくまでも冷静な香月だった。

香月「その事が原因の一つですよ、磯川さん。つまり鳩を客観的に冷静に見ようとしていない」

磯川「君は、この俺の鳩を見る眼が正しくないと言うんだな？競翔歴は君より三年もあり、自分でもレベルの高い競翔家と自負している、無礼じゃないか、余りにそれは！」

磯川が怒った。会長が腰を浮かそうとした。しかし、香月は言葉を続けた。

香月「近親の弊害の一つに神経質と言う事があり、それは血管が細い為に、異常に興奮すると、自分を見失う事です。レースの度に興奮して、イライラがますます激しくなる。」

磯川「それは、俺の事か？鳩の事か？」

香月「両方・・・です」

会長がここで、磯川が爆発寸前の場を取り持った。

「わっはっは！香月君もなかなかきつい事を言う。磯川君、興奮しては何も見えんよ。香月君は今重要な事を言っているんだ。落ち着けと言ってもその様子じゃ無理だろうが、もう少し聞けよ」

無然として、磯川は座りなおした。今にも香月に飛びかかりそうな顔である。大学ではディベート（討論）の達人と言われる磯川をこうも興奮させ、理論も、話力も人を引きつける魅力がある香月に会長は驚いていた。

香月「つまり・・・レースから飛び帰った鳩は、興奮状態で、戻って来たのにまだ飛んでいるような錯覚を起こして、なかなか鳩舎に入ろうとしないのです。接戦のトップ集団を形成しながら戻って来たのに、それが現実として認識出来ないのです」

磯川「あ・・・その説・・・うーん・・・それが事実だとすれば・・・」

磯川の顔が急に・・・変わった。

香月「更に・・・」

磯川「更に？まだ何かあると言うのか？」

香月「それだけで判断するのは、暴論過ぎますし、あくまで仮説ですから。血統の違いはあるでしょうし、それが入舎の悪い原因には特定は難しいですが、三つの原因がそれぞれ重なりあった事と、もう一

つ言っても良いですか？磯川さんが研究してきた。パーマン系の特徴を僕が言うのは・・・どうかと思うのですが」

磯川「参った・・・よ、香月君。脱帽する。君がそれほど緻密に分析しているなんて思いもよらなかった。教えてくれ」

「わしも・・・正直驚くばかりだ。君は凄まじいばかりの科学者だな。根底を見抜いている。わしのハンドラーが予測した以上の事を看破している。川上君をうならす程の君だ。これほど理論家とは再認識したよ」

香月「いえ・・・僕はただ・・・自鳩舎に色んなタイプの鳩が居ますから、それを拡大して他鳩舎を見ているのに過ぎません。自鳩舎の欠点は、他鳩舎の欠点になると思うだけです」

「それほど、自鳩舎の鳩を君が観察していると言う事、すなわち同化していると言う事だな？」

磯川「香月君、俺は今まで、自鳩舎の欠点なんて考える事も無かった。分からなかった。だから教えてくれよ。俺は、君の言うように大事なものを忘れてきたのかも知れない」

磯川がこれ程・・・会長は磯川の顔を見た。それは、多分今期の不調を自分自身で、苦しんできたからだろう。プライドの高い彼は、それを決して自分の口に出す男では無かった筈だ。香月君の類稀な才能に何かヒントを得たかったのだろう、彼としても必死で・・・高橋会長は、真の磯川の中にある競翔家の心を今・・・見た。彼も鳩に魅せられ、そして変わって来た事を。

香月「磯川さんの鳩舎は、管理も構造も素晴らしいものです。ただ・・問題は鳩質そのものに欠点を見出す事にあつたようです。いいえ、欠点なんて言葉は適当ではないかも知れません。でも、弱点を見抜く事は全てを把握する事になると思います。ペパーマン系を僕の鳩舎のシューマン系として見ると、実に多くの類似点があります。これ以上は差し出がましい事は言いませんので、ご自分で分析してください」

磯川「分かった。言ってくれ」

香月「早熟でスピードが出る事です」

磯川「うむ」

香月「理的で、方向判断力に優れます」

磯川「うむ」

香月「副翼が広く、長距離鳩の特性を持っています」

磯川「うむ」

香月「羽毛が密で、広い副翼がスピードを可能にします。難レースでも帰還率は良いです」

磯川「ちよつと待ってください。帰還率は四百キロ辺りからそれほど良くないよ。五十〜六十パーセント位だ」

香月「言葉が足りませんでした。ここで僕が言う帰還率とは入賞範囲の帰還率です。入賞率が十から十五パーセントありますよ。これは驚異的な数字なのです」

磯川「ほお・・そう言われて見れば・・」

香月「次に難点も時には長所として見る方が多いので、つい見逃してしまいがちですが、筋肉が少し硬いので回復力が落ちるんですよ」

磯川「あっ！・・・」

そこまで聞いて、磯川は最大弱点を知ったようだ。瞳に生気を甦らせた。

磯川「香月君。有難う！良く分かったよ。今日君の話を聞かなければ、取り返しのつかない事になっていた。さっそく今日戻ってやるべき事をやらなきや」

香月「磯川さんは、磯川さんでなきや、僕も張り合いが無いですよ。これからも恐い存在で、居て下さい。俺の考えが、お役に立てたなら光栄です」

「磯川君、香月君。今日は私にとつても、本当に有意義な日であった。二人ともそれぞれ、理論も卓越し、手腕も一流な競翔家だ。それ故に敢えて・敢えて、この場で、お互いの違いを明らかにする事が今後の役に立つと私は思ったんだ。幾等我々人間が浅知恵を持ってやった所で、完璧なんて言葉はあり得ない。どんなに愛情を注いでも、それが過ぎる事も無い。君達は競翔と言うものを通じてだけでなく、これからも色んな人を通じて、社会人として、育って行って欲しい。君達ほどの熱意や研究心や、非凡さがあれば、きつと夢を成しえる事は可能だろう。有難う、今日は私も非常に有意義であった。そして非常に嬉しいよ」

会長の目に涙が光っていた。性格は全く違う二人だが、鳩に対する情熱は一步もひけを取らない。ここからの東神原連合会の快進撃を生み出す、中心的な原動力になるだろう、会長はそう思った。

香月が空を見上げた時はもう、夜は明けようとしていた。この夜を徹した大激論を持つて、第三編を終了する。若い二人にとって、競翔家として互いの歩む道への自覚が芽生えが出来始めた所である。いよいよ本編は凄まじい闘いと、この夜に生まれた一羽の鳩によって急激に運命の糸に翻弄されながら、物語の序章に突入する。

この春、香月は六百キロ優勝、二位、三位、四位、五位と完全に上位を独占。続く七百キロGPは全体総合で、川上氏が総合三位(のちに白輝号)、八位(のちの白翔号)に初めて連合会で、総合一桁入賞した。又、八百キロQC、九百キロKCでは高橋会長、郡上鳩舎が共に総合優勝(高峰キング号)(郡上クイン号)を飾った。三大レースも、まずCHを川上氏が、連合会優勝。GP七百キロを捨てた磯川が二位(のちのパイロンエース号)に。GCHでは、郡上氏は圧倒的な強さで、連合会の上位を独占。最終レースのGNでも、郡上氏は連合会最多の三十二羽を記録し、ピン太とグランプリ号も仲良く帰還、連合会の三位、五位に入賞した。そして、そのGNは川上氏が連合会優勝、総合十九位(のちの川上稚内キング号)に入賞し、日本全国にこの人ありと、知られるようになった。お陰で、取材は川上氏がメインとなって、例の子鳩がそれほど話題にならなかつたのは香月に取って、吉運であった。

競翔界に一大センセーションを起こす奇跡の鳩・香月の脳裏には、確かな感覚として刻まれていた。人生、香織、そして・産声を上げた、奇跡の仔鳩・翻弄される大きなものが、ひしひしと迫ってい

た。

今までの話は、これから起こる出来事のほんの序章に過ぎなかつた・・・。



パイロンエース号

春の息吹

季節は巡った・暖かな春の光に誘われて、新緑の輝かしい息吹が美しいメロデーを奏で出す。香月と二人三脚で歩んで来た高校生活の最後の日を迎えていた。香月にとつて、香織にとつて、同年齢の若者が青春を謳歌し、恋を語り合っている同じ時、お互いを励まし、少しでも失いたくない時間を学業に、そして自分の信じるものに分け合つた。それがどんなに二人にとつて充実し、見つめ合いながら、互いに理解し合える愛を育んできた事だろう。二人の愛は本物だつた。

今日、卒業生総代として、壇上で答辞を述べる香月の姿は、誰よりも輝き、凛々しかつた。これから、彼の姿を見続けて行くであろう自分は、今幸せの中に居る。知り合つて四年、思えば、色んな事が目に浮かぶ。悩み、悲しんだ白川老の死。受験勉強、剣道部退部の時の激しい一戦。そして、鳩が取り持つ縁……。誰よりも真剣に全力で投げ出さずやつて来た香月の一挙手、一頭足、香織の胸の中に刻み込まれて忘れる事はない。今日——この日を迎えて、一言の奇矯も無く、静かな館内に響き渡る涼やかな香月の声が、校舎の周りの木々と呼応するように、リズムカルに聞こえて来る。一度もお互いを信じないとか、信じられないと言う気持ち等起きる筈も無い程、二人は心と心で繋がつてきたと言えるだろう。

香織は胸から熱いものが湧き上がるのが押さえ切れなかつた。涙が頬を伝わつて流れた。最後に控えるS工大獣医学部の受験。香織にはそんな難関も彼なら突破するのでは・予感があつた。香織は知っている。数多くの偉業を残し、死ぬ間際まで、香月の名を呼び続けていた、白川正造氏の深い業績が、その愛情が、香月を明らかに変え、一段と彼を逞しく成長させている事を。白川氏の動物生態学の研究

を自らが受け継ぐこととしている事を。その為、どんなに香月がこの三年間努力して来たのかを。だから、決して香月は受験に於いても敗北する事は無い。持つて生まれた天分と、老競翔家との深い心の繋がり
と信頼の絆。そして、自分との愛。彼は それに答えてくれる大きな人間である事を香織は誰よりも知
っている。

香月の両親も、川上夫妻もこの卒業式に来ていた。息子の晴れ姿に涙する母親奈津子、父親泰樹。川
上夫妻も涙ぐんでいた。素朴で、生真面目な香月の父親だが、自分の息子をこれほど成長させてくれた、
川上氏に感謝していた。そして、香織の存在。川上氏は自分にとって、一羽の鳩が取り持った不思議な
縁で、これほど天分を有した競翔家に育ち、一人娘とも確かな結びつき。そして、逞しく成長して行く
彼の姿が嬉しかった。それぞれの胸に、香月一男と言う少年の三年間の姿が昨日のように浮かぶのだっ
た。

二年の時には、まだ他の大学を・・・。そんな度重なる担任の相談。奈津子も悩んだ。しかし、一心不
乱に勉強する我が子にそれは言えなかった。成績は県下でもトップの数字。全国旺文社の模試でも常に
一桁になってからは、もしかしたら・・・周りもそう思った。川上氏は、受験に討論も過去にあったと言
うS工大だが、理論家の磯川さえも感服させたあの一夜を知っている。その知識は、自分を飛び越え
て・・・もしや・・・そんな期待感も持っていた。

卒業式が終り、香月が職員室の先生に挨拶を済ませるのを、香織は教室で待っていた。親しかった友
人とも別れを告げ、香月の机の前に座っていた。

香月が教室へ戻って来ると、

「香月君、ねえ、ここへ座って」

「何だい？」

「いいから」

香織に促されるように、机を挟んで、向かい合わせに香月は座った。香織は香月を見つめたまま、何も喋ろうとしない。

「どうしたの・・・何か顔についているのかい？」

「クスツ・・・」

「あはは。初めて会った時を思い出したね。こう言う答えを待って居たんだろう？」

あの頃と違うのは、香月が香織の黒い大きな瞳を見ても、赤面しない事と、互いの考えている事が手に取るように分かる事だ。

「そう。でも、貴方はあの頃と比べると逞しく成長して、今じゃ私の一番大切な人になった」

「俺もそうだよ。君は一段と輝いて、かけがえの無い存在になった」

「貴方と一緒に受験勉強を始めるようになって、同じ高校に通い、ほとんど毎日昼休みには、こうして机を挟んで昼食を食べるようになって、最初は皆からもかわれたりしたけど、その内誰も言わなくなった。上級生の人も、そして貴方のファン倶楽部の人も」

「ファン倶楽部？大袈裟だけどさ、君の方も大変だったよ。帰りに待ち伏せされて、君との事を色々聞かれたり」

「あら？そんな事があったの？でも、貴方はそれで？」

「勿論、俺の彼女ですって答えたさ。先生の方からも色々あったけど、結果的には堂々と俺達は付き合ってた。次元の低い話は消えてしまったんだよね」

「本当に色々あったわね。でも、一つ、一つが私にとっては大事な思い出だし、これからも凄く大事な事だと思うの。だから、これから貴方と私は違う場所で、違う人の中で、過ごす訳だけど、ここで約束して。私は貴方の良き理解者として、趣味は続けて欲しい。でも、私との時間を今度は貴方が作って欲しいの」

「ああ、約束するよ。俺も最後の入試がある身だけど、この一年間本当に君と過ごす時間が欲しかった。少しでも一緒に居たかった。いや・俺がお願いするよ。我ままな人間だけど、これからもお付き合いください。」

二人が握手を交わした時、丁度一年時の担任であった、鈴原教諭が入って来た。

「やあ、まだ教室に残って居たのか。香月君、川上さん。よくこの三年間頑張ったね。学校と言う規則で縛られた中で、本当に君達は男女の交際と言うものを我々に教えてくれた。傍目で見ても微笑ましい似合いのカップルだった。色々職員の中では言う者もあつたが、その声をはねのける程君達は頑張ったよ。特に香月君の頑張り、二年時から、トップの座を一度も明け渡す事無く、生徒会活動にも良く頑張ってくれた。又、川上さん、君も二年時から急速に成績も上がり、いち早くN短大合格おめでとう！」

鈴原教諭は、二人にとっては、最大の理解者だった。思い出多い教室に最後の別れを告げると、二人は同級生の待つ、市内の小料理屋へと向かった。

この小料理屋での事が香月達にとって、又大きな出会いとなつて人生に影響ある出来事になるのである。

小料理屋の二階には、既に十人の学友達が集まっていた。愛田慎二と言う、中柄の眉毛の太い男が送別会の幹事を引き受けていた。到着した二人を大きな声で、迎えた。

「おーい、皆、今日のヒーロー、ヒロインのお出ましだ！拍手、拍手！」

二人を待っていたのは、香月君！香織ちゃん！そんな黄色い声だった。照れながら二人は並んで奥に座った。

「えー、それでは、皆さんがお待ちかねの我が校一の秀才で美男、スポーツマンの香月一男君と、これ又、我が校一の美女で、人も羨むカッパルの登場です。今日は高校生生活最後の日と言う事で、思う存分、今までの事や、両名に好意を寄せながらも、失恋に終わった惨めな諸君の恨み事の一つでもこの二人に浴びせて、残念会及び、送別会を開催したいと思えます。ちなみに、今日の司会を勤めさせていただくのは、演劇部の愛田慎二と申します。今日は、男子六名、女子六名と、員数が揃っている訳ですが、ご紹介方々、楽しくやりたいと思えます」

「おい、おい・・・」

香月が少し顔を赤らめた。全員が笑っていた。親しかった仲間達であった。

「えー・・・それでは、皆さんも良くご存知だとは思いますが、これからの進路や、自己紹介をお願いします。その後は雑談に移らせていただきますので、よろしく！では香月君から時計回りをお願いします。」

香月「えー、香月一男です。まだ受験前なので、偉そうには言えないのですが、S工大獣医学部を目指しています。」

きゃー、香月さん、素敵！天才！もう、無茶苦茶な声援が飛び交う。香月は香織を見て照れ笑いを浮かべた。

幸田弘之「新聞部の部長をやっていました幸田です。前のスーパーマンの後で紹介し辛いのですが、N大法学部を受験します」

木村かずみ「放送部の木村かずみです。音楽大学へ行きます。香月さんの事ばかりになって、可哀相ですが、一度、放送室のスイッチをONにして、『好きです！香月さん♪』と言って見たかったです。御免なさい、川上さん。そんな恐い顔しないでね」

一同大爆笑となった。

南田洋次「押忍！空手部主将の南田です。家業の八百屋を継ぎます。あの・・・今日の集まりは、やっぱり、主役の二人を惜しむ会だから、だから言います。三年間片思いの川上さん。思い切って言います。卒業後は・・・俺の・・・俺の八百屋を是非御贖に！」

「きやはは」

香織は笑い転げた。涙を出して笑っている。

持田美樹「あはは。合唱部のマドンナ事、持田美樹です。私も音楽大学へ進みます。将来はテレビ関係の仕事をしたいと思っています。一つ言わせて貰います。自分で言うのも何だけど・・・私をあっさり振った香月さんの心を射止めた、川上さんの魅力は一体どこから発散しているのでしょうか」

持田美樹は、芸能プロダクションからもスカウトされた、学校一あでやかな美人である。色々入学時は香月達ともあつたものだ・・・。

そこへ、愛田が彼らしいジョークを飛ばす。

「いえいえ、持田嬢も我が校ナンバーワンの美女であります。僕のような、男前をあつさり振るんですから。どうですか？今から僕とよりを戻しませんか？」

持田「あら・・・川上さんにもアタックしたつて聞いたけど、貴方は二兎を追うタイプなのね？じゃ、無理ね。一兎も得ずだわ、それじゃ」

又全員が笑った。

そこへ、勝浦元国が・・・

「無理、無理。だって持田嬢はアイドルさ。俺だって何度もアタックしたけど、彼女はアイドルで一人のものじゃないよ。川上さんは、もう入学当時から香月の彼女だったしさ・・・申し遅れました。体操部の花形、勝浦です。Y大体育学部に入学が決まっています。将来はオリンピックピックに出るのが夢です」

咲田瑞枝「園芸部の咲田です。姉の花屋さんを卒業したら手伝います。皆さん、香月さんや、川上さんの事ばかり話題にしていますが、私は愛田さんのように、愉快な人がクラスに居て、本当に楽しかった

です」

おーっ！、いいぞと盛大に拍手が湧く。そう言えば、いつも教室に綺麗な花が飾ってあったのは咲田さんのお陰である。

村上和美「村上和美です。良く男性に間違えられるけど、本当は心優しい少女です。S大の教育学部を受験します。先生になるのが夢です。この中では唯一香月さんと同じ中学出身で、剣道三段の香月さんにいつも憧れていました。最後の試合になった、木村さんとの決戦は一生忘れません。私も女剣士を目指して頑張ります」

おーいいぞ、いいぞと拍手が湧いた、彼女もインターハイ出場選手だ。

坂上嘉朗「坂上です。O大農学部を受験します。将来はブラジルへ渡って、広大な大地を切り開きたい。以上です」

橋本京子「橋本です。川上さん、いえ、カオリンとは、入学以来からの一番の仲良しで、同じN短大に決まりました。私も将来保母さんになりたいと思っています。あ、ごめんなさい、カオリンの夢も話しちゃって」

川上香織「川上です。全部京子に言われましたので、喋る事が無いですが、将来は獣医さんの奥さんに

なるのが夢です」

おーつと言う声で、全員が盛り上がった。香織は全員の前ではっきり宣言したのだ。香月と結婚すると。香月の顔は真っ赤に染まった。

愛田「えー今、大胆な川上嬢の発言がありまして、落胆なされた方も大勢居られると思いますが、当の香月君は、赤面する事しきり。早くも尻に敷かれていいるのかな？と言った所でしょうか。私、愛田慎二ですが、地元の新聞社に就職が決まっています、しかし・・・この発言どう思われますか？皆さん。本当にいじめて見たくないですかあ？」

香月「ち、ちよつと待った。その前にどうも、癪だなあ、少し提案させてくれよ」

愛田「何か？こんな美女に結婚承諾されて不服かな？香月君」

香月「違うんだ、皆もひどいなあ。今から提案するけど、全員目をつぶってくれないか？少しゲームをするよ、いいかい？その前に愛田、咲田さん、君達は付き合ってるだろ？告白したまえ」

愛田「ああ、全くなんで奴だ。にこやかな顔していて、どうして、分かったの？付き合ってるって」
香月「ふふふ。じゃあ、皆目をつむってくれ、今から五組のカップルを作る」

幸田「参ったな、香月、君って奴は、全く・・・でも・・・分かるかな？ふふふ」

拍手が湧いた後、香月は眼を閉じた彼等の手を取り、カップルとして横に並べた。そして・・・

香月「いいかい、まだ目を開けちゃ駄目だよ。お互い男性は右手、女性は左手を出して。俺が良いと言
うまで、そのまま手を重ね合ってくれ。もし、俺の見込みが違ったら、何でもするよ。良いと言
うまで、少し待っててよね」

眼をつむったまま、香月が作ったカップルはそのまま手を重ねた。愛田と咲田はもう見抜かれてい
たので、後四組だ。

香月「さー、良いよ、目を開けて」

香月の言葉で、眼を開けたカップルはお互いに顔を見合わせ、驚いた。

まっ先に愛田が言う。

「わお！何で、何で？どうして分かったんだい？」

幸田「いやあ、参った、参った。このカップルは、学校内でもクラスは違うし、香月も全く知らない筈
なんだ。言葉が出ない。何で分かったんだい？」

香織「香月君はね、競翔鳩を飼っていて、中学三年生の時、何百羽の中から一羽を言い当てるような、
私のお父さんも言ってたけど、万人に一人の洞察力があるの。きっと皆の視線や、話から想像したんだ

わ。ね、香月君」

香月「まあ・何となく入って来た時から男子六人、女子六人に員数は合つてると言う話から、視線や、話しぶりから想像したんだけどね。ただ、最後の一組は意外だったので、この際どう言う馴れ初めなのか、紹介してくれよ。今日は俺達をひやかす会では無かったと思うしね」

持田が言った。

「でもね、皆の言う事もまんざら嘘でも無いのよ。私が香月君に振られたって話は本当だし、愛田君が私に、そして勝浦君が私に。最初はね、何だかプレイボーイ見たいで、勝浦君の事嫌いだったの。今付き合っている彼にこんな事言うのはおかしいでしょうけど、とにかくとして、香月さんや、川上さんが、ここに居る全員と何等かの関りを持つてるのは事実なのよ。それだけ、貴方達二人は学年の中でも話題を集めて来たの。少しジェラシーも感じているって訳。それに香月君のように、優しく、格好良く、頭良し、スポーツ万能って、それが少しも嫌味じゃない男の人って、あこがれるのは女性として当然でしょ？でも、川上さんが、本当にそれだけ魅力を持った女性だから、誰も二人の間に割り込め無かった。私達の目から見ても、当に理想のカップル。だから、今日の主賓なのよ」

勝浦が続けた。

「そうなんだ。どこに居ても目立つ二人だろ？それじゃ無くても二人に恋心を持った者も少なくなかった。ここに居る俺達だってそうだ。けど、全く二人には割り込む隙など無かったよ。それと言うのも君達が堂々と交際を宣言していたからだ。それに性格の悪い君達だったら、ジェラシーも感じて、色々悪口を言ったり、変な噂を立てたりすると思うんだ。そんな話なんて一度も聞かなかつたし、これで香月に欠点でもあれば、俺達もちよつとは救いようがあつたのに……だから持田美樹があつさりふられたつて聞いた時は、一体・どんな奴なんだろうって、見に行つた程なんだ。お陰で、きつかけがあつて、彼女と親しくなれたんだけど、君達は本当に理想のカップルさ。で・俺、何を言ってるのか分からなくなつたんで、これで終り」

持田がコツンと勝浦の頭をやつた事で、笑いが少し漏れた。香織が言う。

「ねえ、他のカップルの馴れ初めも聞きたいな。だって……一番の親友の京子が南田君と付き合つてたなんて、今日初めて知つたのよ。彼氏が出来たつて話は聞いてただけど、びっくりしたわ」

橋本「御免ね、でも、隠すつもりじゃ無かつたのよ。貴方達のように、堂々としてられる付き合いじゃ無かつたし、それに親しくなつて付き合い始めたのは、冬休みになつてからで、馴れ初めつて言うのは、私が市内のK校の不良達に囲まれて、どうしようつて時に、彼が偶然通り掛かつてくれて、それで、三人の相手から自分の身を呈して守つてくれたの。でも、一切不良に手出しなんてしなかつたの。空手なんてやつてるから、彼らに手を出したら、警察沙汰になるし、私が困るつて。体中傷だらけ、それでも

ずつと私の事を守ってくれたの。そして、その時から、彼は私の一番大切な人になった。それに……これも公表しちゃうけど、カオリンといつもくっついてたのは、勿論カオリンの事が好きと言う事もあるけど、香月君を側で見てられるから。御免ね、カオリン。でも、今だから言えるけど、やっぱり香月君は貴女の彼で、私は憧れていただけと言うのが分かったの。今は、一番カオリンの気持ち分かるの」

香織は一瞬複雑な表情を見せたが、

「よろしい！その正直さに免じて、友情に陰りの無い事を認めます。おめでとう！京子。それに南田君！貴方は立派です。これからも京子は優しい思いやりのある女性だから、仲良くね。でも、命がけで彼女を守るなんて、凄い事だわ、皆さん、拍手、拍手！」

香月も嬉しそうに手を叩いた。日頃無口で、空手に明け暮れていた男がこんな彼女が出来たなんて、心から祝福したかった。香織が言う。

「じゃ、今度は幸田さんに聞きます。幸田さんは、新聞部の部長さんで、色々運動部の人と話す機会は多かったと思うけど、とりわけ女子剣道部の村上和美さんと、お知り合いになった理由は何かしら？それに、幸田さんは情報家で、香月君と学年内でも好ライバルだった訳だし……それと、こんな機会になっちゃったけど、一度私、貴方に言おうって思ってたのよね。私の体操服姿ばかり、全校新聞に載せ

た事あつたでしよ！もう、顔から火が出る程だったわ！」

笑いの渦に包まれた。幸田が言う。

「いや・いや。御免なさい。とにかくとして、我が校としても、皆に出来るだけ多く読んで貰えるように、そんな企画で、一番人気のある女の子？と言うアンケートを取ったら、君がとにかく持田嬢と並んでトップだったんだ。それで、どちらにしようかなーと言う事で、俺の独断と偏見で、君になった訳。でさあ、学生服姿じゃ、つまらないしね。うーゴホン・断っておくけど、これは別に嫌らしい意味じゃなくてー、芸術的見地と言うか、そう、受け取って貰いたい。それに、これは香月君の了解済みだった・よね？香月君」

香月「は？いや・あはははは」

香織「まあ、本当！」

香織は香月の手をつねった。大爆笑が起こる。楽しい会となった。

香月「ははは・話が逸れてるよ、幸田、馴れ初めを聞かせろよ」

幸田「え・ごほん。では、彼女との事を話す前に、香月からやつと一本取れたと、これで俺も胸をなでおろせます。それではお話します。実は彼女・和美との交際は二年の時からです。丁度香月と、川

上さんのさっきの話じゃないけど、学校のヒーロー、ヒロインってテーマで、相変わらず追っかけていたんですが、突然、香月が、剣道部を退部、その最後の試合を木村とやると言うので、一大スクープと剣道場に取材に走りました。あの、インターハイ全国大会優勝の木村とまさに無名の香月が、互角以上の戦いを繰り広げるなんて、とにかく、ここに居る者は皆見ているんで説明しないけど、凄かった。今でも身震いする程だ。それに、あの時の川上さんの献身的な態度、感銘を受けたよ。これは美談だと思っている。それで、原稿を書き直す為に、同じ香月君と中学校の女子剣道部出身である和美の所へ行ったんだ。木村との香月の中学時代も知っている彼女だからね。中学の県大会の決勝戦の事も聞きたかったからだった。でも、和美にはあっさりと断られた。何で？美談じゃないか、何で協力してくれないんだ？と、俺は迫った。でも、駄目、駄目の一点張り。俺もかちんと頭に来てさ、それで、少しきつい事言っちゃったんだ。ごめん、和美・君が話してよ。俺が言うより現実味がある」

村上「じゃ・・恥ずかしいんだけど、言います。私が剣道を始めたのは、香月さんが好きだったからです。この気持ちはずっと変わりませんでした。私は良く男の子に間違えられるほど、おてんばで、勝負な印象がありますが、自分ではそんな事はないって思っています。香月さんが、高校でも剣道部に入部するって聞いた時も、迷わず入部したんです。私はこの中では香月君と唯一同じ中学校出身ですから、もう、中学校からの片思いでした。川上さん、御免なさい。でも、香月君は中学校時代、本当に物静かで、一人図書室で本を読んでいるような人だったの。優等生には違いないけど、大人びているような近寄り難い雰囲気を持っていたわ。でも、私が本当に香月君を意識し出したのは、やっぱり最後に彼が出場した県大会の試合でした。それまで、かなりの実力があるのに、一度も試合に出た事が無く、私はそ

の試合のマナージャーを買って出て。はつきり言って、皆は余り期待してなかった見たい。でも、私はその彼の実力を信じていた。そして、あれよあれよと言う間に県大会の決勝戦まで行っちゃって。それもそこまで全て、一本も相手に取らせない、分殺と言うのかしら、とにかく凄かったわ。皆は知らなかったのよ、彼の本当の実力を。で、決勝戦は木村さんだった。もの凄い試合だったわ、まさに紙一重の差。最後に香月君が足を滑らせてバランスを崩した時、木村さんの捨て身の横面が決まって・・。その感銘と同時に、私には無性に残念って気がして、ぼろぼろ泣いちゃった。香月君がどんなに悔しかったかって思ったの。そして、試合が終って防具を取った香月君の足は、真っ赤に腫れあがっていたわ。そんな足で、木村さんと互角以上に戦ったんだわ。なのに、悔しい筈の彼が白い歯を見せて笑ったの。木村さんに握手をするその爽やかな姿に・・私は、その時から香月君だけを見ていた。見続けたいと思っただ。ううん・・好きだって言えなくて良い。あの爽やかな笑顔を見ていたかったの。高校も頑張っただけで同じこのE高校を受験し、同じ剣道部に入った。私が頑張れば、頑張る程香月君との距離が近くなるって思った。でも、川上さんの出現を知った時、私は凄く悲しかったわ。私なんてどうあがいたって、叶わない、素敵で、可愛い人だから。でも、それでも私は忘れられなかったの、あの笑顔を。ずっと見ていたかったの。あの最後の試合、木村さんは中学校県大会時の、香月君の足の事を知っていて、それで、組んでくれた試合よね。でも、やっぱりあの後、寄り添う二人を見て、私ははつきりと失恋を味わったのよ。悔しさなんてちっとも無かったし、心から二人に心から拍手を贈りたいって気分になった。香月君を変えたのは、やはり川上さんだから。だから、これ程変貌した彼の事をちっとも知らない幸田さんは、美談だって言っただけ、私にはそれが面白半分に興味にしか思えなかった。私の大事な思い出

を壊して欲しく無かったのよ」

香月が何か言おうとする前に、幸田が言った。

「そんな彼女の気持ちを知らない俺はさ、かつとなつて『何だい！君、川上さんの事妬いでいるのかい！』
つて言っちゃまったんだ。その瞬間、彼女から平手打ちを見舞われて・・・その眼に涙一杯の顔を見た時、
俺、本当にしまった・・・つて思ったんだ。本当に香月の事が好きだなんて、知らなかったんだ。それで、
毎日彼女の教室へ行って、謝ろうとしたんだけど、口も聞いてくれない。でも、何とか済まなかったと
言う一言をきちんと言いたくて、放課後も待ち伏せしたりして。その時からだったと思う。俺は謝りた
いって気持ちより、剣道部の女武蔵と呼ばれた彼女の純情で、可愛い面にどうしようもなく曳かれてい
る自分に気がついた。それで、ようやく和美をつかまえた時には、済まないって言葉より、『好きだ』
つて言ったんだ。クールで、通っていた俺だがこんなに一人の彼女に夢中になっているなんて。今では
誰よりも一番大事な彼女さ」

大きな拍手が湧いた。香織の目には涙が光っていた。

「凄いい話だったわ。感動した。村上さん、御免なさい。貴方の初恋の彼を・・・でも、有難う」

「ううん。香月さんには川上さんしか居ない。今では、私も幸田さんと一緒に過ごして行きたいって思

つてる。貴方達のように、お互いに成長し合える交際をして行きたいって心から思ってる」

再び大きな拍手が湧いた。

少し間があり、木村かずみが言った。

「あの・・・こんな話の後で言い辛いのですが、私達の事をお話します。坂上君と知り合ったのは偶然なんですけど、市内の病院なんです。一年の夏に私が盲腸で、入院してたんです。彼の方は大怪我で、二週間の入院でしたけど。私は退屈で、すぐ病院を歩き回ってたんですけど、とにかく喋る事と歌うのが好きで、誰かと喋って無いと落ち着かないし、知ってる人が居ないかなと思ってたたら、大部屋の名札に坂上嘉朗って名前があつて・・・。もしかしてと思つたら、やっぱり坂上君。退屈しきつた顔で、仰向けになつてたんです。彼は大人しそうに見えるでしょ。だから、少しためらつたんだけど、同じ学校で、良く顔を見る人だから。それで、声をかけたの。そしたら彼も凄く驚いた顔で、『放送部の木村さん？』って言う事になつて、私が退院するまで、とにかく時間の許す限りお互いの思つてる事を一杯話したわ。そしたら、彼って凄い物知りで、将来はブラジルに渡りたいなんて大きな夢を持っていて。とにかく意気投合しちゃつたのよ。退院してからも毎日彼の病室へ行くようになって。それから、学校じゃ余り話をしないけど、彼の家が私の家と割と近いと言う事もあつて、交際するようになった訳」

愛田が言った。

「坂上君、彼女ばかり喋って貰ったので、君の気持ちも聞きたくなかった。君は大人しい奴って印象が深いけど、君からブラジル行きの話や彼女の事も含めて話してくれないか？」

香月も少し興味が湧いていた。

「坂上君、良かったら話してくれよ。ブラジルなんて大きな夢だね。そこで何かを栽培するのかい？農大へ進むって事はそう言う事なんだろう？」

幸田が言う。

「俺も興味が出て来たね。でも、香月、君の推理は鋭いのは分かっているけど、機械的に分析したら興味は薄れるよ。まず話を聞こうよ。」

香月が頭を掻いた。

坂上が喋りだした。

「びっくりした。農大進学イコールブラジルで、栽培って発想……。香月君には隠し事なんて出来な

いね。実は、今の香月の推理通り俺の夢は新作物の栽培にある。例えば、枯渇する石油資源に変わる作物。世界中の飢餓に苦しむ人々を救えるような作物。砂漠化する大地を変えられるような作物。幾等でも夢を広げる事は出来ると思う。森林資源が、環境破壊だと一部言われ始めている(当時の話)時代が、もうすぐ現実になるかも知れない。例えば、紙の原料になる植物は一杯あるんだよね。一年草で、成長が早いとかさ。俺は、それを広大な赤土の大地で耕したいんだ。そんな夢を持っている」

香月が真っ先に手を叩いた。

「凄い！共感するよ、実は俺も分野は違うけど、これから、遺伝子工学って言うの？そう言う分野で、君は食物、俺は動物。色々研究したいんだ。君には共感出来る。素晴らしいよ、坂上！」

少し遅れて、皆が手を叩いた。

坂上が今度は聞いた。

「俺だって、聞きたいな、香月。君の、その目的」

愛田も言った。

「そうだよ、その天才的な頭脳は、きっと目的がある、そう思ってた。聞かせてくれよ」

辺りはもう真つ暗になっていたが、それでも、この集まりは最高潮を迎えていた。どのカップルも素晴らしい恋愛をしていた。香織も香月の真の目的を知りたかった。

香月は、少し背筋を伸ばすと、一口茶を飲み、静かに喋り始めた。

その話は、この場に居る全員に人生に於いて深い関りを持つものでもあった。香月の話を語る時、作者は、非人間的理想論に偏る所がある。何故ならば、超人故に絶対達成出来ないものに挑戦し、そして、激しい心の葛藤との戦いがこれから待っているからだ。それを語る時、この場の話が基本にあった事だと、文章を加えました。

全員が静まり返った。

「今更、俺と香織との事を言うより、自分自身の出会いと、運命のような点と線についてお話します。少し長い話になるんで、退屈しないで、聞いて下さい。俺は、確かに中学時代、図書室で本を読んでいるような物静かな男でした。同級生との関係より、自分が没頭出来るものがそこにあったからです。そして、俺は不思議な巡り合わせに出会う事になります。次々と。それは、誰にもそう言う運命って感じる事があるように、俺には、必然のようなものでした。俺は中学三年の時、一羽の怪我した競翔鳩に出会いました。そして、その鳩の持ち主、この香織のお父さんである、川上さん、俺が今所属している競翔連合会の副会長との出会いがありました。その娘さんである、香織との出会い、又、川上氏を通じて、

俺の生涯の目標となる研究をされていた故白川博士に出会いました。そして、その博士の所有していた、競翔界の超銘鳩、『白竜号』『ネバー・マイロード号』との出会いがあります。それは、不思議な点でありながら、一本の線となつて。人が人と出会う時、その人生に於いて、心を揺り動かすような深い出会いがどれ程あるか・・・？俺は、その出会いの全てに大きく心を動かされ、色んな物を教えられ、目標と言うものが出来ました」

少し間が開いたが・・・再び

「あの一羽の鳩と出会わなかったら、俺は、目的も無く平凡な道に向かっているか、S工大受験なんて思いもよらない事に違いない。きっと近くの大学を受験している筈です。今日、君達の出会いや、お互いの夢を聞いて、それは、やっぱり同じなんだなと思いました。人生つて、今からどうだったか・・・なんて追慕するような時間を経て来ては無いけど俺だけ、こうやって、色んな出会いがあつて、お互いの夢を持てる仲間と空間を共有出来たら、もっと、もっと無限に広がるかも知れないよね。俺が、まず興味を持った事。そして感動した事に、白川博士がやり遂げようとした、動物生態学の中で、DNAの世界です(当時の話)その動物のDNAを解析する事です。(*当時、作者は、一切書物読んでいません。自分の発想でした。現在こうやってPCに打ち込んでいますと、こんな事を考えていたのかとびっくりしますね。今盛んに解析が進んでいます)そうすれば、人間の病気や、寿命なんて自在に克服出来たり、変える事が出来るかも知れない。その血の法則を論文化され、S工大の名誉教授もされていた、白川博

士の研究を、俺なりにもつとやりたいって思ったんです。それは、他の大学では出来ません。S工大で無ければ。形あるものは、必ずその姿を変え、消滅します。無から有、有から無。悠久の歴史の中で。俺が目指すものは、形あるものとどめたいって事なのかも知れない。けど、その形を人間の持つ、愛情、勇氣、広い心、感情、英知、誇り・色々な動物が大きな自然と闘って来た歴史で失って来たものを、俺は探って見たいと思ったんだ。出会いとは偶然なのかも知れない。けど、俺の周りで、起こったその偶然を必然に変えられるように、今からの人生を香織と共に歩んで行けたらなあって思っています」

香月の話は、すぐには全員には分からなかった。しかし、いつしか自分達もその夢の中に引き込まれるような感覚になった。坂上が言う。

「香月のやろうとしている事はやはり俺とも共通する部分があるようだ。それで、さつき共感してくれただね？」

「ああ、食料事情って事も、種の保存って事も、あるからね」

香月はそう言うのと香織の肩を抱いた。他のカップルも同じようにお互いの信頼を深めるように、見詰めた。

この日、六名のカップルにとって、本当に影響ある一日となった。最後に愛田がこう締めくくった。

「それでは、皆さん、今日のこの日は大変有意義なものだったと思います。きつと思いで出に残る事でしょう。これからは社会に向かって第一歩です。それぞれに夢や目標は違いますが、この日を記念して、毎年同窓会を開きたいと提案させていただきますが、どうでしょうか？」

全員が拍手した。

「じゃあ・・・やはりここは、生徒会長香月君に命名して貰いましょう」

再び拍手が湧いた。

「・・・えー、それでは、この春を記念して、『春想会』はどうでしょうか？呼び名は当て字ですが、パスワードです」

この日の坂上とは、特にこれから大きな関係を持つ付き合いとなって行く・・・。

脅威の力

既に、春の競翔が始まっていた。百キロ、二百キロに香月も参加はしたのだが、タイムはしなかった。タイムを打っていたら恐らく優勝圏内には入っている帰舎タイムであった。S工大の受験は千名余・一次合格百八十名・狭き門だった。その狭き門に香月は受かっていた。丁度、このレース期間中が二次試験の最中となっていたのだ。そこから百名・今期の合格者が絞られる事になる。それ程難関中の又難関の狭き門の大学だった。その一次試験も、一枚の論文だけ。それがそのまま大学での自分の研究テーマとなるのだから、よほど明確で、完成度の高い論文で無ければ突破出来ない。香月の論文が充分に認められるテーマであったのだろう。周囲も驚いた。この卒業生は、学内で、教授の道を歩む者、世界各国の重要機関に派遣される者。国家機関に派遣される者。普通の学力等と言う物差しでは通用しない。どんな奇抜で難解な試験が会場で待っているかも知れないのだ。香月はこの二次試験の為に、あらゆる書物を読んでいた。

試験場に来た香月は、周りの空気を感じていた。異様にどの顔も張り詰めている。二浪、三浪なんて当たり前。合格すれば、学費も殆んど免除で、将来は約束される。しかし、その狭き門は、卒業生の数に比例するので、今年は僅か百名。その中に高校生からストレートで、受験する者は皆無に近かった。そして・試験用紙が配られた。それを見て受験者は驚きの声を発した。大きな設問が一つあるだけで、何も他に無かったのだ。時間は百二十分。あらゆる動物の中で、その一つを挙げ、人間と比較する論文を完成させよ・と、だけあった。何とも形容し難い一次試験より、更に難しい設問であった。確かに

論文などは、過去の文献を研究していれば、ある程度の言葉は書ける。まして、S工大を受験するような者は、学力等既に充分であるのだから、それを今更審査する必要も無い。また、ただ単に学力が優秀な者もここでは必要無いと言う事だ。香月はしかし、自分の研究テーマを書き始めた。それが認められない限り、自分がこの大学へ進む道は閉ざされるからだ。論分の最後はこう、結んだ。

人間と伝書鳩の歴史・・・劣勢遺伝、優性遺伝、セクシヨナリズム、DNAの研究——と。特に、二十名しか取らない獣医学部は、S工大の中でもシンクタンクと呼ばれるエキスパートが集中していると言う。いかに白川博士が偉大であったか、香月は試験会場を後にする時、空を見上げた、丁度五百キロレースが始まる前の事。柔らかい日差しの中、青い空が広がっていた。その足で、香月は川上宅へ向かった。香織に会う為であった。少し薄化粧をした香織が高校生の時とは、又違う、輝く美しさで玄関に迎え入れた。

「香月君、どうだった？」

「ああ、何とかね。少し・・・外へ出て話さないか？」

「いいけど・・・、ここじゃ駄目なの？」

「今日は天気も良いし、久しぶりに体を動かしたいんだ。試験が終わったし、君とスケートでも行きたいなって思ってた」

「うん！」

香織はすぐ奥へ仕度しに入った。入れ替わりに川上氏が外の配達から戻って来た。

「よお！香月君。久しぶりだけど、今日2次試験だったんだらう？大丈夫かい？」

「ええ、もう、終わりましたから。その内容も論文一枚。思わず、鳩の事を書きました。それが研究テーマとして、有効かどうかは別にして、自分の目標ですから。もし、それで落ちたとしても悔いはありません」

「ん！そうか！」

笑みを受かべて、川上氏は短く答えた。その香月の答えで充分だった。香織がすぐ出て来た。

「お父さん、今日は香月君とデートなんだから、邪魔しないでね」

分かった、分かったと川上氏は店へ戻って行った。

市内のスケート場で、一日楽しく過ごした、香月と香織だった。夜遅くなって、香織を送り届けた香月だったが、ふいに川上氏に呼び止められた。

「香月君、ちょっとだけいいかい？」

時刻も時刻なので、じゃあ、少しだけと言う事で、川上宅から少し離れた小料理屋へ。
すぐ川上氏は言った。

「いやあ、遅い時間に呼び止めて済まない。試験も終わった事だし、少し今春のレースの事を話しても良いと思ったんだ。香織も怒るだろうから、こつちへ来て貰って済まない」

「いえ」

「他でも無いのだが、中間報告の形だけでも、君に言つてこうと思つてね」

「はい、俺からも聞こうつて思つていました。で、どのような結果ですか？」

「ああ、去年は二年連続で私も最優秀鳩舎賞だったが、今年は昨年以上に厳しいよ。百、二百キロでは磯川君が優勝。私も三百キロ、四百キロと優勝したが、やっと十位内に二羽ずつと言つた所だ。しかし、それも全部旧血統ばかりなんだ。」

「へえ・・・で、磯川さんの方は？」

「ああ、良いよ、今年は特に。三百キロも二、五、六位。四百キロ三、四、八位と入賞している。今年結構ジャンプ方式を採用しているようだよ」

「成る程・・・川上鳩舎と、磯川鳩舎の今期の使翔法は似ているようですね。他の鳩舎も分散して、狙いのコースを絞っているようですね」

「その通りだよ。今期は千三百メートル台の分速が多くてね。結構接戦だね」

「そうですね。でも、僕も今期のレース諦めた訳じゃないですよ」

「えっ？だって君は二百キロで中断しているんだろう？」

「いえ、百、二百キロは佐野さんをお願いして、参加だけしました。で、実は三百キロのレースの最中にトラックの運転手をお願いして、独自に四百キロの放鳩訓練をしました。全鳩帰還をさせています」

「驚くね、君は本当に。で、その目的とは？」

「隠すつもりはありませんが、今晚はもう遅いので失礼します。それをお話しする前に、川上さんにご相談しなければならぬ重大な事があります。試験の通知が届くのは来週ですので、七百キロのGPまでにはお話ししますから、この場ではご勘弁ください」

「仕方が無いね。分かったよ、その時まで待っているよ。遅くまで付き合せて悪かったね」

この時の香月には、ある考えがあった。百キロ、二百キロと何故、佐野に鳩を預けたのか、それは、例の子鳩が他の会員達の目に触れる事を嫌ったからだ。そう・香月は例の子鳩を・競翔に参加させていた。川上氏は、香月程の男が、何の裏づけも無く競翔に参加させる筈が無いと思っていた。勿論川上氏の脳裏に、その子鳩が競翔参加と言うカードは全く入って無かった。種鳩にするのだろうか・そう思っていたらからだ。それは、他の連合会のメンバーも同様の事であった。佐野を除いて。

香月はこの時苦悩していた。例の子鳩の圧倒的な潜在能力を。百、二百キロでもタイムを取ってれば、ダントツの優勝であった事を。今期を次代の種鳩ピン太、グランプリ号×シューマン系交配の仔鳩だけに切り替えていた香月は、少数精鋭主義だった。実際、子鳩も多く取って無かった。川上氏は、今期香月の参加はもう無いのかなと思っていた。だが、この時・香月の思惑は・その川上氏の読みを

遥かに超えるものであった。

香月はその仔鳩の能力を危惧していた。短距離をセーブ出来ないその力は、先天的な長距離タイプの素質を中距離競翔鳩として終らせてしまうだろう。・・・素質を自ら潰してしまうのでは？・・・そんな危惧であった。その体はもう成鳩のものに近く、茶褐色の羽色だが、暗い選手鳩鳩舎の中では、夜目が利くのかと思う程、爛々と光を放つ。その瞳は『白竜号』のような、瞬間の燃えるような気性の鋭いものを感じた。そして、ますます密になる羽毛と、手に取れば、体がぐにやりとする程柔らかい筋肉は、「ネバー・マイロード号」を受け継いでいた。まさしく、仔鳩は超銘鳩の両親の最大の特徴である資質を持って生まれて来たのだ。更に、茶褐色の羽色でありながら、胸には、紫の光線によつては光が反射し、眼の輝きと相まって、蠢く竜に似て・・・。香月はこの仔鳩に「紫の竜・・紫竜号」と命名していたのであった。これが、紫竜号伝説の始まりだった。

そして、七百キロGPを持ち寄り前に、S工大から、連絡が入った。二次試験の通知でその時点で合格を八十パーセント確信した香月達であった。両親、川上氏に報告した後、最後の面接試験に香月は向かっていた。

「そ、そうか！」

超難関S工大二次試験の合格通知を香月から報告された父は、そのまま口を真一文字に結んだまま一筋の涙を。母の両手を覆い、肩を震わす姿を見て、彼はこの時、初めて周囲の人に涙を見せていた。彼

の努力がこれまでいかにほどであったか、知る香織と又川上氏達も当然の如く喜びの涙を見せた。どんどんと、香月、そして、紫竜号はその運命の波に引き込まれて行く。誰かが操るように・深く、更に深く・・・。

面接は、極めて短時間で簡単な質問形式だった。その面接官は、S工大教授陣の中でも特に高名な動物生態学の権威である、桑原善一郎教授であった。

「君は十八歳かね。若いねえ。過去にもほとんど高校からストレートに入学した者は居ない。君の論文を見たけど、やはり専門的見地からは、厳しいと言う指摘もあったが、実にユニークな発想だった。興味深いので、一つだけ質問するよ」

「はい」

やや、緊張しながら香月は答えた。

「君は、人間と鳩とはどちらが優れていると思うかね？」

難しい質問だと思って緊張していた香月だったが、その質問に笑顔で答えた。

「はい、勿論人間と言えますが、能力を最大限に引き出す力は、鳩の方が優れています」

「はっはっは。こりゃいい、はっはっは。君はなかなかの科学者のようだ。楽しみに待っているよ。私の講義を受ける事になるから、是非生態学の研究室のチームを希望してくれたまえ。数少ない研究員しか居ないが、出来るだけの設備と資料を用意しよう。はっはっは。」

「え！」

何と、面接一発で香月の超難関S工大の合格が決まったのである。桑原教授の思いがけない言葉で、香月は感激した。大学でも特に名の通った教授にチームに加わってくれと言われたのである。それだけ、香月の研究テーマが、認められたと言う事を意味するのだ。こんなに順調に……全てが歯車のように回転して行く。不思議な一致と共に。

そして、七百キロGPの持ち寄り前日だった。香月は、川上宅へ合格祝いで呼ばれていた。香月はこの日重大な決意も胸に秘めながら……。楽しく談笑しながら、香月は香織からプレゼントのペアのネックレスを首にかけて貰った。

「有難う・香織。有難う御座います。川上さんご夫婦に感謝します」

「何を言うんだ。君の努力だよ。君の頑張り、香織からも、そして私達も良く知っている。本当に良く頑張ったね。おめでとう！こんなに早く合格の声を聞けるとは、正直思わなかったよ。これは君の努力以外のなものでもない」

「そこまで仰られると。感激も一塩です。でも、この合格はここで川上さんとの出会いが無ければ、あ

りませんでした。僕の方こそ、夢に向える喜びに感謝します」

「謙遜だよ、君の何事にも妥協しない、全力の努力の結果だ」

香織が少し頬を赤らめて言った。

「私ね、きつと香月君は受かるって思ってた。人の何倍もの努力を知ってるから。夢に向かっているから」

川上氏が言った。

「夢って何だい？」

香織が制する。

「駄目よ。これは私と香月君の問題なの。今は内緒よ」

「ははは。分かった、分かった。ところで香月君、この前の話なんだけど・・・」

「はい、実は俺も今日お話ししようと思っていました。明日が、もうGPの持ち寄りですし、俺もこれで、全力でレースに集中出来ますから」

「うん・・・聞こう。君の狙いは何だね？応接室へ行こう。香織・・・後で、茶を運んでくれ」

「はい、はい・・・。」

母親と香織は目を合わせて笑った。父親と仲の良い娘の夫・・・と言う、将来の姿を想像するより、長男がこの家にずっと居るような感じでもあった。

「で・・・？君の四百キロ訓練はこのGPの為で、海添いの帰還コースを想定してのものと分析するが、そう言う事だね？」

「はい。今年は選手鳩の数を減らしました。小数精鋭主義にして、四百キロを二回、訓練しました」

「いつもの連合会主催の四百キロレースを嫌ったのか？それとも新たな帰還コースの選択かね？」

「いえ、四百キロレースは重要なコースと認知していますが、例えば、その天候が崩れた場合には、やはり大きな負担が鳩に掛かります。その後のレースに影響があると思うのです、昨年の磯川さんのように。なら、七百キロ帰還途中にある、山沿いか、海沿いのコースを選択する事になります、分速を求めらるなら、断然海沿いのコースが有利です。その為、丁度分かれ道に当たる地点での放鳩訓練をしました。鳩の帰舎は大きく、差が出ました」

「ふうむ。やはり海添いが有利だったかね？」

「いえ、結果十二羽に絞ったのですが、はつきり分かれました。若鳩は、海のコース、経験鳩は山沿いのコースを辿ったようです」

「ほお・・・。しかし、何故それが分かるのかね？」

「丁度、芳川さんが、春休みで戻って来ていて、帰舎時間にあたる頃、山沿いのコースで観察して貰いました。」

「へー．．．そこまでやったのかい．．．ところで芳川君は元気かい？」

「はい、ここまで鳩に熱心な俺を見て驚いてましたけど．．．ははは」

「ははは。そうだろうね。やはり海沿いが早かったかね？」

「それが．．．」

「それが．．．？何かあるのかね？」

「「羽だけ例外の鳩が出ました」

「ほお．．．山沿いを通って、早く帰還した鳩が居るのかい？」

「はい、例の仔鳩です」

「えっ！君は種鳩にしたんじゃ無かったの？何で．．．？」

川上氏の顔色が変わった。その、非常に驚いた様子に香月の方が困惑していた。

「どう．．．されました。子鳩．．．紫竜号と名付けましたが．．．」

「もう、二度と得られぬ銘鳩の仔鳩．．．日本記録の文部杯全国制覇で、種鳩にするって君は言わなかったのか？」

川上氏の顔色は冴えなかった。先刻まで、談笑していた顔だったのに。

「いえ・・確かに全国優勝の後、レースは中断しましたが、それは、紫竜号の体がまだ出来ていない事と、自分の秘めたる力をコントロール出来ない、その危うさを感じたからです。既にもう一才半になって体もかなりしつかりして来ています」

「聞くよ・・紫竜号の素質を君は何と見る？」

少し恐い顔であった。香月は、答えた。

「・・典型的な長距離鳩だと・・そう思っています。それも、頭抜けた・・。まさに、ネバーの体です」

川上氏の顔は青ざめた。

「どう、されました？お気分が悪いようなら失礼しますが・・」

香月は、川上氏に氣遣った。

「いや、良いんだ。体は何とも無い。もう少し聞かせてくれないか？紫竜号の事を」

「はい・百キロ、二百キロとタイムは打ちませんでした。ダントツの分速で戻りました。タイムしてれば、優勝してました。あ・これは、前に言われたような事ではなく、俺自身がタイムを打つ管理が出来なかったからです」

「それは、承知しているよ。しかし・そんなに早かったのかね？」

「はい、後続を十分、二十分を引き離しての・思うに、豊かな副翼の揚力によって、上空高く舞い上がり、気流に乗ると言う典型的な資質が備わっているようです。つまり二回の四百キロ訓練でも同じでした」

「・・・では、昨春を中止したのは、その能力を危惧しての事かね？」

「そうです。紫竜号は自分の能力を全くコントロール出来ていません。これは、若鳩の体力のまま今後の競翔に参加させたら、命の危険があると思っただからです」

「なら、そのまま引退させたら良いのでは無いか？君の鳩舎には、他にも新しい血が活躍出来る土壌が育っている。紫竜号を失う事は鳩界の宝を失う事にならないだろうか？」

「・・・はつきり申し上げて良いですか？」

「ん・・・何だね？」

「いつもの師匠の顔では無い・・・少し恐いです」

鋭敏な香月は川上氏の顔色を読んだ。慌てて川上氏は表情を取り繕った。

「ははは。思い過ぎだよ。疲れているのかも知れん。君の合格祝い、少し飲めない酒も過ぎたかな？」
「又・・・今後の事は相談致します。鳩の話はここまでにします」

「ああ、分かった。君がG Pの最有力候補になるのは間違いないさそうだ。それだけは言えるよ」

香織が茶を持って来て、また談笑が始まった。その同じ時間、香月の家でも両親が祖父の仏壇の前で、祝杯をあげていた。

「親父！やったぞ、一男が。あんたが目に入れても痛く無い程可愛がっていた一男が合格したんだよ、S工大へ。母さん、本当に良かったなあ」

「ええ、何度思い留ませようか、悩みました。けど、あの子はいつの間にかこんなに成長していたんですね」

「ああ、二年になって、殆んど睡眠時間も二、三時間だったよな。あの子のあの頑張り、どこから来たのだろう」

「あの子が変わったのは、香織ちゃんのお付き合いもあります、白川さんでしょうね。毎日話してくれましたよね、白川さんの事。それが大きな目標になったんだと思います」

「そうだな。本当に良い付き合い、良い出会いだよ」

「一緒になるって言い出すのが楽しみです、香織ちゃんと」

「まだ、早いよ、それは、あははは」

両親は笑った。

この夜、香月は重大な事を川上氏に相談出来なかった。それは、きつと愛鳩家の氏からは、大目玉を喰らうような途方も無い事であった。しかし、話の途中から顔色が悪くなつた氏に、何も言えなかった。香月は、ある試みを紫竜号に対して実行していた。それは、もしかしたら紫竜号を失ってしまうかも知れない、無謀なものでもあった。

次の日、持ち寄り場所に十二羽の鳩を連れて来た香月を見かけて、磯川がすぐ近寄つて来た。

「よお！香月君。GPに参加するのか！忙しかっただろうから、もう君の今春の参加は無いなって思っていたよ。大学受験の方、どうだったの？」

「ええ、合格しました」

「そう！おめでどう！君・・・知らなかったんだけど、S工大を受験したんだってね。凄いね！」

周りの学生達が集まった。わいわいがやがやと香月達を中心に話題が盛り上がった。

「で・・・いきなり七百キロへ持って来るのは、狙いはGP？それとも、この後の長距離狙いかな？」

磯川は真の狙いを即座に見たようだ。香月は笑った。

「隠せませんね、磯川さんには。ええ、今春の俺に出来るベストの調整をやってきました。仕上がりには少し自信があります」

すぐ側に居た北村が言った。

「うん・・香月君がこれ程言うのは珍しい。余程の裏付けがあつての事だろう。過去D地区Nの総合二位もある事だしね。特に今年の場合、前年追加された、KCが面白い事もあつて、参加羽数は減っている。川上さんの所の昨年度の全体総合三位と言う記録もあるしね。地域的には不利な我が連合会でも、充分総合優勝のチャンスは出て来た訳だよね」

北村は今や、連合会の中堅クラス、若手の面倒見も良く「兄貴」と慕われている。そして、そのまま閉函時間となつて、すぐ香織の所に向かった。昨夜の事もあり、近くの喫茶店で談笑する二人であった。

「ねえ、香月君、大学へ通うのはどうするの？」

「自動車の免許を取ろうつて思つてる、今まで、そんな余裕も無かつたからね」

「私の場合、冬休みになんとか教習所に通つて受かつたので、学校へは自動車で行くわ」

「橋本さんと一緒だから、心強いよね」

「うん、香月君の大学の方はどうなってるの？」

「ああ、通常の大学と違ってさ、国家公務員のような施設だから、週に三回、講義の他は、自分が所属するチームでの研究自体が、そのまま一学科のようになっている。だから時間的余裕はあるんだ」

「でも、その分厳しいんですよ？」

「ああ、卒業までに論文を完成させないと、五年、六年、最長七年間は大学だ。」

「その論文が完成出来ないと？」

「卒業出来ない・・と言うか、ただ卒業しても、普通の大学での修士課程と同じ資格にしかない。その場合国家の仕事には従事出来なくなる」

「貴方は？」

「俺は、獣医になりたいんだ。でも、そうなるには、何年か、国が指定する機関で働く事になるか、教授としてS工大に籍を置く事になる。その為に、学費の免除や、研究費が出る訳だからね」

「本当に特殊な大学なのね」

「ああ」

「大学に残るって方法もあるんですよ？」

「それも、ある。教授の道だね。でも、俺は研究より、より多くの動物と触れ合いたいんだ」

「応援するわ」

別れ際、二人はいつもの公園で、唇を重ねあった。香月は、もう既に大学へ通いながら香織の通う短

大側のペットショップでのアルバイトが決まっていた。そして、その主人は強豪風巻連合会の競翔家、日下部四郎と言う人であった。細身で長身、口に髭を蓄えた、お洒落な人だ。この人との縁も、後に香月の競翔家として多大な影響を与える事となる。

二日後の放鳩を前に、香月の心には大きな不安があった。紫竜号の帰舎についてである。香月は、典型的な超距離鳩として天分を持つて生まれたその資質を、短距離で使い果してしまう危惧ゆえに、敢えて紫竜号の体重を八十グラムも殺ぎ落としていたのだった。何故？愛鳩家を自負する香月が、こんな無謀な策を講じたか・・・その訳は、その計り知れない紫竜号の、突出した方向判断力と、圧倒的なスピードを生む筋肉にあった。生まれながらの長距離鳩の資質を、持て余すように使ってしまう紫竜号をこのままで使翔してしまうと、中距離競翔鳩として、スピードバードの称号は得るかも知れないが、それで終ってしまう危惧を持ったからだ。確かに、無謀な試み・・・しかし、それに成功すれば紫竜号は大きな成長の一步を手に入れる事になる。師匠川上氏ならどう使翔するだろう・・・香月は考えた。きっと、中距離鳩で成績を残した後、種鳩にするだろう・・・と。香月はそうは思わなかった。あの・・・白竜号と出あった衝撃・・・それは、「わしはまだ飛べるぞ！」そんな声が自分の心に響いた気がした。ネバーを見た。この完璧な超長距離競翔鳩が。何で最終のGNで、その力を十分に發揮出来ずに、引退してしまつたのだろうか・・・と。紫竜号が、今・・・成鳩目前の体になって思った。この目は、「まだ飛べるぞ！」その両鳩の遺志を受け継いで生まれて来たのだと・・・この紫竜号を育ててくれと言う、白川博士の遺志を持って生まれて来たでは無いかと。それは、香月にとつての義務では無いか・・・と。それ故に、香月には辛い選択だったが、無謀を承知で実行したのだった。

人間の歳に鳩を当てはめてみたらどうだろう・・・？香月は思った。通常競翔鳩は、三歳、四歳をピークに下降線を辿って行く。しかし、年齢を人間に当てはめて見るならば、鳩の寿命を十五年として、五歳は人間の二十七〜三十歳に相当する。長距離ランナーなら、その年齢はピークの熟年期で、一番力が発揮出来る歳である。しかし、何故多くの鳩は、その年齢を境に下降線を辿るのだろうか・・・。香月は、磯川の使翔法も推理して見た。昨春は、紫竜号を四百キロまで見合わせ、その秋にも七百キロを使翔するかも知れない。そして、この春はもう千キロへ挑戦させているだろう。そして、四歳時には、もう種鳩として、引退させているかも知れない。しかし、紫竜号の母鳩ネバー号は七歳にしてなおも現役で、千キロを先頭集団で飛び帰っている。それも、最遠の地区でありながら。その成績は熟年期の長い競翔鳩の証明である。遅咲きの血統は、むしろ白竜号の方だ。白竜号はまだ若鳩の体力で、千二百キロを翔破したのであった。一方ネバー号は、得意である筈のフルマラソンに参加せず、三重キロレースに参加。今から力を発揮するであろう距離で・・・中断・・・。香月は、その疑問を抱いていた。しかし、並外れた競翔家である白川氏だから、きつと何かの目的を持って使翔したのでは無いか・そう思った。

いかにしても、人のちっぽけな考えや思いなど、自然の中では、風に揺るぐ木の葉のようなものに過ぎないと思うが・・・。香月は推理を根本的な所まで追求し始めて居たこの時であった・・・。そして、薄曇の天候であったが、放鳩地は快晴と言う事もあって、定刻の七時に放鳩された総数五万八千余羽の鳩は、鳩舎に向かった。幾分競翔が増え、参加羽数が分散されて、少し参加羽数が減ったGPとは言え、国内での最大のレースである事には変わりはない。香月の読みが成功するかどうかは、結果が出ないと分からない・・・しかし、それを見るには絶好の天気ともなった。

香月が最短距離コースと見ているのは、地図上海沿いで七百八十キロ、山沿いコースで八百六十キロ。過去のレースで、上位に食い込めなかった距離の差がここにあると香月は見た。五百キロレースの分速において千六百メートル台が出て、何で二百キロ増えたGPで、分速が千二百メートル台に落ちるのかと・・ほとんどの帰舎コースは、山沿いを通る事にある。しかし、海沿いを通ると、距離的有利があると言っても、鳩は先天的に海沿いを嫌う。それは、気圧の関係、風の関係、猛禽類等の関係がある。単独で飛ぶより、大羽数で飛び帰る方が危険は少ない。且つ、安心出来る。鳩とは集団で、生活する動物だからでもある。当然、当日帰れない鳩も出て来る。となると、経験鳩の集団はやはり山沿いのコースを通る。香月の計算はこうだった。

1、海沿いの実距離七百八十キロメートル

十時間費やしたとして、五時帰舎。

2、山沿いの実距離八百六十キロメートル

十一時間四十分費やして、六時四十分の帰舎

3、もう一つ山岳超えがある。こちらは、八百二十キロメートル
十時間四十六分で、五時四十六分の帰舎。

日没が七時前とは言え、当日帰って来られる鳩の帰舎タイムはこうも違うのだ。つまりこの時間で戻っても、優勝圏内には到底入れない。いかにトップレーサーの飛行速度が高レベルであるか。香月は分

析していた。

しかも、参加地区には最短六百六十キロの鳩舎もある。最長で、九百キロ近い位置にある鳩舎が圧倒的に不利な事は言うまでも無い。

香月は、三時前から鳩舎の前で、待っていた。不安で仕方が無かった。読み通り展開するなんて事など考えてもいなかった。見えないレースが見える競翔家などありはしない。一步でも鳩とシンクロナイズする為に競翔家は推理するのだ。今回の香月はもう一つ読みがある。山沿いを通る鳩は、帰還地近くに発生する乱気流の発生に影響されると言う考えだ。つまり、本年度のGPを制するのは、海沿いを通ったごく一部の鳩達である」と。

香月が時計を見た時は四時半を差している。香月は密かに二羽の鳩に期待を持っていた。一羽がピン太×リリー号の子。もう一羽がグランプリ号と、マロン号の子であった。ピン太号の子は百キロ二位、二百キロ優勝、三百キロ四位、六百キロ優勝。グランプリ号の子はムラがあるが、百キロ三位、六百キロ二位、KC八百キロ、会長の総合優勝の陰には隠れたが、堂々連合会三位、総合三十六位になっている鳩であった。第二期の当たり配合の子鳩達でもあった。愛称も既について、「ヒロ号」「シルク号」だ。又、今回他の十羽全鳩が、いずれも各距離で、優入賞を果たしている記録鳩群である事に、香月もかなりの自信を持っていた。ただ・・紫竜号についての大きな不安以外は・・。なお、ピン太号、グランプリ号と同じ源鳩配合の子もまだ二羽健在であった。特に勢山系の血を濃く受け継いだと見え、昨春の千キロ記録もしており、今春のGN候補だった。その待っている香月の前の突然二羽が、舞い降りた。それは余りに突然の帰舎だった。

呼び込む間も無く飛び込む二羽を、同時にタイムする香月だった。それもすこぶる二羽の元気が良い。やはり期待した、ヒロ号と、シルク号だ、香月は嬉しかった。動揺する気持ちを隠せなかった。その香月の頭上に又一羽が舞い降りた。その鳩を見て・・・香月は背筋が凍ったのだった。

それは、紫竜号であった。何故だ？香月は、驚愕した。しかし、気持ちと裏腹に体は反応する。ゴム輪を外して殆んど無意識の内にタイムしていた。その時香月は空白の瞬間から覚醒し、時間を見る。ヒロ、シルク号をタイムして、一分も経て無かったのだ。再び彼は驚愕した。こんなに早く紫竜号が帰って来られる筈が無い。ギリギリの体力のコンディションで、海沿いの高速コースを・・・？・当日帰って来られる確率とて低かったかも知れないのに・・・。七百キロを飛び帰る限界の体力であった筈だ。流石に止まり木で座り込む紫竜号を見ながら、香月は時計を再確認した。更に驚く。五時十分前であった。と言う事は、GPの優勝タイムの千二百メートルをクリアしている事になる・・・三羽とも。香月は自分の予想すら遥かに飛び越えた紫竜号の持つ脅威の能力に、恐怖に似た気持ちさえ覚えたのだった。しかし、香月は勤めて、冷静に分析しようとした。この紫竜号を完全な体力のまま参加させていたら、どんな大記録が生まれたかも知れない・・・否・・・それは結果論に過ぎない。香月は考えた・・・。持って生まれた天性の広く、密集したその副翼は、紫竜号の体を上空高く舞い上がらせて、気流に乗ったのである・・・。その体重を絞り込んだ事で、かえって浮力が増し、紫竜号は気流に乗ると言う事を得たのである・・・それは、確かに香月の試みに叶った事・・・しかし、その方向判断力、潜在能力の余りの凄まじさに、その香月自身が恐怖したのだ。ようやく冷静になりつつある香月の鳩舎に、次の帰還が、五時三十分に一羽、続いて三十五分に一羽、六時十分になつて又一羽。第一配合の子達二羽が同時に帰つてのを見届け

てタイムを完了すると、まだ誰からも電話が無い事に不安を覚え、川上氏に電話した。
電話に出たのは、香織だった。

「香織？俺・・・川上さんは？」

「お父さんは、今ブザーが鳴って、鳩舎の方に行ったわ。すぐく帰りが遅いからって心配してた見たい。
呼んで来ようか？」

「いや・・・いいよ。それじゃ、すぐ俺がそちらへ向かうんで、家の中に戻って来たら言っといて」

受話器を置くと、香月は自分の予測した事が現実となるのを感じた。今、十二羽参加中七羽帰舎していた。もう陽は落ちかけて当日帰還は望めそうも無い。しかし、それにしても川上氏が五十二羽参加で、この時間にまだ帰舎中とは珍しい事もあるものだ・・・香月は思った。当然、前年度GP総合三位の川上鳩舎は、優勝候補筆頭の筈なのに。既に、使翔も三年目。白川系の真価が発揮する年であり、得意の距離である筈・・・何故？香月は思った。香月はオートバイのアクセルを強く握った。

しかし、その川上氏は平然としていて、一羽の帰舎に喜んでいて。香月から言い出した。

「あ・・・帰舎が悪いようですが・・・？」

川上氏はしかし、笑顔で答えた。

「いや・・そんな事は無い。分速千百メートルも出ているんだからね。それにしても、良く、当日帰って来たよ。他の鳩舎でもほとんど当日帰って来ていないようだから、君の所は特別だけど、今連絡があって、私と君を除いて、連合会で二十四羽しか戻って来て無いんだよ」

「そう・・なんですか？でも・・」

「原因はあつてね。実は、七百キロの持ち寄り前に鳩舎に猫が出没してね。幸い被害は無かったんだけど、鳩が怯えていてね。状態としては良くは無かった。今春今一つなのは、猫のせいだと思う。もう少し早く気付いて居れば・・。鳩舎から外が見えないように、仕切りも作って何とかやって見たが、間に合わなかったようだ。ま、でも、解決したし、これから徐々に鳩も落ち着くだろう。今日は一羽だが、入賞圏内。明日何羽帰って来るのが、私としては心配だよ」

「そうでしたか・・。」

「で・・？君はかなり良かったようだね、思惑通りだったかな？」

「ええ、十二羽中、七羽今日タイムしました」

「ほお！それは凄い！ダントツの帰舎率の上に早そうだね、何時？」

「ええ、早いのが、五時前・・それで三羽。後はバラバラで、最終的に六時十分前に二羽で、七羽なんです」

「君がGPを制した・・か。恐ろしく早いタイムだね。分速千二百メートルだと、総合一桁は確実だろう、それも三羽なんて。ははは。参ったなあ。君には」

川上氏は笑った。

「でも・・・他には？」

「君の次・・・と言うと連合会では渡辺鳩舎が、五時二十五分頃と聞いている。渡辺さんの所も新血統が活躍しているようだね。今年は特に強いよ、この鳩舎は。とにかく、連合会で君と私の所の帰舎を加えて、やっと当日三十二羽だ。GPレースの七時放鳩つてのは、しかし、鳩には酷だよね。特に今春の君の読みだと、四百キロで体力を消耗した鳩は、この七百キロで更に、体力を削がれる事になる。むしろ、明日戻って来る鳩の方が心強いよ。その鳩達が山沿いコースを取った大多数の鳩群だからね」

川上氏は読んでいた。香月の試みを。ただ、その四百キロを経験させている鳩と、させていない鳩は、過去に置いての帰還率も違う事も、データは証明していた。香月はそのデータを知りながら、敢えて、違う事を選択したのだ。

「ああ・・・そうだ。紫竜号はどうだったの？」

「それが・・・その三羽の中に居るんですよ」

「何と！・・・」

川上氏は非常に驚いた顔をした。

「俺は、今回は非常に難しいかな・・・と思っていました」

「ふううむ・・・。血は争えないと言うか、銘血は裏切らないと言えば良いのか・・・で、特別に訓練はした訳だ。君の事だから」

「はい・・・夜間訓練はしました。短距離なんです、五キロ位の訓練を二回」

「ほお・・・夜間訓練については否定も肯定もしないが、色々君もやっているねえ。」

香月は、今回のもう一つの重要な事を川上氏に言い出せなかった。それは、初めて、師匠に秘密を持った事であった。この事が後に重大なものに繋がるとは、この時点の香月と川上氏には知る由も無かった。

「ところで・・・磯川さんの所の情報はどうですか？」

「いや・・・当日帰舎は無いようだね」

「やっぱり・・・」

「やっぱり？何で君が分かっているんだい？」

「磯川さんは、今期全レースに優入賞果たしていますが、ジャンプ方式に少し不自然さを感じたんです」
「どう言う？」

「はい、百キロ、二百キロと参加したら、三百キロと参加させるのに、今春は五百キロヘジヤンプして
います。それは昨年の轍を踏まない為か・或いは・・・」

「或いは・・・？聞きたいな。ははは」

「少ない参加って聞いていたんです。これだけ羽数を制限していて、ペーパーマン系が入賞圏内に居ない
のが、むしろ不思議ですよ。GP狙いで無いとするなら・・・」

「考え過ぎじゃないのかい？確かに脅威の飛び筋だが、主力を分散しているし、そんな事は無い。結果
もこれまで出して来ているよ」

二日目に開函となって、香月のタイムに話を持ちきりとなったが、その開函間際に磯川が鳩時計を持
ち込んで来た。磯川が当日帰していると言う報告は、入っていないかったのだ。香月が訊ねた。

「磯川さんも当日帰されていたんですか？」

磯川は怪訝そうな顔をしながら答えた。

「ああ・・・七百キロは重要なレース。何だい？おかしな顔をして。それより、今春二百キロで中断して
いた君がこの場に顔を見せている事の方が脅威だよ。どんなマジックを使ったんだい？」

磯川は、少しおどけたように言った。むしろライバル復帰が嬉しそうでもあった。

「で？何時だったの？自信があるって言っていたから、早かったようだね」

「ええ、五時十分前でした。」

「凄く早いね。そりゃ驚くよ。俺が六時十分前だから、君の所と一時間も差があるよ。何で？って俺が聞きたいよなあ」

「それで、何羽参加だったんですか？少ないとは聞いていますが」

「ああ、五羽だよ。それで、当日二羽だ。今日は全鳩戻って来たよ、朝に」

「そうですか」

「君の中間訓練が上手く当たったようだね」

「えっ・・自分は訓練の事は言って無かったですが」

「その位分かるよ。じゃなきゃ、こんな差が出る訳ないさ」

「でも、磯川さんの主力は五百キロからジャンプでしょ？」

香月が言うのを、磯川は眼を丸くした。

「ふふ・・相変わらず恐い奴だなあ。去年の轍は踏まないように、今年は四百キロには少なく参加させたい。主力は三百キロから五百キロに持って行ったよ。四百キロも俺は今シーズン独自に訓練した。ちよ

うど平野部と、山沿いの分かれるコースの川沿い訓練をやったんだ。」

「・・・流石ですね。同じ狙いと見ました」

香月は改めて、磯川の並々ならぬ視点に驚いた。今後最強のライバルとなる事を確信したのだった。

「同じ狙いだって？ふふ」

磯川は笑った。

「QC、KCと、CHですね？」

香月は言った。

「ははは。半分は合っているが、QCやKCには興味は無いよ。君は狙っているのか？そつちを」
「え・・・まあ。」

「GPは君に敗北したが、それはどうやら、君と俺の中間訓練の設定が違うからかも知れない」
「どの地点でやられましたか？」

香月が聞いた。

「ああ、厚木だ」

「成る程、僕も考えました。その地点は放鳩地と、自鳩舎の位置関係で、帰舎コースが丁度台形の形になりますね」

「そうなんだ。で・君は？」

「私も入れてくれよ」

川上氏が、にこにこしながら会話に参加して来た。

「俺の場合は五条浜です。二回とも」

「ほお・それは盲点かも知れないな、でも、二回とは？少し多すぎないか？」

川上氏が言った。

「いえ、実は二回やったのは条件をマッチさせる為でもあったんです」

「条件？一つ言わせて貰うけど、そのコースは、春は通用しても秋には通用しないと思うぜ」

磯川が質問しながら、指摘もした。

「その事も、考えました。でも、充分通用すると思います。何で選んだかと言いますと、当日帰れない鳩は民家の集中する地点に休息出来ると言う想定で、磯川さんは考えられたのだと思います」

「その通りだ。それに、海沿いは風が強く、特に南西風は危険だ」

磯川が言うと、川上氏がその磯川を肯定するように続けた。

「確かに、私もそう思う。現四百キロレースは、難コースだが白川さんが提唱されてから、GNの帰還率が飛躍的にアップしたコース。回避する人も居るが、その価値を君は承知している筈だよ」

「はい。それは、そうだと認識しています。でも、今回の俺の狙いはCH以降では無く、GPにあります。磯川さんは、その後でしよう？」

「は・は・俺の狙いを最初から見越していて、君はそこまで考えていたか・成程。納得はしたよ。しかし、それでも俺は選ばないね。何故なら・今度は霧だ。春には多く発生するよ、海沿いは」

「同感だ」

川上氏も答えた。

「その為に霧の条件を選びました。だから二回になりました」
「あっ！」

磯川が声を上げた。川上氏も呆れながら首を振って言う。

「君と言う人は……。成る程……。それで、念入りに夜間訓練までした訳かい？」

「何？夜間訓練も……。？驚いたなあ……。そこまでやるのかい？香月君は。それじゃ、七百キロGPに負けて当然だ。スピードボードが制する筈だよ。」

磯川は納得した。

「ただ、現四百キロを否定する気は全くありません。そのコースを経験している鳩は、超距離鳩と言う認識は持っていますから、今後はスピードボードと、長距離鳩は分けて参加させますよ」

「ははは……。しかし、CH狙いなら、俺も充分に今度は戦える、「パイロンエース号」も順調な仕上がりにだね」

磯川はそう言いながら帰って行った。川上氏も、明らかに変わった磯川に目を細めて、嬉しそうだった。そう言う自分も、残る三大レースには主力を温存している。自信も持っていた。

そして、数日後、香月のGP総合優勝、二位、八位と言うビッグニュースが飛び込んで来た。参加総数五万七千三百四十二羽中に当日僅か二千四百六羽打刻と言う中で、三羽も総合十位内に入賞させたのだ。それも、香月は他にも、総合三十六位、百六位、三百五十六位、八百九十位と十二羽中七羽も当日打刻しており、特筆すべき快挙でもあった。

この事で、香月は再び愛鳩雑誌社の取材を受ける事となった。その時、既に、香月も覚悟は決まっていた。文部杯全国総合優勝二回。そして、過去GPレースで、三羽も総合一桁に入賞した鳩舎は皆無。その特出した記録が話題にならない筈が無かった。

総合一、二位のヒロ号、シルク号は勿論の事、紫竜号と言う、頭抜けた鳩の成績が注目されない訳も無かった。

天才競翔家と奇跡の超銘鳩紫竜号の歴史は今からスタートするのだった。

雑誌社から取材日程の連絡で電話が入ったのは、それからしばらくしての事であった。取材記者の名前は、片岡安正と言った。若い声だった。その電話の三日後の事である、香月はアルバイト先で、日下部店主と談笑していた。

「いやあ、香月君がここへ来てくれて間も無いんだけど、凄く盛況でねー。特に若い女の子が急増中だ。君の応対が良いって事もあるけど、ホテルよねー、香月君は」

「いえいえ。とんでも無いですよ。でも、色々質問も受けて、俺も勉強になります」

「そう言えば、君、凄い事になったよね。私もGPは参加させたものの、当日帰りは無かった。君は強

豪レーサーと聞いていたけど、驚異的だよね、GPの十傑に三羽。それも一、二位は同着だったんだろ
う？」

「ええ、何とか当たり交配の期待の二羽が頑張ってくれました」

「シューマン系×ノーマンサウスウエル系？」

「それに、勢山系と、ブリクーの血も入ってます」

「しかし、そんなスピードバードは、旧来の血では・・・」

日下部氏も少し首を捻った。確かにGPの高速レースを今まで、東神原連合会が制した事は無かった。

「シューマン系の血が濃く出ていますね、二羽とも」

「その、シューマン系は余り聞いた事が無いんだけど、どこから？」

「白川さんの所です」

「ははあ・・亡くなられた時学生競翔家に渡ったと言う血統だね。しかし、凄いやねえ。もう一羽の八
位の鳩も？」

「いえ、それは、血統が又違います。でも、白川さんの所の鳩です。文部杯の鳩なんです」

「ん？文部杯の鳩だって？全国優勝の？ちよ・・ちよっと待ってて」

日下部氏は奥に消えて、すぐ本を片手に戻って来た。

「そう、そう・・・気になっていたんだよ。この血統。オペル系」

日下部氏はオペル系を主力にしていた。長距離系を主力にしている強豪でもあった。

「はい、雌親がオペル系です」

「いや、このオペルでも血筋なんだ、注目は」

「グラン氏が使翔したオペル系の飛び筋である、ダブルBの曾孫にあたります」

「何！それは凄い血筋だよ。日本では、白川さんしか持っていないなかった筈。直仔は手には入らない鳩なんだよ。その鳩が曾孫と言ったら・・・ええっ！ひよっとして、あの死んでから、GCHの称号を貰った、ネバー・マイロード号の直仔かい！」

もう、隠す必要も無かった。香月は答えた。

「ええ、唯一の仔鳩です」

「む・・・むむ・・・その血筋は殆んどもう居ないと聞いていたが、ダブルBの三重近親の孫の中で、一羽だけ、突出した鳩が生まれたと言う・・・それがネバー・マイロード号・・・すると、世の中に一羽キリだよ。そのダブルB三重近親の曾孫は」

「そう・・なりますか・・」

「驚いた！凄く驚いたよ、香月君。その鳩が文部の全国杯、そして、このGPの総合八位なんだね？」

子供のように興奮した顔で、日下部氏は言った。

「はい」

「勿論、種鳩にするんだらう？」

「え・・？いえ・・。まだ成長過程にある競翔鳩です。むしろ、GP総合一、二位の鳩・・ヒロ号と、シルク号って言うんですが、次にCHレースか、GCHに参加させたら、種鳩にしようと思っています。早熟過ぎますし、それ以上の期待はもう無理でしょうし」

「何と！・・それなら、ついでに聞くよ。雄親の血統は、アイザクソン系ってあるが・・」

「ああ、白竜号ですよ」

香月は平然と言った。

日下部氏は雑誌の写真と、香月の顔を交互に見たまま、言葉を発しなかった。競翔をやっている者なら、超銘鳩の頂点に位置するGCH同士の仔とは。それも両親は既に、この世に無し。二度と生まれぬ奇跡の仔・・。その驚きは言うまでも無い。香月が困った顔で言った。

「全国杯の時には、愛称で隠しました。その年は川上さんが、大活躍されて取材の主でしたから。しかし、今度は隠し通す事も無理ですから。公になるでしょう」

「そりゃあ・・・大変な事になるよ、香月君」

「で・・・しようね」

「君はS工大に入学したばかり。きつと、おちおち学業にも専念出来ない騒ぎになるかも知れないよね」

「困りましたよね・・・」

「・・・一つ聞くよ?」

「ええ」

「君はまだ、この鳩を競翔に参加させるの?」

「その・・・つもりです」

「なら・・・公開しない方が良い」

「でも・・・それは・・・無理でしょう?今となっては」

「雑誌社は何時来るって?」

「明後日です」

「分かった、その担当者の名前を言ってくれ。君に援助したい」

「え・・・?どう言う事ですか?」

「君、日下さんって知ってる?」

「協会の理事さんで、あの、白川系と天下を二分した、日下系の作使翔者でしょう?」

「少し私の知っている協会理事を通じて、雑誌社に働きかけて貰えるようお願いして見る。その理事とは少しは顔の利く付き合いだ。その雑誌社の社長さんと、日下さんとは旧知の仲だと聞いているから」
「本当ですか！日下さんとは、俺・・何時か会いたいと！」

香月は目を輝かせながら言った。

「その話の実現は、俺の力では難しいかも知れないが、今は、この記事の事だ。公に出ないように頼んで見る。君が使翔すると言う、その怪物鳩の活躍を俺も見てみたい。オペル系最高峰のダブルBの血筋の活躍を応援したいからね」

日下部氏との思っても見なかった会話の中から、大きな一路が開かれた。香月の進む道、必ず出会いがあった。まさに、香月はこの時にも不思議な縁に恵まれたのであった。紫竜号の素性は、まだ、封印されて行く・・。

取材が無事終了し、総合一位、二位のヒロ・シルク号二羽の話を中心に、紫竜号の記事は小さく扱われた。お陰で、注目はされたが、その血統に対して、記事も無かった事から、故白川氏の遺産との題で、ヒロ号、シルク号が大きく紹介された。美しく、品評会でもこの後総合一席、二席を分け合う二羽は、記事としては多いに目立ったのだ。

大きな心の重みが消えた事で、次に控える、GC千キロ、CH千キロの参加鳩選びに集中出来た香月

であった。

同じ千キロでも、知名度は天と地程違う。当然参加羽数も、五対一の割合だ。香月は七羽の振り分けをしている最中であつた。両距離とも帰還率についてそれ程差は無い。香月は、この時ヒロ号、シルク号の2羽を参加させた後、種鳩にする決意をした。両鳩は早熟で、突出した成績を残した事もあるが、筋肉が硬く、使翔三年がピークであろう。それより早く種鳩とした方が良いと考えた。そして・・香月はヒロ号、シルク号をそれぞれ、GCと、CHに分けて参加させる事に決定したのでつた。

GCHには三羽。GNには、四羽参加予定。香月は、晩生ながら、万全に仕上がつた、あの・・佐伯氏より譲り受けた「ムーン号」に大きく期待を持っていた。なお、川上氏は七百キロGPの翌日には三十六羽もの帰舎があり、三日後の記録は、もつと増えた。第一人者として、川上氏がこのままで春レースを終える筈も無い。

香月がいつものように、千キロレース前に川上氏宅を訪れた。先刻まで来客が居たようで、川上氏が香月を呼び入れる。灰皿に煙草の吸殻があり、来客は帰つた後だつた。

「あの・・どなたか？」

「ああ、今しがた帰つたばかり。他でも無い、磯川君だよ」

「えっ・・？」

「ははは。驚く事は無い。彼も大きく変わつて、今日は、CH千キロと、GCH千キロの参加について迷っているようで、相談に来たんだよ」

「へえ・・・」

嘗て無い事である・・・磯川が川上氏に相談に来るなんて・・・。香月は驚いた。

「随分変わったよね、彼・・・」

「はい・・・今日の用件は？」

「ああ、GCの参加と、GNの関係、CHの関係と、GCHの関係なんだよ」

「全く同じ事を俺も考えていました」

「ほほう・・・気付いたのかな？方程式を」

「不思議な定義ですよ。直線にして八十キロしか違わない両放鳩地が、何で生まれたかと言う事と、GCに参加させた鳩は、GNのステップと言う定義。GCHを制するのは、CHの経験鳩と言う・・・」

「全くだ。私も追及しないまま、今までも参加させて来た。二人がそこに視点を向けたのは、面白いね」

「色々考えますが、帰還コースが分岐点と言う事かも知れないですね。GCは関西や、四国、九州と言った超長距離競翔地ですし、一つの関門のような・・・」

「提唱したのが、協会理事の目下さんと聞いている」

「白川のじいちゃんと、大レースの優・入賞を分け合った方ですよ。俺も是非お会いしたいです」

「多忙な方だから、実現は難しいだろうが、目下系は又、白川系と違った、我が国を代表する血統だ」
「そうですね。見てみたいです。あ・・・話が逸れましたが、磯川さんは、帰還コースの通過点の事を話

していませんでしたか？」

「ふ・同じ考えのようだね。それは、天候によって大きく左右される筈だ。どちらが良いとも、悪いとも言えないが、CHレースが圧倒的に参加数の多いのが不思議だって言っていたよ」

「怖い人だ・・・」

香月は真顔で言った。川上氏は笑った。

「私に言わせれば、君達の分析の方が怖いよ。ははは」

「俺は、CHより、GCに主力を移します。ちょうど、GNにマミー号、コール号、ムーン号が居ますから」

「おお、ムーン号って、あの佐伯君の所から貰った？しかし、そこまでの鳩に仕上げた君の手腕に感服するよ。私の目から見ても、あの時点では平凡な競翔鳩だった。しかし三歳になって、GNと体が大きくなって、しつかりした筋肉になったね。後のニ羽は私の旧血統だから、特徴は良く知っている。粘り型の勢山系の特徴を良く持っているよね」

結局GCが良いか、CHが良いかの結論は出なかった。それは誰にも分からなかったが、磯川と香月が同じ疑問と方向性を持っている事だけは、この会話で明らかとなった。

香月はGCにマミー号を含む三羽を参加させる事に決定したのだった。このレースは、そのマミー



ムーン号

号が連合会三位に入賞した。

続くCHは、磯川が連合会優勝、総合十六位になった。パイロンエース号だった。この鳩も不世代の素晴らしい競翔鳩に仕上がって来ていた。又GCHレースには仲良くヒロ号、シルク号が連合会七位（総合七十八位）、八位（総合八十三位）に入賞。このGCHでは、今期一発を狙っていたかのように川上氏が総合二位の大記録。それも大量入賞で、総合十八位、三十六位、四十位、五十六位、八十七位、九十五位、百一位、百二十四位、百四十六位、二百八十三位の十一羽も上位に入賞させた。これらが全て、白川系の一群であったとは、まさしく脅威の血統であった。その磯川も連合会三位で、総合三十八位に入賞させた。

そして、最終のGNでは、香月は期待するムーン号で、連合会優勝、総合十三位の大健闘を飾った。会長が二位で、総合二十位、郡上氏が三位と、五位で、総合三十九位、四十五位。大量四十二羽大羽数記録も作った。

そして、千キロから連続参加のマミー号も、連合会九位で、総合二百三十五位、コール号が連合会十一位で、総合四百三十七位に入賞した。川上氏も連合会六位、八位。こっちは、旧主流系を十二羽記録させる等、郡上氏の影には隠れたが、素晴らしい成績を収めた。香月はこの春十二羽と言う少数精鋭を競翔に参加させて、十一羽帰還と言う、特筆すべき帰還率も達成していた。大きく、新たな陣容で、新たな血の追加で、加熱する東神原連合会であった。

めばえ

S工大に通う香月の生活は、毎日車で通学する講堂への道、週三度のアルバイト先の日下部ペットショップへの往復への道と言う具合だ。香織との時間は週に四度と、充実した展開となっていた。アルバイト先が、香織が通うN短大のすぐ近くと言う事もあって、香織も橋本さんとしょっちゅう休み時間にペットショップを訪れていた。このペットショップも香月の発案により、それまでの鑑賞鳩主体から、輸入競翔鳩を手掛けるようになって、実に色んな血統が入れ替わり入って、香月にとっても研究に多いに役立っていた。香月は日下部氏に殆んど店を任される程、その信頼も厚かった。香月がきりもりするようになって、急激に女学生のファンが増えたよと、日下部氏は笑いながら言った。確かにN短大の女学生達にも香月の噂が広がっていた。香織がしょっちゅうここへ訪れているのも、内心不安な、そういうものが含まれているらしかった。

その香月のS工大の講義は、ニヶ月先に参加となる桑原チームへの研究課題で、油断のならない重要点を学習している。この講義の論文を桑原教授に認められてやっと、S工大での自分の進路が決まるとあって、店内が暇な時間にも論文を整理しているような状況であった。その香月が受講を終了し、講堂を出た所だと思いがけず、桑原教授に声を掛けられた。驚く他の学生を横に、度の強い眼鏡の奥に秘めた優しい目で、

「やあ、確か香月君だったね。どうだね？君のテーマは順調に行っているかな？獣医学部の笹本君は君

の事をベタ褒めのようなのだが、私のチームへも入って貰って、あのユニークな論の展開を楽しみにしているよ」

「はい！」

構内では厳しい事でも定評があり、学生達からは雲の上の存在、畏怖すら感じるような高名の名誉教授だ。なのに、香月には入試の面接の時と言い、今日のことと言い、桑原教授にとって、注目に値する学生と映っているのだろうか・・・他の学生達はそう思った。

そんな教授達の思惑も知らず、この日も香月は、日下部ペットショップに来ていた。日下部氏は、最近アメリカのゴードン系の輸入にかかっている、交渉が難航しているようだった。高橋会長も大羽数導入している血統で、人気の高い血統であった。地道に歳月をかけて作り上げた血統は、長距離系として、販売としては大きな商品だ。今回はその中でも記録鳩群で、その扱い金額が高い事もあって、交渉が長引いているようだ。日下部氏は長く競翔をやっているもので、一羽一羽自分で確認し、これはと思う鳩を選んでから導入しているの、仕入れに時間が掛かる。その吟味のおかげで、このペットショップで購入した鳩は、評判がすごく良い。厳選した鳩を対象にする事で、信用がついて来る。地方から電話一本で注文を受ける事も多い。加えて、日下部氏がそう言う競翔鳩を主体に切り替えたのも、香月と言う男が並々ならぬ選鳩眼と言うか、洞察力の持ち主と知っているからで、自分の導入鳩に対する率直で、鋭い意見も聞けるからだ。それ程、香月は日下部氏に信頼を得ていた。丁度日下部氏が出かけようとする時、香月が彼を呼び止めた。

「あの、日下部さん」

「うん？」

「もうすぐ試験が始まりますし、それに夏休みも近いので・・・」

すぐ日下部氏は反応した。

「ああ！そうだね。うん！いいよ。君が来られる時に好きなように来てくれれば良い。丁度今、交渉も大詰めで、どうにか上手く行けそうなんだ。だから、気にしないで良いよ」

「あの・・・」

「何だい・・・？」

「それじゃ・・・すぐと言っても、日下部さんのご都合もあるでしょうし・・・」

香月は、自分が無理を言っているのでは？と気遣った。

「ああ、ああ。そんな事ちつとも構わないんだよ。私も競翔家。君は本当に良くやってくれているし、お陰で売上も倍増したしね、アルバイトは一週間に一度だって構わない。君は大事な学生さん。凄い頼りになるが、それは私も弁えているよ」

「済みません」

「何の、何の！　そういや君の彼女も来る日だったね。香織ちゃんにもそう言っといてくれよ。私の所は夫婦二人きりだろ？　君達が家族見たいに思っているし、楽しく家内もお付き合ひして貰っている。若い時は青春も謳歌しなくちゃな、うん、うん！」

そう言いながら、日下部氏は店を出て行った。その奥さん（敦美さん）は、女性では珍しい競翔家の一人で、強豪として活躍されている日下部鳩舎は奥さんの手腕が大だ。その敦美さんと話している内に香織がやって来た。

下校する時間帯は特に忙しく、レジの掛かりを香織が受け持っているのだ。中には毎日訪れる娘も居て、細々と飼料や病気の事を質問する。何事も中途半端にしない香月は、それを親身になって説明するものだから、客数が飛躍的に増えたのも頷ける。この日も常連のその娘が訪れたようだ。香月はやはり丁寧に教えている。香織がちらちら、その様子をレジから見ている。可愛い娘であった。

「・・・じゃ、そう言う時は、少し餌を減らして、代わりに青菜や、鉱物飼料も与えてね。二日位経てば、小鳥も大丈夫だよ。凄く可愛がつているようだけど、動物って君が心配する程は、か弱くないから神経質にならないでね。じゃ、又何かあったら、ここへ言ってくるんだよ」

前髪を下ろした可愛い高校生の娘で、取り分け香月のファンのようだ。香織はいじわるそうに言った。

「可愛い娘ね。特に貴方のフアンの中では熱心のようにだわ」

「よせよ・・動物が好きなだけだよ」

「あら・・そうかしら・・。だって貴方を見る目は恋する女の娘だわ。貴方も少し優しすぎ・・」

香月は少し、いじわるに言う香織に対して、遮るように言った。

「本当に！よせよ。俺はね、動物を大事にする人には親切になるんだ。共通するものだろ？そう言うものって」

側で微笑みながら見ていた、日下部敦美さんが、笑って言った。

「ほほほ。香月君、女の勘って鋭いわよー。香織ちゃんがやきもち妬く気持ちも分かるなー、私も」

「あら、そんなんじゃない」

香織は少し赤くなった。舌をぺろっと出す仕草は、益々大人としての輝きを増し、又高校生時代とは違う魅力を感じさせていた。勿論二人の間には何者も入る余地等は無かった。敦美さんも仲の良い話相手としてこの二人を暖かく見守っていた。香織も自身の姉のように慕っていた。そう言う人間関係が既

に、ここには出来ていたのであった。

初夏の日差しが明るいペットショップ店内に射し込み、飼料を運ぶ香月にも汗が落ちる。大学へ入ってもうニケ月。春の作出も完了し、総数四十六羽の仔鳩を得た。極度の近親交配による弊害の仔鳩も何羽か居り、これらの鳩を大学の飼育室に持ち込むには、まだまだ幾つもの垣根を越えねばならなかった。秋の競翔までには、第一選抜、第二選抜、そして秋レースでの第三選抜で何羽残せるか。経験鳩四羽を種鳩にした今、春の残りが六羽。これから第二次鳩の作出を各一腹ずつの予定である。

こう言う時、雌鳩を多く持っている鳩舎は有利だ。偶然とは言え、香月のところには雌鳩が多い。変則的な春のレース参加だったとは言え、良い成績を収める事が出来た。秋のレースは本格的に取り組む事の出来るシーズンだ。一レース、一レース蓄積されてきた独自の手腕は、幾度の成績に証明されている様に、川上氏もおびやかす存在になっている。日下部ペットショップの中で、額に汗して働く香月、香織。仄かに香る清涼の気。周りの誰もが愛さずに居られない、明るく煥発な若者達、その笑顔。日下部夫婦もいつしか本当の弟、妹のように、自分達も惹かれていく事に気付いた。一瞬の後には、もう過去の香月の姿が映っている。急速に階段を昇る、現在の輝くその姿を見つめている日下部氏達がそこに居た。大きく香月は成長しようとしていた。

事件

広い学内に咲き誇るひまわりの花が、盛夏の強い太陽に負けない位大きく、黄色い花を咲かせていた。この夏季休暇中には、学内に通う学生もまばらだが、香月にとっては、一ヶ月後に控えた論文に、自分の全てがかかっていた。学内の図書室へ朝から晩まで通う毎日となっていた。自宅で論文を書く者、避暑地で書く者、色々だろうが、香月はこの大学の図書室が好きであった。数多くの専門書、辞書、歴代の教授陣の論文が読める。その数も膨大であった。香月は論文とは直接関りは無いが、坂上と話し合った飼料について興味があった。鳩は好き嫌が多い。その為栄養のバランスが崩れる。何か画期的な飼料が無いものか・坂上とは試験が終ったら会う事になっている。香月は、その夏季休暇前半に論文を急ピッチで完成しようとしていたのだった。それは、香織との二泊三日の、初めての二人だけの小旅行の為に・。そして・香月と香織は海へ出かけていた。考えて見れば、若い男女の自然な青春の姿。海辺で真っ黒になつてはしゃぐ二人。どこから見てもお似合いの若者達であった。その夜の事・二人にとつて思いもかけない事件が起こつた・。

バンガローに戻つたのは、夕暮れ近くだった。生憎飲み物を切らして、香織が売店に走つて行つた後、香月はバンガロー内で、夕食を広げていたが、歩いて二、三分の所にある売店なのに、香織が戻つて来ない。心配になつた香月は、外へ飛び出した。それは直感のようなものであった。売店には香織は居なかつた。その瞬間香月の頭に過ぎつたのは香織の危機であった。すぐ裏の松林に飛び込むと大声で香織の名を呼んだ。

「香織！香織い——い——！」

その声に香織の甲高い悲鳴が聞こえた。

「香月君、香月君——！」

声のする方向に走ると、五、六人の不良達に香織が上半身を剥き出しにされ、松を背に囲まれていた。香月には、自分でも押さえられない激情の怒りがその瞬間に起こった。怒号が飛ぶ。

「何・・・しているんだ・・・？お前達！」

「ああ・・・彼氏か、テメエ・・・！」

ナイフを片手に、中でも一番大きな男が走って来た。それは殺意であった。香月は身をかがめ、落ちていた木の枝を拾った。香月の怒りの形相が、不良達の行動を誘発したのかも知れない。香織のつんざく悲鳴、泣き声が響く中、香月は、既に自我忘失。やらねば、やられるのだ。その中で、香月の怒りは当に頂点に達していて、その大柄な不良達の一人がナイフをかざして飛び込んで来た瞬間、香月の上段の構えから打ち下ろした木の枝が、男の腕に鈍い音を発しさせた。「バシン！」恐らく腕は折れただろう。その男は、その場にうづくまった。流石の残り五人の顔が強張った。香月の構え、その鋭い振りと

共に、裂帛の気迫は、喧嘩慣れしているであろう不良達にすら恐れを抱かせた。目配せすると、大柄な男は、他の五人と共にその場から立ち去った。

「香月君！香月君！」

香織が、大きく肩で息をする香月の胸に飛び込んで来た。香月はやっとその時我に戻った。

「香織・・・」

「私の為に、私の為に・・・」

泣きじゃくる香織の髪をなでて、香月は言った。

「大丈夫だったかい？怪我無かった？」

しゃくりあげながら香織は頷いた。バンガローの中に入っても、まだ香織は香月の胸に顔を埋めて泣いていた。夏の夜は若者の狂気を誘い、暴走する。無秩序の世界にいきなり飛び込んだ二人にとって、大きな出来事であった。しかし、香月、香織の魂が呼び合う如き叫びは、捨て身の勇気を生み、それを救った。

ようやく落ち着いた二人、香織は香月に腕を巻きつけた。

「香織・・・」

二人はこの夜結ばれた。一つの事件が益々二人を畢生の伴侶として結び付けようとしていた。夜が明けて、二人は海辺のキャンプ地を後にした。香織の顔にも昨夜の事件の陰は無かった。

次に二人が訪れたのは、海では無く山間の古寺であった。それは、昨夜の事件の為に急遽変更した訪問でもあった。雑草の生い茂った石段を登ると、香月には見覚えのある、古ぼけた仏寺の山門が見えた。高校一年の時に剣道部の合宿で訪れた事のある、思い出深い寺であった。そして、ここでの話は又、香織の心の中に香月が確固として、刻まれる事となる・・・山門などは今にも崩れ落ちそうだった。香織がきよるきよるしている。

「凄い所ね」

香織が山門を見上げてそう言った。



「ああ、何でも鎌倉時代前期に建てられたもので、その後何度か修復しながら、今ではこんな荒寺だけど、縁結びの御利益もあるんだって」

「あら・・・それで来たの？」

「それも、ある。でも、それだけじゃ無いよ。本堂で、こここの和尚さんの話を聞いて見る価値は十分にあると思うから。俺も随分為になるお説教を受けたり・・・ある出来事があった」

「ふうん・・・」

その言葉の意味が理解出来ないまま、香織は門をくぐった。石畳はあちこち剥がれているがそれでも綺麗に掃除がされていて、訪れる参拝客もあるのだろう、質素な本堂ながら、山間の涼とした雰囲気、どここの立派な寺にも負けない一種独特の然として感じられた。

本堂へそのまま二人は入った。この寺には住み込みの結城と言う老夫婦が和尚さんの身の回りの世話をしている、健在であろうか・・・合宿中には大変お世話になった人の良い方達だ。そして、二人を出迎えたのは、その結城夫婦の信江さんであった。少しも変わらないその様子に香月はにこにここと頭を下げた。

「あら・・・貴方・・・香月君？まあ、立派になってえ！」

「お久しぶりです。覚えていて下さって嬉しいです。おばさん」

信江さんは、すぐ大きな声で、満面の笑顔になり、

「お父さん！お父さん！ちよつとおいでなさい、ねえ、早く」

奥から、

「何だい？大きな声を出して、私はまだそんなに耳は遠くないぞ・・・」

いぶかりながら出て来たのは、懐かしい顔の三郎さん。その皺だらけだが、背筋の伸びた肌つやの良い顔が途端にもつとくしゃくしゃになった。

「おお・・・！香月君じゃないか！間違える程立派になったなあ。ほお・・・こちらのお嬢さんは？」

「川上香織と申します。同級生です」

「綺麗なお嬢さんだ。さあさあ、立ち話もなんだ、奥へお入りなさい。本堂に和尚さんもおいでるから、お茶でも飲みましょう。さあ、母さん、早く早く」

「はいはい。分かっていますよ、お父さん」

クスツと香織は笑った。老夫婦の暖かい優しい笑顔と、初対面と思えぬ人懐かしい笑顔に、心も暖かくなるようであった。何故、香月がここへ自分を連れて来たか、理解出来るような気がした。

お茶を信江さんが運んで来るのも、もどかしそうに、三郎さんは二人に対座すると、

「もう・何年ぶりになるかな？香月君がここの合宿に来たのは

「はい、ちょうど三年になります」

「立派になって、川上さんと仰いましたね？綺麗な本当にお似合いの二人だ。こうして並ぶと、まるで絵から抜け出て来たようだ。ああ、勿論香月君の彼女なんだね？」

「ええ、僕達は付き合っております」

「うん、うん、そうであろう。こんな綺麗なお嬢さんを連れてここへ来てくれるなんて、嬉しい限りだね、なあ、母さん」

ちようど茶を運んで来た信江さんに、三郎さんは言った。その前に香月が、

「おじさん、おばさん、その節は大変お世話になりました。」

「何の。私達より、和尚さんの方が喜ぶだろう、何しろ大変な騒ぎだった。フ・フ・フ。今でも思い出すよ」

香織が香月に尋ねた。

「ねえ、何があったの？騒ぎって？」

「いや・・参ったなあ・・その話は・・」

香月が言いかけた時、ここの住職である、日照が入って来た。かなりの高齢のようだが、和尚としての凛とした風格の感じる人であった。香月はすぐさま挨拶をした。

「和尚さん、ご無沙汰しています」

「おお・・香月君・・良くここへ」

「その節は有り難い教えを頂きました」

「まあまあ、それは後の事で」

和尚が座についてから、改めて、香織が自己紹介をした。和尚が優しそうな顔で、こう言った。

「川上さん、貴女は大変な福相の持ち主ですな」

香織は少し驚き、

「そんな事言われたのは初めてです」

「ふむ、貴方は情があつて、常に光に導かれるように、なおいつそう輝くような相だ。外見的な美はも

とより、伴侶としてその夫を向上させるような、類稀な良相だなあ」

「あら・・・そんなに言われると嬉しい・・・」

年老いた僧だが、温和な優しい目と俗世から解脱した悟り切ったような姿に、香織は包み込まれるような感情を持った。では・・・？自分の夫となるであろう、香月君はどうであろう、聞いて見たくなかった。聞かねばならない気がして和尚に言った。

「では・・・私が夫と決めている、ここに居る香月君はどうなんでしょうか？」

しかし、香月は聞いてはいけないよ、そんな顔で、首を振りながら香織に目配せした。香織は何故か理解出来なかった。

「何で？香月君の事を聞いたら駄目なの？」

三郎さんが横から言った。

「和尚さん、この二人は我々から見ても、真にお似合いです。和尚さんもしっかり仰って差し上げれば、このお嬢さんも不安になって聞く事も無いでしょうに」

「ふあははは、宜しい、宜しい。ただ、いじわるで教えなかった訳ではない。川上さん、香月君、本堂に来なさい。その理由を教えて進ぜよう」

香織は不安に少しなつて、香月の顔を見た、香月はにっこりと微笑んだ。少し安心した。

二人は和尚の後について本堂に入った。広い本堂では無いが、おごそかな顔の大日如来菩薩像の前で正座し、拝んだ後、二人に対座するように和尚が向き直った。静かに二人に礼をすると、二人も頭を下げた。

「香月君、まず、君の事から言おう。仏門に入つてこの日照、実に様々な人に接し、色々な相を眺めて来た。人が生を受けて死ぬ。これは、輪廻であつて、前世、来世の仏様の意志によつて定まつたもの。持つて生まれた才能も、磨かねば發揮出来ず、又己が持つ以上の輝きは得られないもの。その中に人間の業が存在する。故に光輝く才も磨かねば、薄れてしまうのが俗世と言えるもの。お若い二人にとっては、こんな僧侶の話など耳に痛い事かも知れぬ」

香織が言った。

「いいえ、ちつとも」

香月がこう言った。

「和尚さんは、僕達に分かりやすいように、話を砕いてお話してくださいさつてるんだよ。今でこそ、仏門に深く身を置き、浮世を超越して居られるけど、その昔は大変な暴れん坊だったらしいんだ」

「ふおおおお。それより、まずこの川上香織さんの問いに答えねばなるまい。かおりとはどう言う字を書くのかな？」

「はい、香は香月君のかです。織は織姫のおりです」

「ほお・・・その香織さんか、ふむふむ・・・香月君が香と月、何かの縁とはこう言うものである。この和尚の目から見て、当に二人はこれ以上に無い良縁。それは間違い無い。更に、香月君の相は、天性の輝くような大星の運と、才能を持った、わしが見る限り二つと無い大福相。三年前より一層輝きを増したのを見ると、二人の縁が最良のものとする。香織さん、貴女は香を備え、形を織り成し、光明を灯す相。お互いに呼び合い、巡りあう為にこの世にあると思いなされ。これからも疑う事なく、信じあい、励ましあい、優しさで包まれなされ。和尚この年になって初めて見る福縁、これも仏様のお導き、あり難や、あり難や・・・」

和尚がお経を唱え始めたのを見て、香織はキリスト教、仏教の違いはあれ、結婚式をしているような感覚になっていた。仏教や顔相など分からなくても、良縁、福縁と聞かされて、嬉しかった。和尚の言葉が、より一層香織の香月に対する揺ぎ無い心を形作る。

本堂を離れ再び、結城夫妻の待つ奥の部屋に二人は通された。ソーメンが用意されていた。

「さあ、二人ともゆっくり出来るんだらう？ソーメンでも食べながら、話も聞かせておくれ。何も無い山里、年寄りも寂しがっておりますのじゃ」

三郎さんの暖かいもてなしに、二人は、この古寺での宿泊を決めた。

「願っても無い事じゃ。これも縁、どうぞ、こんな荒寺じゃが、心ゆくまで泊まってください」

香月はこれまでのいきさつを和尚に話した、何度も和尚は頷きながら聞いていた。さもあるうと、和尚は言った。

「香織さん、若いお嬢さんを恐がらす訳では無いが、この和尚と香月君の因縁めいたお話をさせていただきます。良いかな？香月君」

香月は頷いた。

「はい・・・」

香織も答えた。

香織は気になっていた、この古寺の和尚さんとのこれ程のつながりとは・・・一体・・・。

日照和尚がゆつくりと話しはじめた。

「わしが仏門を選んだのは、昭和の戦争中の事でした。わしは、暴れ者と言うより戦争一色である当時の世の中、非国民と非難された不戦論者だった。当時の徴兵制度に反対して、牢獄にも入れられた。結局こうして坊主の道に入る事になったのじゃった。人の命は尊いものだ・・・若い、これから社会で活躍出来るであろう尊い命を、国家の為とは言え、戦争と言う大義名文の元に差し出す。わし等が不戦論を唱えた所で、どうにもならない大きな流れ、力が動いて居た時代。わしは、国家の為に投げ出す命が、決して惜しかった訳では無い。国家に差し出す命が当然のように言われたそんな時代、せめてわしは、この自分の手で、若い命を散らして行った人達の魂を供養したかったのじゃ。全国を歩き回り、いつしか、この古寺に来た時、戦争は終わった。この世に生を受けて、それぞれに成すべき事もあるうに、無念の内に死んで行った若者の涙が、絶望が、人の現世は終つても、御霊は残る事があるのじゃ。この高齢になつても、まだまだ、わしは供養せねばならぬ。香織さん、決して恐ろしい事では無い、聞いてくださるか？」

香織は、香月の手を強く握った。香月は優しく香織の肩を抱いた。

「香月君が剣道部の合宿でこの寺に来た時、わしは、今日の香織さんに感じた以上の強い輝きを持った少年だと思った。それはどの子よりも遙かに強く、若草が伸びる勢いで、おそらくこの子は将来とてつもない体験をして行くだろうと。仏門に入って以来、実に多くの人々と接して来たわしだが、生きるも死ぬも人は顔相に現れてくる。この相がどんな相かはわしには分かるのじゃ。しかし、人の先を見抜いても、それは教えるものではない。香織さんにすぐ言わなかったのもその為じゃ」

香織はこくと頷いた。とてつもない話になりそうで、少し緊張した。

「・・・その日の晩の事じゃった。若い皆が稽古で疲れて寝静まっている頃、わしは、妙に何かが起こりそうな気配に胸が騒いで寝られなんだ。それで、本堂でお経を唱えて居った。ふと・・・わしは背後に人の気配を感じて、振り返ると、そこに香月君が立って居った。しかし、その顔色は蒼白、この世のものとは思えぬ程じゃった」

香織は小さい声で、キャツ・悲鳴をあげ、小刻みに震え、香月の手を強く握った、香月は軽く肩を叩いた、香月の顔を見ると、その眼は澄んで、いつもの優しい眼であった。

和尚の話はまだ続く。

「咄嗟に、わしは、この子が何者かの霊に憑依されていると感じた。いや、こんな子だからこそ余計に彷徨っている霊が何かを伝えようとしているのかも知れないと。わしは、静かな口調で尋ねた」

「御身はどちらの何様かの？」

「我は、上州の唐沢兵衛の嫡男、源三郎なり・・・」

「はつきりした口調で答えた。戦国時代の武将の様じゃな・・・わしは続けた」

「御身は幾つになられますか？」

「当年十七歳に成り申す」

「何故に和尚の前にお越しなされました？」

「聞いたその時、静かな表情をしていた顔が、醜く、悪鬼のような表情に変わった。怨念じや。余程の無念を残して若い命を野に捨てなされたのじやろう、わしが念仏を唱えると、又静かな表情に戻ったので、こう言った」

「この日照、貴方様に安らかな眠りを捧げる仏師。心残りをお話し召されませ。この少年は貴方には縁の無い御方です」

「和尚に申す。この身を借りて・・・我こそは、上州唐沢城主の嫡男源三郎なり。隣主五条光正との一戦に父上は破れ、いつの日か、この敵をはらすべき、友主影成公への力添えを求めての帰路、おのれ、影成・我を殺害せんと、後を追って参った。無念なり、友主に裏切られ、唐沢城再興の悲願も路傍の朝露と消える。この恨み、いつの日か果せん。影成の下衆匹夫。わが父の恩を忘れべかざりや」

「ここまで聞くと、並大抵の事ではこの怨念晴れるまいと、わしは思った。朝露と消えた骨を捜して供



養するにも、不可能な事であろう。そこでわしは、今晚のところはお帰り下さいと経を唱え、それでの日は終った」

香月が言った。

「あれ？何で僕はここに居るんですか？和尚さん・・・そう言いましたよね？」

「やつと霊が離れた事を察知したわしは、きよとんとした香月君に事の次第をゆっくり説明したのだ。驚いた様子だが、意外にも香月君はこう言った・・・そう言う話は聞いた事がありますが、まさか自分に現実を起こり得るとは思いませんでした。そんな無念の思いがあれば、成仏も出来ないでしょう。皆には内緒にしておきますから、明晩、僕はこの本堂で一緒に和尚さんとお経を唱えますよ。その時、和尚さんは、こう質問して・・・と言うたのじゃ。わしは成る程と思った。何故この子に霊が憑いたのか、判る気がした」

和尚は茶を飲みながら続けた。

「そして次の晩、一緒に経を唱えていた香月君にまた霊が憑いた」

「坊・・・今宵もお話申す・・・」

「すぐわしは、尋ねた。唐沢城と言えば名家、何故戦いを避けられませんでしたか？」

「唐沢城領内には銀山があり、利権を巡って、争いが尽きず、戦は予期していた事」

「すぐわしは、次の質問に移った。民あつての領主、多くの民の命、百姓の命と引き換えの利権争い。名君の誉れ高き唐沢君成公は和解を目指されませんでしたか？」

「民あつての政、承知している。しかし、五条領主それを知らず、我が城に戦いを仕掛け、多くの民草を殺害す。主上、いたく心を痛め、再度に渡る話し合いの儀、ついに五条城内にて殺害されんとす。君主無くして国は栄えず、我立つも四面楚歌、ついに臣下屈し、我の非力を嘆かんとする、坊・それを責めるや？」

「わしは、そこで香月君に言われた通り、冷静に心を落ち着け、お題目を唱えた後、続けた。それこそ名君主たる者の勤め。然しながら戦乱の世、殺し、殺され、戦の習いとは申せ、どこまで行つても、無限の連鎖、利あれど、得無しと申せましょう」

「ここでわしは、戦乱の武将と話が出来るなどと夢にも思わなんだ。恨みを抱いて現世に現れた、怨念、論しも聞かず、受け入れず、なおこの世に止まり、香月君に災いを成すかも知れない。わし如き法力で持つて、除霊など出来まいとな・だが、この霊は反応したのじゃ」

「利あれど、得無し・坊は何故そう申されるや？先主の恨み、この身に受けて、再興を目指すは勤めなり。不忠にあらず、孝行にして、義と先人は教えたもうなり。我が身力及ばずとも、国を愁う心は義にして、真なり」

「まさに、香月君の言う通りの答えにわしは身震いした。その怨念の真の心を香月君は見てとつたのだ。わしがこの日のお経を唱えると又霊は去って行つた」

和尚は香月の顔を見た。香月は穏やかで、涼やかな顔をしていた、不安な顔だった香織も次第に落ち着きを取り戻し、平静な顔つきになっていた。安心したように和尚は又喋り始めた。

「そうして、問答は七日目を迎えた。もう、これ以上香月君が靈に憑かれては体が持つまい……。倒れ無いかと心配するわしの心と裏腹に、次第に靈の顔は穏やかになり、問答にも『師』と従うようになった。そして、わしは、仏様の所へこの靈を導く事に成功したのだ。香月君の素晴らしい言葉によつて」

「坊は申す、古今東西、人は生き、死んで行くもの。殺し、殺され、罪なき民草の不幸こそ、国の不幸。唐沢城の悲劇は、人の世の悲劇であります。されど、義は残り、孝行は永世に受け継がれましょう。怨みあれど、一得無し。時は流れ、一掬の信念が永く土を称え、祭りを催しましょう。よくぞ、頑張られた、心静かに御上りませ」

「その時じやつた。穏やかな、本当に穏やかな表情になって、こう言つてあの世に召されたのじゃ」

「師、教えを蒙り、御礼申す。この若者の守護の靈も申す。我の御靈に力をお貸しくださると・・・」

「その言葉を残し、除靈されたのじゃ。解に深き怨靈ならば、お念仏を幾等唱えようと、簡単に心静めるものでは無かつた。坊主を始めて、数多くの体験はしたが、こんな事は初めての事であつた。香月少年がいかにかこの靈にとつて待ちわびた何百年かの巡り合わせであつたか、初めてわしは悟つた。これは俗世と現世を超えた夢物語、この三年の月日は香織さんの天性が持つ、織りなす、優しさと思ひやりの

心が更に磨いたと見え、益々輝くこの香月君を見て、二香の運命は前世より決まって居るかのようじゃ。わしにははつきりとそう見える」

香織は涙を落とした。自分が何かは分からぬが、自然と香月と引き合う心が大きく強くなっている事に・

和尚はなお言った。

「今日はその日から丁度三年目。ここへ訪れたのも縁であろう。これから三の倍数年にはここへ訪れなされ、きっと二人に福がある事だろう」

この夜を過ごした二人は、明朝、和尚と共にその後建立した聖功碑の前で手を合わせた。

この和尚との出会い、香月が持つ大きなもの・それは、やがて真近に迫る大きな試練への序章であった。

出発

それぞれの胸に思いを秘め、学期初めの論文が提出された後、ふいに、香月は動物生態学の笹本教授に呼び止められた。

「香月君！」

「あ、はい！教授」

「少し時間を貰えないかな？話があるんだが・・・」

「・・・はあ、良いですけど」

「そうか。何・・・余り時間は取らせないよ。少し、校外で話したいのだ。喫茶店にでも」

突然の事で、香月も笹本教授の言うままに、校外のやや離れた喫茶店に入った。座るとすぐ教授は話し始めた。

「うん・・・今日、話があったのは、他でも無い。今期の受講生は学部総数二百三十五名。例年通りこの中の百名余は、再受講を余儀無くされるだろう。講義の内容は、君も理解していると思うが、実に多くの専門知識が必要で、応用もとにかく幅広い」

「ええ・・・かなりの広範囲からの受講は、三ヶ月の期間ではまとめきれない量でした」

「ははは。当校では、まだこれ位は序の口だ。確かにここ数年、高校からストレートに入学した者は居ないし、君にとつては大変な苦労だったろう。だが、講義内容さえ理解出来ていれば、論文としての形態はどうか完成出来る筈。知識として身につけていかなければ、この先、自由選択肢としての、各チーム活動は出来ないのだからね」

「はい、心引き締まる言葉です」

「実はその事だが、まだ論文も見えていない段階で、我々としても断は下せないが・・・、君は桑原チームに加入を希望しているとか？」

「いえ・・・そんな。希望と言うより、その・・・桑原教授が・・・」

「君に参加してくれと？」

「ええ・・・まあ、そう仰つては頂きましたが・・・」

香月は笹原教授の真意を測りかねて、あいまいな返事に終始していた。

「私も学内は長いがね。あの桑原博士が、特定の者を指名する事は今まで一度も無かつたし、それで、君の事を色々論文やら、他の事も調べさせて貰った」

「はあ・・・そうですか」

香月が少し不安な顔で答えた。

「いやいや、別に君がどうかそんな話じゃないんだ。そんな顔をされたら私も困る。私も獣医学部の教授だし、自分のチームも持っている。だから、これまでの経緯の事や、定期的な小論文にしても君は群を抜いて素晴らしかったよ。本年度一番最年少入学である君が、これ程高い知識を持っている事に驚嘆すら覚える。だからこそ、君の論文の中に桑原教授を惹きつける何かがあると思つた訳だ。確かに君の視点は、ユニークであり、興味もある。それ故に、だから、私のチームの生態学の方にも参加して欲しいと言つて誘いなのだよ」

「えっ！」

思わぬ笹本教授のチームの誘いに、香月はその言葉が信じられなかった。研究チームのテーマも内容もそれぞれに違う。両チームで研究する者が学内を見ても殆んど居ない現状からして、直接教授から誘われるなんて事は、殆んど皆無に近い。そんな言葉を貰えるなんて、それは非常に光榮な事であった。

「光榮です。是非それが、叶うならば！」

若者らしい煥發さで、香月は答えた。研究に値する何かが認められているのだろう。それが嬉しかった。

「良かった。私もほっとしたよ。何しろ、桑原博士の合意も得ている、それは意思でもあったからね」
「ええっ？」

香月はもつと驚いた。

「君は知るまいが、君の入学論文は、君の将来を大きく左右するような大きなものであった・・・それだけ今は言っておくよ」

「え・・・？」

その先の説明はもう無かった、笑い顔で、笹原教授はレシートを取ると出て行った、香月も後について出た。真夏の空には白い雲が浮かんでいた。

この日は、坂上達と市内の居酒屋の二階で会う事になっていた。香織も同伴だ。その待ち合わせ場所に着くと、もう坂上達は来ていた。

「よお！久しぶり！」

香月が声を掛けると、坂上、木村が立ち上がって二人を迎えた。

「久しぶり！香月君、川上さん。さあ、二階へ行こう」

二人に付いて行くと、もう、料理はセットされていた。木村かずみが香織に言った。

「うふ、驚いたでしょ？この店、私の親父殿の店なの。だって私達はまだ未成年だし、店の中では堂々と飲めないでしょ」

香織が言った。

「どうりで、料亭？って思っちゃった。私も、もう大人・・ま、少しはね」

茶目つ気たつぷりに言う香織の言葉に、皆が笑った。

「はは、ま、ビールを一杯位なら良いだろう、汗もかいたし、それじゃ乾杯しますか？」

香月の言葉に全員が乾杯をした。少しの間に、高校時代とは違う大人びた顔にお互いになっていた。雑談が続く。

「どう？ 大学の方は」

香月が坂上に尋ねる。

「うん、思ったより厳しいんだけど、何とか選択科目に進めるように頑張っている。君の所は言うに難し・・・かな？」

「ああ・・・やつと論文提出が終ったばかりだね。まだ、結果は出て無いんだけど、手直しに時間が掛かれば、希望のチームへの参加が遅れるから、必死さ。毎年、三分の一はこの論文で落伍するらしい。一ヶ月で、済む者も居れば、半年も掛かる者も居るらしいし、大変だよ。その差が優秀な研究助手を獲得出来るか否かの境になるそうだし」

「へえ・・・随分違うもんだね。普通の大学とは」

坂上が言った。

「一種の研究機関だからね。助手と言っても、助教授を目指している優秀な人も居れば、学内に残って、仕事として助手をしている人も居るらしいから、色々だよね」

「ふうん。良く分からないけど、早くチームに参加出来たら有利なんだね」

「うん、随分その後が違って来るらしいんだ。自分の進路や、大学内で教授の道を目指す人にとっては」

「君は何を目指すの？」

「うーん。漠然としてるけど、研究も勿論したいけど、獣医になりたいね、やっぱり」

香織も、側で頷いていた。すかさず、かずみが言った。

「香織の夢だもんね、獣医さんの奥さん」

「もう、やだあ！」

香織が少し頬を赤らめた。ビールのせいかも知れなかったが、話が進み、かずみが言う。

「へえー、旅行に二人で行ったんだあ。貴方達もやるわねえ」

そのいきさつを香織がすると、坂上、かずみも揃って言った。

「・・・そんな事があったの。でも、日頃大人しい香月君が、暴漢相手にそんな激しい喧嘩をするなんてびっくりしたけど、香織も幸せね」

「ああ・・・その時は自分を忘れていたよ」

香月が答えた。すると、かずみも言った。

「ねえ、私達の事も聞いてくれる？」

「ええ、是非聞かせて？」

香織が言った。

「貴方達程じゃないけど、今すぐと言う訳じゃないの。婚約と言う事で、学生の内は無理だけど、卒業と同時に結婚しようって決めてるの、私達」

「そう！おめでとう！貴方達なら、きつとうまくやれるわ。お互いを理解しあってるもの」

香織は笑顔で拍手した。香月が言う。

「じゃ・・君達は卒業と同時にブラジルへ移住するって決めたのかい？」

坂上が答えた。

「ああ、そのつもりだ。実際今は、大学で学ぶ事が多いけど、向こうの大学へ助手として勤務する事も可能だそうだ。現地の方が夢により近づく事が出来るし、それにかずみは、今英会話の勉強中なんだ。向こうで音楽の教師を目指している。と、言っても、分教場のような小さな学校になるだろうけど」

「そう・・そこまで考えてるのね。じゃ、もう貴方達のご両親も？」

香織が聞いた。坂上が答える。

「いや・・大反対でね。婚約については、双方の親も認めてくれたが、移住の方は猛反対を受けている。まだ三年もあるから、その内考えも変わるだろうと、両親の方は思ってるようなんだ。でも、もう俺達の気持ちは決まってる」

「大変だね。で？君達が敢えて、今婚約したのには、きっかけがあつた筈。それを聞かせてくれないか？」

香月が言うと、クスッと、かずみが笑って答えた。

「実はね、私達・・今、難民の為のボランティアやってるの。坂上君の夢の一部なんだけど、私の音楽学校の仲間で、小さなコンサートをやつてて、その一部の費用を救済センターに送ってるのよ。まだまだ活動の規模は小さいんだけど、この三ヶ月で二十人集まったわ。色んな職業の人達が参加してて、もつと、もつとこの活動を大きくして行きたいし、彼が目指している第一歩として、日本支部を作つて、

国際的な活動にしたいのよ。街頭でも良く寄付集めをするんだけど、丁度一ヶ月位の夏休み前だったわ。十チームに分かれて、街頭で寄付を集めていたの。私達も二人で。こんな活動をやってると良く分かるんだけど、今の若い人達って・・・本当に、情けないけど、そう言う事に無関心なのよね。同じ世代の人達が、毎日飢えで苦しみ倒れて居ると言うのに知らん顔。でも、そんな事を私達が今、声を大にして訴えたって仕方が無いわ。もつと、もつと私達のサークルが大きくなって、他のサークルとも手をつないで、大きな運動にするまでは・・・でも・・・でも、この前、本当に私達は悲しかった・・・」

木村かずみの顔に浮かぶ涙を見た時、坂上は言葉を続けた。

「この日は、本当に暑かった。俺達は、木陰を利用して、大きな旗を掲げて呼びかけていたんだ。それでも、中年の婦人や、小さな小学生なんかが寄付をしてくれたりした時や、暑いのにご苦労様なんて声を掛けられたりした時なんかは、頑張らなきゃ！って思っ、大きな声を出してね。中には質問してきて、納得してくれる人も居るし、ポンと大金を入れてくれる人も居るんだ。そんな時だった。俺達の前にオートバイに乗った若者がやって来て、盛んに囀（はや）し立てるんだ。止めてください！これは善意の寄付集めですからって何度も言うんだけど、益々面白がって立ち去らない。それで、俺も頭に血が昇ってさ。この時間にも飢えで苦しむ同世代が居るんだ。君達見たいな面白半分で冷やかすような者は、どこかへ消えろ！と叫んだんだ。そしたら、いきなり散々に殴られて、気がついたら、善意の寄付箱も無くなってた。この時程俺は悔しい気持ちになった事は無いよ。こんな平和な世の中で、遊びまわっ

ている人達と、今日の食べ物すら無くて、飢えに苦しんでいる人達が居る。こいつらは人間じゃないって俺は悔しくてそう思った……。結局警察に届けたり、全員を集めて、この事を話あったりしたんだけど、大なり小なり、皆こんな経験があるって言うんだ。何で、俺達がやっている事を理解して貰えないんだろう。こんな人達が居るんだろう。明日は救えるかと言う問題じゃなく、今日の糧をどうするか、俺達は今そんな直面する事に問題提起してるんだ。きっと、それが明日に繋がる事だと思うから。その晩は、かずみと二人で一晩声を思いつきりあげて泣いたよ。情けなくて、そして、自分達の非力に。俺達はその晩誓いあつたんだ。結婚を」

香織が泣いた、香月も涙した。二人の信念を確かに感じたから。

「君達は立派だ。良ければ、俺達も参加させてくれないか？約束しよう。君達の心が変わらない限り、俺も香織も春想会の皆にも声をかけて」

「是非、入れて。きっと伝わる日が来るわ。坂上さん、かずみの夢が叶うよう応援する」

香織も言った。

又大きな一夜であった。坂上と言うこの先にも重要な友人と、出会う度に香月は大きく成長して行く。人生の深さとは、出会いの深さであろう。香織はこの時思った。その出会いを形作るのは、その人の持つ運かも知れない。

そして・・秋レース本番に向けて競翔訓練・調整に余念が無い頃、論文の発表があった。講堂前の廊下に貼り出されたのは、助教授選が五十点、教授選が二十五点、特選数点がある。それぞれに、推薦教授の名前が論文の下にある。助教授選は、若干手直しが必要だが、合格。教授賞は手直しが無くそのまま合格。選が無いものは、これから一ヶ月の講義を受けて、又再提出の形となり、合格出来ない限り、その繰り返しになる。六ヶ月を経緯しても合格しない者は有無を言わせぬ落第だった。

殆んどの受講生が集まる中、お互いに話し合う余裕すらなく、凝視しながら見て行く。同様に順番に見て行く香月だが、助教授賞の選には名前が無かった。教授賞の所へ目が行くと、流石に著名な教授の名前が載っている。まだ・・無い。香月は大きな不安にかられた。高校生程度の学力では、無理なのか・・。そして、特選・・香月の名がそこにあつた時は、興奮で、倒れそうになった。最優秀論文、学長賞とあつたのだ。夢では無い。そのまま硬直する香月の耳に、マイクの声が聞こえた。一番に呼ばれたのは香月であった。小講堂の中には二十六名の椅子があり、思い思いの席を取ると、しばらくしてから、正面の座に教授陣が入って来た。一斉に受講生達に緊張が走る。笹原教授、中央正面には木原名誉教授・本学長が座つた。右隣には、桑原名誉教授・本学副学長・居並ぶS工大を代表する、日本屈指、世界レベルの教授陣を前にしては、物凄い倍率の中から勝ち残って来た、英才・秀才達にとつても当然の事でもある。司会進行を勤める掛川教授の挨拶の後（この掛川教授の息子さんは現在S工大助手を勤めていて、親子二代のS工大教授となる。この後に香月と大きな縁がある）香月の学長賞を筆頭に論文表彰を終えた後、木原学長が総論を述べた。

「今日は皆さん、おめでどう。三ヶ月の短期間に良くこの小論文をまとめて提出されました。当学内、機関に於いても、従来の形式的な小試験制を廃して、今年度からは、講義内容を理解しているか、その論文の構築度や、熟学度等を計る方式を導入しました。君達も大変であつたでしょうが、我々教授陣も全ての論文に眼を通す為に約一ヶ月半時間を要しました。この選は、再度教授陣による検討の末に、今回の決定となりました。当大学は、学ぶ為の機関ではありません。その研究をいかに国益として活用出来るかを問う目的を持っています。よつて、入試の論文形式は、その時点での君達の進路を決めたものであつたと言えます。採点の方は今回初めての試みでもあつたので、幾分甘かつたと思うが、その中で、今回特に優れていた香月君の論文は、全会一致で、学長賞と言う特例を設けました。一つ一つの序文、構文には注釈がついており、要点、症例の付則と、類を見ない完成度でした」

一同が香月の顔を見た。最年少である筈の彼が？驚きと共に、天才？そんな小声が聞こえた。木原学長は続けた。

「この席に今座る者は、この後希望するチームで、思う存分独自のテーマに取り組んで貰いたい。もう一度おめでどう！」

拍手の中で、いよいよ香月の研究がスタートとなつた。

今・眼の前の門が開いたのであつた。香月は数日後、今度は堂々と笹原チーム、そして、桑原チー

ムに加入希望を提出。勿論その場で受理される事となる。笹原チームでは故白川博士の遺志を受け継ぎ、動物生態学を。桑原チームでは、遺伝子工学を研究する事となるのだった。その桑原チームは、S工大の中でもシンクタンクと呼ばれる、特殊な英才の集まりであった。香月は学長賞と言う文句無しの成績で、加入となった。この時から周囲は香月を別格扱いとして見るようになって行く。溢れんばかりの才能と、幸運。今、この天才少年は、大きく羽ばたく一步を踏み出そうとしていた。誰もが驚く早さで、階段を昇って行くのだった。

この日、香織との約束の為にN短大の前に車を止めて待つ香月であったが、車を覗き込む女学生も居るし、キャーキャーと騒ぐ娘も居て、落ち着けない。やっと、香織が校門から出て来たのを見届けると、急いで車に彼女を呼び込んで、車を急発進する香月であった。

「いやあ・・君の短大って凄いなだね。君が出て来るまで、色んな事を聞かれたり、車の中に入れてなんて娘も居て、驚いちちゃったよ」

「まあ・・。でも、貴方は自分がもてるって事自覚してないから。もう、少し離れた所で待つてくれたら良かったのよね」

「参ったよ、今度からそうする」

「女子短大って凄い競争力よ。男子校に凄い挑発的な服着て行く娘も居る位だし」

「凄いて事は分かったよ。はは・・」

「短大を卒業する頃は二十才だから、女の娘ってもう、将来設計もあるし、そう言う意味で同年齢の男

子学生よりはずつと大人よね」

「うーん。じゃ、君も橋本さんもそんな話題をしている訳だ」

「どう・かしら？でも、案外しつかり彼氏をつかまえてる娘は判るわね。落ち着いてるし」

「ふーん。ああ、そうだ。これからどこ行く？喫茶店？何か食べる？」

「じゃ、今日は私が行く所へ付き合つて頂戴。貴方の結果も聞きたいし、実は行きたいなつて所あつたんだ」

「いいとも」

香織の言うままに、車を左折、又右折して行く内に、静かな郊外へ出た。晩夏とは言え、杉並木の道を進んで行く内に、次第に人家を離れて、山間の寂しい道に入っていた。

「一体・どこ行くの？」

「内緒。着けば判るわ」

「やれやれ、はい・」

クスッと香織は笑つたが、それ以上は言わなかつた。

山間を抜けると、広い庭園に出た。

「ここは・・・？」

「いいから。もう少し入って。そしたら白い建物が見えるから」

「ああ・・・」

車を走らすと、庭園を過ぎた所に大きな白い建物が見えた。香月はここがどこなのかさっぱり検討もつかなかった。建物前には大きな池もあるし、数台の車が駐車してはいるが、広さに半比例して、人の姿も見えない。その香織も初めてのようで、きよろきよろしていた。

「ここは・・・一体？見た所ホテルのように見えるし、見方によつては、どこかの会社の保養所のようにも見えるし、判らないなあ・・・。看板が出てる訳でも無いしね」

「うふふ。実は私も初めてなの。短大の友達に聞いてきたのよね」

「ここは？」

「何だと思おう？」

「降参だよ」

「温泉！」

「温泉？こんな所に？初めて聞いたよ。目印も無かったね」

「つい最近だけど、掘り当てたらしいの。それも偶然に。元々は会社の研修に使ってた建物らしいんだけど、一般にプレオープンで公開したそうなの。だから、まだネーミングも決まって無くて、私用地に

なるのか、公共の場として使うのかも決定してなくて、一部娯楽設備や、幾つかの業者が入っていて、だから今はそう言う仮オープンらしいの」

「へえー」

「それより、中へ入らない？外で、色々言っているより」

「それもそうだ。じゃ！」

腕を組んで中へ入ると、中は広くて、人こそ少ないが、仮設のフロントで聞くと自由に入って下さいとの事。広いロビーがあつて、ショーに使われるのだろうか。中央のソファアに座って見た。すると、喫茶室にでもなっているのだろうか、すぐ、ウェイトレスが水を持って来た。

オーダーを取ると、

「お客様、今はサービス期間中で御座います。お飲み物は全て無料となっておりますので、どうぞ、ごゆっくりお過ごし下さいませ」

と言つて、離れて行った。

「無料だつて・・・」

「そうなのよ。噂では、本格的にオープンするのは冬かららしいのよね。今がチャンスかもね」

「何だ。ある程度君は知ってたんだ」

「そう・・香月君を驚かそうって思ってる。でも、本当に良い所でしょ？こんな広いロビーに二人きりだなんて」

「そうだね。じゃあ・・後で温泉にでも入らないか？ここは混浴？」

「もう・・やだあ。他にも何人かが来ているようだし、二人きりって事は無いでしょう」

「そうか、残念だなあ」

「本当にそう思ってるの・・？」

香織は上目使いに香月を見た。

「・・少しだけ」

「うふ・・あら、忘れてた。貴方今日発表だったわよね。おめでとう！」

「って、何もまだ言ってる無いよ」

「その顔見ていたら分かるわ。で？」

「ああ・・合格したよ。でも・・」

「教授賞じゃ無かったの？でも、助教授賞でも良いじゃないの」

「それが、学長賞なんだ。この十数年では初めての事らしい」

「ええっ！S工大の世界でもトップクラスレベルの生徒が集まる二百数十名の中で、最高の賞なの！」

「ああ・驚いた」

「それじゃあ、もつと嬉しそうな顔するべきよ！。香月君ったら。でも、私はもう貴方には驚かないつもりだったのに、嬉しくて涙が出てきちゃう。もう、本当に香月君たら・」

シンクロするように二人の気持ち、重なった。

「まあ、でもこれからだ。これからもつと忙しくなりそうだし、笹原、桑原チームの掛け持ちになりそうだから、ニチーム参加なんて他にも居ないって。俺の体が持たないよ」

「それも、驚きよね。S工大のシンクタンクの一員だなんて。でも、本当におめでとう！お父さんにも報告しなくちゃ」

「近い内にお邪魔するよって言って」
「ええ」

二人が楽しく話している所へ、今度はウェイターがやって来た。

「お客様、私共は、只今仮営業中で御座いまして、お越しのお客様に色々サービスキャンペーン中です。特別に当期間にお越しのお客様には温泉の無料ご利用と、お飲み物のサービスの他、特別会員券を発行して居ります。会員になられますと、当方ご利用の宿泊料、御食事料の全てが、二割引となって居りま

す。本日は当方をご利用頂きまして、誠に有難う御座います。お友達、ご家族をお誘いの上、又のお越しをお待ちしております」

会員券に住所、名前を明記すると、一礼してウェイターはその場から立ち去った。

「成る程ね。次の客を呼ぶデモンストレーションで事だね。それで、色々ロコミなんかを通じて、徐々に浸透した所で、テレビや雑誌で流すって訳だ。この人達は企画会社の人達だろうね」

「ちゃんと、色々既に戦術を練り広げているって事ね。ただただ感心するわ」

「でも、快適な気分を提供して貰えるんだから、こう言う企画は大歓迎だね」

「同感」

夕刻近くまで、ここで過ごした二人は、車の中で熱い抱擁を交わした後、帰路についた。香月の帰りを待っていた両親の喜びは、言うには及ぶまい。

そして、念願の桑原チーム参加が決まって、研究の為に二十坪の鳩舎の設置。学内で、いよいよ本格的な遺伝子の研究をする事となった香月だった。今期四十八羽の仔鳩を作出し、その中の二十羽は見切りをつけて、学内に持ち込んだ。日下部氏に協力を依頼して、各種血統も二十数羽入った。鳩をモルモットにするつもりは毛頭無いが、この香月の研究には、あの、掛川教授の息子さんでもある掛川四郎と言う当学を卒業し、助教授を目指す長髪の最優秀な助手が共に研究に携わる事となった。香月の驚嘆す

るような快進撃は、これから始まるのであつた。川上氏とも壮絶な競翔の戦いを繰り広げる事となる地盤がこの時出来た。

そのスタートとなる秋レース百キロの持ち寄り日、幾分早めに來ていた香月であつた。師匠と弟子、相い通じるものがあるのか、やはり川上氏も早めに一人そこへ來ていた。

「よお！」

「お久しぶりです。何度かお邪魔しようと思つたのですが」

「分かつているよ。今が一番大事な時。秋レースの調整も、忙しい時に大変だつただろう」

「はい、でも充分に訓練に割く時間はありましたから」

「うむ。君の事だ。又我々が予想も出来ない訓練をした事だろうね。今日は君が早めに來るんじゃないかと思つて私も早めに來たが、予想が当たつたよ。君にとつては、久しぶりの本格的参加だからね」

「もしかしたら、川上さんも・俺もそんな気持ちで早めに來たんです。今秋は二十八羽なんです」

「ほう・・少数精鋭主義とは思つていましたが、かなりの数を訓練で淘汰しようだね」

「はい。今秋にはテーマを持つていまして、何とか五交配の仔鳩が平均的に残つたのですが、特に率から言つても、親子交配の二交配・一代戻し交配については、出来、不出来が歴然としています」

「もつともだ。近親交配は危険性が高いので、私は余りやらないし、白川さんも極力避けていたようだ」

「つくづく、白川のじいちゃんの偉大さが分かつてきました。それでありながら、一群の飛び筋を固定されたんですから」

「君の事だから、その辺は理解して交配しているのだろうね」

「リスクは覚悟しています」

「そうだろうね。その反面、ずば抜けた優秀な部分を受け継ぐ鳩も得る訳だ」

「その中で、紫竜号に匹敵する一羽が出ました」

「ほお・・。その訓練を少し聞きたいね」

「端的に三つに大別しますが、一斉放鳩、単羽放鳩、高地訓練です」

「ふむふむ。君の事、データを一杯作ったのだね？」

「はい」

「しかし、もう成鳩である紫竜号を持ち出すのは、換羽期にあたり、少し無理は無いかね？」

「ええ。でも、乱気流の中で、低地に向かう追い風を見つける能力は、紫竜号に天性に備わっていると思うんです。その意味では、若鳩にとっては良い訓練になったのではと」

「成る程、その中で一羽図抜けた訳だ」

「はい」

「ま、そろそろ他の会員も来る、後で夕食でも一緒にしようじゃないか」

続々持ち寄り場所へ集まって来た会員達。新人の姿も幾人か見える。春の競翔で有名になった東神原連合会は、ますますその地位を高めつつある。しかし、この日、春には殆んど姿を見せなかった佐野が居た。放鳩車を送り出した後、香月が佐野に声を掛けた。佐野も香月に話があったようだ。佐野の方か

ら言い出した。

「やあ、お互い久しぶりだね、春は大活躍だったよね」

「いえいえ。でも、佐野さんはどうされてました？俺も競翔には途中参加だったんで、佐野さんの姿が見えないのを心配してました」

「うん・・春の競翔の直前になって、イタチが入ってね。成鳩のほとんどがやられたんだ。俺の鳩舎は、相当古くなって。それで、金網を破られて。種鳩の被害が無かったのが、せめてもの救いだっただよ。でも、シヨックだね」

「そう・・だったんですか。佐野さん程の方が、油断していたとは思えませんが、一体何故急に？」

「ああ、長年飼っていた犬が、老衰で死んでしまっただね。犬の匂いがある所はイタチも来ないだろ？それが、犬が死んだ途端だよ」

「お気持ち分かります。残念でしたね」

「でも、又子犬を貰って飼っているし、鳩舎も今度は設計し直して、建て替えたんだ。それに、新血統も入れたんだ。自分なりに研究して導入した血統だから。秋は俺も頑張るよ」

「そうですか。佐野さんの元気な姿を見て安心しました」

「ああ、又よろしく。で・・少し今日は君に聞きたい事があったんだよね」

「何でしょう？」

佐野はノートを出した。彼らしい仕草に香月もニコツとした・・が、次の瞬間香月の顔が凍った。

「分かる？君の紫竜号・・どう見ても、白竜号、ネバー号の仔鳩としか思えない。これが血統図の証拠だよ」

「・・ふう・・佐野さん、どなたかにそれを？」

「いや、君に確認したかっただけさ。君が公認しないのは、理由が勿論あるのだろう。天下のGCH両鳩の奇跡の仔鳩だなんて知れたら、困るからだよね？そう言う事で、隠して来たんだらう？驚くのを俺も通り越していて、なお且つその紫竜号の稀有の才能に驚愕するよ。全く」

「今は・・やはり内緒にして下さい。お願いします」

「ああ、勿論さ。どんな競翔鳩に育って行くか、楽しみでもあるし、勿体ない気もあるよね。これを磯川さんが知ったら、どう言うだろう・・。恐らく紫竜号の才能を誰よりも感じているから。パイロンエース号のライバルになるかもって言っていたよ」

「あの鳩も英傑ですよ。春には素晴らしい成績が期待出来る競翔鳩でしょうね」

この晩、久しぶりに川上家で夕食を取った香月であった。楽しく、そして祝福を受けた後、いよいよ川上氏との今秋の本題に入った。

茶を応接室へ運んだ後の居間では、香織と母親が談笑していた。

「本当に頑張ったわねえ、香月君」

「うん。殆んど寝てない状態だったそうだよ。二週間」

「天才の影には努力あり・・か。凄い彼氏を持ったわね、貴女も大変」

「そんな事思っても無い。ただ、体を壊さないかと心配」

「そうよね。見る限り、少し痩せたかもね。大学では、二つの専攻を取ったそうだし。貴女が氣遣ってあげなきゃ。ああ言うタイプは、突っ走りそうだから」

「あら、お母さん、そう言うタイプと付き合ってたような言い草ね。お父さん以外の人の話ね？」

「ふふふ。ああ見えて、若い時は無鉄砲だったのよ、お父さん。貴女は知らないけど、特に白川さんには散々迷惑を掛けたわ」

「ふーん。そう見えないけどなあ。じゃ、同じタイプだから気が合うのかな？香月君とお父さんって」
「まあ、うふふ。どうかしら？」

二人が笑いながら話す間、川上氏も上機嫌であった。

「とうとう、帰って来たな。強豪が」

「やっつです。これで本格的参加になりそうで、嬉しいです」

「頑張ったもんなあ、君は」

「これも、白川のじいちゃんのお陰です」

「ああ。しかし、それも並大抵の努力では研究を受け継げないだろう、君の才能と努力だよ」

川上氏は目を細めた。故白川氏の姿が万感に過ぎる。改めて偉大な人だった事が偲ばされる。

「・・・ふうん。じゃあ・・・七回の訓練の後、残る三回の試みで、六羽が脱落した。そして、君のチーム編成に狙いがあると言う事だ。聞かせてくれよ」

話は進んでいた。

「ええ、長距離鳩、短距離鳩と言いつても、実際レースに参加させて初めて真価が問われるものだと思うのです。向き、不向き等と判断しても、我々は単に体形的な側面でしか見ていない訳ですから」

「うむ。確かに。体が大きいから、筋肉が硬いからと思っていたら、二歳から三歳になって開花する鳩も居る。要するに色んな血統をませこぜに飼育するよりは、固まった一群を使翔する方が、管理もしやすいし、見極めも比較的容易でもある訳だね」

「ええ、その通りですね。でも、俺の所は今、色んな系統が居ますから、どうしても、比較判断せざるを得ません。又、そうだからこそその面白さもあると思うんです」

「確かに。ただ、私自身も白川ベルランジェの飛び筋の一群は出て来たが、まだまだ突きとめる部分がある。正直難しいよね。でも、自分でも言うのもなんだが・・・相当良い子鳩が今年は出来たよ」

「わあ、恐いですね。その言葉。どんなCH鳩が生まれるか分からない血統ですから」

「私は、君程精力的には動けないがね。新方式を採用しつつある。又、白川さんが活躍されていた頃と比べて、現競翔界はスピードバードを求める傾向にある。これは今後も、更にそう言う指向が強くなって行くだろうと私は考えているからだ。やつとスピードバードの一群を発見したよ。今後はレースのムラをどう無くするかだ」

「春のGCHの成績で、もう証明されていますよね。爆発的な真価が発揮されています。GP以前のアクシデントが無かったら、どんな成績が出ていたか・・・」

「おいおい・・・弱ったね。君程の子が、そんなに。私だって、君が最大のライバルだって思っているよ。それより本題を聞こうじゃないか」

いつに無く香月も、川上氏に対してのライバル心が燃えている事に気付いた。茶を飲み干すと、訓練の過程を話し始めた。

「比較的・・・スピードのある八羽と、残った二十六羽で、編成を考え、十一チームと一羽の組み合わせで、三羽単位の訓練を考えました。タイプは二分しましたが、短距離訓練に影響も無い事なので、春レースを想定して行いました。ある程度の訓練を経て来た鳩群ですから、今度は訓練を兼ねて、背中に体重の割に当たる錘を装着しました。勿論飛ぶには支障の無い場所です」

「思いも依らない訓練だね、まさしく・・・」

「この訓練は山間のふもとで行ったのです。結果・・予想通り、かなり帰舎タイムは遅れましたが、何とか終了。ただし、スピードボードである三羽の内二羽と、チェックポイントが二つある三羽が特に、帰舎タイムが遅れました」

「ふむ・・。では、チェックの対象となった訳だね」

「いえ。むしろ、スピードボードには期待が持てました」

「期待？何故？」

「その中の一羽は高山からの一番手。もう一羽は、これまでの訓練を常に先頭で帰って来てた鳩だからです」

「今の私には即座に理解出来ない事だ」

「つまり、気流に乗るタイプと判断したからです。若鳩ですから、筋力はこれからつきます。先天的に気流に乗るタイプとは長距離鳩と見て良いのでは、と言う考えです」

「ははあ、それを見極める訓練だったのか」

「はい。まず、この訓練が第一段階。続いて行う第二訓練なんです。これは春終了時から思案して、まして、場所選定に苦労しました」

「何・・春から準備していたのかい・・。君には驚くよ、全く。ははは」

川上氏は笑った。

「いえ・今までのレース展開を見たら、真価を發揮しだした白川系と、磯川さんのペーパーマン系には恐らくスピードで置いて行かれるでしょう。その為には筋力と、方向判断力を磨く事に主眼を置いたのです。春は俺も奇策が成功しましたが、若鳩の質と数では到底不利です。特に千キロまである今秋は、いち早く可能性と資質を見極めて、全レースに参加させようと思っっていますから、それだけの準備が必要だったのです。現役レーサーを種鳩にしたのも、考えての事でした」

「つまり、君は春レース以前から自鳩舎改造プログラムを作成していた訳だ。いやはや、そこまで先を見越しているとはね」

「俺は香月系を作る夢がありますから」

「分かったよ。ただ・私の意見として、旧主流系プラス、シューマン系では、かなり難しい面があると思う。敢えて、君が今後どんな異血導入を考えているかは聞かない事にしよう。で？その訓練とは？」

「はい。難易度の高い候補地を捜し、山あり、谷あり、池あり、川あり。どう鳩が帰還コースを選択するかによって大きく帰舎時間が変わるような、おまけに放鳩時、鳩が飛び立つ方向が鳩舎と逆方向になる所・直線にして僅か三重キロの訓練なんです」

「つまり、方向判断力だね。なお且つスピードが要求されるとなると、厳しいね」

「一羽、一羽の単羽訓練をやりました。友人に依頼して。三分間に一羽、総数三十四羽を一時間四十二分かけて行つたのです。ここで、二十分以内に戻つた鳩が、十一羽。無チェックの一群でした。それに続いて、二十一分から二十四分前後に十四羽。二十五分過ぎに七羽。三十分以上掛かったのが二羽。予想外に帰舎は良かったのですが、総合的に判断したら、的確に自己判断で戻つた鳩は二十八羽になりま

した。残り是一緒に付いて戻って来た鳩でしよう。これで、一応の第一段階は終わりました」

「第一段階と言う事はまだ、あるのかな？第二段階が」

「ええ。最後の見極めがありますので。六羽については、再三のチェックがあり、将来的に選手鳩として危ぶまれましたので、大学へ持ち込みました。種鳩としては案外子孫を残してくれるのでは？特に近親交配による鳩達でしたから」

「君すら、それまでに見分けがつかない程だった位だから、余程判断に苦慮したようだね」

「そうなんです。親と瓜二つの鳩も居りますし、外見的に両源鳩を彷彿させるような面も多々ありましたので。ひよつとしたら・・そんな期待感で、鼻屑目に見ていた所もあります。けど、やはり駄目でした。短距離を帰つても、難レースには失踪の危険性も持っていますし、力及ばない鳩をレース参加させる必要はありませんから」

「その通りだね。多くの競翔家がレースによって淘汰しようとしている。我々はその前に、もっと早く資質を見抜くべきなのだ。」

「訓練は、同一の力量を持った鳩達で行うのが良いと思います。遅い鳩のペースに合わせると、訓練になりません」

「そう発想をした事は無かったが、君の言う少数精鋭主義とは言い換えればそう言う事だろうね」

「それで、最後の訓練は、その・普通の一斉放鳩なんですよ。実は」

「何だ。もつと大掛かりかと思つたよ。あはは」

「その訓練は秋の百キロ帰還コースに当たる六十キロで、夕刻にしました」

「ははあ・普通ではやはり無かったか。それなら私も良く分かる、短距離鳩なら一目散に戻るだろう。いつもより早く。逆に長距離鳩はやや遅れて一斉に戻って来る筈だ」

「はい。その通りでした。何か、これは一般的な方法が最善と思つたものですか」

「一般的じゃないぞ。その方法は著書にも出ているが、十数年前に備前連合会の著名鳩舎、郷原道和田が試されたもので、これで成功を収めたと書いてあつたのを記憶している。ところが他の人がそれを真似しても中々結果は出なかつた。君は今までの九回に渡る訓練で、何かを掴み、それで結果を試したかつたのでは無いか？君だから出来る芸当だが、とても難しい方法で、一般的とは言えないよ」

「いえ・そんな難しい方法ではありません。だつて餌を抜いて放せば、どの鳩だつて、一目散に戻るに違いありません。ところが少量の餌を現地で与えておけば、短距離鳩は全速で、長距離鳩は時間の余裕を持つて帰るに違いありません。その違いが、短距離鳩、長距離鳩を分ける距離感覚で、九回の訓練で体感している事ですから」

「全く・脱帽するよ。一分の隙も無いね、君と言う子は。とても私の比ではない、今思つたよ。君は既に一流だ」

そう言う川上氏の言葉に、香月は強い調子で言った。

「いえ、とんでも無いです。川上さんと初めてお会いした時、お教え下さつた事。・鳩舎にはそれぞれ個人の創意工夫があり、独創的なものだよつて。人それぞれに、管理も訓練も飼育の仕方も変わつて

当然。むしろ、だからこそ競翔は楽しいし、他鳩舎と同血統の鳩を幾等飼育しているとしても、その鳩舎の管理に合う、合わないがあります。俺の目標はいつまでも川上さんなんですから、目標なんですか
101

川上氏の目が少し潤んだ。

「有難う、ひたむきな君の姿にはいつも感心させられる、私も負けては居られないね、ははは」

川上氏の胸の奥には、白川氏の言葉が過ぎっていた。グランドスラム、無謀なまでの挑戦。超銘鳩の誕生。彗星の如く出現した偉才。今香月の手元に居る、その恐るべき可能性を秘めた紫竜号。この純粋で、ひたむきな若者を苦しませてはならぬ。全くこうなつて見ると、罪な交配を香月君に託したものだ・白川氏は・川上氏はそう思っていた。ただ、他の鳩を完璧とさえ見極める事が出来る香月が紫竜号には翻弄され続けて居る。そんな不安や心配も過ぎっていたのだった。

翌朝は、向かい風七メートルのコンディションだったが、現地の低気圧が通り過ぎた午前八時ジャストに放鳩は開始された。風は多少吹いてはいたが、晴天で、レースとしてはまあまあの方速が出そうな気がした。過去香月にとっては、殆んど明け渡した事の無い文部杯であった。香月はこの秋で、文部、Jrレースから降りようと思っっている。

来年には二十才を迎える。そろそろ後輩の学生競翔家達に活躍の場を譲ろうと思っっている。連合会内

においても既にトップレーサーの位置に、自分が居る事を自覚しているからだ。レースの帰還分岐点に位置する香月鳩舎、何度も言うが、この天の利は短距離レースでは圧倒的に有利な条件だ。先頭集団を形成する一群に香月鳩舎の鳩が居ればの事ではあるが、川上鳩舎の旧主流、或いは、現種鳩からの仔鳩群は、例えペーрман系、白川系とも一歩も引かない活躍が期待出来る筈。香月はその為に充分な訓練をして来ていた。そして、鳩舎上空に現れたのは五十羽程の一群だった。その先頭集団から二羽が舞い降りた。すぐ鳩舎に飛び込み、二羽をほぼ同時に打刻するが、後続は中々姿を現さなかった。ようやく十分後に大集団が姿を見せ、その中から十二羽が一斉に降り立った。打刻はしなかった。最初の打刻が九時二、三分。向かい風のコンディションを考えると、やはり短距離タイプの鳩がこう言うレースは早い。続々戻る鳩のデータを克明に記入しながら、今日のレースを分析していた香月だった。ようやく最後の一羽が入舎した時は、九時三十分だった。

・・・まずまずだ・・・香月はそう思った。

長距離タイプの鳩は決して無理はしない。悠々と自分のペースを守り帰って来る。予想した通りの帰舎に香月は頷いた。九時四十分になって、佐野から電話が入った。

「やあ、どうだった？」

「ええ、タイムしたのは二羽なんですけど、佐野さんの所は？」

「うん。確認した所では、上位が千五百メートル台かな？俺の所も九時九分にタイムしたよ。かなり一般も分速が接近していて、俺の三羽と、磯川さんの一羽。川上さんが特別多くてね、十羽なんだ。君の

方の文部がどうかと思つてさ。大体君の帰舎タイムが百キロレースを左右するからね」

「ええ、九時二、三分だったと思います」

「そう！やっぱ早いね。すると・・俺の一般の方も案外良い線に行つてそうだね」

「俺が確認した所では五十羽程の集団でしたから、面白いですね。間違い無く上位でしょう。ところで、佐野さんのトップは新血統ですか？」

新導入の血統を敢えて香月は聞いて居なかつた。それは結果が出てから聞くものだと思つていたからだ。

佐野は、喜びを隠せないような張りのある声で答えた。

「うん！そうなんだ。実はビクターロビンソン系を入れたんだけど、長距離タイプって思つていたら、こんなに短距離にもスピードが出るなんて考へて無かつたからね、期待以上で嬉しいよ」

「良かつたですね。イギリスの血統ですが、かなりのスピード系と聞いています。今晚の開函の時にでも又その話を聞かせて下さいね」

「うん！じゃあね、今から他の鳩舎にも連絡を取つて、リスト表を作つて見るね」

元気の良い佐野が戻つて来た。香月も嬉しくなつた。佐野の新血統が幸先の良いスタート。愛鳩を失つた悲しみから立ち直つたその喜びに、拍手を贈りたかつた。

夕方になって、川上氏宅へ訪れると、川上氏は外で待っていた。

「やあ、今日は君の車に同乗させて貰うよ。佐野君が一般では早いらしいね。又、強力な血統が出現したものだね」

そう言う川上氏の顔はにこやかだった。香月と同様の気持ちのようだった。

「ええ、ビクターロビンソン系を導入されたみたいですね。佐野さんの鳩舎にマッチしたようです。これ程短距離にも早いとなると要注意ですね」

走りながら、佐野鳩舎の新血統を話し合っていたが、川上氏も今春の佐野鳩舎の出来事を良く知っていて、非常に熱心な若手競翔家の一人。その手腕も高く評価しているのだと嬉しそうだった。こんな川上氏故に、香月は師と呼び、深く尊敬している。

到着し、すぐ開函となったが、同場所に来ていた浦部が話しかけて来た。最近は何度も市内の工場に勤めていて、温和で大人しい人物だが、かなり社交的に変貌しつつあった。頑として、自分の競翔姿勢を崩さない彼の血統は、南部×今西系。長距離鳩舎として何度も優入賞しているが、短距離レースでは殆んど顔を出さない人が何故？香月は思った。

「やあ、こんばんわ。佐野さんから聞いたんだけど、新血統が良い見たいだね」

「ええ、ビクターロビンソン系のようですね。随分研究されての導入でしょう」

「皆、次から次へと新血統を導入して行くけど、スピードバードはそれだけ危険性も待っていると僕は思うんだ」

「確かにあるでしょうね。特に新血統の場合、全てが未知数ですから、どう対応するかによって、レースにムラが出るでしょうし。でも、それだけ突拍子も無い記録も秘めているから、その反面、面白さもあると思いますね」

浦部の姿勢を尊重して、香月は答えた。浦部は続けた。

「そうかも知れないね。ただ、僕は自分が長年飼って来た愛鳩を手放すなんて思いもつかないんだ。自分の飼っている血統なら、こんなタイプなら、こうする、このタイプはこうだなんて、大体把握出来るし、僕は、稚内に標準を絞っているから、粘りがあつて、難レースでも後日帰りがあつて、大体把握出来るのが好きだな。僕は人の事はとやかく言うんじゃないけど、ただ、鳩レースは競い合う為のものでは無いって思ってるんだ」

「良く分かりますし、浦部さんの姿勢は尊敬していますよ。俺も自分の鳩を一羽たりと失いたく無いんです。ただ、自鳩舎の血統の可能性を最大限引き出してやる事も愛鳩家、競翔家の姿勢だつて思うんです。欲張り・・・ですかね？」

ゆつくり浦部と話をした事も無かった香月だが、こう言う会話はむしろ楽しかった。

「うん。君なら、その両方を持ち合わせている。僕が言いたかったのはそう言う事なんだ。川上さんに初めて競翔の事を教えて貰った時から、僕はその事を忠実に守って来た。いつまでも、その気持ちを持って居たいんだ。だから、若いのに古いのに古い考えだつて良く言われるけど、僕は僕なりに長距離鳩を育てたいんだよ」

「素晴らしいと思いますよ。第二代、三代と世代が進むに連れ、より優れた素質を引き出す事をやって行けば、浦部さん独自の血統が出来るのでは・・・と思います。古い考えなんて誰が言ったのかは知りませんが、俺は決してそんな事は思っていないよ、日本と言う狭い島国で、戦い生き残つて来た系統は、大事です。必ず、必要です・・・で、話は全く変わりますけど・・・今秋は浦部さん、いつもより仔鳩の出来と言うか、早かったようですね。短距離で姿を見るのは学生の頃だけでしたので」

「ああ・・・。今秋は五十六羽参加したんだ。」

「いつもより凄く多いですね」

「秋の参加が多かったのは、僕の所も過去千キロ以上記録した鳩を種鳩にしたりで、現在二十羽程種鳩が居ると、現役選手鳩兼種鳩が居る。記録鳩からは、一度春の子取りをするので、今秋は特に羽数が増えたんだ。予想外に帰舎が良くて、いつもは短距離なんて諦めているんだけど、五羽タイムしたよ。今日の帰舎状況を見て、ひよつとしたらつて思ってたね」

「・・・で？何分頃でした？」

「うん。一番手が九時十分頃で、五番手が十二分頃なんだ。でも、聞いたら、今集計の方やっているけど、佐野さんの所の鳩には敵わないようだし、川上さんの所も十羽も打刻しているって聞いてるしね」
「混戦のようですね、今秋は、参加羽数も六千羽余りらしいですし」

そう話している内に、集計がCブロック分が終了したようである、磯川はBブロックだ。羽数が多くて、今秋はAとDまで五ブロックある。集計が終わり次第、このCブロックへ集結する予定であった。
佐野が浦部、香月の所へやって来た。

「いやあ・・・凄い混戦だよ。分速が一メートル、何十センチの争いだ。未だ他のブロックもあるので、待っているけど、大体は俺のリスト通りの順位になっているようだ。特に浦部君、君の今秋は凄いな。参加羽数もそうだけど、上位にかなり食い込んでいるよ。君の事だから、ストックしていた選手鳩からもかなり仔を引いたんだろうけど。」

香月が訊ねた。

「それで、順位の方は・・・？」

「ああ、ここでの順位なんだけど、ジュニアの香月君の一位、二位は恐らく不動だよ。一般の五千数百

羽の分を合わせても、七千六百八十九羽中ダントツだ。総合レースで優勝したようなもんだよね、凄いや。分速が一五九八・六二四メートル出ている。それに二位も一五九二・五六二メートルだから、圧倒的だ。それに一般の部だけど、このブロックでは、俺の鳩が一五六・二九六メートルで、暫定一位なんだけど、二十位まで一五三〇メートル以上出ている。俺が三羽、川上さんが十羽。浦部君が五羽。渡辺鳩舎が一羽と、新人の人なんだけど、小谷良一さんが「一羽だ」

それを聞いて香月が聞く。

「・・・小谷さん・・・って言ったら、確か中原連合会で、参加されていた人・・・かな？」

「おや、香月君は知っているのかな？」

別室で話をしていた川上氏が、この場に丁度やって来た。その隣で、にこにこしながら入って来たのはやはり香月が知っている小谷さんであった。

「小谷さん、お久しぶりです。でも、何で、こちらの連合会へ？」

小谷氏が答える前に、川上氏が座り切らない内に小谷氏を向いて訊ねた。

「どう言う知り合いなんだね？小谷さんは私も随分前からの知り合いなんだが、香月君と、知己とは思わなかったよ」

にこにこしている小谷氏であった。髪の毛は短く刈り込んでいて、三十過ぎの小柄な人だが、中原連合会ではトップ競翔家で知られた人である。見た目には少しいかつい顔だが、話をすれば凄く楽しい人である。

「いえ、川上さん、俺がお話します。小谷さんは、俺がバイトをしている、日下部ペットショップに良く来られているんです。それで知っています」

小谷氏が続ける。

「私は日下部さんとは、年も近いし、大の仲良しなんで、良く遊びに行くんですよ。香月君と知り合ったのは、五月頃でしたが、凄く鳩競翔については詳しいし、理論も舌を巻く程です。私も競翔鳩の事を語らせたなら、うるさいほうなんですけど、とても、とても。閉口してしまう程の鋭い質問を浴びせて来る。確か、佐伯君のハンセン系を使翔しているとかで、私もハンセン系を主流に使っていますけど、その特徴を私以上にずばりと突いて来る。聞けば、東神原連合会の香月一男だと言う。おお！あの雑誌にも載っていた子か・と思ったたら、何だか私も愉快になりましたね。それからの知り合いなんですよ。中原連

合会は、東神原連合会とエリアは変わり無いですし、それに・・天狗になっているつもりじゃ無いですけど、中原連合会に居ては、自鳩舎の向上が望めないと思っただんです。弱小連合会ですし、私が常勝を続けるんで、色々陰で言う者も居たりして・・。そんな話を日下部さんと話ししていたら、そんなら、香月君が是非東神原連合会に入会して一緒にやりましようって言うんです。強豪が目白押しだからそう簡単に優勝させませんよって。あっはっは」

「あれは、冗談ですよお」

香月が笑った。川上氏も笑った。

「ははは。まあまあ、香月君。理由はどうであれ、私達は趣味を通じて楽しむ会だ。小谷さんの本音は言つては貰えないが、良いじゃないか。一緒にやりたい人はやれば良い。こんな強豪を交えて、レベルは更に高くなるだろう。でもね、小谷さんもこう見えて、結構気が小さい所があつてね、昨日の持ち寄り場所へ早めに来て、私に鳩を預けて帰つてしまふんだから」

「ああ、それで、川上さんが早かつたんですね？昨日は」

「はは。まあ、それもあるけど。もう紹介済みだろうけど、私から、今ここに居る会員を紹介しよう。こちらの長髪の眼鏡を掛けた子が、佐野君。情報量が豊富でね。連合会の博士って呼ばれている、その内小谷さんの所へも行くだろう」

「佐野です。よろしくお願いします。近い内にお邪魔します」

「是非来て下さい」

「続いて、浦部君。若手の強豪の一人だが、特に長距離には強くてね。GNが彼の目標レースだ」

「よろしくです。在来系を主流にしています」

「よろしくです。君の名前は知っているよ。確かGN優勝もしていたよね」

「他の人もかなり今日は帰ったが、まだまだ強い若手は大勢居るよ」

川上氏の言葉に、小谷氏も頷いた。

「ええ。実際今日も優勝に食い込んだかな？そんな事を思いながら、ここまで来たら、とても、とても。特に、香月君の帰舎タイムを聞いて愕然としました。総羽数何銭六百八十九羽でしょう？ダントツの一位、二位タイムだと言うから驚きですよ。この短距離の大羽数の中、トップを取るなんて事は、むしろ、GPや、各種の総合レースを取るより難しい。タッチの差ですからね。それを、分速何十メートルも引き離すとは、身震いします。私もこんな連合会に入れて光栄です。これからも皆さん、どうか、よろしくお願いします。ところで、先程から、楽しくお話されていたようなので、良ければ、私も入れて下さい」

「ええ、今、各ブロックから集計が来ているようですので、俺が佐野さんに代わってお話します」

香月が言った。

「今日は、佐野さんが、導入したビクターロビンソン系について、伺おうって思っていました。スピードバードですが、特に長距離には強い血統です。旧血統にビクターロビンソン系を交配するのか、一本で行くのかを聞きたかったんですが」

「ああ、その話だったら、僕が聞いているよ」

浦部が答えた。

「佐野さんの鳩舎は、今までブリクシー系を主体にしている、ジュニア時代には、入賞も多かったんだけど、一般で参加するようになってからは、なかなか長距離になると、入賞出来ない。色々新血統を入れては行っていた見たいけど、今まで飼っていた系統を手放すなんて事は出来ない。結局その前に外敵に入られて、選手鳩の大半がやられてね。あの時の佐野さんの落胆ぶりは見てられなかったよ。長年飼っていた犬も死んでしまって、辛がっていたすぐ後の事だからね。千キロの記録鳩も随分やられて、残ったのは数羽だったんだ。もう競翔なんて止めるって僕にも言っていたよ。飼い主が責任を持ってない命なら飼う資格が無いって。彼は性格もそうだけど、実直で、すごく真面目だから。でも、僕は言ったんだよ、佐野さんが各鳩舎を回って、血統の研究や、鳩舎の資料作りをして来たノートはもう何百冊にもなっている。そのお陰で、皆も感謝しているし、それ程鳩が好きなんだから、止めないよね、止めたら駄目だよって。そうしている内に、佐野さんが雑誌の中で、ブリクシー×ビクターロビンソン系で大活躍

してる鳩舎を見つけてね。それで、思い切ってその鳩舎に電話したそうなんだ。その鳩舎は凄く電話を喜んでくれて、それで、幸い鳩舎には種鳩が残っていたから、佐野さんも鳩を止めないで良かったんだ。その鳩舎から数羽のビクターロビンソン系を無期限で借りたんだよ。何度もお金を払おうとしたんだけど、交配が上手く行かなかつたら、他の鳩と交換するよって言う位に、親しくなったんだ」

香月が頷きながら浦部に聞く。

「凄く良い話ですよ、佐野さんは連合会に無くてはならない人です。良かったです、本当に。で・・・？
どこの方なんですか？雑誌に出てた人と言うのは」

川上氏も言った。

「そうだね。佐野君の熱心さは定評ある所だし、徹底した几帳面さと、データ量の豊富さに加えて、管理も独自のものがある。今まで、何で佐野君がもつと活躍出来なかったのか、むしろ不思議な位だ。その鳩舎との関り合いを知りたいねえ」

「うーん。僕は済みません、言えないですよ、実は。佐野さんと、その人との約束らしくて」

浦部が申し訳なさそうに答えた。

「それじゃあ・・・しょうが無いね。無理にとは言えないよね」

川上氏もそう言った。しかし、その頃には全部のブロックの集計が完了したようで、佐野がにこにこしながらこつちへやって来た。

「えーそれでは、集計が完了しましたので、発表します。文部は、香月鳩舎が優勝、二位、三位が渡辺鳩舎、四位が秋山鳩舎、五位が柴田鳩舎、六位が山田鳩舎、七位が荒木鳩舎、八位が渡辺鳩舎、九位が山田鳩舎、十位が原田鳩舎です。次に一般ですが、優勝が佐野鳩舎、二位が川上鳩舎、三位が佐野鳩舎、四位が磯川鳩舎、五位が浦部鳩舎、六位が小谷鳩舎、七位が川上鳩舎、八位が川上鳩舎、九位が浦部鳩舎、十位が川上鳩舎、以上が上位十傑です。おめでとう御座います」

残りが十数人になっていたが、拍手が沸いた。既に時刻も十時近くになっていた。川上氏が佐野を祝した後、先ほどの話を佐野にした。佐野は少し躊躇したが、話し始めた。

「はい・・・実は固く口止めされていたんですが、名前は千葉静生さん。名古屋の中部連合会の会長さんです」

「おお！あの高名な千葉さんか。そりゃあ、凄い。色んな血統を輸入されて競翔されている方で、特に

V・ロビンソン系の超銘鳩インザクト号を飼育されている方と言う事でも有名だ。私も授賞式で、二度程お目に掛かった事がある。それは大変な人と知り合いになれたもんだよね。じゃあ、君の鳩舎に入るのはそのインザクト号の血筋な訳だ」

ほおー・一斉がどよめいた。インザクト号は導入して未だ数年の鳩である。その血筋と言えば、直仔の可能性が高く、つまり、佐野はインザクト号の孫鳩を使翔している事になる。

「はい。直仔が二羽と、孫が三羽です。俺も有名なインザクト号を知らない訳では無かったので、夢のような事でした。それに、こんな濃い血筋とは。何度も千葉さんの鳩舎にはお伺いし、その度にアドバイスを頂き、俺の鳩舎のブリクー系のエルパソ号（実在した鳩です）孫鳩との交配について、詳しく教えて頂きました。それが、最初からこんなにスピード性を發揮し、上位に顔を見せるなんて、嬉しい一言です。俺は今までの自分の姿勢は崩さず、徹底したデータ至上主義を持って、千葉さんに恥じない競翔家を目指したいです」

拍手が沸いた。佐野の非凡さを見抜いた千葉さんも立派だが、佐野がこんなに成長した競翔家になっていたのだと、川上氏も嬉しかったに違いない。それに対して素直に喜びを感じる香月であった。小谷さんが言った。

「いやあ、本当にここには熱気がある。皆が競翔家の姿勢を持っている。私はこの連合会に参加して本当に良かった、小さな連合会で天狗になっていた自分だが、今までの姿勢を改めて自身に問わねばならない。川上さん、何か、こう、体が燃えるようですよ。本当に私をお誘い下さいまして、有難う御座いました」

あれ・・香月は思った。川上氏が小谷氏をお誘いしたのか・・と。又一人強豪鳩舎が誕生し、強豪鳩舎が加入した。会員のレベルアップは著しい。学生達のレベルも一段と高くなっていた。インザクト号は、イングランド・インターナショナルレース千二百キロメートル競翔に於いて、総合三位、十二位、二十四位に入賞したグラランドチャンピオンである。素晴らしい長距離のスピードバード。きっと佐野の熱意が通じたのだろう、千葉さんに。又新風が吹いた。東神原連合会に・・。

近年の競翔界も増大し、数多くのレースが開催されていて、どの鳩が銘鳩と言う統一基準は難しいかも知れない。が、万人が認める超銘鳩とは、やはり、大記録を残した鳩である、白竜号、ネバー号、パイロン号、インザクト号、(実在した鳩では、ミイニユエ号)不滅の記録の陰には、やはり名トレーナーの存在がある。いつの時代になろうとも、人間と鳩が、血の滲むような訓練、交配、努力、愛情に支えられて、達成された事を忘れてはならない。香月は思った。白川氏が残したネバー号の悲しい宿命を思えば、一番の鳩だけがその勳章を受けるとは決して思わない。人間が至上では決して無い。又、鳩が至上でも無い。根本にはやはり深い愛情を無くして、記録は生まれえないのだ。無言の中に、香月は川上氏の競翔に貫く姿勢を深く感じていたのだった。川上氏の人間的な大きさ無くして、今の香月が無いよ

うに、佐野にも千葉さんが競翔界に居られた事が、彼にとつての幸運であつただろうと。

そして、続く週に行われたジュニアレースの二百キロでも香月が優勝した。ただ、かなり上位は混戦で、二十位内入賞は他には無かつた。一方、一般は、優勝が川上鳩舎、二位が磯川鳩舎、三位、佐野鳩舎、四位、小谷鳩舎、五位、渡辺鳩舎、六位、川上鳩舎、七位、桐生鳩舎、八位、川上鳩舎、九位、浦部鳩舎、十位、高橋鳩舎と、大混戦で全く予断を許さないポイントレースであつた。参加が総合レース並の東神原連合会では、一位を取る事自体が難しく、まして、入賞に顔を連ねる強豪の名前が川上、磯川、高橋、佐野、渡辺と。流石にこのメンバーの特異な強さは際立つて居た。

いよいよ、秋レースは本番に突入し、全国杯の農林大臣杯三百キロレースと、十連合会合同ダービーが、待っていた。先に農林大臣杯が開始。香月は短距離候補の十羽を参加させた。

この三百キロレースは、後に控える十連合会合同レースの人氣が最近高いので、幾分参加羽数は減つていた。この三百キロレースから五百キロヘジャンプする鳩舎も多いので、参加羽数は連合会では二千五百羽余。

晴天に恵まれて、この三百キロレースは高速レースとなり、分速千七百メートル台の高分速は、百キロ、二百キロと好調に優勝して来た勢いで、このレースでも香月が優勝。川上氏が二、四、八位。浦部が、三位、北村が、五位、磯川鳩舎六位、七位、九位に高橋鳩舎、十位が、桐生鳩舎だつた。ただ、毎回入賞を重ねては居るが、磯川鳩舎が、今一つの勢いで、それがかえつて侮れない存在と香月の目には映っていた。とにかくとして、香月はここまで無傷の三連勝。この勢いは、素晴らしかつた。

そして、いよいよ、秋の花型レースの一つ、三百キロ合同ダービーを迎える。十連合会が今年から十

五連合会に膨れ上がり、それも運輸大臣杯に参加せず、主力をキープして来た各鳩舎の思惑通りに、連合会でも四千七百八十羽参加、十五連合会で、三万四千羽余りの大羽数が集結した。香月は十六羽参加中には三百キロを続けて参加させた鳩も居た。他の鳩舎でもそう言った参加は多いようで、この三百キロ後、五百キロにジャンプさせる鳩舎の狙いがそこにある。そして、この日は無風だが、途中の平野部に霧が発生し、分速が落ちるのであると予想されている。しかし、香月自身は、最もこの条件を待ち望んだレースであった。訓練の成果が出るとするならこのレースだ。香月は短距離の期待鳩をここへ持ってきた。その中の一羽は、今秋百キロ、二百キロ、三百キロと三連続優勝した一羽でもあった。そして、このレースは磯川にとつても最も強いレース、過去にも総合優勝を飾っている放鳩地でもある。放鳩はもう、これ以上は天候が悪化しないだろうと言う判断で、午前八時二十分にスタートした。トップ集団の鳩舎が十二時前後と読んだ香月は、分速が落ちるレースと周囲が予想する中で、相当早い帰還を考えていた。それは、短距離レーサーだけに絞った参加をさせた狙いもあるのだが、自分の思案した訓練が生きてくる筈・・・と言う期待感が高かったからだ。

そして、乳白色の霧が立ち込める鳩舎上空、その悪条件の中、香月が予想した時間よりも、なお鳩の帰舎は早かった。十二時前にバラバラといきなりタラップに降り立った鳩は、六羽。今回のレースには、帰還する大集団が見えない。いきなり鳩舎に飛び込んだと言う表現がぴったりだった。そして、後続は中々続かず、ようやく次の集団が戻って来たのは、十二時半を回ってからで、その後ポツポツと帰舎し、全鳩が帰舎したのは一時を少し過ぎてからだだった。

短距離鳩だけに絞ったこのダービーは、香月の読みがほぼ的中した形となって、それ程帰舎の遅い鳩

も居ず、スタート百キロレースからまだ一羽の落伍鳩も出して居なかつた。競翔前訓練と淘汰がここまでは功を奏したと言えるだろう。又、この日の帰舎でも百キロから三連勝した鳩が一番目に帰舎した。とにかく、訓練時から飛びぬけていた仔鳩であつた。ようやく二時近くになつて、佐野から連絡が入つた。各鳩舎の状況を確認していただろうが、佐野も今秋は、三百キロの運輸杯では十一位だったが、常に先頭集団に入つて居る。又浦部も短距離から確実に入賞を続けて居た。

「やあ、今日は随分分速が乱れているようだよ。どの鳩舎もまちまちだ。君の所はどう？」

「ええ、俺の所は、六羽タイムして、時間は早いのが十一時五十二分で、後は何分かのバラバラと。その後間が空いて、全鳩戻つたのが一時少し回つた位です。他の鳩舎はどうですか？」

「ええつ！十一時五十二分だつて？そりゃあ、早すぎるよ。ダントツで、君が早い。それも六羽も？」

香月はこの時、優勝等とは予想もして無かつたし、いつも強い磯川や、川上氏が当然上位に来ているだろうと、自鳩舎は、入賞程度としか思つても無かつた。佐野の驚きに香月が驚いた位だつた。

「君、独占しているかもよ、上位。俺が調べた所では、俺が十二時十分に二羽、十二時十一分に磯川さん、川上さんが、十二時十分頃に五羽。それに小谷鳩舎が十二分頃に二羽。それと渡辺鳩舎が十三分頃に一羽。ウラちゃんが、九分に一羽。その他にはそんなに早い鳩舎は無いよ。ひよつとして・君が総合一桁に大量入賞している可能性も・調べて見るよ、今から！」

そう言つて佐野は電話を切つた。香月は予想以上の展開に驚いていた。そして、そのまま、電話を北村に繋いだ。

「やあ！どうだった？俺の所は遅いよ。ははは。ま、短距離じゃこんなもんだけど」

聞く間も無く、北村は笑いながら、こう言つた。

「それで・・・この前の件なんですけど・・・」

「ああ！調べて見たよ。確かに今秋の磯川さんの参加形式は変だつたよ。百キロレースが、十二羽参加。二百キロが二十四羽。三百キロの運輸杯が二十一羽。そして、今回のダービーが十五羽。少ないねえ・・・」

磯川さんは、相当仔鳩を引いている筈だし、佐野の情報でも六十数羽が居る筈なんだ、選手鳩が」

「やっぱり・・・」

香月が言ふと、

「狙つてゐるね、きっと、七百キロの菊花賞」

北村が答える。

「そうでしょうね、今度の四百キロに恐らく殆んど持つて来そうな気がしますね、有難う御座いました」

磯川は今秋の大レースである、菊花賞一本に狙いを絞っているようだ。今秋の場合、千キロのダイヤモンドカップを、連合会としては参加を見合わせた関係上、最終レースとなる、菊花賞が磯川の狙いだ。磯川の競翔は大きく変わった。それは、優秀さを誇示証明するかのような、全レース参加型から、自鳩舎の主力を狙ったレースに持つて来るような、照準型へと。それにしても、やはり少ない参加羽数でありながら、全レースに上位入賞を果たして来る所は、パーマン系の底力だ・・としか形容出来ない。

夕方、川上宅を訪れると、川上氏はにこにこしながら香月の車に乗り込んだ。

「いやあ、参ったねえ。君の訓練通りのレースになったようだ。これだけ早かったのは、訓練の賜物だろう。集計が楽しみだね。君の十五連合会総合優勝もあるって、佐野君は言っていたよ」

「嬉しいんですが・・今日の天候を見た場合、バタバタと戻って来て、後続が三十分以上遅れました。恐らく霧の中で、分速が落ちたものと見ますが、そんなに濃い霧では無かったようなのに、影響はあるものでしょうか」

「うん・・。君の理論を借りれば、方向判断力が正しければ、直線的に戻る筈だと言う事になる。が、

果たしてそうだろうか？我々人間が晴天の中を歩いていたら、急に雨が降った・・大慌てで、どこかで雨やどりをしようとする。又立ち往生してどうしようかと迷ってしまう。特に鳥類は、水滴が飛翔の最大の妨げになる事から、恐怖心もあつて、避けて通る傾向がある。分速が落ちるレースには、そう言う時にマイペース型の鳩が上位に食い込んだりする事もある。順位だけで、鳩の資質を判断するのは危険だ。そう言う事を何回も体験して、なお且つ上位に食い込む鳩は優秀だと判断出来る。何分若鳩と言う事を忘れてはいけぬ、香月君」

「はい、分かりました」

素直に頷く香月に川上氏もにこりと笑った。この子は、知識が勝っている。そう川上氏は思った。優劣は順位では無い。鳩には、個々の能力の違いがある、その資質を見る事なのだ・・と。しかし、香月は充分に理解して川上氏に訊ねたのであった。人に心があるように、鳩にも個体差があり、それぞれの性格、資質は違う。それが川上氏の常々言う、最後の犯してはならない部分の『聖域』なのだとしたら、きつとそう言う事なのだろうと思つた。そこへ踏み込む事に今の香月は躊躇していた。踏み込めばきつと自戒する事になるだろう・・と。香月の追求するものに対する壁がそこにあつた。川上氏は香月の予想通りの答えをやはり出して来た・・確かにそれは正論だと思つた。

香月の成績はやはり連合会ではダントツの一位く六位を独占している模様で、この夜はそのまま帰路へ着いた。

ようやく秋季レースも、東神原連合会一番の難レース、四百キロ衆議院議長杯を迎えた。香月は長距

離鳩候補の十二羽を参加した。

残るレースは、高松宮杯の五百キロレース、運輸大臣杯の六百キロレース、ファイナレが、菊花賞七百キロ総合レースだ。恐らく菊花賞は、近年に無い参加羽数があるだろう。更に八百キロKCや、千キロDC等があるが、この参加は連合会では、任意開催となって居て、参加希望者は、隣市の風巻連合会が持ち寄り場所となっている。連合会で個人的に何名が参加になるのかは、この四百キロレースの結果次第と言える。香月、川上氏は七百キロの菊花賞以降の参加を見合わせる事で一致していた。磯川の狙いが菊花賞であるなら、この四百キロは要注意の鳩舎だ。常に先頭集団を形成するペーパーマン系も数シーズン目を迎え、円熟期に入っている。爆発的な帰舎は未だ見えないが、それは、狙いのレースに絞っていて、これまで主力を分散していたからであろう。恐らくこの四百キロには、全鳩参加か・・？香月はそう見ていた。夜遅くに、B持ち寄り場所の北村から、香月に電話が入った。

「やあ、こんばんわ。磯川さんだけど。参加がやはり六十二羽だったよ。単なるジャンプじゃないね。特殊訓練でもしたんじゃないかなあ。主流を全部ここへ持って来たって感じだよ」

「やっぱり・・そうですか。相当に菊花賞に入れ込んでいるようで、不気味ささえ感じますよ」「そうだね。でも、菊花賞は新設だけど、KCや、DCもあるから、そっちも人気はあるよね」

「ええ。でも、KCやDCは当連合会にとっては遠隔地ですから、上位入賞を狙うならやはり菊花賞でしょう。百二十連合会が参加するらしいですし、各距離に応じた、総合レースで、協会の方でも力を入れていきますし、何と言つても、今回の総合順位はカラー印刷で、五十位まで掲載されるようですよ。(当

時のカラーページはべらぼうに高かった)これは、磯川さんの性格から言って、待っていたようなレースでしょう。上位入賞すれば全国に知れ渡るわけですから。又、このレースを制する鳩は、春のGPや、その後のCH、GCHも狙える有力候補ですからね」

「そうだよ、まさしく。で・・その磯川さんが、君の鳩を要注意って言っていたよ。二人ともライブだから同じ事言っているよね。面白いね、ははは。特に、百キロから四連勝した、シルバーの鳩。四百キロも参加させたの？異常にマークしていたよ」

「ははは。調べたんですか・・まだ、連合会の集計結果は聞いて無いんですけど。でも、この鳩は俺の場合、今秋は短距離鳩候補、長距離鳩候補と分けて参加させていますから、この四百キロには参加してないです。次の五百キロの宮杯には参加させますけど」

「そうなんだ。でも、その調子じゃ、君も相当に自信を持ってそうだね。明日放鳩だから、結果が楽しみだ。じゃ！又！」

北村の、張りがあつて明るい声には香月も元氣が出る。磯川の狙いはつきりしている以上、香月は、自分の訓練の成果を待つだけである。やっと、このレースでペーマン系の本隊と戦えるのだ。それにしても、明日は聞きしに勝る難レースの四百キロ、ここを嫌って、参加を敬遠している鳩舎も多い。浦部、高橋、道上氏等だ。参加羽数は連合会で二千八百五十六羽とやはり少なかった。

朝・・香月は空を見上げて、深いため息をついた。空は乳白色に染まり、最悪のコンディションを思わせた。東神原連合会独自で行う短距離のこのレースには延期は無い。七時に川上氏より電話があつた

時も、放鳩委員が迷っているようだった。分速が出ないとするならば、どうしても当日帰れる時間での放鳩になる。小雨もぱらつき、高橋会長も連絡を受けて、役員の緊急会議が開かれ、九時ジャストにもう待てないとの判断で放鳩が決行された。川上氏は参加全鳩舎に電話を入れていた。内容は、最悪の放鳩状態になった事を覚悟してくれと言うものであった。

川上氏のこれが競翔家としての姿勢であり、こまやかな気遣いでもあったが、不参加鳩舎からは、それら見ろ・・

そんな声が聞こえたのもやはり事実だった。非常に難しい判断でもあった。晴天時でも過去最高が、分速千二百メートル台のレースである。当日戻れない鳩も多く出るだろう。まして、この日は小雨、乳白色の厚い雲。競翔と言う名に於いては、放鳩を避けられないものなのかも知れない。だが、敢えて難レースを覚悟の放鳩地を選ぶ必要等は無い。それは、どちらも正論で、連合会でも過去何十回となく話し合って来た事だ。ただ・・香月は、このレースが、菊花賞を左右するレースと位置付けていた。その狙いは磯川も同様。このレースを勝ち残れないようで、菊花賞に到底入賞等出来ぬだろう・・それが川上氏をはじめとする者達の意見だ。が、そんな記録や榮譽に拘って競翔しているのでは無い。秋のレースは若鳩の訓練なのだ。競翔鳩を育てる為にやっているのだ・・それも真理だ。

このレース、香月は長距離鳩候補ナンバー一の一羽に期待をかけて、参加させていた、高地からの訓練で、紫竜号と肩を並べて戻って来た鳩だ。ピン太と、マロン号の交配の仔が、四連勝のSみ。ヒロと、ムーン号との交配の仔が、今回の鳩だ。源鳩からは孫と、曾孫に当たる。どの交配も香月鳩舎の代表する素晴らしい記録を残した種鳩達だ。資質から見てもピン太号の直系は、スピードのある鳩が多く出て、

ヒロや、ムーン号からは、長距離向きの鳩が出ている。

そして・・ようやくこのレース。鳩が姿を見せたのは、三時五十分の事であった。やはり、期待の一羽が一番手だった。しかし、異常に疲れていた。難レースの帰舎をそのまま現していた。続いて、戻って来た鳩も同様だった。スタミナジュースを与えたら、首を突っ込んで飲むその姿を見ると、相当長い距離を飛んだのだろうと思われた。その内にもポツリ、ポツリと鳩は戻って来て、八羽目が戻って来た時間は四時五十分だった。十二羽参加で、こんな天候なのに、良くぞ戻って来た・・香月は思った。六時にタラップを締めるまでには、計十羽が当日戻って居たのだった。一応の結果に満足した香月の所に、川上氏から電話が入った。

「どうだった？香月君。私も殆んど主力九十二羽を参加させたが、半分にも満たないね、今日の帰舎。他の鳩舎も非常に悪いようだ。今朝の会議でももめた事だが、近年最悪のレースとなったよ。申し訳ない」

川上氏の沈んだ声に反比例するように、香月は勤めて明るく答えた。

「とんでも無いですよ、十二羽中、十羽です。悪天候のわりに帰舎は上出来です。むしろ、こんな天気でもきちんと戻って来る鳩を見て、俺は安心しました。菊花賞に狙いが当てられますから。まだ、菊花賞まで一ヶ月近くもあります。調整は十分ですから」

「ほお・・十羽かね？それは良い帰舎だね」

香月はすぐ電話を置くと、川上氏宅へ向かった。会長宅での開函に行く道中の会話も、このレースの話ばかりであったが、会長宅へ着くと、二十人前後しか会員は集まって居なかった。開函を済ますと、審査員を除く全員で円陣が組まれた。口火を切ったのは、このレースに大羽数二百六十羽を参加させていた郡上氏であった。

「いやいや、参ったねえ。この連合会に参加して何度目かの四百キロだが、今日は本当に放鳩したのか？と思つたよ。何しろ二百六十羽も参加させているのに、四時半だよ。一番手が戻つて来たのは。あははは」

郡上氏らしい余裕の言葉に、硬い表情の会員達も幾分緊張が解けたようだった。
小谷氏が続く。

「そうですね。私は運輸杯を捨てて、この四百キロに主力を持って来たんですが、聞きしに勝る難コースでした。まるで七百キロレースのような錯覚を覚えるレースでしたね。五十二羽参加して、四時半に二羽。六時前にやつと六羽の八羽きりです、当日戻つて来たのは。初めての体験ですね、四百キロコースでこんな悪い帰舎は。でも、明日戻つて来なかったら、本当に万歳ですけどね。わはは」

少し笑いが漏れた。皆は充分に理解している事で、事前に川上氏から全会員に通知が入ってもいる。レース自体の決行に異議を唱える者は皆無だ。ただ、このレースに拘る必要性を否定として論じる者は居る。磯川が加わった。

「俺もこのレースに全鳩参加しました。六十二羽です。実はこの四百キロを秋のメインである、菊花賞レースのステップにしようと特殊訓練をして、参加したんですが、当日十二羽です。聞けば、俺はまだ良い方だったので安心しましたが、言い換えればこのレースを当日戻って来る鳩で無ければ、七百キロの菊花賞なんて到底無理でしょうし、ここに集まっている方達の顔ぶれを見ますと、やはり、強豪揃いですから。三白キロ二回後五百キロヘジャンプすると言う方法もあつたんでしょうけど、五百キロから七百キロのステップは、帰還コース的に無理があります。どうしてもこの四百キロレースは、100キロレースに対しての重要な位置にありますから。春のレースにも重要ですよね」

居合わせた水谷氏、渡辺氏も頷いていた。又この場にも学生競翔家の姿が何名か見える。ジュニア杯も来年から一般とも集計を一緒にして、ダブル杯にしようかと言う案も出ている。それは良い事だと香月も思っている。川上氏は何かこの場で言いたそうであつたが、腕組をしたまま、会話を聞いていた。その内集計が完了したようで、高橋会長から、発表された。

「ええー。では先にこの前の三白キロ合同十五連合会総合レースの結果が届いて居りますので、発表します。ええー、皆さんも周知の事かと思いますが、この東神原連合会始まって以来の快挙が生まれました。ここに居る香月鳩舎が、参加三万五千五百十六羽中見事、総合優勝、二位、三位、五位、六位、八位に十位内に六羽も入賞しました。他にも、総合百位以内に連合会で六十八羽もの大羽数入賞です。正に快挙でしょう。まずは拍手を」

大きな拍手が湧いた。

昨年磯川が達成した総合優勝すら薄れてしまう、大記録と言える。又、連合会で、総合百位内六十八羽入賞も凄い事だった。しかし、再び静寂が訪れた時には、その高橋会長の大きな体が少し小さく見えるような、声も小さくなって、

「えー・・・こんな大記録の後に誠に発表し辛いのですが、四百キロレースは、参加総数二千八百五十六羽中、当日帰還が、二割にも満たない三百二十四羽であります。誠に結果は遺憾な事であり、これは当日の放鳩決行時間が遅れた事も一因と、役員一同猛省している所ではありますが、とりあえず、成績の発表を先にして、その後反省会をしたいと思えます」

全員が会長の顔を見た。沈痛な表情であった。川上氏も同様の雰囲気だった。香月はそれ程責任を感じなければいけない事かな？そう思った。こんなレースを覚悟や、承知の上で参加させている筈なの

に・・・そう思った。

「では・・・優勝が、又々香月鳩舎であります。同、二位、三位。分速が九八〇・一三二メートルです。四位が磯川鳩舎、五位、六位、七位が川上鳩舎、八位が小谷鳩舎、九位が渡辺鳩舎、十位が郡上鳩舎、以上、十位以下は省略させていただきます」

郡上鳩舎が「おっ・・・スミ一を取ったか！」その言葉に笑いが漏れた。今度は川上氏を中心として反省会が開かれた。

川上氏は硬い表情のまま、話を始めた。

「実に・・・近年に無い難レースとなり、春のGPに続く悪い結果になりました。現地からの連絡を受け、緊急に役員会を招集しましたが、都合上中止は困難で、やや雨が小さくなった九時に放鳩しました。毎回の事ですが、この四百キロレースは、単一連合会による放鳩で、予算の都合上、延期が無理なレースなのです。今回の失敗を繰り返さない為、来シーズンは、レース開始日程を二週間早くして、西コースや、WG（ワールドグランプリ）等多くの競翔に、会員が選んで自由に参加出来るような方式にしたいと言う案があります。この四百キロレースと同時に、合同の四百キロレースを近隣の連合会にも呼びかけて、総合レースとするような事も検討課題ですが、古くからの会員はご存知ですが、この四百キロレースは故白川正造名誉顧問の提唱で始まり、以降、当連合会は飛躍的な発展と、各総合レースでも優入

賞を遂げて参りました。しかしながら近年の目覚ましい放鳩技術の発展と、鳩質などの向上もあり、特にこの四百キロレースに固執する必要性は薄れて来たのでは？そんな意見もあります。これは、新春の定例総会の議題に載せたいのですが、どうぞ、この場に居られる方の意見をお願いしたいのですが」

真つ先に手を挙げたのは香月だった。

「あの・・四百キロレースの放鳩地は確かに難コースです。でも、今までの経験の中、ここで成功を収めた鳩は、その後の長距離に強いんです。有利、不利、向き、不向きはあるでしょうが、この地点は、山あり、谷あり、気流も複雑です。でも、それは竜飛崎、稚内に共通する地形的な面や、コース条件があるからです。皆さんもご承知かと思いますが、長距離鳩はほとんどと言っても良い位、この四百キロレースを経験している筈です。七百キロGPでも入賞を果せて来たのも、それぞれの鳩舎の努力や、新血統導入で鳩質向上もあるでしょうが、このレースの開始以前と以後では、全くその成績飛躍が顕著でもあります。又、後日帰りも多い事から、放鳩地の変更などはいつでも出来ると思います。こう言った事も踏まえて、俺は存続を継続させるよう意見とします」

反論する者は居なかった。その理由は全員この場に居る者は知っているからだ。しかし、会長はこう言った。

「わしも存続には反対せんよ。むしろ、逆の立場だ。だが、近年の競翔は長距離レースよりも、短・中距離を主体にした当日レースの人氣が高まっている。それは合同レースや、ダービーが多く開催されている現実を見てもそうだろう。皆が皆、長距離に目が向いている訳でも無い。ここで、やはり意見も多く出ているように、四百キロレースでも合同杯等をやつて見ては？そんな案が出ているのも事実なんだ」

川上氏が続けた。

「皆さんの選択肢が増えれば、やはり良い事だと、私も思います。当連合会としても、今の四百キロレースは継続しますが、前後して、今回のような、雨中でも決行と言う事は避けたいと思つて居ます。どうでしょう？」

川上氏が言うのと、香月が再び手を上げた。

「よろしいでしょうか？」

「何でも、言つてくれたまえ」

川上氏が頷きながら答えた。

「確かに今回は雨中でした。でもこのような悪天は、度々ある事では無いですけど、四百キロレースで無くても、今後もどんなレースでもそう言った状況はあり得ると言う事です。その為に順延や、中止と言う選択肢はありますか？」

「尤もな意見だ。それは、初会合で検討しようじゃないか」

高橋会長は言った。

「今の意見に付則しますが、競翔が多くなればなるほど、審査委員の負担が多くなります。そちらも増員が必要でしょう」

川上氏が付け加えた。

「尤もです。それも案件に加えようと思います」

高橋会長が再び頷いた。

「それなら、俺も賛成します。競翔が増える事は、一極集中の人氣が高い役員負担の重いレースより、各競翔を選択出来る。即ち、近隣の連合会との合同レース形式もある訳ですよね」

磯川がこう言った。

「成る程。そう言った地域性競翔も面白いじゃないか。それなら負担も少なくて済む」

会長が言った。川上氏の表情が随分緩んだ。今回の事を責任感の強い川上氏は一人で被ったのだろう、皆の気持ちを。誰にしても、大事な競翔鳩を失いたくない。傷つけたくは無い。気持ちは皆一緒であった。そして、雑談が始まった。

磯川「いやあ・・四百キロは大失敗。鳩のピークは七百キロに持つて行くつもりが、とんだ負担になったよ。色々今秋は試して見たんだけどなあ・・」

高橋「ほお・・筋トレなんぞやって、入れ込み過ぎたかな？わはは」

磯川「ふふ。まあ、そんな所ですが、会長は三百キロでストックしていましたよね、大量に。やっぱり、本音はこの四百キロを嫌っていたんじゃないんですか？」

高橋「ま、私の場合ハンドラーがしっかりしているからなあ」

磯川「何ですって？俺の所のハンドラーが無能に聞こえますね」

川上「いつも会長と磯川君は漫才しているようだね、ははは。ところで今秋は成功している香月君の話を知りたいね」

磯川「そうだった！香月君。どんな訓練をしたんだい？十二羽中、この条件の中、十羽帰還だってね。五連勝よりむしろ凄い事だよ」

小谷「そりゃ、凄いよ。聞きたいね。佐伯君が驚いていたよ。まさかあの鳩（ムーン号）をあそこまで育てる君の手腕に」

香月「参ったなあ……。俺はこの雨の中と言う条件を選んで、雨中訓練をしました。四回です。それに、夜間訓練もやりました。高地訓練も。そこで、競翔前に鳩の短・長距離向きの適性を見極めた上で、グループ別に更に訓練をしたんです。そこで、本番競翔が始る前に見込みの無い鳩を淘汰しました」

小谷「ひゃあ……。徹底しているわ。強い訳だよ、香月君が」

郡上「彼だから成し得る事だろうねえ。とても、私や高橋会長では無理だ。七百キロレース位になって、鳩の数が減ってくればある程度見極めもつくが……。しかし、成る程ねえ……。感心するばかりだ」

川上「こう言う子なんですよ、香月君は。今秋は一回も私も勝って無い。ははは。今秋は非常に出来が良いとスタート時点で思っていた私だが、その上を行かれています。ははは」

磯川「全く。俺も確かに四百キロに主力を集中したけど、他のレースだって、決して能力が落ちた鳩を参加したのでは無いですよ。むしろ、今秋は出来が良かったんですから」

高橋「それだけ、佐野君や浦部君も頑張っているように、連合会のレベルアップがあると言う事だ。ここまで徹底した訓練をやったと言う事はむしろ、手腕の差だね、鳩のレベルはもう、殆んど並んでいると思つて良い。白川系すら、頭が取れないんだからな。ははは」

川上「全く！ははは。でも、むしろ、この場に居る面々が次の七百キロ菊花賞の本命である事は、疑い

なさそうですね」

そう言う言葉に全員の顔が引き締まった。ジャンプする鳩舎、菊花賞の照準を合わせている鳩舎。それぞれにやり方も思惑もある。それぞれのスタイル、思いで競翔すれば良いじゃないか・・・この100キロレースは又新しい東神原連合会の方向を見帰りの道中、川上氏が言った。

「今晚は、君の意見を有り難く聞かせて貰ったよ。一つ、一つ、競翔が幕を開けるにつれ、君の訓練の結果が成果を示して来る。私も大羽数参加の安心感からか、どこか、詰めを誤っていたようだ。又、磯川君にしても、少数精鋭主義と聞いていたのだが、まさか、大羽数を秋に持つて来るとは思わなかった。競翔の駆け引きと言うのも、段々と皆がやって来るようになったね。」

香月は答えた。

「この前、自鳩舎の血統を整理して・・・近親交配は難しい面が多々あり、今更ながら難しいなあって再認識しました。特に磯川さんの鳩舎は、ペパーマン系のパイロン号直系が主力ですから、その前に導入していたそれ以外のペパーマン系にしても、源鳩が何重にもなる近親となります。前年のダービー総合優勝の鳩を見ても分かりますように、アンダーソン系の交配が成功しています。これから何分の一かでも新血統を入れて行かないと、最初の当たり配合のような結果は、そうそう望めそうも無い事では

よう。小数精鋭主義を目指していたが、とことん出来なかつたのは筋力訓練をした事を見ても分かりますように、少し出来、不出来のばらつきが生じたと見ます。そこで、三百キロまでの短距離は分散して参加して見て、能力を見極めた上で、四百キロで一気に確かめようとしたのでしよう」

「君は、毎度の事ながら鋭い分析をするねえ。じゃ・・今日戻って来た十二羽は要注意・・かな？」

「はい。厳選された主流でしょう。磯川さんは、四百キロを狙ってなんか居なかつたんでしょう。狙うは菊花賞だけだと思います、今秋は。そして、それは来春の有力候補鳩です。大レースの」

「うむ・・確かに・・。で？君は今秋に成果を上げた理由として訓練だけではないね。どこに資質に違いがあつたのかね？」

「特に、今秋に限りますと、ピン太×マロンの子鳩が三百キロ総合優勝しましたけど、百キロから三百キロを四連勝しました。ヒロ号と、ムーン号の交配の子鳩・・こちらが今回、四百キロ優勝しました。共に、源鳩の孫であり、曾孫です」

「うむ」

「そして今秋は、グランプリ×リリーの子にピン太を交配した子鳩が活躍しています。それぞれ近親ですが、ノーマンサウスウエル、勢山、シューマンの血が三対三対二の割合で混ざるような交配です。」

「うむ・・それで？」

「それぞれにシューマン系の血も混じる交配なんです、非常にシューマン系の血は濃くて、特徴を受け継いでおります」

「成る程。確かオペル系もそう言った、孫、曾孫の交配だね。参考にしたのかね？」

「ええ、その組み合わせが成功しているんじゃないかと思うんです。」

「良い交配だった訳だね、血の混じりあいと言うか」

「はい。今後更に研究を進める上で、大学で研究室の掛川さんが、非常に協力的で、色々手伝ってくれています。聞けば、吉川さんの高校の大先輩らしいですし、不思議ですね、縁あって」

「そうか、吉川君か・初めて私の家に来た時の顔を思い出すね」

この夜の会話は、秋レースを戦い抜く強豪競翔家達の各自の手腕を垣間見る思いがした。そして次週の高松宮杯レースは好天の追い風に恵まれて、素晴らしい記録が続出した。香月は十六羽を参加させた。十四羽を帰舎させ、またもや優勝、二位を占め、連合会会員を騒然とさせた。

香月はこの時、百キロ、二百キロ、三百キロ、三百キロ、五百キロと五連続優勝を飾ったこの鳩を、将来の短距離のエースとなる事を期待して「カズ・エース号」と名付けた。この鳩は香月鳩舎を代表する、短距離エース選手鳩として、これから益々華々しい成績を重ねて行く事となる。又、悪天の四百キロレースはその後帰還鳩が相次ぎ、連合会でも二千百羽が帰舎したようで、会員も安堵したようだ。そして、香月の開幕六連勝で来た秋季レースも、いよいよ大レースの菊花賞を迎える事となった、参加連合会百八十連合会。参加羽数十万人八千羽の途方も無い大レースとなった。春のGPをも凌ぐこのレースは、協会が力を入れて来た成果でもあったが、国際鳩舎と言う海外参加もあった。七百キロレースではあるが、五百キロから、千キロまで距離は多彩。その中で、六百三十キロから七百四十キロまでの鳩舎が七百キロ菊花賞レースの資格となる。他の距離でもそれぞれ、菊花賞、五百キロ、六百キロ、八百キ

ロ、九百キロ、千キロレースとなる総合レースだ。その中で、圧倒的に多い参加がやはり七百キロ菊花賞。総参加羽数六万七千四百羽と言う空前絶後のレースとなっていた。

鳩舎の前で香月も送り出した十羽の鳩舎を待っていた・・・。

そして、今秋東神原連合会開催の最後を飾る総合ビッグレース、菊花賞は、午前七時快晴の空の下、放鳩された。真つ青に晴れ上がった空を埋め尽くすかのように、大きな一団、小さな一団は数百もの群れとなったが、数分間で視界から消えて行つたと言う。

鳩舎の前で、愛犬ドンと戯れながら香月は、高 speeds のレースを予想して、送り出した十羽の鳩舎を早い時間から待っていた。最も今秋に期待する四百キロ優勝の鳩。まっしぐらに帰って来る姿を香月は想像していた。そして、昼過ぎから待っていた香月の元へ「ワン！」ドンが吼えた。まっしぐらに鳩舎に落ちてくるようなそんな勢いで、一羽が舞い降りた。それは、やはり期待の一羽であった。もう何十回も経験した筈の鳩舎なのに、香月は震える感動で、胸が詰まりそうになりながらゴム輪を外して、タイムした。いつになく香月は興奮していた。素晴らしく早い鳩舎だ。それも期待する鳩であった。

二時四十分の鳩舎だった。恐ろしく早い・・・。行ける・・・香月はそう確信していた。それは香月が高地从ら紫竜号をかり出してまで、行なつた訓練の成果・・・つまり想定帰還コースをこの鳩が飛び帰つた事を意味していた。真つ青に晴れた空には、他には一羽の鳩の姿も無い。紫竜号を彷彿とさせるデビューレースを見る思いがした。香月の天才的な手腕によって、鳩舎の代表主流鳩（のちの香月系最高基礎源鳩となる）が、この日誕生しようとしていた。そして・・・二手は大きく差があり、一時間少し前であった。この二羽で、香月は打刻を止めた。この一羽が戻って来た時には、数十羽の鳩が上空に姿を見せた

からであった。後続はその後もぼつり、ぼつりと戻って、当日の羽の帰舎を見た香月鳩舎であった。残り羽の当日帰舎を諦め暗くなったタラップを閉めようとしたその時だった。「バサツ」と音がした。「あつ！」香月は声を上げた。四百キロの後日帰りの鳩であった。すぐ、その真つ黒にやせ細った鳩を抱きかかえると、別棟に作ってある病鳩の隔離鳩舎で、治療をする。難レースの四百キロに、後日帰りが一羽も無かった事を心配していた香月であったが、中でも見込みがあると見ていた一羽であっただけに、嬉しかった。この鳩は源鳩。パパ号×マロン号の直仔であった。RCのオスで、柔らかい筋肉をしていた：この鳩も後に大活躍する香月鳩舎の代表鳩となる事は、今の香月にも想像は出来なかったが：この夜、九時を少し回って、川上氏より電話が入った。

「こんばんわ。少し遅くなってしまったが、四百キロの後日帰りが二羽あってね。隔離鳩舎で治療をしてい所だったんだよ」

「川上さんの所ですか、俺の所です。一羽戻って来ました」
「うん。抗生物質を与えようと思ったのだが、どんなのが良いのか君に聞こうと思ってね」

鳩の順位などニの次。川上氏の一貫した姿勢は揺らぐ事が無い。それが嬉しくて、電話口でにこにこしながら香月は、アドバイスをしていた。二度目に川上氏から電話が入ったのは、午後十時前であった。

「いやあ・・・やっと落ち着いたよ。申し訳ない、夜分に。で・・・聞けなかったんだが、今日はどうだった

た？私の所は三十八羽だ。早いのが、四時少し過ぎていたかな。殆んど同時に八羽タイムしたよ。七十六羽参加で、半数丁度当日帰舎だったよ」

「はい。俺の所は参加十羽で、当日六羽ですから、率的には同じ位ですね。で、二羽タイムしたんですが、二番目の鳩が丁度四時少し前ですから、川上さんの所とほぼ同じ位でしょうか。今日は天候が良く、スピードが出たようですね」

「ああ……。しかし、その鳩より早いのが居るんだね。私の所も聞けば、他に近い鳩舎も少ないようなんで、今回は一矢君に報いたかと思つたが……。ははは。で？一番は何分頃だったのかね？」

「はい……。それが飛び抜けて早いです。三時前……。二時四十分頃なんですよ。驚きました」

「へえっ！……。それは、無茶苦茶早いねえ！一時間以上差があるよ。そんなに……。でも何故？……」

川上氏すら予想出来ない帰舎タイムだった。恐らく上位を形成しているであろう、白川系の一群のトッププレーサー達よりも、更に一時間も突き放す帰舎には、たまげたようだ。川上氏は可能な限り、この時間から問い合わせをすつと切つて電話を切つた。まさに、この七百キロレースで、ぶつちぎりの帰舎は想像を遙に超えていた。紫竜号に続く香月鳩舎の英傑が誕生した一瞬でもあつた。長いこの物語を語る時、この競翔鳩は、常にこれから、紫竜号と比べられる事となる。少し先に香月系の最高種鳩となる鳩でもあつた。

次の日の晩になって、川上氏と同行して、高橋会長宅で開規正をした後、時計を預けて帰る事になった香月だったが、この席に姿を見せては居るが何となく元氣の無い浦部に声を掛けた。

「・・・どうされました？」

「あ・・・とんだ失敗したんだよ」

「何か？」

「四百キロレースは難レースだっただろう？」

「ええ、今年も大変でしたね」

「俺の鳩舎も今年の春から大羽数になり、例年に無く好調で、秋こそ上位には食い込め無かったけど、まあまあ成績でこれまで来たんだ」

「秋も・・・確か・・・五十六羽スタートでしたか？」

「うん。三百キロまでは、三羽落としただけで、好調なもんだから、自分も残り半分の二十六羽参加したんだ、四百キロ」

「ええ・・・」

「難レースは知っているから、いつもは五百キロにジャンプするんだけど、今年の秋は菊花賞があるだろ？それを狙うには、四百キロは外せないって思って、選んだ半分の主力組を参加させたんだよ」

「はい」

「でも、あのレースは当日一羽だけ、翌日五羽・・・結局後日帰りが五羽・・・散々な結果になったんだ」

「悪いですね。後日帰りが特に・・・」

「結局、五百キロレースは余り良くなくて、菊花賞は八羽だけの参加になったんだ」



カズエース号

「ええ・・・」

「昨日は二羽当日戻って来て、それはまずまずだったんだけど、今日四百キロの後日帰りが二羽も一緒になって、戻って来たんだよ、結局三羽戻って、八羽中五羽記録」

「悪くないじゃないですか？それなら」

香月は、浦部の言葉をまだ読みきれて居なかった。

「いや・・・今日戻って来た二羽の四百キロ後日帰りなんだよ。真っ黒になって、可哀相な事をしてしまったと思ってるね」

「分かりませんが・・・あの難レースですから、ある意味しよすが無いですよ。浦部さん」

「いや、それは防げた筈なんだ。今までの俺なら、無理して四百キロに参加させる事は無かった筈なんだ。少し大羽数を参加させるようになって、自分は思い上がっていた気がするんだ。来春からは又少数精鋭主義に戻すよ」

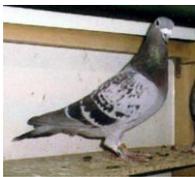
「浦部さんの考えですから・・・それはそれで賛成しますよ」

多くを香月は語らなかつた。この姿勢は、尊敬出来る。だが、ある程度浦部程の上級者になったならば、温室だけのレースよりは、もう一段上がって見るべきだとも思った。それだけ手腕を高く評価される競翔家に、既に浦部は到達している筈だから。

そして・・・この菊花賞レースは、参加百八十連合会、参加総数十万七百四十五羽中、総合五位に入賞した。遠隔地でありながら、香月鳩舎が堂々と一桁入賞したのだ。総合九十五位にも入った。この秋、香月は、連合会で、全レース完全優勝を達成した。恵まれているとは決して言えない、競翔鳩達の陣容の中で、手腕の成果として誇れるような見事な訓練を行い、しかもその中から突出した競翔鳩二羽を、まさに香月が創り上げたとしか形容し難い結果を生んだ。この菊花賞を実質総合優勝したのは、香月鳩舎と誰もが認めた。香月鳩舎をこれから語る時、又、香月系の全ての血統の中心となった、その名を「スプリント号」そして、短距離の銘鳩と賞される「カズエース号」を生み出して。

香月の秋レースは、二十三羽の選手鳩を残す事が出来た。春は二次鳩を十三羽加えて、成鳩十二羽。順調に行けば、四十八羽の大羽数参加が見込める計算だ。更に、後日帰りの鳩があるかも知れない。香月の頭には新構想が生まれようとしていた。春には新たに三レース増えるそうだ。種鳩として、ピン太号とグランプリ号からは続々と素晴らしい選手鳩が生まれ、入賞率も高い。香月は来春のエースとして、スプリント号に期待した。紫竜号と並んで、長距離へステップ出来る早熟の鳩だ。又、現役競翔鳩七羽も順調に行けば、GNの最終レースに参加出来る。ヒロ号、シルク号を第三代とするならば、スプリント号、カズエース号は第四代の種鳩候補となる。香月の新構想が、この秋の好結果によって、いよいよ具体化しつつあった。

そして・・・S工大での活動だが、いよいよ本格的な研究テーマに入っていた。



スプリント号

香月の目指すものは血統の固定化・・・そして、研究テーマとして遺伝子分野。既にDNAと言う未知の世界への研究は幕を開けていたが・・・まだまだ当時の研究施設やパソコンの発達していない時代の事・・・到達し得ない分野でもあった。掛川氏と言う優秀な助手のおかげで、資料も豊富に揃いつつ、もう一つのテーマ、「血の概論」の研究の方は相当な進展を見せていた。講義を終えた、香月に桑原教授が声を掛けて来た。

「どうかね？」

短い問いに、香月は明るい顔で答えた。

「進展しているとは言いませんが、現在データの積み重ねの段階です」

「その部分を今君が解説出来るかね？」

「ええ・・・部分的であれば」

突然の教授の問いに驚きながらも、教授の部屋で、香月は答えた。

「適者生存の法則の中では、環境条件に淘汰された優性が生き残ります。それが種を保存されるとされています。一方、人為的な近代における瞬きの中で、その優性が左右される事例も又あります」

「動物学的に見たら、それは、形態だけの違いではないのか？例えば、犬とか馬とか、色々あるが・・・」
「鳩・・・つまり競翔鳩に当てはめるとするならば、進化に位置します」

「競翔鳩と言う、帰巢本能の一例で決めるのは危険だね」

桑原教授は、論点を付いてくる。一瞬も気の抜けない雑談だ。この会話の中に、研究テーマが位置する重要性があるのだ。

香月は、答えた。

「後退化、進化と見るならば、明らかに進化です。より早く飛翔し、より筋力を増し、より明晰になり、大自然に適合出来る羽毛を短期間で完成させようとしています。たかが百年の歴史の中で。それも人為的にです」

「競走馬もそうではあるね」

「そうです。しかし、動物本来の能力を考えると、更に、進化のスピードは競翔鳩の方が早いです」

「それは何故か？」

「セクシヨナリズムと帰巢本能、或いは、抗体性、免疫力、視力、体力、環境への順応性、筋力、知能・・・どれをとって見ても、競走馬の歴史より遥かに早く、優れており、又、雄大ですから」

「ははは。成るほど。千キロ、三千キロのスケールと比べれば、千メートル、二千メートルでは違いがあるか」

「それもあります。確かに。諸機能、諸器官に至るまで劇的变化があります。空と陸と言う空間の違いはありますが、全てに淘汰と改良があつての対象ですから……」

「うむ・存分に研究すれば良い。ただ、君の年齢で、いかに、その知識を得たのか少し興味もあつてね、それで時間を貰つたんだよ」

香月は少しほつとした。研究内容を披露出来ても、それを裏付けて行く資料はこれだから。

「私の尊敬している白川博士の資料を参考にしました」

「前に聞いたね。どう言う関係なのかね？ 差し支えなければ・もう少し詳しく聞きたい」

「僕の趣味でもあり、研究目的でもある、競翔鳩の大先輩で、日本国内でも頂点に立つ、偉大な競翔家として、又所属連合会の顧問で、又、僕の尊敬する倶楽部長の恩師でもありました。生前大変親しくさせて頂きました」

「そうか・。白川氏はS工大においても、世界的においても著名な学者であつた。私にとつても恩師である」

時間があるか？ の問いで、この後、桑原教授が香月を夕食に誘つた。こうして、S工大の中でも次期学長が有力視される程の著名な学者と、香月は後々の人生に大きな影響のある付き合いが始まって行く。

チーム

白川博士の話題を、何度も嬉しそうに頷きながら、聞く桑原教授。こうして、白川氏・桑原教授と言う関係が、桑原・香月と言う世代の関係となつて、深く人生に影響する事となつた。

香月と香織の持つ活動の一つ、坂上と、木村かずみの進めているボランティアサークルがある。既に何度目かの会合もやり、春想会のメンバーのうち、橋本京子、南田洋次、咲田瑞江、愛田雄司が加わつて、他大学に通うメンバー達にも年明けから始動の声を掛けるつもりであつた。愛田の勤める新聞社にも働きかけ、チャリティー活動を呼びかけている際中でもある。南田は、空手道場の仲間呼びかけ、積極的な活動を展開している。この集まりは、各地に支部が出来る程の大きな会になりつつあつて、勿論その中で中心的な役割を担っているのは香月であり、坂上達であつた。

この日もアルバイトを終えた、香月、香織の二人は、市内の集会所である、文化会館の一室に向かつていた。

到着すると、既に常連のメンバー五十名を数え、百四十名もの大きな組織作りがテーマと成るほどの盛り上がりだつた。集まっているのは、支部長を中心とする幹部メンバー二十名達で、実行委員長の坂上が議題を呈したのは、必然的な支部作りの事であつた。

「・・・と言う訳で、横島政雄さんに、第二支部をお任せしたいと思ひますが」

横島は香月達より一歳上になる、社会人の方で、福祉関係の仕事をされている。異議も無く、中心メンバーとして、横島も挨拶した。次に名前が上がったのは三十過ぎだが、菊池吉郎と言う青年団の団長を務める方で、女性会員が急増したのも、この人が精力的に各方面に働きかけてくれたお陰だ。満場一致でその推薦は決まった。

幾つかの問題点を解決し、一通りの人選の後、香月が司会を勤めた。

「えー、それでは、各支部長も決まった事で、本部とは別に幾つかの支部活動が役員会でも具体化している訳ですが、これは重要な議題だと思うのです。人数的には、現在百四十名、A支部が二十名。B支部三十名ですが、今後は、C支部やD支部と言った、活動拠点を広げる必要があります。現在小サークル活動として、C・D地区とも動いているだけですが、ここの地盤を強化して行く案をお願いしたいと思います」

指名して活動を依頼するより、A・B地区のようなリーダーシップのある人物が居る地域は別として、あくまで自発的な、活動目的。その為には、むしろ、意見を待つのが良いと香月は思った。少し沈黙があつて、一人が手を上げた。それは南田であつた。

「押忍！俺は、口は達者じゃないから、上手く言えませんが、現在空手道場には、十人程が活動に参加してくれています。咲田さんも、花屋を中心に善意の小箱を設置して頑張っています。俺は、時間にも

都合がつけやすいし・・・ここが地盤にはなりませんか？」

香月は、拍手しながら大きな声で言った。

「有難う！そう言う自発的な言葉を待っていたんだ。それが同級生であり、親友である君が申し出てくれた事を、嬉しく頼もしく思うよ！」

全員から勿論拍手が沸いた。これは大きく、固い活動になって行くこれからの活動を予言させた。D地区には、今城俊夫氏と言う喫茶店主が名乗りをあげた、若い頃は政治活動家であったと言う雄弁で、博識で行動力ある方だ。年齢は最もこの中には高い四十六歳の人だ。こうして、基礎となる人材が固まり、いよいよ坂上が描いた、夢に向かって、大きな前進が始まろうとしていた。

新春の、東神原競翔連合会定例総会の日がやってきた。市の文化会館の中間議場を借りて、更に膨れ上がった会員二百十五名が、一同に集まった。高橋会長の挨拶の中、次々と昨年春・秋レースの表彰を受けていた。盛大な拍手の中、初めて香月が川上氏の三連覇を阻む、最優秀鳩舎賞を僅差で獲得した。準優秀鳩舎賞が川上鳩舎、銅賞鳩舎賞には郡上鳩舎が入った。磯川は、次点の四位であった。その磯川鳩舎は、既に異血導入に動いているようであり、春にはパイロンエース号をはじめとする、秋の優秀レ―サーが仕上がり上々との噂も聞く。川上氏が、高橋会長の後に会の司会を引き継ぎ、今年の日程を述べた後、任期満了に伴う、新役員の選出が行われた。会長高橋氏、副会長川上氏は、無投票選出だった

が、水谷支部長が体調を悪くされて鳩レースを中断、後任に北村が選出された。会計は佐野、書記に道上氏と次々と新役員が決定されて行く。川上氏によって、新たに放鳩委員六名の設置案、そして、教育部が提案されたが、全会一致で可決された。

教育部長に川上氏、副に香月、書記に磯川、佐野、常任委員に浦部、北村が新任された。俗に言われる川上ファミリー達だ。東神原連合会でも、中心的で最も熱心な鳩舎達でもある。又、香月が提唱していた、春、秋のチャリティーレースなどよいよ具体化されて、近隣競翔連合会との賛同もあつて、大羽数の短距離レースを分散できる狙いともに、開催が決まった。この競翔は、瞬く間に広がりを見せ、合同レースと合わせて、参加が五十連合会を数える事となるのは、すぐの事であつた。

だが・・・この総会が終わつて、目まぐるしい日程をこなして行く類まれな英才、若者の香月であつたが、まだ厳しい寒さの一月二十日日のこと、高熱を發し、市内の病院に運び込まれる。母親が付き添い・・・そして、夜が明けた。

「ここは・・・？」

「一男・・・良かったな、熱もかなり下がったようだ」

両親が、傍に居た。病院のベッドに寝かされていると気がつくには、まだ意識が朦朧としていた香月であつた。

「病院よ、一男。少し無理をしちゃったようね、風邪をこじらせたんだって。それに過労気味らしいわ」
「・・・ごめんね、心配かけて」

香月は状況が分かって、両親にそう言った。

「少し・頑張り過ぎたのね。アルバイト先にも電話したわ。お父さんとも話しあったけど、学費の事なら心配ないのよ。だからしばらく休んだ方がいいわ」

香月が黙って頷いた。体が重くて、起き上がれそうも無かった。

そこへ来生医師が、入って来た。香月の小さい頃からの知り合いの医者であった。

「一男君が、ここへ運び込まれた時は、びっくりしたよ。ほとんど君は病気一つした事が無かったからなあ。ご両親も大変でしたね。ま、二、三日ゆっくりして行くか」

「先生、俺・・・どこか悪いんですか？」

「はは・・・呆れた奴だなあ。もう少しで肺炎を起こす所だった。それに、二十歳にもならない若さで、どうして、過労になるまで体を使っただい？君も同じ医学を目指す者。第一には自分の健康。それになくちや、一人前の獣医にはなれんぞ」

「・・・済みません。父さん、母さん、先生・・・」

香月は再び、深い睡魔に襲われ、再び目覚めた時は夕方の事であった。病室には誰も居ない。手を伸ばして、ベルを押そうとした時、看護婦さんが入って来た。

「どうしたの？香月君」

そう言う看護婦の顔を見た。

「あれ・・・君・・・斎藤さん？」

「ふふ、お久しぶり。どうしちやったの？香月君」

「はは・・・多分・・・病気だからだろう？」

「あはは。じゃあ、昨夜病院に救急車で運び込まれたのは、貴方だったのね。勤務が代わって、見覚えのある名前だから、もしかしたらって思ったのよ」

「良く覚えてないんだけど・・・それより、君、看護婦さんになったんだね。中学以来だね」

「そうね、中学以来よね。今・・・大学生？」

「ああ・・・それよりさ・・・お腹が減っててさ・・・それで、ベルを押そうって思った所なんだ」

「まあ・・・ほほほ。その位元気だったら、大丈夫ね。先生に聞いてくるから待っててね」

しばらくして、来生医師が来ると、少し動いても良いよと言う事で、病室外へふらつく足で歩いた。

娯楽室の横にある、電話から香月は坂上に電話していた。

「おお！香月君、香織さんから聞いたけど、大丈夫かい？入院したって聞いたから」

「ああ、少し風邪をこじらせてしまった見たいなんだ」

「無理させちゃったね・・・香月君」

坂上の声が沈んだ。

「はは、何言っているの？坂上」

「いや・・・そうじゃない。俺達が今やっている事は目標であっても、目的ではない。積み重ねなんだ。俺達は、少し慌てて焦っていた気がしている。もう少しのんびりやろうよ、香月君。君に頼り過ぎていたんだ、俺達は」

「だから・・・」

言いかけた香月に、電話の向こうの坂上が制した。

「俺達が今やる事はまず、学業。卒業する事だ。君は特に大事な時期。約束しようよ、香月君。無理は止めよう。ね？」

「・・・分かった」

友達故の心遣いが痛いほど分かった。香月は電話を切ると、病室へ戻った。齋藤が私服に着替えて待っていた。

「どうしたの？病人のくせに」

「やれやれ・・・トイレも行けないのかい？それはそうと、君はもう勤務終わったの？」

「ええ。もう少ししたら食事持ってくるわね。先生の許可貰ったから」

「悪いよ。勤務終わったんだろ？」

「全然構わないわ。それより、無理じゃ無かったら貴方が食べる時間ここへ居ても良いかしら」

「ああ・・・いいとも。少し気分も良くなったしね。お腹もすいた事だし」

しばらくして、食事を齋藤が持って来て、味気ない病院食を食べながら、少しずつ話をして二人だった。香月が、

「だけど、随分君も変わっちゃったね。中学時代は確か美術部だったよね。県展にも何回も入選していた」

「覚えててくれて有難う！嬉しいわ」

斎藤は、長い髪をさらりと掻き分けた。色白の美しい顔がやや紅潮した。本当に嬉しそうだった。

「で？質問して悪いけど、どうして、看護婦さんになったの？」

「憧れ・・かな？白衣の天使」

「似合うよね、君にぴったりだ」

「ふふ。でも、香月君って随分変わったわよね、大人しくて、目立った方じゃなかったけど、びつくりしたわよ、S工大に高校生で一発合格したんですってね！」

「あ・・来生さんが、そんな事を喋っちゃったんだ、君に」

「うふふ。私は香月君とは同級生だから、良いでしょ。それにお目出度い事だしね。凄いわ・・で、S工大で、何を目指しているの？今度は私の質問。でも、本当に尊敬しちゃうわよね。現役で合格する人だったなんて」

「獣医なんだ。生態学も専攻してるけど」

「きっかけは？」

「憧れ・・かな？」

「まあ！ほほほ」

「はははは」

それからしばらくして体に障るからと、その後斎藤は病室を出て行った。香月も再び深い眠りに襲われた。

香織が病室へ現れたのは、翌日の昼頃であった。母親が丁度帰った後で、香月の体調もかなり回復していた。

「大丈夫？熱がすぐあつたつて聞いたから」

「ああ、もう殆ど無くなった。若いからさ、回復も早いや」

「本当に？」

香織は心配そうに香月の顔を覗き込んだ。

「本当さ、ほら、この通り」

そう言うのとベッドから降り、柔軟体操をして見せる香月であった。

「いい……。元気だつて分ければ、安心したから。でも、何だか気が抜けちゃった見たい」

「それは……。俺がもっと病人でなくちゃ困るって事？」

「馬鹿……。心配しちやつた分、損したつて気分なの。本当は昨日来る予定だったけど、お父さんが、明

日にしなさいって」

「御免・・・」

香月は素直に謝った。香織が一瞬泣きそうな顔になったからだった。

「先生がさ・・・この際だから、ゆっくりして帰れだつてさ・・・あはは」

「まあ、いい先生ね」

「おいおい・・・」

「貴方の事良く分かってるわ。退院したら、又貴方は忙しく動き回る筈よ。だから」

「昨日・・・坂上にも約束した。まずは学業だつて」

「私の家にも坂上さんから電話があつたわ。同じ事を私も言ったの」

「そうか・・・そうだよね」

そんな会話をしている所に、斎藤が入室して来た。

「香月君！」

巡回では無く、花を持って来てくれたようで、振り向いた香織と、斎藤の眼が合った。それは、一瞬

の事で、女性同士がどのような感覚であったか、香月には分からなかった。斎藤は、

「こちらの綺麗な方は、ガールフレンド？香月君の」

「お世話になっています」

香織は、香月が答える前に頭を下げ、その質問を肯定した。斎藤は、香織に花を渡すと軽く頭を下げると、お大事に・・・その言葉と共に、退出した。

その時、

「ねえ・・・あの看護婦さんって、香月君と知り合いなの？」

敏感な女の勘は、見抜いたようだ。

「ああ・・・中学校の同級生なんだ」

「綺麗な女性ね」

「そうだね」

香織は、花を花瓶に活けながら、後ろ向きに香月に言った。

「あの人、香月君に気がある見たい」

「え・・・？よせよ・・・変な事言うの」

香月が少し眉間に皺を寄せた。香織は、それ以上もう言わなかった。夕方まで香織は病室で過ごし、帰って行った。

その晩、個室である香月の病室の電気が消えた、九時半頃であった。少し疲れてうとうとしかけた香月の耳に、病室のドアが開く音が聞こえた。ベッドの横のスイッチを入れようとした香月だったが・・・

「点けないで！お願い・・・」

その声は齋藤であった。

「齋藤さん・・・」

「御免なさい・・・こんな顔見られたくないから・・・」

「・・・どうしたの？」

「構わない？このままで・・・」

「あ・・・ああ。そのソファにでも座ってくれよ。俺もベッドに座るから」

少し沈黙があつた。

「私ね・・・思い違いをしていただけなの。いきなり再会した貴方を見て、余りに素敵過ぎたから」

「・・・有難うと言えれば良いのかな・・・？」

「昼間に来ていた方、一目で分かったわ。輝くような綺麗で明るそうな彼女。完璧に貴方とお似合いだつて」

「・・・うん・・・」

「私ね、自分勝手に想像して浮き上がっていて。貴方に彼女が居るなんて事を考えても居なかつた。ただ嬉しかったの。この二日間」

「うん」

「もう、私なんか入る余地の無い位、親密な貴方達の雰囲気を感じて・・・失恋した訳・・・私は今日」

「嬉しいよ、君のような素敵な女性にそんな言葉を貰うなんて・・・もつと違う形で君とは会えば良かったかも知れないね」

「止めて・・・そんな優しい事言うの、泣いちゃうから・・・」

斎藤和江のすすり泣きが聞こえた。

「御免・・・」

香月はつぶやくように言った。

「私ね、香月君が私の絵を描いてた事覚えてるよって言ってくれたの、凄く嬉しかったの。だって、もう忘れてるでしょうけど、美術部の文化祭の発表の時、一番熱心に私の絵を見てくれたのは香月君だった。だから昨日その言葉が本当に嬉しかったの」

「・・・君は覚えてないでしょうって言ったけど、その絵の事覚えてるよ。凄い才能のある人だって思った。」

「嬉しいわ」

「俺の話・・・少し聞いてくれる？」

「ええ・・・」

「君と再会した一昨日、その絵を描いていた君と、看護婦さんのイメージが重ならなかったんだ」

「絵は今でも描いてるわ。来生先生に頼まれて、今、この病院に飾る絵を描いてるの」

「そうなんだ。じゃ・・・君の絵に感動した俺の当時の気持ちを言っても良いかな？」

「是非！香月君ならきつと理解してくれると思うから」

「・・・あの絵は白馬と老人だったよね。白馬は老人の夢、老人が追い求めて来た理想。老人は現実を見ている自分。きつと、夢を未来に託そうとしたんだよね、白馬に乗せて」

「その通り！嬉しい。やっぱり香月君は私の王子様だった。あの時勇気を出して、声を掛ければ良かったわ・・・」

「そう言つて貰えるのは本当に嬉しいよ。でも、今の俺は香織しか居ないって思つてる。君には有り余る絵の才能があるし、又素晴らしい白衣の天使であつて欲しいと俺は思う。君さえ良ければ、こんなサークルがあるんだ。参加して見ないか？」

齋藤が歩み寄つた。香月が薄闇の中、資料を渡す。齋藤が香月に抱きついた。

「齋藤さん・・・」

「少しだけ・・・このままで居させて。お願い」

香月の行く所出会いがあり、心揺るがす何かがある。齋藤はこの後、ボランティアサークルに積極参加し、香織とも親友になり、サークルの香織と並んでマドンナ的存在になり、そして来生医師と幸せな結婚をする事になる・・・。

翌日になつて、サークルの仲間が続々と訪れ、坂上と会つた齋藤は、その場で入会した。改めて、香織と互いの自己紹介をすると、同年齢と言う事もあり、何年来の知己のように打ち解けて、たちまちの内に会話の華が咲いた。二人が親友になるのはすぐの事であつた。

皆が帰つた後、香織が・・・

「どうしちゃったの？彼女昨日とは別人ね」

「別に・・何も感じなかったけど」

香月が笑った。香織も笑った。良き友人が出来たような嬉しさもあった。

そこへ来生医師が入って来る。

「よお！さつき看護婦詰め所で、聞いたけど、俺も参加させてくれよ、サークルに」

「喜んで！光栄ですよ、先生に加入いただけると」

「ま、それはそうとして、退院は明後日にするかい？」

「ええ！」

香月は嬉しそうに答えた。

「ははは。一男君もうらやましいね。可愛い彼女が居て」

来生医師はそう言いながら、病室を出て行った。

「ねえ・・・？来生先生って独身？」

香織が聞く。

「ああ・・・大学出て何年かだろう・・・そろそろ三十歳近いかな？」

「なるほどね・・・。そう言う事か」

「何・・・？」

「良いの。良いの。ふふふ」

「変な香織・・・ははは」

香月も笑った。

退院した香月に待ち受けていたのは、大学の研究室での、論文提出前の討論であった。それはお互いの論文テーマに対する指摘であり、桑原研究チームと言う突出したメンバーが集まる学内でも高レベルな討論でもあった。

自分の論文の位置するものが、ここで互いの指摘を受ける事にもなる。八名のメンバーは普段バラバラで、自己の研究を行っており、こうして一同に集まる事は少ない為、絶好の機会でもあった。桑原教授が、いつも議題を提出し、自分の研究テーマを紹介しながら、疑問点、不備部分を徹底的に突いて行くと言う厳しいものだった。情報量も圧倒的で、又その習熟度は飛びぬけたメンバー揃いでもあった。

白石五郎、新藤雄作、尾上一行、西山司郎、高山良行、山本俊二、菊池秀夫、香月一男、そして、桑原教授も加わる。

「・・・と言う訳で、私のテーマ発表を終わります」

白石の論文テーマ発表が終わると、すぐ質問の手が上がった。高山だった。白石はこの中では最年長の博識家、対する高山は理論家として知られ、その舌峰には鋭いものがある。

「質問します。白石さんの今の発表の中で、言語に対する知性との関連の中で、幾つかの言語レベルでの比較データがありました。知識レベル・知能レベルについての比較対象の論旨説明が少し甘いのは？」

白石が答えた。

「比較対象とは、幾つかの知識レベル、相対的な脳の比重や、体重に占める大きさ等に区分されます。例えば人間界に於いても、知能レベルテストは完璧ですか？逆に高山君に質問します」

高山が質問を取り下げた。こうして、次々と論文発表があり、最後に香月の発表となった。香月に対

する質問は、殆ど全員の手が上がった。

「・・・君の言う鳩ゲノムの遺伝子情報解読はどのように進めるのか？」

「・・・DNA塩基配列の仕組みについて」

「病理学的、免疫性のテーマは？」

「優性遺伝、劣勢遺伝についての資料を」

等、様々な質問が起こった。それは、香月の論文が今までに無い、新境地を拓いているからで、特に遺伝子情報の解説と言う、この時代には超先見性的の高い研究部分については、大きな質問が集中した。最後に桑原教授が締め括った。

「今日は有意義な日であった。それぞれの研究論文は五月末に纏めて提出下さい。それによつては、現役での博士号も可能かも知れない。特に、新分野の香月君の研究論文には、大変私も興味があった」

この日、香月には大きなS工大での一歩があった。それは周囲が予期せぬ、大きな、大きな一歩でもあった。

そんな日々の中でも早くも、春の競翔についての訓練に余念が無い香月であった。

今回は助手である掛川が、鳩の訓練地探索に同行していた。山間の訓練の候補地選びであった。香月

鳩舎には現在四十三羽の選手鳩が居るが、今回の放鳩地探索には、その中の十三羽に重要なポイントを絞っていた。

二人が到着したのは、山間の細い栈道だった。

「これ以上は、もう車では無理だね」

掛川がつぶやくように言った。そこへ車を止め、急な坂道を下った。やっと一人が通れる位の曲がりくねった道を降り、その場所を眺めながら、二人は同時に頷いた。

「うん・・・ここなら行けそうですね。掛川さん。理想的な地形と言えませんか？」

「昔・・・溪流釣りに凝っていて、色んな場所に行った。それが役に立ったようだね」

山間の深い谷間であった。両岸が切り立った断崖で、溪流は激しく流れ、大小の岩にぶつかり飛沫を上げていく。雪もちらほら残り、この日は今にも雪が降りそうな天候であった。二人で地図を眺め、詳細に記入しながら、ここでの一斉放鳩を、まず実施したのだった。本来は単羽訓練地だが、このような冬場の寒い放鳩には危険も伴う。今回の場所を詳細に記して、この場を二人は後にした。帰りの道中の車内での会話。

「やっど・一つの難問の答えは見えていましたね。次の難問をどうクリアして行くか・又、鳩が答えてくれるか心配です」

「うーん。難しいね。競翔鳩の優秀さに、俺も認識を新たにしたよ。君の鳩舎の一級選手鳩を提供してくれたから、随分助かっているんだが、この訓練が、レースに影響を与えないか？」

「その点でしたら、大丈夫です。成鳩に関しては、一般訓練をこの後行うので、それで十分だと思つてます。若鳩の潜在能力をいかに早く把握出来るか。俺も助かっていますよ、この訓練は」

そして・二日後、単羽訓練が掛川の手によつて、同場所で行われる事となつた。掛川は一羽、一羽、放鳩しながら鳩の帰還コース、時間等を詳細に記録して行く。鳩舎で待つ香月は、放鳩された時間から逆算した、一羽、一羽の帰舎を克明に記録して行く。放鳩から一時間以内に八羽の鳩の帰舎が確認された。放鳩地からの直線距離は六十キロ。相当な難所ゆえに、特別早い帰舎も無かつた。さらに、一時間経過して、三羽が戻つて来た。残り二羽の帰舎を待たずに、香月は大学へ戻り、掛川と結果を分析しあつた。

掛川が地図を片手に話始める。

「予定していた通りに小雪ちらつく天候で、帰舎コースは四つに分かれたよ。その内訳は直線的に川を下つて、それから急上昇をしたのが三羽。それから左側の山を越えて行つたのが四羽。逆に上流へ向かつて、そのまま急上昇をして視界から消えたのが二羽。それからまっすぐ川を下つて見えなくなった鳩

が四羽。計十三羽の内訳だ」

「ええ。岐路コースを分析すれば、帰舎は上流方向に位置する訳です。このコースは最短で直線的でもあります。これは短距離離鳩の特徴で、二羽は確認出来ました。次に下流に向かった鳩が十位羽と言う事になります。これも結果が顕著です。いきなり上昇した鳩の四羽は、確認出来ました。まず、六羽は見込みある鳩です。長距離離鳩の資質十分です。残り五羽なんです。左の山を越えた四羽の内二羽は先ほど確認しましたが、残り二羽と、まっすぐ下流に向かった三羽の内、どちらかの二羽が二時間以内に帰舎してないかを推理して見ますと、左手の山超えの二羽の方が少し遅れて帰舎したのでしよう。そして、一羽が下流に向かった方でしょう」

「うん。根拠は？」

「地図を見ながらお話しましょう。最初の放鳩と、最後の放鳩との時間差は一時間ありますから、二時間の差がついて当然の帰舎なんです。つまり、下流の二羽は一度左手の山を上って、それから迂回をする事になります。山からの強風に煽られて、相当苦戦した事でしょう。逆に上流に向かった鳩は視界こそ悪いが、追い風となつて、比較的楽な帰舎コースを選んだ事になります」

「ははあ・・なるほど。だから、二羽が下流と言う結論なんだね？」

「ええ・・この二羽は今後のレースに不向きですね。大学へ持ち込みましょう。逆に下流の一羽。これは期待が持てます」

「・・・なんで？分らないね。競翔素人の俺には・・ははは」

「明日もう一度訓練を実行したら、結果が出ますよ。多分」

そう言つてすぐ次の日に放鳩へ向かつたのは、香月が秋に行つた、あの山あり、谷あり、池あり、川ありの放鳩地だった。十一羽の鳩が今回は訓練を受けた。雪混じりの天候は、昨日と同じ。二日続けて行つと言う点が大きく過去の訓練と違う所だ。ただ、一斉放鳩に踏み切つたこの日の訓練に鳩は一時間弱で戻つては来たものの、相当疲れた様子だった。

香月は重大な事を忘れていた事に気がついた。

「しまった・・確かに結果は出だし、見極めも成功した。しかし、こう難レースばかり想定しての訓練じゃ、荒天レースがかえつて心配だ。スピード性のある、短距離鳩には、災いしてしまう・・。」

研究者としての立場、そして競翔家としての視点。香月はその二者が両立しない事に気がついた。次の日に掛川と実習室の中で、相談を繰り返していた香月だった。

「学者としての視点的には成功だが、競翔家としては失敗だと言う根拠は？」

掛川が興味深そうに尋ねた。

「いえ、失敗だとは言っていません。少なくとも、長距離鳩に関しては、極めて有効な訓練でした」

「俺には、その短距離・長距離鳩の適性が、理解できて居ない。参考の為に教えてくれ」

「他の動物を見ても、そう大差はありませんよ。短距離鳩は、その力強い筋力で、スピード性を重視されますから、主翼の三枚が長く、竜骨が高く、長い等の特徴があります。人間でもそうです。大腿筋や、上腕部等、筋肉が発達しているのと同じです。特に、怖さを知らない若鳩の場合その傾向が強く、個体差はありますけど鳩舎方向を定めると、加速する様に飛び帰るのです。ところが、逆に長距離鳩はあのような谷間では、上流に向かって上昇気流に乗り、その豊かな副翼と密な羽毛によって、自分の筋肉を使わずとも、浮力を有効に使うのです。この対象は、面白いですね。日本のような気候風土では特に、顕著です。この訓練は確かに難コースでの想定としては、良かったですが、結果として、次の日の訓練は余分でした。何故なら、もう結果が出ていた事に対する、駄目押しのようなものですから」

「それ・それ。今の論理は俺にも良く分かる。自分なりにある程度の習性なり、特徴は知っているつもりだ。帰巢メカニズムについての、俺なりの論文を六月までに完成させるヒントがそこにあると思うんだ」

「掛川さんが、もし、競翔家になったら、俺の連合会でもトップになるでしょうね。ヒントになる事でしたら、何でも言います。帰還コースとして、今回は、山あり、谷あり、池あり、どんな優秀なレーサーでも、直線的な帰舎は無理です。更に向かい風の吹雪と来れば、長距離タイプの鳩は、安全な帰還コースを選び、低空で、帰っている事でしょう。事実三羽の鳩が帰還タイムを大幅に遅らせました。又、短距離鳩は帰舎が早かったのですが、非常に疲れていました。これは逆風の中を突っ込んで帰って来たからです。羽毛も濡れて、非常に痛めております」

「ほお・羽毛の損傷か・レースまでに治るかな？」

「治ります。でも、これが短距離の訓練だから。この程度ですが、四百キロ、五百キロ、六百キロと短、中距離に参加する鳩達ですから、若鳩の場合この経験はかえって逆効果。無理をして戻って来る事は死をも意味します。」

「もつともだ。だが、我々学者は結果で判断するが、競翔家の視点とは、万一の場合も想定しているんだね。」

「命・預かるとはそう言う事だと思いますから」

「感服したね、その点では競翔家の君に。でも学者の俺としては、結果が出て成功したと思っているよ」

「ここで、掛川さんのヒントになるかどうかなのですが、今回訓練の鳩は全て若鳩。秋のレースにも参加させていない、二次鳩です。つまり体は大きくても、小学生並の体力なんです。今まで少しでも危険のある事は避けて来ました。冷静な判断を持つには、若すぎたかも知れませんか」

「うん・・そうだね、もう少し実地訓練を、大学内鳩舎の成鳩でやってみよう。今の言葉は参考になったよ」

「それと・スタミナ的に、もう少し栄養バランスの取れた飼料が欲しいですね。体型バランスは、飼料によっても随分違うと思いますよ。」

「ああ・君が大学内で実験してるスピルナの餌・あれ面白いね、白の羽色がピンクに染まっている。もつとも、研究には遠い実験ではあるが」

「ははは・いえ・あれも飼料としての価値です。無関係ではきつと無い筈ですよ」

「君はアイデアの宝庫だね、ははは」

掛川、香月は同時に思った。それは近い内に到来する飼料の革命を二人が同時に予期していた事だと・・・。

「農学部の人に相談して見るかい？」

「いえ、友人が農大に通っています。そちらと相談するつもりですから」

「成功を祈るよ」

この日を一応の区切りとして、一週間後に迫る合同訓練を待つまでとなった。次の日大での講義を終了した後、香織と待ち合わせて、坂上、木村の待つ喫茶店へ向かった。香月からの連絡で、坂上が資料を揃えてくれると言う事だ。到着してすぐに、木村と、香織は奥のテーブルに行き、坂上と香月がテーブルに資料を広げて早々に検討を始めていた。

「急遽だったんで、十分じゃないけど・・・」

「済まない。突然にこんな相談を持ちかけて」

「いや・・・希望にそえるかどうか・・・とにかくペレットに関する資料は集めて来たよ」

「出来ると仮定しても良いものだろうか・・・？」

「少し、それは早計だね。つまり香月の求めるものは、今までの配合飼料を越えたものと言う事。季



節的な配合パターン・・となるとそれだけの需要があつてのものだろうか？簡単では無いさ」

「うん・・その点は俺なりに、三種類のタイプを用意しているんだ。種鳩用、シーズンオフ用、選手鳩用のスタミナ食。三パターンあれば十分だと思う。大きさは、せいぜいトウモロコシ以下、それでいて鳩が好んで食べる色、艶が欲しい」

「・・凄いい注文だね」

「聞きたいのは可能か、無理かと言う事だよ」

香月の提案が、単なる実験で無いものと感じた坂上は、頭を上げ、香月をじっと見た。

「試作して出来ない事は無いよ」

「そうか！」

「少し・・待ってくれ。その前に、君が本気で取り組むと言うなら、俺も全面協力を惜しまないが、最後は飼料会社との交渉になるんだよ？」

「申し訳ない。俺自身が出来ない相談かもって思ったから、そこまで踏み込んだ事を全く想像して無かつたんだよ」

「ま・・その前にせっかく集まつたんだから、彼女二人を呼ぼうよ。こちらへ」

「はは・・済まない。そうだね」

香月は笑って、香織、木村を呼んだ。
香織は笑って来た。

「相変わらずね。二人とも」

木村も言う。

「本当だわ。私達なんて眼中に無いつて感じ？」

「あはは・・御免、御免。お詫びにこれを」

香月が木村、香織に紙袋を差し出した。

「何？」

「あら・・・」

木村と香織が顔を見合わせてにこりとした。それは、香月の退院快気祝いである、スカーフであった。

「ま・・・しょうが無いわね。これを出されちゃ」

そこで、坂上が話を続けた。

「簡単に見通しがついたって言うがね。簡単でも無いよ。飼料を細かく砕く、製粉機はあるさ。だけど、その後の加工なんだ」

「うん・・俺の思うにはだね。小麦粉で、色付け出来ないかって」

「成るほど・・それは難しい事では無い」

「そこでだね、ただ漠然と今までの飼料を使ってたんじゃ、面白く無いから。君の推薦する新しい栄養価のある、種子は無いかと思ってるね」

「脂肪分の割合とかは？」

流石に坂上は即座に理解した。可能な食材が頭に、何種か浮かんでいるようだ。

「二十％・・三十％は種鳩用にしても良いと思う」

「鉱物飼料は別に与えるんだろう？」

「うん・・抗生物質は個人的には混入したくないけど、構わない。とにかく形をまず作って見たいんだ」
「じゃあさ、聞くけど、鳩が好んで食べる餌は何だい？」

「麻の実か、コーリヤンだね」

「主成分比率が問題だね。君の事だ。資料は用意してるんだろう、預かっておくよ」
「助かるよ」

坂上は頭を掻きながら、答えた。

「まあ・俺の研究にもプラスになる事だから、成功すれば、一挙両得って事も有り得るね」

坂上は笑った。

「得になるかどうかは分からないけどね。ふふふ」

香織も笑った。

木村かずみがこう言った、街頭に出ているので、真っ黒に日焼けしていて、健康そうな顔だった。

「私が言うのもなんだけど・二人とも凄い研究家だから、不可能は無いつて感じ？」

「あ・それよりさ、香月君、S工大のシンクタンクが集まる論文討論会だったの？君が倒れたのは、その論文テーマの事で睡眠不足と言う事も一因だって聞いているからさ、重要なものだったんだろう？」

「ああ・・・凄い質問攻めで大変だったよ、俺のテーマ。なにしろ未知の分野だからね」

香織が言った。

「雲を掴むような話なのよね。でも、実際聞いてると、何となく、今坂上君と喋っている事も分かるし、香月君の研究が分かってくるような気もするの」

「それは、香織が香月一男と言う彼に全幅の信頼を持つてるからよ」

木村かずみがそう答えた。

「で？どうだったの？実際」

坂上が重ねて聞いた。

「感触としては・・・上々だったと思う。六月までに、何とか部分的にでも完成させたいよね」

「完成って？未知の世界・・・今からの研究する分野だろう？」

「いや・・・。研究は勿論一生涯のテーマにしたいと思うし、俺の人生の中で、到達出来るとは思っても居ない。でも、それに行き着く為の序説を論文として提出したいと思っている」

「凄そうだね・・君のS工大で、認められたって言う論文の中身・・じゃ、ひよつとして、現役二回生での博士号つてのもあるのかな？」

坂上は沈着冷静な男だ。滅多な事は言わない。香織と木村かずみは、香月の顔を見た。改めて、香月の重要な論文の中身を認識したのだ。坂上の質問は、最初からその重要性を認識した上での事だったのだ。

「それは・・分からないよ。決めるのは教授だから」

香月はその言葉を、静かな口調で返した。
場を盛り上げるように、木村かずみが言う。

「ねえ・・ひよつとして、二人でその新飼料の会社作っちゃえば？」

坂上と香月は笑った。

「あはは・・無理無理。だって、たかが、鳩飼育人口位の需要で、そんなもん出来ないって」

香月が笑いながら言った。

「あら・・じゃあ、何故、坂上君に相談を持ちかけたの？その時が来るまで待てば良いじゃないの、それなら」

「あはは、香月はきつとその先を見越しているんだろう。飼料会社は営利を目的としなければ成り立たない。質の悪いものを幾ら作っても、時間、経費の無駄さ。三種の提案は、個人のオリジナルをどう作れるか。香月はその先を見ているんだよね？」

かずみが言う。

「だって、私達から見れば、安価で、高カロリーのもが良いに決まっているわ。そう考えるのがおかしいかしら？」

香織も続けて言う。

「そうなのよ。確かに言う事は理解できるけど、個体差って言うか、体質って言うか。そう言うものがあるでしょ？同じものを食べても太る人も居れば、痩せちゃう人も居る。その人に合ったものを、個々に与える訳にはいかないんだから、どこまで妥協して行くかでしょう？最終的には」

香月は真顔で答えた。

「君達、女性が同席してくれて、本当に良かったよ。凄く良い質問だった。その通りなんだよね。君達の指摘通りだ。つまり、こう言う事なんだ。俺達だって、毎日同じおかずで、偏食的に食べていた人が、いきなり全部五目飯のようにして食べるとする。確かに栄養は偏らず、カロリーもある。だけど、毎日食べられるのかどうか。飽きはしないだろうか。いきなり食変化をしても、なじめないだろうか？分かっていても、そうなんだ。無理だと思うんだ。俺の考えは、使い分けなんだよ。白いサフラワの中に混入しておけば、食べるかな？とか、そうなれば今までの数倍、補助栄養的にもカロリーを摂取出来るようになるし、分量の加減で、調整も出来る。市販されている飼料を単品で買うとなれば、とても高価なものになるし、学生を含めた、愛鳩家にとつて、そんな負担は実際無理でもある。つまり、色付けによつても調整し、分量によつても変化し、その配分にも工夫をし、いかに飽きさせないで、カロリーを摂取させるかなんだ」

「大変ねえ・・良く分かったわ。それを飼料会社に要求するのは無理ねえ」

かずみも香織も言った。

「あつ！そうだ！」

黙っていた坂上が突然声を上げた。驚いて坂上の顔を見る三人だった。

「ど・・・どうしたの？」

驚いて眼を見開いて、香織が坂上に聞いた。

「うん・・少し考えていたんだ。飼料の配合の事で」

「良いアイデアがあったかい？」

香月が聞いた。

「うん。上手く行くかどうかは分からないんだけど、つなぎにマツシユを入れようと思うんだ。デンプン」

「ははあ・・なるほどね。俺はタピオカって言うのも考えて見たよ」

「君の事だ。その知識は流石だと思うけど、そのタピオカは、タロイモから取れるデンプンだよね？まだ、流通にはメジャーじゃないし、一般的でも無いよ。うどんを作るのならライスアイデアだろうけど・・あ・・そう言う意味かあ、あはは」

「ははは。」

香月は笑った。坂上の考えの組み立てを聞く為に出した言葉であった。

「うん・・そうだね！うどん状に練って、乾燥機で乾かし、天日で殺菌して、その後小麦粉での着色・・これでやって見ようと思う」

「俺が漠然と考えていたものに全く近い。是非お願いするよ」

「それと・・配合のバランスを教えてください？君達は不可能って言っているけど、実は親父の知り合いで、大学へ出入りしている飼料会社があるんだ。少し色んな飼料を集めて貰って、交渉して見たいと思う」

「助かるよ！それが、有益だったと認められれば、大学からも費用が出ると思う」

「抜け目が無い奴だ。じゃ！今日は皆と楽しく後は過ごそうじゃないか」

そして・・一週間後には、早くも坂上から香月に電話が入った。

「やあ！この前の件だけだよ」

「ええ？もしかして、もうやってくれたのかい？」

「思いついたら、即やらないと気が済まない性質だね。ニサンプルは作って見たよ」

「あはは。じゃ、行くよ、待ち合わせ場所へ」

余りにも早い対応に香月は驚きながら、坂上の待つ指定場所へ車を走らせた。○農大に着いたのは夕刻近くの事であった。坂上に招かれて、飼料室の中へ入った。

「どう・・・？これがサンプルだけど、カラカラに乾燥させた状態だと、消化に時間が掛かるので、水量を少し調整して見たよ。圧縮して、一度平たくしたものを切ったので、少し角張っているが、業者に持ち込めば、滑らかなペレット状の物は出来る」

「うん、そうだね。君は、相当詳しく分析してくれているようで有り難い。サンプルデータを見せて貰えるかな？」

坂上は五つのサンプルデータを詳しく説明しながら香月に見せた。香月は何度も頷きながら聞いていた。

「うん！これは良いね。で・・・？これ一粒で、どの位の栄養素が入ってるの？」

「そう来ると思った。百グラムに対してAが二十g、Bが十五g、Cが十g、Dが五g、Eが二g相当だから、分量的には抑えているつもりだ。この程度はどうにでも出来るが、一つだけ苦労した事がある」

「・・・何だい？」

「水分だ。ペレット状の場合、作ってすぐ与えるのは良いが、保存するとして、長期間に及ぶと、カビが発生する」

「そう・・だよ。難しい問題だ」

「要するに表面のコーティングをどうするかに絞った。同時に、それは君の言う、表面がざらざらしていない、種子に近い食感のあるような、それで居て、カビの浸透を防ぐと言う物で無くてはならない」

「難問を押し付けちゃったよね・・」

香月は、申し訳無さそうに言った。

「で・・保存期間を一年間と言う長い日数では無く、一ヶ月単位の小袋での提案なんだ」

「・・うん・・それは可能かも知れないね」

「なら・・一案がある」

「是非、披露してくれよ。試作してくれたサンプルがあるんだね？」

「相変わらず、鋭いねえ。安価で大量に確保できるものは卵白だった。ただし、動物性蛋白だが、鳩にとつてはどうだろうか？」

「・・問題は特に無いと思う。皮膜の問題だけだろうか？」

「良かった。消化の点で、吸収の妨げになるのでは無いかと思つてね」

「かえって良いんじゃないかな・・消化まで少しインターバルがある方が、空腹感を感じなくて済む」

そう言つて坂上は奥から更にサンプルを取り出した。

「なら、この少しサンプルを君に持つて帰つて貰おうかな。鳩に試食させて見るかい？」

「ああ。有難う、流石に坂上だ。感謝するよ」

「なあに。俺も凄く勉強になつたよ。自分の目指す方向でもある訳だし、君に礼を言いたい位さ」

間も無く、坂上の〇農大に出入りする飼料会社に香月と坂上が来ていた。年齢は四十の半ばだが、二代目である大西飼料会社の社長、大西健一さんは、太い眉毛の人柄が良さそうな笑顔の応対で、熱心に香月達の説明を聞いていた。

「・・・と言う訳ですが、コスト的には十kg入りで、千五百円前後でお願いしたいのです。問題があれば忌憚の無い意見をお願いします」

「いや、無いですな。出来ますよ。ただ、何種かは、普段扱っていない飼料なので、取り寄せになりませんが、やりましょう。いや、是非私の会社でやらせて下さい。大学で使つてくれると言う事になれば、私達も営業販売の範囲が増やせますし、何と言つても、私の恩人である坂上さんの親父さんからも、電話が入っている。貴方達の説明を聞くまでは、正直申しまして、一抹の不安もありましたが、ここまで分析してくれている飼料ならば問題も少ないと思います」

坂上の親父さんと、大西飼料会社の先代社長とは、深い親交があったようだが、義理を抜きにしても、既に完成度の高い飼料として、大西社長は見てくれたようだ。さっそく二十袋の試作品を作ってくれと言う事になって、坂上と香月の合作、のちの「SKペレット」と言うヒット商品は、こうして急速な進行によって産声を上げようとしていた。それは、香月、坂上の人生にも大きく影響のある産物の一つであった。

そして・・春レースは、すぐ間近に迫った。香月は、その数日前に「春想会」の第二回目の会合を主催していた。

定刻通りに香月と香織は、市内の小料理屋の二階へ来たが、部屋で待っていたのは、坂上と木村かずみだけだった。

「あれ・・？皆、遅いね。時間は連絡した筈だが」

香月が言った。

「ああ、愛田達は少し遅れるかも知れないって言ってたから、その内来るだろう、皆」

坂上が答えた。

「ま・・色々と皆も忙しいだろうしね。みやげの一つでも持って来るのかな？」

笑っている所へ、幸田と、村上が入って来た。

「やあ・・遅れて御免。少し市内で買い物をしていてね」

そう言う幸田と、村上にはお揃いのマフラーが首にかかっていた。

香月が幸田に言う。

「どう？最近大学の方は楽しいかい？」

「楽しいって？余裕なんてあるもんか、君じゃあるまいし」

幸田が答えた。

にこにこしながら香月が続ける。

「いや・・プライベートの方さ、うまく行ってるようだから」

村上良美が少し頬を染めた。幸田が少し頭を掻きながら座った。続けて、南田・橋本組と、愛田・咲田組が入って来たが、勝浦・持田組は姿を見せなかった。司会を進行しようとする香月に、愛田が言った。

「あの・・・少し、始める前に報告があるんだ」

言い辛そうな愛田だった。

「何か？まさか・・・」

香月の少しおどけたような問いに対して、少しかぶりを振って、愛田は言う。

「違うよ・・・香月の言わんとするような事じゃない。実は勝浦、持田組なんだけど・・・別れたんだ」

香織が驚いた。

「ええっ？あんなに仲が良かったのに？」

愛田が続けた。

「急の話じゃないんだ。お互い目指す道があつて、勝浦つて凄く良い奴なんだけど、俺について来いってタイプだろ？持田嬢は大学へ行く傍ら、モデルのユニットにも入っているらしいし、結構色んな仕事も増えて来たようだ。余りにも二人の時間が無かつたようだ。努力はしたらしいが・・・」

幸田が言った。

「俺がちらつと聞いた話では、持田さんは、今アメリカへ渡っているようだ」

香月が言う。

「そう・・・男女の仲って難しいね・・・」

少し場が静まりかえつたが、香月は続けた。

「でもね、春想会は、友情の会。誰がどうなつたとしても、今年が駄目でも来年は参加をして欲しい。実は皆に今日お願いしようと思つていたのは、坂上が主催している福祉サークルが会員二百名を数えて、

是非君達も許せる範囲で、中心メンバーに加わって欲しいと思つてね。もう既に、南田君も支部長を引き受けてくれているし、愛田も新聞に掲載してくれたんだ」

幸田は村上の顔をちらつと見た後、

「香月にそう言われちゃ、断れないな。これほど力を入れているって事は、いよいよ坂上君の夢が進んでいる証拠だし、我々も勿論参加するよ」

「有難う！」

香月と坂上が手を差し出した。

幸田と言う大きな柱が加わった事で、この活動は拠点を東京の中心に。今後は益々広がりを見せ、大きな全国組織へ、そして、国際的活動へとやがて発展して行くのだった。

そして、この次の日、香月は川上氏宅の夕食へ招かれていた。

香織の手料理で楽しく夕食した後、いつものように、川上氏と香月は応接室に入った。

「しかし、救急車で運ばれたって聞いた時は驚いたよ。香織がすぐ行くと言うので、ご両親も行つてる事だし、一晩様子を見てからにしようと思ひ止めたんだが、幸い大事が無かつて良かったね。君は自分の限界を超えても行動しようとするから心配だよ」

「済みません……。ご心配をお掛けしまして。論文の事もありましたし、色々重なってしまいました」
「でもこうして、又春のレースが来たね。昨年度最優秀鳩舎賞の君だ。皆からもマークされている事だろうが、少し聞きたいね。今春の事を」

香月は、勿論残す事無く川上氏に説明を始めた。途中で香織がコーヒーを持って来たが、すぐ退出した。

「……と言う訳なんです。訓練としては、一応の成果は上がったと思っています」

「ふむ……少し危険はある……かな？十三羽の少数に絞った若鳩だから、やり易い面はあっただろうが、訓練中の事故も考えられなくは無かった筈……私としては、全面的には賛成の手は上げられないが……」
「そうご指摘を受けるとは思っていました。確かに二回目の訓練は余分でした。ただ、その結果として、若鳩の中で三羽を短距離へ絞る事が出来ました。」

「うん。君がそこまで見越したのなら成功だろう。で……？何羽のスタートになるのかな？春は。私も巻き返しを狙っているからね、ははは」

「数的には五十六羽ですが、もう少し絞って五十羽位にします。けど、更にもう一回絞って見ようと思つています。最終的には四十数羽位のスタートになるかな……？」

「それでも、君は過去の参加数を上回るね。絞った精鋭となると、今春も活躍が期待出来そうだ」

「いえ、まだまだです。白川系のように粒の揃った鳩群は出来そうに無いです。特徴的にバラバラで、

四つのグループ編成にしようと思います」

「それは？」

「はい、短距離鳩群、中距離鳩群、長距離鳩群、記録鳩群です」

「やはり台風の目になりそうだなあ、今春も。秋の記録鳩群が居るし、記録鳩群も数居るしね・・・あ・・・それはそれとして、香織から少し聞いたんだが、君は鳩の飼料を試作したんだってね」

「ええ・・・今大学での効果を待つてからと思つていたのですが、大学の許可が予想外に早くて、業者がもう生産に入っているんですよ。俺が案を出してから、二ヶ月の間にこんなに早く進むとは驚きです」

「むう・・・それほど既に、飼料としての完成度があったと言う事だろう、それはむしろ、アイデアと言うよりも君の着眼点が良かったんだよ。きっと」

「自分の鳩舎にと思つたのがきっかけで、そこまで考えていませんでした」

「良ければ、私も使用して見たいのだが・・・？」

「はい！それは勿論お持ちします。結構良いと俺は思っていますので」

「ははは。君ほどの子が考案した物だ、疑い無く私は使わせて貰うよ。実際鳩の嗜好性については、私自身も悩んでいた事だ。実に理想的な餌だと思うね」

「有難う御座います。ただ・・・業者が入れ込んだじゃって・・・困っています」

「ははは。でも、売れば、君達にロイヤルティーが入るかも知れないね」

「そんな・・・」

思っても居ない方向の話に、香月は困惑した。

「あ・・それはそれとして・・チャリティーレースだけどね、今春は六百キロレースに決まったよ。毎シーズンチャリティーレースの距離は変えるそうで、今回は三十六連合会主催レースになるそうだから、そこそこの数は集まるんじゃないかな。順位もせつかくだから、正式な競翔の形にするって言う事だ。何しろ六百キロと言えば、優秀な鳩が集まるレースだからね。距離的に見ても、これ程大きな反響になるとは思って無かったよ」

「川上さんのご尽力の賜物と感謝申し上げます」

「いやいや・・・こう言うレースは、協会にとつても必要な事であつた。むしろあつて当然だつた。今後は協会主催にと言う意味も、多分に含んでいるレースになったんだ」

「問い合わせがありましたか？例えば、日下協会理事とか・・？」

香月の問いに笑いながら、大きく川上氏はかぶりを振つた。

「いやいや、それは無いよ。あんな大物は、私も残念ながら雲の上の存在だ」

「そうですね・・いえ、そうですね。で、春レースに戻りますが、成長過程で若鳩を酷使すると、換羽期には、羽根が曲がったりする鳩も居ます。現在対策としてカルシウムを余分に与えて、特製の鉱物飼料を与えて居ます。成鳩についても、今後は息の長い競翔鳩を育てたいですね」

「うむ。良い考えだ。それは、競翔家の手腕一つに掛かっていると云えるだろうね」

「今春はレースが多く増えましたので、大変ですね。週に二回も持ち寄りもあるし、なかなか学生やサラリーマンには、打刻が出来ないです」

「ああ・・良し悪しと言う感もあるね。ただ、競争と言う原理から離れて見れば、順位ではなく、戻つて来た、記録した事に意義もあるとは思うがね。今春は、確かに選択余地が拓さんあって、競翔家の狙いは分散するだろう。その分、参加羽数が各レースに散って、面白くなりそうだ」

「放鳩地が色々あるのが面白いですね。特に、西コース、東コースがあつて、今春は、長距離鳩の為の岐路コース選定が要求されそうですね」

「ベテランの腕の見せ所かも知れないね。ただ、GP、CH、GCH、GNは不動だ。準ずる、KC、DC、QC、ダービー、合同杯、チャリティーレース等も興味深いね。特に、チャリティーレースの放鳩地である、西コースは、案外狙い目かも知れない」

こうして、前夜談義と言える師弟の会話は続いたのだった。

春風と英傑の息吹

新緑の若葉が一斉に息吹を奏する頃、香月達の競翔も始動する。

レース前の舌戦も火蓋を切つて、教育部活動も熱気を帯びていた。大連合会の風巻連合会をも今や凌ぐ勢いの、有数の強豪連合会として、東神原連合会は大成長を遂げていた。中核を形成する一流競翔家も多く、各総合レースにも軒並み顔を出しそうな勢いであった。白川氏の名血群の子鳩達も既に第二世代が出て、強豪の中に名を連ねる学生競翔家も増えていた。熱心な学生競翔家の手によつて、レベルは更が上がっていた。そして、佐野鳩舎のビクターロビンソン系も真価を問われる年となつた。川上氏は既に白川系飛び筋の一群を駆使しており、恐らく最高の出来と思われる。勿論磯川も相当出来が良いと聞いている。秋のような展開にはなるまい、香月は感じた。磯川は、アンダーソン系のナシヨナルレースの上位の選手鳩四羽を導入して、この春に直仔を間に合わせている。又、頭抜けた銘鳩「パイロンエース号」も円熟期を迎えた最高の出来だ。言葉からも自信が溢れていた。強気だけの磯川ではもう無かつた。しかし、香月にもエース鳩が三羽居る。

そして・百キロレースが七千四百羽数で開始された。郡上鳩舎三百六十二羽、高橋鳩舎二百四十六羽。川上氏百六十四羽。その他にも小谷、桐生、渡辺鳩舎等大羽数参加鳩舎も多い。

香月は結局最終的にスタートを、四十六羽に絞つた。それは厳選に厳選した選手鳩で、流石に経験鳩はしっかり体が出来ていて、これ以上に無い仕上がり状態であつた。使い始めた飼料の効果もあるのかも知れない。

そして、まずまずの好天の空模様の中、快分速となったレースは、各鳩舎一線に並ぶ大混戦になったが、その中でも香月鳩舎では、紫竜号とカズエース号が殆ど同時に帰舎して、香月を驚かせた。佐野からの連絡によつて、その中でも頭一つ抜けているのは、磯川鳩舎、香月鳩舎、川上鳩舎の三強だと言う事であつた。川上氏宅へ着くと、

「いやあ、今日のレースは凄いよね。私の確認した所でも二分以内に四、五百羽のトップ集団が居る。分速も千八百メートルは出ているだろう。私の所でも三十羽ほど殆ど同時に戻つて来たので、どの鳩をタイムしたのか、しばらく確認に迷つたよ。ははは」

好調のようで、上機嫌の川上氏だつた。質、数とも揃つた川上氏は、ここ数年の白川系試翔期間を経て、強大な存在になつていた。国内に於いても、既に有数の鳩舎となつている。香月はどうしても、現鳩群だけでは、一步を譲らざるを得ない。ただ、香月には天才的手腕がある。類まれな洞察力がある。

「今日は参加羽数の多い総合レース並ですから、好天も幸いし、レベルの高いレースになつたようですね」

「私の所は若鳩が良かったよ。君の所は記録鳩が良いみたいだね」

佐野からの連絡である程度情報を得ている氏に、香月は詳しくは言わなかつた。

結局その日に開函の審査を立ち会う川上氏を残して、香月は一人席を抜けて家路に着いた。審査会場が大勢の会員でごったがえしていたせいもあった。

香月はこのレースの結果を、実は余りに喜んで居なかった。カズエース号が予想通りの帰舎を見せたが、紫竜号が殆ど同着のタイムで帰舎した事にある。香月は紫竜号を息の長い競翔鳩として育てる為に、あらゆる訓練をこなして来た。だが、その類稀な資質に翻弄されるばかり、もう若鳩では無い紫竜号がその天性ゆえか、常に先頭集団を形成する位置に居ると言う事だ。長距離経験鳩は、長く競翔をしていると、ある程度のレース配分を体で覚えているかのように、短距離等は悠々と戻って来るのに、紫竜号は常に全力・・否・・それは紫竜号の資質の中では、全力では無いのかも知れない。だが、典型的な超距離鳩としてこの世に生を受けたからには、その資質を伸ばしてやる事こそが、香月の競翔家としての使命だと思っている。この天才競翔家にして、紫竜号は、全く今もつてどの鳩の規格には収まらないのだった。

二百キロの持ち寄り日に百キロレースの発表が行われた。

優勝は磯川鳩舎であった。二位が香月のカズエース号。紫竜号が僅差の三位で、この上位三羽は頭抜けて早かった。川上氏が四位から八位までを占め、佐野も九位に入賞、磯川が十位だった。

続く二百キロレースも好天の高分速で又々大混戦のレースとなった。このレースでも又同じ三羽が殆ど同着で、今度はカズエース号が優勝、二位が磯川鳩舎、のちの「パイロン三世号」三位が紫竜号であった。

四位に佐野が入り、川上氏が五位く十三位までを占めた。白川系は、正に黄金期を迎えるような、優

勝こそ逃しているが大羽数の中で、上位を占めるように、一団で戻って来る、横綱相撲を取っているような成績を残している。香月も磯川も、優勝こそ分け合つては居るが、ひしひしと重圧を感じているのであった。

しかし・・・何と言う・・・紫竜号の成績だ・・・香月は、予想を遥かに上回るこれまでの帰舎に、ジャンプを決定した。この成績故に、のちの香月鳩舎の最高傑作と育つスプリント号と、紫竜号の運命はこの時大きく変わる事となる。底知れぬ才能を發揮する紫竜号は、全く違う道を歩むのである・・・。

そして・・・三百キロの合同杯レース。近隣四十連合会が参加する春レース序盤の総合大レース。運輪杯とのダブル杯の掛かるこのレースには、スプリント号が参加された。本来なら紫竜号が参加したレースでもあった。このレースにもしかして・・・紫竜号が参加されていたなら、紫竜号は、短・中距離の銘鳩として全国に名を馳せたかも知れない・・・が、それは、人間の勝手な想像の産物であつて、スプリント号が、持ち合わせた、これも資質ゆえの結果なのでは無いだろうか。

低気圧が張り出した、ややスピードが落ちるであろうこのレース。こう言うレースこそ紫竜号だな・・・、香月はそう思った。これまでのレースでは、圧倒的に他鳩舎を引き離す成績は出ていない。大混戦の高速レースだった。だが、こう言うレースこそ、鳩の真価がはつきりする。香月自身の中では、一番信頼できる鳩は第三世代の新鋭では、無かった。参加羽数はこの三日後に開催される、シルバー三百キロレースと言う西コースの新設レースのストックで、五千四百羽と、数的に連合会では減っていたが、合同杯は、五千羽近くの大レース。当然狙いの鳩舎は多かった。運命の別れ道は「カズ・エース号」においてもそうだった。このレースは、七百キロGPを狙うスプリント号の参加で、五百キロ、六百キロのチ

ヤリテイレースに照準を絞る、カズ・エース号は、シルバー杯に回ったのだ。

放鳩が七時二十分になった事で、香月は、すぐ掛川に電話した。それは、このレースを左右するであろう、帰還コースに位置する小高い丘にある公園へ掛川が直行する事、即ち、訓練を行って来た、本来は仮想紫竜号の帰還コースを確認する事であった。思えば、高地訓練から唯一紫竜号に匹敵する帰舎を見せた、スプリント号は、まさしく長距離鳩としての頭抜けた資質を持つて居たとと言える。それは高地同時訓練をした紫竜号から受け継いだ物であるとも言える。そして、この上空を通過する事は、見えないう鳩レースの長距離鳩の帰還コースの一端を捉える事でもある、絶好の機会であった。紫竜号に最も近く高いデータがあるスプリント号だから、今後のレースにも大きく関係してくる筈だ。掛川は望遠カメラを用意して待っていた。帰舎予想時間が十一時前後と、この天候でも比較的早い帰舎タイムを予想していた香月であった。そして・・・香月の目の前に一羽がタラップに舞い降りた。それは、予想通りのスプリント号であった。この予想は完璧に香月の読み通りで、タイムを打つ。結局三羽のタイムをして香月は打刻を止めた。それは、スプリント号のタイムから二十数分も遅れて四番手の集団が戻って来たからだ。掛川の報告を待つまでも無く、予想コースをスプリント号は戻って来たのに違いない。二番手、三番手の鳩は短距離で秋に活躍した鳩群だった。短距離鳩では無いスプリント号が飛び抜けて早かったのは、別コースからの帰還を意味している。

参加二十四羽全鳩の帰還を確認後、香月は川上宅へ向かった。

「お・・・今日は随分早いねえ。私の所は何羽かまだ戻って来てないよ。君の所は全鳩帰還のようだ。好

調だね、今春も」

香月に聞くまでも無く、川上氏は言った。そう言う川上氏も、相当今日は良い見たいだと、香月は感じた。

「君の所のカズエース号は又も二百キロで優勝だね。今度も早かったの？」

「あ・・いえ、カズ・エース号はシルバー杯に出すつもりです」

「ほお・・西コース狙いか。なるほど」

「今日はどうですか？」

「ああ、悪く無いよ。十一時半までには二十羽戻って来ているよ」

「良いですね。正に、束になって戻って来ると言う感じですよね」

「君の所も早かったんだらう？勿論」

「ええ、一羽は早かったです。三羽打刻しましたが、二、三番手が十一時二十分前後ですね」

「ほお・・今度こそ優勝の文字もちらついたんだが、逃したかなあ・・ははは」

川上氏は笑った。大羽数参加の川上氏は、既に視点は中距離から長距離レースに主眼を置いている。この短距離は、上位に食い込むスピード性を評価の対象としているようで、それは同じく大羽数参加の郡上鳩舎、高橋鳩舎も同じ手法だ。

数百羽の記録となって、早々と香月は帰ったが、三日後のシルバー杯三百キロの持ち寄り時の発表では、このレースは連合会で、香月鳩舎のスプリント号が優勝、二位が佐野鳩舎、三位が磯川鳩舎「パイロン三世号」四位〜八位が川上鳩舎、九位が香月鳩舎、十位が磯川鳩舎で、上位は又殆ど三人が独占した。この時の佐野の二位鳩がのちに佐野鳩舎を代表する長距離鳩、丹木（タンギ）号であった。この年には数多くのエース鳩が出現する事となる。

合同杯の次の日、香月は大学へ急いで行った。そして到着後、まだ現れぬ掛川を待っていた。ようやく現れた掛川に、

「掛川さん、この前の結果は・・・？」

「ははは。そう、急かすなよ。今現像から戻って来た所だ。今から説明するよ」



タンギ号

苦笑いしながら、掛川は机からノートを引き出すと、スライドの写真を見せながら、説明を始めた。
「これが十時ジャストに撮ったものだ。丁度公園の真上、高度千メートル。これ以上は、望遠レンズの性能ではぼやけて無理だが、この一枚を撮る為にフィルム二本使ったよ。連続で一分おきに撮影したものの二枚に写っていた」

「その時刻だと分速二千メートル以上で飛翔している事になり、恐るべき高度ですね」

「あの付近の上昇気流がそうさせるのだろう。それにしても、天候が良くなかったのに、この高度は研

究に価値あるものだね。この時刻に二機設置した望遠カメラが、東の低空に飛翔するもう一方の五、六羽の鳩群を捉えているよ」

その写真は、この合同杯を制した、総合優勝ランクの鳩群であろう。・香月鳩舎のスプリント号は、遠隔地にあり、総合優勝までは届いていないと予想されていた。集計は、シルバー杯が終わって、その週末頃と聞いている。二人の分析は長く、この日深夜まで続く事になる。

二日後シルバー杯はすぐやって来た。そこには上機嫌の佐野の姿が見えた。ほぼ香月と変わらない帰舎タイムは、総合上位を確実に予想出来るものであったから。

「やあ！今度こそ優勝って思ったんだけど、君の、菊花賞総合優勝の鳩だっけ？紙一重の差で負けちゃったよ」

「いよいよVロビンソン系の真価の年ですね。佐野さんが元気で嬉しいですよ」

「いやいや・でもね、今年の交配は俺自身も凄く出来が良いと思ってるよ。何しろ今や、連合会を三分する強豪の一角に食い込めたんだから。」

「いえいえ・とんでも無いですよ。ほら・・色々あったから・・佐野さんの所」

「ああ・・。そうだね」

短い会話の中で、お互いの今春を誓う二人だった。最強のライバルが又一人目覚めた。

連合会の参加羽数は、二千五百四十羽。中には三百キロが終わって、又このシルバー杯に参加させた鳩舎もあるらしい。それはそれで一つの狙い目だろう、会員も色々考えているなど、香月はそう思った。

そして・シルバー杯は、ぶつちぎりでカズ・エース号が優勝。二位に川上氏、三位に佐野、四位、五位に川上氏、磯川は、六位、七位。八位に香月、九位川上氏、十位、小谷鳩舎が入った。主力をシルバー杯に持つて来なかった会員も少なくなく、比較的天候に恵まれたレースの割りには、会員の盛り上がりは今一つであった。とにかく、カズ・エース号は百キロ二位、二百キロ優勝、三百キロ優勝と言う突出した成績を今期も發揮していた。運命は変わったのだ。カズ・エース号の未来にも。紫竜号の殆ど優勝同着である百キロ三位、二百キロ三位入賞の成績によって・・・。

四百キロレース持ち寄り日の場所で、その前の三百キロ合同杯の結果が発表された。香月の持ち寄り場所では川上氏が弾んだ声で読み上げた。

「えーそれでは、合同杯の結果をBブロックの皆に発表します。参加三万四千五百八十一羽中、総合優勝が東神原連合会より出ました！香月鳩舎です。更に総合三位に佐野鳩舎です。総合八位にも磯川鳩舎が入っています」

「おおー！」

どよめきが上がった、東神原連合会は最遠隔地に位置し、圧倒的不利と言われるこの三百キロで総合優勝を成し遂げ、更に十位内に三羽と言う大記録に驚いたのだ。ちなみに、この総合三位がタンギ号、

八位がパイロン三世号と言う、次世代のエースが揃って名乗りを上げたレースとなった。

「ちなみに、この総合優勝鳩は秋の菊花賞全体総合五位、北地区総合優勝の鳩です」

川上氏が紹介をした。

「凄い、中距離競翔の銘鳩の誕生だ」

口々に会員はそう言った。

・中距離レーサー・・・？香月はその言葉を胸の中で否定していた。

四百キロ衆議院議長杯のレース。今期は二つある四百キロの一つで、香月はこのレースに十二羽を参加させていた。

「香月鳩舎の鳩、綺麗だねー、羽色がつつやつつやしている」

小谷氏が、ゴム輪を入れるのを手伝いながらそう言った。

周囲の会員が顔を向けたが、慌しい中、その言葉に対して、興味を持つ者は居なかった。このレースは昨秋難レースとなった、東神原連合会の独自のコースとは違う新設コースであった。参加数は東神原連合会独自コースの三倍の三千八百羽が集結していた。



パイロン3世号

この春は比較的天候に恵まれて、この四百キロレースも快晴との事で、どの顔にも笑顔があった。ここまで好調と言う事もあった。新コースは、香月にとつても、短距離鳩にはうってつけのレースだった。勿論、この中にカズ・エース号を参加させている。恐らく・綺麗だねーと言った、小谷氏が言った鳩はカズ・エース号であろうと香月は思った。それほど今春の出来は素晴らしかったのだ。そして、今春を証明するかのような四百キロレースは、やはり高分速が続出のレースとなり、又もや、カズ・エース号が優勝を遂げた。ただ、この優勝は、殆どタッチの差で、二位と七位までを川上鳩舎が入賞。佐野が八位、九位が磯川、十位に高橋鳩舎が入った。大量入賞を続ける川上鳩舎。優勝、上位を占める香月鳩舎。四日後には、東神原連合会会長杯となった、四百キロレースに香月は、スプリント号と、紫竜号を参加させている。

今春のGP、CHを占う大事なレースと位置付けていた。古豪と呼ばれる東神原連合会の、鳩舎の多くは、このレースに主力を持って来ていた。磯川がパイロン三世号を。佐野がタンギ号を、川上氏も主力の白輝号、白星号のエースを投入。参加羽数こそ千七百六十五羽と少なかったが、東神原連合会を代表する鳩舎とエース鳩が顔を揃えていた。

他にも、高峰号（高橋鳩舎）、ライデイン号（小谷鳩舎）、郡上二三七号、郡上三二四号（郡上鳩舎）、浦部クイン号（浦部鳩舎）、北昇号（北村鳩舎）、渡辺ビーナス号（渡辺鳩舎）等々・・・。

昨秋の玉碎に近いレースの結果を受けても、この通り会員達はこの白川氏の遺産である、放鳩地を重視している。しつかり東神原連合会には根が生えている証拠なのだ。

「よお！調子良いねえ、香月君」

高橋会長が、香月に声を掛けた。

「いえ、今からですよ。春は」

「ははは。そうだよな。しかし、三百キロの合同杯は見事だった」

磯川が熱心に紫竜号を触っていた。

「なあ・・・香月君。どう言う血統なんだ？この鳩は」

スプリント号には目もくれず、磯川は紫竜号を触診していた。

「アイザクソン系×オペル系です」

そこへ、郡上氏も加わった。氏も紫竜号を触った。

「ほお・・・この異常に柔らかい筋肉・・・長い主翼、体を覆い尽くすような副翼・・・昔触った記憶があ

るなあ・・・」

香月と川上氏の顔が凍った。

磯川が、郡上氏に質問した。

「どんな鳩だったんですか？」

周囲に会員が集まった。佐野が香月に目配せした。こくと香月は頷いた。

「・・・うーん・・・ネバー号に良く似ている気が・・・しかし、その体型とは又少し違うが・・・」

「ネバー号はオペル系だから、筋肉は近いかも知れんな、オペル系と言っても、飛び筋の系統によって色々あるからなあ」

会長は余り興味を示さなかった。磯川は更に熱心に触診していた。

「この鳩が要注意だな、やっぱり」

磯川がそう言った。

「おいおい・・・香月君の所には秋の菊花賞、春のダービー総合優勝の鳩が居る。なのに、何で、この鳩なんだ？」

会長が笑いながら言う。

「何を言っているんですか、会長。この鳩も、文部杯日本記録全国優勝で、昨春のGP総合八位ですよ」
「ええっ・・・！」

会員が改めて、紫竜号に注目した。それほど紫竜号からはオーラが出ていたのだ。特徴的な羽色と共に・・・。

「確かに・・・この鳩は違うねえ・・・。体型、副翼、主翼、羽毛・・・」

紫竜号の前に人が集まった。その内と閉関時間も迫り、そこで話は中断となったが。紫竜号は輝きを一段と増してこの春に望んでいた。

しかし、この屈指の難レース、天候は確かに良かったが、放鳩地近くでは十五メートルの強風が吹く放鳩日となった。向かい風十メートルを越す強風に、放鳩時間が九時半に延びた。

「ふう・・今春は天候に恵まれ安心していましたが、色々あるもんだ」

川上氏の電話だった。

「まあ・・でも、天候は良いですし、放鳩地は向かい風ですが、三百キロ地点は横風、二百キロ地点からは逆に追い風になりますから」

香月は明るく答えた。いずれの鳩舎も自鳩舎を代表する選手鳩を投入しているのだ。佐野からも同様の電話が入った。同じ返事をした。つまり、それほどこの四百キロレースを各鳩舎が、重要視していると言う証明でもある。だが・・このレースは予想を大きく覆す結果となるのであった。

香月鳩舎に二時半と言う脅威のタイムで帰舎をした鳩が居た。紫竜号であった。丁度五百キロへ参加させる鳩を、触診して調子を見ていた香月であった。

「な・・なんで・・？紫竜よ」

余りに驚く早い帰舎に、震える手で香月は打刻した。過去二十年間、このレースで記録した事の無い快分速であると同時に、向かい風十メートル以上吹きすさぶ現地、そして帰路・・それは、帰舎も予想してない時間だった。五百キロレースに出す選手鳩を触診していた時であったからだ。

頭の中が少しパニック気味の香月であった。「分速千三百メートル以上出ている・・・」二番手のスプリント号が帰舎したのは三時頃であった。それでも、通常ならばダントツに近い優勝タイムだ。三時半に一羽、四十五分に一羽が戻って来て打刻を止めた。

四時半になって、佐野から電話が入った。弾んだ声だった。三時十分前にタンギ号が帰舎したと言う事で、優勝の一角に居るであろうスプリント号のタイムを聞いて来た佐野だった。ほぼ同タイムと言う事で、更に優勝争いに確信を持った様子だったが・・・。

「え・・・？まだもつと早い鳩が居るって？紫竜号が二時半・・・信じられないタイムだ」

佐野の動揺が、電話の向こうで見て取れた。桁外れに早い帰舎は、香月とて信じられないのだから。

「とんでも無い怪物に育ったようだね・・・紫竜号」

間も無く、川上氏からも電話が入った。やはり、川上氏も百キロレースから常に川上鳩舎のトップで、帰舎が続けている、若鳩だが、後の代表基礎鳩となる、白泉エース号が、三時過ぎと言う事で、四時半までにばらばら帰舎だと言う事だ。この三時帰舎と言うタイムは、過去二十年のこの四百キロレースの中でも、レコードに近い快分速だ。それを大幅に上回る鳩が居ると言う事で、連合会内では、もう情報が駆け回っているようだった。

「どえらいレコードのようだね。いやはや・・快晴の天候でも出ないスピードだ。特別な訓練をしたのかい？」

「いえ・・紫竜号はもう成鳩ですから、むしろ体力を使い切らないよう、セーブする訓練を施して来ました。ですが、常にレースのトップ集団に居ます」

「鳩の様子はどうか？非常に疲れて無かったかい？」

「はい、スプリント号は少し疲れた様子でした。後続の鳩はそれほどでも・・でも、紫竜号は平然としていました」

「私の所の一番手も、全レース鳩舎で一番手の鳩なんだが、今日は疲れていたよ、凄く。後続はそうでも無かったが」

「・・帰舎コースがそれぞれ違うのだと思いますが、今晚申し訳ありませんが、時計を預けさせて貰っても良いですか？」

「ああ・・でも、何で？」

「今から大学の掛川さんに連絡を取って、今日の気象状況や、コースを分析したいのです」

「特別な意味がある・・訳だ。今日の驚愕な帰舎タイムには」

「はい・・それによって、紫竜号は今期、GPに出しません。」

「分かった・・君の考え通りしたら良い」

その晩の開函場所の会長宅では、騒然となっていた。

「しかし・・信じられんタイムだ。香月君の鳩」

高橋会長が大仰な仕草で言った。

「日本記録を塗り替えたスピードバードですよ。有り得るでしょ、今回の帰舎は」

磯川がレース前に予言していた結果を、肯定するように言った。

「それにしてもだよ。放鳩地と、鳩舎位置を距離で換算しても、実距離六百キロ余。すると鳩は分速二千メートル以上のスピードでしかも逆風の中を戻って来た事になる。驚異的だよ」

小谷氏が言う。他の会員も頷いた。

「しかし、実際ですね、他連合会では、五百キロ、六百キロのレースで、分速二千三百メートルとか二千メートルの分速が出ているじゃないですか。脅威とは言えないでしょ。分速千三百メートル台なんですから」

磯川が反論する。解説者を取り囲むように、磯川を中心とした円陣が自然と出来た。連合会屈指の理論家である磯川の円陣に、川上氏もやや後方に位置し、座っていた。

「しかしなあ、この放鳩地が出来て、二十年。過去四十回もの開催の中で、分速千メートル台の競翔は僅かに三回。その最高分速にしても、千メートル台だ。今回、突出した一羽を除いても、二位から六位までの五羽は、分速が千二百メートル台だと集計はまだだが、予想されている。一気のレコード更新をどう見るのかい？」

高橋会長の質問に、にやりとして、磯川が答えた。図を指し示しながら、

「・・・と言う二つのコースがあります。先頭集団は、このコースを飛び帰ったと予想されます」

ほお・・・会員達から少しどよめきが上がった。川上氏も頷いた。

「川上さん、この場に香月君が居ませんので、少しお聞きしますが、香月君は何か特殊訓練をやったのですか？」

少し曇った表情の川上氏だったが、

「少し、高地訓練等はしたようだよ、私も詳しくは聞いて無いんだが」

ほお・・・少し、会員達のどよめきが上がった。

「納得でしょ？つまり、香月君の菊花賞鳩に引つ張られた格好で、この五羽の集団が出来たのです。こ
うやって迂回すると、二百キロ地点からは、追い風になります。記録が出た筈ですよ」

得意満面の磯川の表情だった。

「ふうむ・・・なるほどなあ・・・確かにそう言う事なら納得出来そうだ」

小谷氏は頷いた。

「なら・・・トップの鳩をどう見る？」

高橋会長が尋ねた。

「それは・・・分かりません」

磯川は、実にあっさりと答えた。

「何だよ、それ。わははは」

会員が笑った。磯川が頭を掻きながら

「ただ・・・考えられる事は、この五羽の一群こそGPを制する鳩群だと言う事ですよ」

全員の顔が今度は引き締まり、一瞬座が静まった。

「なあ、磯川君。君の推理でも良いから、トップ鳩の帰還コースを解説してくれよ、あるんだろ？
思いが」

小谷氏の言葉に少し磯川が頷いた。

「憶測で良いのなら・・・でも、あくまで仮想でしかないですが」

「聞こう」

川上氏が言った。

「放鳩地から、五十キロ後方つまり四百五十キロ地点には、標高二千四百五十メートルの妙高山(仮名)がありますよね。つまり、この山の裏手に回り、大きく迂回するコースです。なら、向かい風も無く、更に風裏となつて、山沿いに一直線で、二百キロコースに迂回出来ます、そこからは追い風です」

ほおー．．．又どよめきが上がった。

「しかし、それは妙高山を迂回する為に、五十キロも逆飛翔する事になるじゃないか。若鳩の方向音痴ならともかく、優秀な経験鳩がそんなコースを辿るだろうか．．．」

郡上氏が言う。

「そこなんですよ、仮説の域を出ないのは。ただ、この鳩の成績を見ても、前年度のGP時は相当がりに痩せていたんです。でも、今期は見違える程の筋肉が付き、体型も出ています」

「磯川君は、えらいその鳩に御執心なんだね」

高橋会長が言った。

「それ程未完の大器と言うか、底知れぬ物を感じているからですよ。俺はずっと注目して来ました。郡上さんにお聞きします。ネバー号の筋肉を覚えて居られますか？」

「ああ・手に持てば、ぐにゃつとなるような柔らかい体、理想の体型、絹のような羽毛、幅広い副翼・まさに競翔鳩の理想のような鳩だったなあ・」

遠くをみるような視線で、郡上氏は答えた。

「川上さんにもお聞きします。白川さんの所から卵で貰ったと言う事ですが、白川さんの所にネバーの他に、オペル系の鳩が居ましたか？」

困惑気味の表情で答えようとした川上氏の横から、丁度集計が終わった、佐野が答えた。

「僕が答えましょう。はい、一羽居ます。オペル系真髓のダブルBの二重近親の鳩です。他百五十六羽についてもお答えしましょうか？」

磯川が、いやいや・・と言うように苦笑いしながら手を振って、

「良いよ、それは佐野博士がデータとして持って居れば良い。で・・その鳩は？」

「田中君と言う学生競翔家の所ですね。ただ、昨秋病気で死んでいますが、その鳩は」

おお、流石博士だ。会員が感心していた。

「で・・その鳩の成績は？」

「百キロから五百キロまで全優勝してます。短距離スピードボードですね。栗二引きの鳩です」

「何だ・・じゃあ、違うじゃないか、紫竜号とは」

磯川が言う。川上氏が少し笑いながら言った。

「短距離鳩の仔が全て短距離鳩とは限らないじゃないか。まだ競翔鳩はたかが百年、色んな特徴が出るよ。」

「そうなんですが・・俺の言うのは筋肉の話なんですよ。その鳩だったら、むしろ筋肉は硬い筈。その特徴のどこに親鳩のものを受け継いでいるかが、関心のある事なんです。じゃ、雄親と言う事になるのかな？」

川上氏は答えなかった。

「僕も答えようが無いですね、データ外の事ですから。白川さんと、香月君の事でしようから」

そう言って佐野は川上氏に目配せした。この時になってようやく、佐野が紫竜号の生い立ちを知っている事を川上氏は認識したのだった。せめて・・・凡庸に生まれてくれれば良かったのに・・・川上氏は胸の中で大きく嘆息したのだった。

そんな時S工大では、掛川と香月が喧喧諤諤と討論を繰り広げていた。

「そんな・・・もし、そうだとしたら俺達の今までの研究が大きく覆る事になるじゃないか」

掛川は大きく首を振って否定した。

「ですから、特異なケースとして今回は考えるしか無いんです」

「そうだとするなら、突出した規格外の鳩だと言う認識を持っては良いのか？」

「紫竜号は確かに突出したレース鳩ですが、二位以下の数羽はこれも突出した鳩達です。陸上選手の本メートル競争で、十秒で走る選手が居たとして、他の選手が一秒と遅れる事は有りません。それほど力の差は無いんです」

「しかしだよ。君の言う妙高山までは、逆飛翔したとするなら五十キロも離れている。そこから迂回して、確かに風裏となるこの谷間のコースを飛んだとしても、他の鳩群とは実距離で、五十キロメートルのハンデを背負う事になる。それこそ、その陸上選手の比ではないじゃないか」

「ここで、妙高山からの下降気流を見る必要があります。それに乗れば恐らく・・・」

「つまり、君の言うのは仮説の上に仮説だね。でも、それは学者として採用出来る論じゃない。要するに君の言う規格外って事で処理するしか無いだろう・・・今回の件は」

「そう言う事になりますね」

結局・結論は何も出なかった。だが、香月の胸の中では仮説は大きく信憑性を持っていた。そして、紫竜号に対する新たな彼の挑戦が始まったのだ・・・。

そして、本命不在と言われた五百キロの郵政大臣杯は、連合会参加千四百二十四羽中、カズエース号が、貫禄の優勝を遂げた。まさしくエースそのものの活躍だった。磯川が二位、五位に入り、川上氏が三、四、七、九位。佐野が六位、浦部が八位、郡上氏が十位の順であった。続く合同杯五百キロ（ダービー）は、四日後に行われ、こちらは連合会でも二千七百八十六羽参加と、数も多く、川上氏が優勝、三位までを。磯川が四位、香月が五位、桐生氏が六位、高橋七位、川上八位、郡上氏九位、小谷十位となった。川上氏が、総合優勝を白泉エース号で勝ち取る事となる。白川系次代のエースである。総合二十位内には、川上氏総合九位、総合十二位、磯川総合十三位、香月総合十六位、桐生総合十八位、高橋総合二十位と言う上位を当に東神原連合会が独占した。

又六百キロレースは農林大臣杯と、合同チャリティーレースの二つ。農林水産大臣杯への連合会参加は千二百四十六羽。香月は、このレースには昨年度GPレース八位の紫竜号の参加への意思は、全く持つて居なかつた。順当ならばGPからCHレースへのステップこそが道筋であつた。しかし、敢えて香月は紫竜号を参加させたのだつた。限られたメンバー参加で、慌しくゴム輪を入れたりする中で、幸い紫竜号に注目が集まる事は無かつた。そして・このレースは悪天候に祟られる最悪のレースとなつた。雨足の弱まらぬ中、放鳩時間九時半と言う六百キロレースとしては遅い放鳩で、当日戻れるか・そんなギリギリの時間だつた。しかし、紫竜号は疲れた体で、戻つて来た。夕刻五時半の事であつた。それが、連合会当日唯一羽帰りであるとは、思いもよらなかつた。

「叉も優勝か・今度は唯一羽当日帰り。ドラマを感じさせる鳩だよなあ・でも、何で華々しいレースを避けて、君がこの鳩を参加させてるのか、本意が分からないけどね」

磯川は嘆息気味に言つた。そう言う磯川は翌日早朝帰舎で、連合会三位、六位、九位に食い込んだ。川上氏が二位、四位、佐野が七位。当日こそ一羽帰りだつたものの、このレースは天候の回復した翌日に、かなりの帰還を見せ、そう悪い結果のレースでは無かつたのだつた。

「どう？その後、六百キロ農林杯」

チャリティーレース持ち寄り日に、川上氏が香月に聞いた。

「ええ、六羽参加で、五羽戻りました。帰還率は悪くないです」

「私の所もだよ。十八羽参加で、十五羽戻っている。そんなに悪く無い」

「鳩の調子はどうですか？」

「ああ・・飼料の影響か、回復力が凄く良いように思える。すっかり調子は戻っているね」

「俺の所もですよ」

その横で聞いていた磯川が、

「飼料って？どう言うものですか？」

「あ・・ああ。香月君の大学で使っている、現在テスト用のものなんだが、栄養バランスを実に考えた合理的なものなんだ。香月君と友人が試作して、今は業者が大学納品用として作り始めたばかりなんだ」

「へえ・・っ・・何時の間に香月君？」

磯川が、興味ありそうな顔で聞いた。

「鳩の嗜好を見ていましたら、嫌いな餌があつて、どうしてもそれが残るんですよ。何か良い方法はと

考えていまして、ペレット状にしたものを作ったんです。そしたらあれよあれよと言う間に出来ちゃって」

「何かあると思っていたんだよ。今春の君の所、鳩の出来が凄く良いし、羽に艶があるから。使わせてくれよ、俺にも」

「はい！勿論ですよ」

その様子に、集まった会員達も多数申し込んだ。こうして、東神原連合会だけでも月に五百袋近い数量が出る事となった。

続くチャリティー合同杯には、かなりの主力鳩が参加されていて、総参加羽数も一万五千六百羽のレースとなった。うって変わって非常に良い天候のレースとなり、総合優勝は川上鳩舎の白願号が、総合五位に磯川、総合六位に高橋、総合十五位に川上、総合二十五位に郡上、総合三十七位に香月のカズ・エース号が、総合四十六位に佐野が入賞した。カズ・エース号は、やはり五百キロレースの方が得意としているな・・香月はこんな素晴らしい成績を上げたカズ・エース号に対してそう言う評価を下して、この鳩の今春を終えた。

そして、いよいよ春のメインレースの序幕である七百キロGPが開催される直前を迎えた。香月鳩舎はスプリント号を、磯川はパイロン三世号を、佐野はタンギ号を・・と、名だたるエースが万全の体調で揃った。参加総数十万余羽。五つのブロックに分かれ、放鳩日を一日ずつ繰り延べると言う新案での開催となった。その中で、東関東ブロックに位置する東神原連合会であった。各ブロックの参加数

は、東ブロックが最大羽数で四万八千余羽、北関東ブロックが二万四千余羽、南関東ブロックが一万一千余羽、西関東ブロックが一万余羽、東関東ブロックが一万余羽であった。

北関東ブロックが先陣を切り、好天の高記録続出との報の中、東関東ブロックも翌日好天の中放鳩。これも高記録続出となった。ただ、三日目には曇天が広がり、天候が翌日以降は崩れるとの事で、三ブロックが一斉の放鳩。この事が、後々公正なレース開催への不公平感と言う事で不満が広がり、もめる事になったが、それは総合順位での話。ブロック別にはそれぞれ集計がされるのではあるが・・・。

このレースに、本来参加予定であった紫竜号は、ここまでの中で、二つのぶつちぎり優勝で消えた。それは、紫竜号の孤高の気性故の、単独飛翔の危険性は、必ずその身に巡ってくるだろう・・・香月は思った。そして、GPレースは川上氏の白泉エース号が全体総合優勝を遂げたのであった。磯川のパイロン三世号が総合三位、佐野のタングィ号が総合五位、スプリント号は総合十三位となった。この天候の中、長距離鳩として育ち始めたスプリント号を証明するものだった。続く八百キロQCは、高橋鳩舎が優勝、総合六位に入った。渡辺鳩舎も総合八位、郡上鳩舎が総合十位と東神原連合会の上位入賞が続いて行く。その勢いで、九百キロKCは大荒れの天候となったが、翌日帰り、磯川が総合優勝をパイロンキング号で成し遂げた。川上氏の白川系と、ペパーマン系の血統の層の厚さをまざまざと見せつけた。だが香月もパンナ号で連合会二位、総合二十四位に食い込んだ。

そして・・・いよいよ紫竜号の運命を決める、千キロGCが開催となる。紫竜号は本来なら、GP、GP、CH、GCH、GNと言うビッグレースに進むべき鳩だ。十分過ぎる程の資質を兼ね備えている。しかし・・・この春も紫竜号は昨春の教訓を生かして無かった。先頭集団を形成する、飛び抜けたこの資

質なら、常に紫竜号は、陽の光を浴びるレースに参加される競翔鳩となった筈。だが・・孤高の気性故に・・・。

GCは、北海道内陸地から行われるレース。千キロレースとしては古くからある。だが、近年のCHレースに押されて、参加羽数は七千二百四十羽と多く無い。このような比較的マイナーとも言えるレースに参加となる運命のいたずらは、晴天の無風の中で開始されたのだった。気流に乗る典型的な超長距離鳩の紫竜号。それが両刃の剣となる事を香月は知っていた。天恵の資質に頼りきった紫竜号は、その資質故に自ら押しつぶされると。五歳以降から力の發揮出来るだろうその体を、今、食いつぶしてしまうだろうと・・。それは、香月が自身の心の抑制と闘って紫竜号を使翔する結論だった。

さて・・いよいよ、本編は紫竜号を中心とした物語へ突入する・・。

その頃、紫竜号は先頭集団を形成しながら南下していた・・くそ・・いまましい・・どうしても後続を引き離せない自分に苛立っていた。空はどこまでも青く、風は無かった・・見ておれ・・海を越えたら、お前たちなんか、着いて来られない上空へ舞い上がってやる・・津軽海峡を渡る風はまだ冷たくて、しかし、それでも紫竜号を上昇させる程の風は無かった。海峡を渡りきった紫竜号は、コースを急旋回、右に突如舵を切った。そのコースには一羽も着いて来なかった。ざまあ見ろ・・紫竜号は太平洋岸を唯一羽南下し始める。海の風はその体を上空へ舞い上げ、風に乗って、速度はぐんぐん上がって行った。だが・・この選択が紫竜号にとって運命の出来事であったとは・・。

快調に紫竜号は気流に乗っていた。その時であった、高く舞い上がる紫竜号の更に、上空から黒い弾丸が落ちて来るような気配があつた！俊敏な紫竜号は咄嗟に避ける。だが、その弾丸の波状攻撃は何度も続く。隼だ！紫竜号の何倍もの速度で飛翔する、その鳥のスピードには到底適わない。きりもみ状になって、降下するその先に小高い森が見える。方向転換をする紫竜号、その喉元に激痛が走つた！隼の嘴が喉を切り裂いたのだ！。朦朧とする意識の中で、紫竜号は、それでも気丈に森の奥へ逃げ込んだ。隼はもう、それ以上は追つて来なかつた。だが・・・。

一本の太い枝に紫竜号は、へたへたと座り込んだ。意識が混沌として朦朧となつた。どくどくと赤い血が流れている。紫竜号は深い傷を負っていた。動く事が出来ない・・・俺は死ぬのか・・・？紫竜号は思った。次第に思考力が薄れて行く紫竜号だつた。この時であつた・・・父さん・・・母さん・・・何故か紫竜号は育ててくれた仮母の親達より、見も知らぬ父母を無意識に呼んでいた。絶対絶命・・・。ここまでは、当日帰れるかと言うスピードで紫竜号は帰つて居た筈・・・。もう駄目だ・・・諦めかけた紫竜号に、その時であつた。薄闇が既に迫つて来る頃、突如、谷間から吹き上げる神風が吹いたのだ。無意識のまま紫竜号は、羽を広げる・・・その持つて生まれた天性の資質が無ければ、ここで紫竜号は、息絶えた筈。その時紫竜号は鳩舎まで、既に二百キロの地点まで戻つて来ていたのだつた。「帰りたい・・・」紫竜号の本能は朦朧とする意識の中で、羽を動かさせた。追い風が吹いていた。優しい風だつた。その時間・・・六月に発表となる論文の最終校正をしながら、香月は鳩舎のタラップをまだ締めないで待っていた。いつもなら、とつくに外敵から守る為に締めているタラップだつた、この時、タラップに仕掛けてある電子ブザー音が聞こえた。

「あ！・・・しまった。タラップを締めて無かった」

外敵侵入か！慌てて香月は家の外に走り出る。鳩舎は暗いが、タラップは月明かりで、二重タラップ内に外敵にあらざ、鳩が居るのが確認された。

「あれ・・・後日帰りかな・・・？」

鳩の足輪からゴム輪を抜く、そして薄灯りの中で確かめる。

「こ・・・これはGCのゴム輪」

傍に置いてある時計に打刻後、香月はその鳩を抱いた。ぎよっとした。異様な感じが手にした。鮮血が流れた。

「し・・・紫竜か！お前！」

香月は紫竜号を抱きかかえると、家に走った。

「た・・・大変だ！父さん、母さん、今から大学へ行く！」

応急処置後、香月は一目散に車を走らせた。瀕死の重症を負って、それでも当日帰還した紫竜号。いや、当日戻らねば紫竜号は確実に死んでいただろう。この資質故に戻れたのだ。しかし・・・紫竜号の命は風前の灯火に見えた。既にぐったりとしていた。

「死ぬな！紫竜！」

香月は何度も叫んだ。この素早い処置と行動が、紫竜号の命を救う事になるのだった・・・。

「ど・・・どうした？香月君」

同じように、論文提出の為に大学へ残っていた掛川だった。香月の必死の形相に、事態をすぐ悟った。無言で、香月の手術の助手を勤める掛川だった。一本のアンブルに入った薬を、香月に手渡す。

「これを使えよ」

「これは？」

「いいから・・・これだけ出血しているんだ。一刻を争うだろ？」

こくと、香月は頷いた。

処置は終わった・・・後は紫竜号の生命力に賭けるしか無かった。そして・・・夜が明ける・・・。生死を彷徨う中で、紫竜号は夢を見ていた、顔を知らぬ父鳩と母鳩が優しく毛づくろいをしてくれている。温くもりの中で、紫竜号が生まれて初めて味わった事の無い、幸福感に満たされていた。誰なんだろう・・・この温もりは・・・やがて・・・その鳩達は、遠くへ・・・遠くへ・・・飛んで行く。

「父さーん・・・母さーん・・・」

紫竜号は、ピーピーと赤子に戻り、鳴きながらその姿を追いかける。しかし、追いつけない、益々遠くなり・・・そして、その姿は・・・消える・・・ぐ・・・ぐうー・・・紫竜号は声を上げる。

「こ・・・ここは？」

それは、香月の腕の中だった。

「し・・・紫竜・・・助かったか・・・」

掛川が、香月の肩を叩いた。

「良かったな・・・助かったようだ」

「はい・・・有難う御座いました」

香月の目からは、涙がぼろぼろ落ちていた。

・ ・ ・ 何で泣くのだろう ・ ・ ・ 主人は ・ ・ ・

紫竜号には理解出来なかった。

しばらくしてゲージの中へ移された紫竜号だった。香月は、紫竜号の体温が落ちないように、一晩中抱いていたのだ。

「少し帰って休めよ。後は、俺に任せてくれ」

「あ・・・でも」

「良いから。愛鳩家の君の姿を見させて貰った。正直、感動した。後で笹本教授に診て貰うから安心してくれ」

「本当に有難う御座いました」

香月が大学を出た後、掛川は紫竜号に言った。

「おい・・紫竜とやら、ご主人が香月君で良かったな」

紫竜号は立ち上がろうとした、しかし、まだ動けなかった。

「おいおい・・気丈な鳩だなあ、お前は・・無理するなよな」

すぐその後、笹本教授がやって来て、術後の診断をした。

「おお・・見事な処置だ。君がやったのか？」

「残念ですが、手術は香月君ですよ」

「そうか・・しかし、この縫合と言ひ、腹の筋肉を首に移植した処置と言ひ見事だ」

笹原教授は薬を投与すると、戻って行った。

「おい・・良かったな、天下の名医に見てもらって」

掛川は、紫竜号にウインクをした。

朝に大学から戻った香月に両親が訳を聞いたが、鳩の怪我だと言った。紫竜号と共に参加した二羽が、丁度この時間一緒に戻って来た所だった。時刻は十時半。打刻はしたものの、香月はまだ放心状態で、時計を自分の所から一番近い浦部の家に預けて、川上氏に電話した。

「何！紫竜号が！」

状況を全て聞いた川上氏は、

「そうか・・助かったのか。良かった・・良かったね」

電話の向こうで、川上氏の声が詰まった。香月の心情とシンクロするように、川上氏も涙をぬぐった。紫竜号は、白川氏が残してくれた遺産と言える大事な・・失ってはならない鳩なのだ。この瀕死の帰舎は、圧倒的当日唯一羽帰りの記録ではあるが、日没から日の出までをカウントしないルールによって、実距離九百五十キロしかないGC参加連合会が総合順位を独占した。分速カウントの矛盾はそこにある。紫竜号は夜も飛べる鳩なのだ。夜間訓練も経験している。紫竜号の総合順位は九位となった。その瀕死の帰還は連合会内に伝わったが、誰もが紫竜号はこれで終り・・・そう思った。それは、香月自身も確かにそう言う思いを抱いた、当時では無かつただろうか。

紫竜号はこの後一ヶ月間、大学の鳩舎内で加療。その後自鳩舎へ戻る事となる。

この間、春レースは終了した。

CHレースは大混戦となったが、磯川のパイロン三世号が連合会優勝を飾り、見事な総合十位に。川上氏の白輝号が、総合十三位、白翔号も総合二十三位。佐野のタンギ号が満一歳の若鳩ながら総合三十六位に入賞。期待のプリント号であったが、少し体調を崩したか、それでも連合会五位、総合四十七位に入賞した。続くDCでは、小谷氏が連合会優勝、総合七位（小谷ビーン号）、浦部が二位、総合十二位（浦部DC号）、高橋鳩舎総合二十位、川上鳩舎総合三十六位、郡上鳩舎総合五十二位、六十七位、八十四位、九十八位と総合百以内に連合会でも相当数が入賞した。そして春のビッグイベント、GCHには、香月は三羽の鳩を参加。川上氏が総合四位に（白麗号）、香月が連合会二位、総合十六位（メッシュ号）磯川が三位、総合二十八位（パイロンキュリー号）、高橋鳩舎が四位、総合四十七位、川上鳩舎五位、総合六十八位、渡部鳩舎六位、総合七十四位、磯川鳩舎七位、総合八十七位、郡上鳩舎八位、総合八十九位、桐生鳩舎九位、総合九十四位、川上鳩舎十位、総合九十八位と、これも素晴らしい成績を収めた。

そして、とうとうこの春も、最終レースGNを迎える事となり、香月は昨春の千キロ記録鳩二羽と、GCH記録鳩の三羽を参加させた。参加数二万八千八百六十三羽の選ばれた俊英の競翔鳩達は、悪条件のレースの中で、翌日帰還三百六十三羽と言う厳しい記録で、それでも、連合会一位〜三位までを郡上氏が独占、川上氏四位、磯川五位、浦部六位、郡上七位、川上八位、高橋九位、桐生十位となり、香月は三日目二羽を記録をした。郡上氏が総合二位（郡上GN号）、六位（郡上九一四号）、九位（郡上二六

三号) 川上氏が総合十位(白蘭号) 磯川が総合十六位(パイロンピッチ号) 浦部が総合二十三位(浦部GN号) 郡上氏総合三十位、川上氏総合四十一位、桐生氏総合六十七位、その他にも郡上氏総合八十三位、高橋氏総合八十七位、川上氏、総合九十三位、郡上氏総合九十六位など総合百位内に大量入賞を果たした。こうしてこの年の春は終わった。香月の春はトラブルもあったが、やはり当たり配合と言う突出した鳩群は入賞を果たしたが、血統、系統と言う強みを持った鳩舎は圧倒的で、長距離になると、最終レースまで磯川、川上、郡上、高橋と言う強豪が上位に顔を揃えた。

この競翔後、香月自身の春は急転開を見せる事となり、慌しい日が過ぎて行く。

この年六月の後半・・・

「よお、香月君！」

構内で、突如笹本教授に呼び止められた香月であった。

「先だつては、お世話になりました」

「いやいや・・・見事な手術だったね。処置が良かったから、あの鳩は助かったのだろう」

「恐れ入ります。慌てていて、十分な処置は取れませんでした」

「謙遜しなくて良いよ。私は正直に君の腕を認めているつもりだ。それより、君、英語はどうだね？」

質問の方向が読めなかったが、

「はあ・・・高校卒業程度ですが」

「ふむ・・・君・・・これから忙しくなるよ。そっちの勉強が先だな」

「は・・・？はあ・・・」

その翌日の事であった。突如、獣医学部の受講生五十名が、小講堂に召集された。それは全く突然の事でもあった。

壇上で司会をするのは桑原教授であった。時期学長が確実視されている名誉教授である。

「諸君、突然の召集で驚いたと思うが、今期学術論文提出について、教授会の推考を経て、再度、再度に訂正、校正提出となった者も多いだろうが、本日発表を行う。名を呼ばれた者は前へ出なさい」

講堂内がざわざわとなった。論文は二月から、香月も三度の手直しをして、五月末にやっと完成提出した所だ。他の者も同様であった。

「静粛に。加えて言うが、この論文は、君達の進級テストも兼ねていて、最優秀論文に博士号の認定もある。この三年間、現役学生からの博士号は出た事が無かったが、本年、二名の者について博士号が認

定された事を報告・発表する」

おおー！再び講堂内は騒然となった。

そして、真つ先に呼ばれたのは香月であった。

「香月一男君！」

「は、はい！」

騒然となった講堂内は静まりかえった。一番で呼ばれたのは、最年少である香月であったからだ。

「君の論文「動物生態学」「動物免疫学」共に優れた論文と認め、博士号を認定する」

おおー！どよめきと拍手が起る。香月は緊張しながら授賞した。

続いて、

「掛川四郎君！」

「は・・はい！」

掛川が選ばれた。香月は、一際大きな拍手をした。

「君の論文である「動物帰巢本能概論」が優れた論文と認め、博士号を認定する」

掛川も、香月と共に研究してきた二年間の努力が認められた。大きな拍手が沸いた。

これによって、掛川は助教授となり、教授への道が開かれた事になる。親子二代の、S工大の教授になるのだ。香月と掛川は力強く握手を交わした。

その他三名が、特進と言う事となり、二回生の山田和弘が四回生となる特進、桑原チームでは三名が特進となった。白石五郎が三回生から修士課程二年への特進、山本俊二が、一回生から三回生へ。高山良行が四回生から助手として・・・。

以上の六名が対象となった。香月は、S工大四年の学士課程をたった二年で修了し、修士課程、博士課程をも飛び越えた事になったのだ。笹本の忙しくなるぞと言った事は、この事でもあった。

香月は嬉しさも大きかったが、余りの急激な進展に当惑していた。今の現実が必死で、全くこの先の事を考えて無かった。四年間の中で、自分の進路を決めるつもりだったからだ。当然、修士課程に進むと言う漠然の進路が、唐突の現実となったのだから。

そして・・・桑原教授に部屋へ呼ばれた香月であった。

「高い評価を受けたよ、君の論文。私のチームでの免疫学、笹本君のチームでの生態学。全く新しい視

点の上での理論の構築だった。君はこれから忙しくなるぞ」

「でも・・・いきなり助教授なんて、思っても見ませんでした。俺はまだ二年しか・・・」

「若い、経験があるとか無いとかは関係が無いだろう。ただ、君の論文は英訳する事になる。一年間は修士課程に席を置いてそれを完成させるんだね」

「は・・・はい」

一年と言う助手兼、助教授兼、修士生としてS工大に通う事となった香月であった。今度は給料を貰う身なのである。それも国家からだ。それは周囲の誰もが、驚嘆するような大きな香月の人生での出来事であった。

待ち合わせた、香織と香月だった。香織は来春短大卒業となって、現在は教育実修で市内の保育園に通っている。いよいよ保母さんのスタートが始まる。この日は、夕方会う約束になっていたのだ。

「どうだった？香月君」

「ああ・・・それが・・・」

「まだ、発表は無いの？」

「いや、突然、今日あったんだよ、それがね・・・」

「そうなの！？どうだったの？」

「それがね・・・公園で話そうか・・・」

待ち合わせの場所から、近くの公園は歩いて行ける距離にある。そこへ並んで歩く人だった。

「俺の話は少し長いからさ。で？君の方はどうなの？」

歩きながら話す香月だった。

「大変・・だけど、楽しいわ。凄く」

「良かったね、夢が叶うね。もうすぐ」

「貴方の夢はどう？」

「ああ、そのベンチで話そう」

2人はベンチに座った。少し初夏の風が吹いて、大きくて丸い夕陽が綺麗だった。

「今日さ・・二人の博士号が誕生したんだ。それは、同時に助教授に推挙されると言う、S工大ならではの特進なんだ。学士課程からの博士号取得は、三年ぶりだって事なんだけどさ」

「まあ！そうなの・・じゃ・・まさか・・貴方？香月君が？」

「まだ・・何にも言ってないよ」

「貴方の目がそう言ってるわ。凄い・すごおい！」

説明する前に、香織は香月に抱きついた。

「お・・おい・香織」

香織は小刻みに震えていた。泣いているのだ。

「だって・・だって。もう最高じゃないの！こんな嬉しい事・・他には無いわ」

「ああ・・俺が白川のじいちゃんに会ったのも、S工大を選んだのも、君と出会い、川上さんに出会ったのも不思議な縁だと思うんだ。それは、俺自身の努力とかそんなもんじゃなく、何か、運命の糸に導かれるような事だと思うんだ。俺、四年間の中で、きっちり方向を出そうと思っていたんだけど、今嬉しい反面凄く動揺してる。だって、このまま進んだら怖いって気持ちもあるんだ」

香織が、首に巻きつけた手を離し、香月の目をじっと見た。黒い澄んだ瞳の美しい目だった。一点の曇りも感じなかった。

「ねえ・・貴方は、白川のじいちゃんに何を授かったの？」

「・・・信念・・・かな？」

「じいちゃんが亡くなった時、海辺で誓った事覚えてる？」

「ああ・・・。人生って事・・・生死って事だ」

「貴方が居て、私が居る。夢があつて、掴むのは自身の力よ。それは、信念を持って望む事でしょ？ 貴方はそれを、常人の何倍もの才能と努力で、克服して来た。勇気だと思ふの、貴方は木村さんとの剣道の試合の中で、それを私に示してくれた。その時、初めて私は貴方と生きる事を決めたの。貴方は一歩を進む事にためらう事など無いわ。私がいつも傍に居るから」

「香織」

香月は香織をきつく抱きしめ、口つけを交わした。

その夜、香月は川上宅へ来ていた。

「そうか！ ご両親はさぞお喜びだろう。凄い事だね。おーい母さん、香月君が博士号だった！」

「いえ・・・俺の両親には、まだ話していません」

「何でだ。こんなにめでたい事なのに」

川上氏は不思議そうな顔をした。

「いえ・・今晚はその前に少し、お話があつて来ました」

「まあ、立ち話もなんだ、早く入りたまえ」

いつもなら、とつくに家に上がりこんでいる香月を、川上氏は促した。母親恵子さんが、奥からばたばた飛び出して来た。

「まあまあ！何をしているの、早くお上がりなさい！おめでたい事だから、早く話を聞きたいわ」
「どうしたんだ？」

いつもと違う香月、香織の様子に、川上氏は笑いながら再度促した。

「俺達・・婚約のお許しを今夜頂きたいと、そう思つて来ました」

「ええっ！？おいおい・・香月君・・」

川上氏は驚きながら言った。

「いきなり・・そう言われちゃ・・どう返事して良いか分からんよ。とにかくだ。二人とも上がつて話を聞こう」

余りの突然の言葉に、慌てる川上氏だった。しかし、母親恵子さんは、香織の顔をじっと見ていた。香織の目には一点の曇りも無く、揺るぎの無い顔であった。不思議と・・母親の感性は、冷静だった。

「分かったわ・・二人とも。これからお父さんと、相談します。今晚は、香月君、貴方もお帰りなさい。ご両親にも今日の報告をして、日を改めておいでなさい」

「おい・・母さん・・」

「良いの、貴方・・この子達は、もう大人ですし、思いつきで言う子達ではありません。それなりの思いを込めて言っていると思います。さあ、香織・・香月君を見送りなさい」

「はい・・」

香月は、深々と川上夫妻に頭を下げると、玄関を出た。香織が車まで見送った。

「じゃ・・」

香織は小さく手を振ると、香月の車は家路方向に走り去った。

啞然としながら、川上氏は居間に座った。香織と母親が正面に座った。

「君達・・・一体・・・どうなっているのかね・・・？」

「貴方・・・今日は、私に任せて・・・ね？」

川上氏にとって見れば、当に寝耳に水の話であつた。予期はしていた事だが、父性の感性は又別物でもあつた。

応接室へ籠つた川上氏であつた。母親恵子さんは、香織に向かつて、

「それが、貴方達の決断して事は分かつたわ。でも、何故今なの？聞かせて」

「香月君自身、今日の発表を聞いて凄く動転していたの。勿論、素晴らしい事、香月君の才能と努力の結果よ。飛び上がる程嬉しかっただろうし、私も同じ気持ち。でも・・・彼の動揺も良く分かる。だって、これからの二年間、そしてプラス修士課程での二年間で結論を出す事が、いきなり一遍にやつて来たって感じなんだから。二年前S工大を受験した十八歳の高校生が、いきなり助教授つて言われたら誰だって驚くでしょ？それが、香月君の才能や努力の結果だとしても、獣医になるんだって夢と、学者になる夢が同時に今現実になっているの。でも、彼の選択はもう一年の修士課程の期間しか残つて無くて。その間に人生の決断をしなくちゃならないの。母さん、私は彼に何をしてあげられるの？私に今何が出来るの？どうやったら彼を支えて上げられるの？私が唯一出来る事は、ただ傍に居て彼を支えて励ましてあげる事位。結婚なんて先で良い。私達は、はっきり両親に許しを貰つた上で、お互いで生きると言う証として、婚約の形を取りたいの。その決意を持ちたいの」

「香織・・でも、人生は長いわ。今から喧嘩もすると思うし、色んな経験を積んで行くと思うの。香月君が素晴らしい男性だって、お父さんだって母さんだって勿論承知しているけど、それでも今決断したいの？しなくちゃならないの？」

「私達にとって、早いか遅いかの論は、関係無い。私には、香月君と過ごせない未来は考えられないの」
香織は毅然とした態度で言った。

「分かったわ・・お父さんに話して見る。少し時間を頂戴」

恵子さんが、応接室へ入った。川上氏は、電気も点けないで座っていた。

「まあまあ・・電気も点けないで・・」

恵子さんは、部屋を明るくすると、コーヒーを容れた。

「ねえ・・・つい最近のようね」

「うん・・・？何が？」

「あの子・・香月君が、芳川君と初めて来た日の事」

「ああ・・初々しくて、はにかみ屋で大人しい子だったよね。ただ・・澄んだ瞳の、清々しい印象も受けた」

「香織とも同級生で、一緒に勉強して、お互い一人っ子だから、兄妹のように見てきたわね」

「ああ・・私もいつしか、本当の親子であるような錯覚を持っていた」

遠くを眺めるような、懐かしいような・・そんな二人の顔だった。

「わがままで、勝気で、一人娘って事で甘やかしたのもあるが、香織も、いつの間にか成長していたんだね・・」

「淋しいって思ったの？ 貴方は」

「どう・・言うのかな・・本当に親としては、これ以上に無い二人で、香月君は、本当に申し分の無い最高の男で、願っても無い事だ。香織がこんなに成長したのは、全部香月君のお陰だよ。でも・・何だろうな・・この寂寥感は」

「それが父親と母親の違いかも知れませんね。私も賛成・・でも、余りにも二人は若い・・それでも香織は今すぐ結婚なんて構わないって、そう言うの。香月君がこれからの一年間の中で、人生の決心を付けて取り組む、その心の支えになりたい・・二人で生きたい証として婚約したいってそう言うの」

「分かっているんだ、私も。でも・・はいそうですかって・・親はそう言えば良いのか？」

「貴方・・」

恵子さんは、アルバムを出して来た・黙って二人はそれを眺めた。
その頃、香月は香月で、父母の前に座っていた。

「お前な・父さんも母さんも飛び上がる程嬉しい報告と一緒に、何て驚かせる事を言うんだよ」

「そうよ。川上さんも驚いた事でしょう。きっと」

「反対なの？父さん、母さんは」

「そう言う問題じゃないだろう。そりゃ、そうなるだろう、そうなって欲しい良縁だよ。これ以上無い良い娘さんで、私達もお願いしたい位だ。でも、何で、それが、お前のS工大卒業発表と一緒になんて聞いているんだ」

「確かに・・タイミングはそうだったかも知れない。けど、俺達は真剣なんだ」

「分かっている・・お前達は傍目に見ても、お似合いだよ。しかし、結婚って言うからには、人生設計が先だろう」

「それはそうだよ。だから婚約だけでも」

香月は執拗に食い下がった。

それから、一週間も経ってからの事であった。香月の父泰樹から、川上氏へ電話が入った。

香月の卒業祝いをしたいので、川上氏と一緒に食事会をしようと言う誘いだった。断る話でも無いの

で、川上氏も即答した。

「貴方・・・」

「ああ、ご両親が一緒って事はとうとう・・・かな？」

「そうね、覚悟決めますか！」

「子供達の覚悟はどうに決まっている、お互い成人だ。決まって無いのは親だけだ・・・ははは」

川上氏に否と言う言葉は勿論無かった。こうして・・・（本編から略）

S Kペレットの毎月のロイヤリティーと、アルバイトをして貯金していたお金で、香織に婚約指輪を買った香月であった。その翌月からは助教として国家から給料が支払われる身となった。

そして、又月日は流れて行く。この年の秋・・・競翔は既に終了していた、連合会では、磯川のペーマン系、川上氏の白川系、佐野のVロビンソン系が、大活躍をして、新御三家と呼ばれる程素晴らしい成績を上げた。香月はと言うと、出来が悪かった訳では決して無いが、昨秋のような、頭を取ると言うような鳩の出現は無く、どのレースにも、入賞はしたが、凡庸な成績であった。それは血統の層の厚みが、圧倒的に違うと言う事でもある。香月は新たな異血導入や、目指す香月系への早期基礎鳩作りの必要性に迫られたのであった。来春のレースで、スプリント号は種鳩候補となっている。GNのメッシュ号も既に、種鳩鳩舎に移っている。来春は、スプリント号、パンナ号を中心とした鳩達が主力になる。

ところで紫竜号はどうなっているのか・紫竜号は大怪我を負いながらも奇跡的に助かり、香月の懸命の治療によって、今選手鳩舎内に居るが、胸の傷は、相当深く、その部分は薄い毛に覆われただけで、完全には癒えた状態では無かった。この物語の紫竜号の竜の字は確かに白竜号から貰ったものだが、前の由縁は、暗闇の中でも爛々と光る眼光にある。紫竜号とは、ダークレッドのDRの羽色と、銀白色に輝く喉の毛色から命名した。その喉は今、竜がうねるような、眼光とあいまって紫竜号の紫竜たる由縁を表現しているかのような風貌になっていたのだ。



闘志・・

そんな日だった。佐野が突然香月宅へ来た。丁度、種鳩鳩舎内の掃除をしている所だった。早くも春の偵察？香月はそう感じたのだが・・

「やあ。今日はね。紫竜号の様子を見に来たんだ・・いいかな？」

「え・ええ、勿論です。選手鳩鳩舎の最上段に居ます。今、タラップをくぐったばかりですから」

佐野の言葉は、思いもかけない事であった。

「そう！じゃあ、もう傷は治ったんだね？」

「ええ・・ほぼですが」

香月は、種鳩鳩舎から外へ出ると佐野と一緒に選手鳩鳩舎に入った。薄暗い鳩舎の最上段に紫竜号が泰然として二人を見ていた。

「相変わらずの鋭い眼光だね・・うん・・？体がでかくなった？」

「今、筋力トレーニングをしています」

「傷・・凄いな。喉元から肩口まで、裂傷だったの？」

「猛禽類の鋭い恐らく爪でしようね、引きちぎられたような傷でした。その部分の肉が削げ落ちてしまったので、腹の皮膚を取ってきて、移植しました。今は産毛のような毛が生えています」

「凄い重症だったんだね、君が獣医さんで助かったんだろうなあ。不適切な言葉だけどDRの羽毛に、紫色した蛇・・いや・・眼光と言い、竜がうねっているようだ。まさしく・・紫竜号。傷を負って、この名前どおりになるなんて皮肉だけど・・。触らせてくれる？構わなければ」

「あ、良いですよ」

香月は手を伸ばして、紫竜号を捉えた。全く無抵抗で、香月の手に収まった。紫竜号を佐野に手渡す。

「体・・本当にでかくなったね。特に肩幅が広がって、胸筋が凄い。今は換羽期だから、主翼も揃っていないけど、この手触りは一種独特のものがある・・」

佐野は熱心に紫竜号を触って、又定位置である最上段に、静かに戻してやった。

「今日はね・・紫竜号を君が今後どうするのか、確かめに来たんだ。筋力訓練をやっていると言う事は、春に出すの？」

「本来は、紫竜号には筋力はいらないのかも知れませんが。気流に乗れる恵まれた資質があります。しか

し、それは、いかなる条件にも順応出来ると言うものではありません。この孤高の気性は、過去短距離でも常にトップに立てる分速で戻って来ましたが、この鳩舎の短距離鳩カズ・エース号には同レースで負けましたし、他の鳩にもそう言う事もありました。それだけ、資質だけに頼った競翔をさせていると、恐らくそこそこの成績は残せるとは思いますが、GCの時のような、単独飛翔の末の事故・・・とかもあります。紫竜号をこれから使翔するとすれば、やはり他の鳩群と協調できるような・・・浮力を殺す筋力をつける事・・・今はそう思ってます」

「じゃあ・・・やっぱり使うんだ、競翔で。間に合うの？」

「今の状態では未知数ですね。傷を被う為に少し肉をつけていますが・・・」

「俺の考えを言うね」

「ええ・・・」

「俺は、白竜号、ネバー号の子鳩と知った時驚愕した。俺が競翔鳩に興味を持ったのは、小さい時から昆虫や動物が好きで、昆虫博士と呼ばれて居た位で、小学校高学年になって、ペットショップで偶然に鳩の雑誌を見て、その時、その綺麗な姿に見とれたんだ。その中に掲載されていた、「ミイニューエ号」その偉大な鳩に目は釘付けになったよ。それは、スーパーマンや、アトムや、鉄人二十八号や、その他のヒーローより、俺自身の中で、スーパースターになったんだ。お父さんに頼んですぐ鳩を買って貰ってね。俺が競翔鳩の世界へ足を踏み入れるのは、すぐの事だったよ。色んな本を読み漁り、色んな鳩舎を訪ね・・・俺が今日あるのは、川上さんや、この日本でもミイニューエ号に劣らない程のスーパースターを作出した、白川さん所有の「白竜号」だったんだ。俺が加入する同時期、白川さんは、競翔を止めた

けど。俺もいつか・・こんな鳩を競翔して見たい・・そう思つてやつて来たんだ。だから、その白竜号と言う偉大な競翔鳩の子である、紫竜号は俺にとつて、新たなヒーローなんだよ。それは、磯川さんが競翔家として機敏に察知しているような紫竜号の資質よりも、むしろ憧れに近いものなんだ。だからこそ、俺は、香月君の紫竜号に対する思い入れや、白川さんとの深い交流の歴史を大事に見守つていたいと思つている。それは俺自身の勝手な思い入れなんだけど、同じ夢を見たいんだ、君と」

香月の胸は熱くなつていた。鳩友として最高に嬉しい言葉だった。

「・・有難う御座います。正直、大怪我をして戻つて来た紫竜号をこの時失つてしまふかも知れない・・と言う辛さを俺は、体験しました。俺はやつぱり紫竜号が一番好きなんだ、愛しているんだつて思い知らされました。その時、だからこそ思つたんです。この先紫竜号を競翔に出せば、そんな辛い思いを背負いながら過ごして行かねばならない自分が居る。でも、失いたくないからこそ、紫竜号を訓練する自分も居るつて事を・・紫竜号が参加する競翔結果、成績なんて俺には関係ないです。紫竜号に飛び続ける意思がある限り、どんな結果になろうとも俺はトレーナーとしてこの鳩を見守るつもりです」

佐野と香月は握手を交わした。偉大な鳩、偉大な師の種はやはり残つた。若い競翔家達に・・。久し振りに日下部ペットショップに立ち寄つた香月であった。忙しそうに日下部氏が動いていた。

「よお！久しぶり！」

香月は論文提出があつて、入院以来殆ど、ここでアルバイトはしていなかった。

「手伝いましょうか？」

「あ・助かるよ、少しだけでも手伝つて貰えるなら。君が居ないから、何で？どうして？つて毎日来てくれていた女の子には何度も聞かれるしさ。あはは」

「あはは。でも嬉しいって言えば良いのかな？それつて」

「ああ、香織嬢が居ない内にそう言つとけよ。あはは」

香月は二時間程飼料を出したり、店の応対をしたりと、やっと落ち着いた頃、敦美さんがコーヒーを容れて来てくれた。

「ご苦労様、助かったわ」

「敦美さん、何やら隣で片付けしていますが、何を作るんですか？」

「あら・鋭いわね。片付けしているだけで、そうくるなんて」

「本当に作るんだ・で？何を？」

「託児所よ」

「ええっ？」

香月は敦美さんの顔を見た、日下部氏の顔も見た。

「聞かないんだよ。やると言つて」

「その為に私は資格も取つたし、許可も貰つたわ。今更後戻り出来ないわよ」

「どうして又・・・？」

香月は、突然の敦美さんの言葉に少し驚いた。

「急に・・・では、無いのよ。前々から思っていた事なの。動物が近くに居る保育園って、ナイスアイデアでしょ？」

「はあ・・・それは、無認可保育所って事ですか？」

「ええそうよ。市に届けしてね。共働きの家庭が多いでしょ？朝から晩まで子供を預かるのよ。勿論規模は小さくて、私が管理出来る規模だけ」

「ちなみに、この店は？」

「夫がやるわ。勿論従業員も雇うけど」

「日下部さん・・・大変じゃないですか？」

「大変だよ・でも、しょうが無いよ。もう、春には出来ちゃうもん」

「敦美さん、保母さんが必要じゃないんですか？」

「だって、今からまだ運営なんてどうなるか分からないんですもん、当分一人でやるわよ、私」

その言葉の後少し沈黙があつて、香月は、日下部氏を手招きした。

「日下部さん、例の件で、少し・・・」

「あ・あ。そつちで話そうか」

「何よ、二人して私に内緒話？」

「済みません、鳩の事ですから」

香月は、敦美さんに頭を下げると、二階の屋上へ日下部氏と上がった。五坪もある大きな鳩舎がある。

「今は・何を言っても無駄ですね、敦美さん」

「そうなんだ。でも、私達は子供が居ないだろう？分かるんだ、あいつの気持ちも」

「そう言う事なら、賛成しますよ。俺も」

「香織ちゃんには言わないでくれよ、香月君」

「何で？」

「短大を卒業し、今から教育実習を一年間やって、彼女が家内と一緒にやるなんて言い出したら、俺達や、家内が良くて、親御さんが納得しないよ。あいつもそれは流石に言い出さないと思うし、ひよつと耳にでも入ったら、香織ちゃんの事だ。手伝うなんて事にでもなったら困るよ」

「はあ・・・」

香月は、それ以上はもう言わなかった。しかし、黙っていて、いつまで香織に内緒に出来るかも疑問であつた。

香織が教育実習から戻ってくれば、当然分かる事なのだから・・・。香織は、二年後に一緒に手伝う事になるのだが・・・

「ところでですね・・・どうです？ステツケルボード系は」

「ああ、素晴らしいよ。今秋の百キロレースから五百キロレースまで、パーフェクトだったよ。連合会参加レース全て優勝。流石に、合同杯の総合順位には届かなかったけど」

「ヒロ号、ハンク号との交配が上手く行ったようですね」

「ああ・・・流石に君の目は高い。どうするの？これから」

「まだ、二、三年先ですから・・・今度はシルク号やキング号を連れて来ます。春に間に合いますよね、今からなら」

「ああ・・・そちらが、交配の本命主流だね。今度は私も記録鳩を導入するよ」

「お願いします」

香月は、既にこの時ある計画に着手していた。それは、壮大な香月の計画の始まりでもあったのだ。この後、香月は、悲願でもあったある人物と出会う事になる。それは人生を左右する大きな出会いであった。

年が明けて、恒例の連合会総会を開催した後、川上氏に連れられて中華料理屋へ行く事になった。同行したのは、佐野と浦部であった。

「始まったね、又春が。秋は磯川君のパイロンビーナス号が菊花賞総合優勝を飾ったし、西コースの千キロVC（ビクトリーカップ）でも唯一羽当日帰りで、総合優勝をパイロンビクトリー号で飾った。ペパーマン系を導入三年で、とうとう大輪の花が咲いたよね」

「研究を重ねた成果でしょう、パイロンエース号も、種鳩として引退したそうですので、これらの若鳩達が次代のエースでしょうね。そう言う川上さんの所だって、VCレースは総合二、四、六、八、九、十位と総なめで、上位独占しました。佐野さんも三百キロ合同杯総合六位、菊花賞、総合三位、西コースN七百キロも総合五位と、大活躍でした」

香月は嬉しそうに言った。



パイロンビーナス号

「そう言う君はどうしたの？昨秋は」

川上氏が聞いた。

「当たり前配合に恵まれて、三年間好調が続きましたが、そうそうトップを狙えるような選手鳩は出ないです。やはり、血統のしつかりした鳩舎は強いですよ。三年計画です。もう一度交配を練り直して、基礎鳩を作る予定です」

浦部が言う。

「秋の成績って、悪くは無かったよね？香月君。三人の鳩舎が素晴らし過ぎたんだよね？」

「そうですね。ははは」

香月が笑った。他の皆も笑った。川上氏が言う。

「いやいや、何かと大変な年だし、香月君もアメリカへ行く準備があるしね。レースには集中も出来ないだろう」

「えっ？アメリカへ行くの？それは、旅行で？」

浦部が聞く。

「香月君はね、この年で、博士号を取得しているんだよ。講演に行くのさ」

佐野が答えた。

「ひえ・・大変な事だね。そこまで凄い人になっちゃったんだ」

浦部が目くりくりさせながら言った。

「凄くは無いですよ。ただ、英語を勉強しとかなきゃ・・それが大変です」

「まあ、今日は新年の顔見世、存分に食べよう」

楽しく会話が弾み、香月は、川上氏に帰る途中に伝言した。それは、三年間血統作りに専念する為に今年の春は現役競翔鳩をレースに出すが、二次鳩は一羽も居ない事、今秋の参加もしない事、来春には競翔に参加すると言うものであった。事情を知っている川上氏からは特に何も無かった。

家に戻った香月だったが、一時間前坂上から電話があったとの事で、慌てて*ダイヤルを回した(*七十年代当時ですからダイヤルです)。

「よお！電話貰ったそうだけど」

電話の内容は、愛田、咲田ペアのゴールインの話であった。時期は三月と言う事で、香月は自分の日程、友人との連絡にこの日は奔走していた。

(愛田、咲田の結婚式での、持田、勝浦と、香月の会話のみ紹介)

香月

「It is long-awaited Ms.Mochida you activity.」

持田

「Oh-They are perfect English. It is listening to the rumor of Kouzuki you as well.」

香月

「It was done how, and it became beautiful with all the more.」

持田

「A young doctor is good at the conversation as well. You became handsome all the more, too.」

香月

「Have you already been returned here? As for the work in Japan?」

持田

「Though it is a little office though it is only gravure with now that it was scouted」

香月

「you look forward to it because it has a talent as soon as it is terrific」

持田

「Some difficulty Kouzuki animal Doctors of Medicines」

勝浦

「おい・・二人で何外人やってんの？」

香月、持田「あははははは」

「御免、御免、来週にアメリカ行くからさ、少し英語の練習やっていたんだよ」

持田

「貴方もご活躍ね、全日本の強化合宿メンバーに選ばれたそうね」

勝浦

「ああ、補欠だけどね」

持田

「努力の賜物よ、才能だわ」

勝浦

「君も、アメリカでダンスの修行をして、今は大活躍だね」

香月

「改めて交際申し込んだじゃえよ、勝浦」

勝浦

「ば・・馬鹿な事言うなよ・」

香月

「何で馬鹿なの？ねえ、持田さん」

香月は真顔で持田に言った。

持田

「ほほほ To Katsura she residence which is wonderful now certainly」

香月

「What do you say? as for her who doesn't have a reason to be here.」

勝浦

「何だよ、又2人で外人かよ」

勝浦が、少し怒ったように言う。香月が勝浦に耳打ちをする。

「何だよ・・香月・・ああ・・分かった・・持田さん・・言うよ・・ If you are not here, I live, and

I can't go. Don't please you do it again?]

持田

「もう・・・！」

持田が泣き出した。

勝浦

「お・・・おい・・・香月」

香月

「良いから・・・持田さんはOKだそうだ。上手くやれよ」

一年半の別れは、二人にとって良い育みを与えたようだ。香月は、そんな二人の気持を瞬時に悟っていたのだ。

そんな愛田、咲田の結婚披露宴の二週間前の事だった。カリフォルニアへ出発前に、最終校正の英文を見てもらう為に、桑原教授宅へ訪れた香月であった。

「良い出来だ。太鼓判を押すよ、良くまとめたね」

「有難う御座います」

新たな出会いと共に

「現地では、バリー・マグワイア教授が案内してくれる事になっている。掛川君は英語が堪能だから、通訳兼彼も講壇に立つ事になると思うよ」

「心強いです」

「それはそうとだね、君の進路について伺おうと今日は思っている」

「遺伝子研究を一生のテーマとしてやりたいので、出来ればS工大に籍を置かたわら、獣医になるのも夢なんです、外部で動物診療所をやりたいなあ・・・今の段階になってもそんな事を思っているんですが・・・」

「君は、既に二つの博士号を取得した教授なんだ。研究は勿論だが・・・S工大は国家の機関。動物診療所と言うのは、施設が無いなあ・・・」

桑原教授はしばらく考え込んで居た。

「なら・・・こう言うのはどうだろう。大学へ出入りする、薬剤会社の顧問となって、診療所を持たないフリーな獣医になれば良い。ただし、君は診療の報酬は受け取れないよ。あくまで、製薬会社の顧問としての顧問料だけだ」

「そんな事が出来るんですか！」

香月は嬉々としながら聞いた。

「可能だが、これから君は研究チームを発足させて、講演もある。多忙だよ」

「でも、どこでも時間があれば、動物を診療出来るって事でもありますよね」

「ははは・・君って子は・・とことん欲が無いなあ。そんな事を言ったのは君が初めてだよ」

桑原教授は笑った。香月には太陽の光が曇り空から射して来たような、素晴らしい薦めでもあった。ようやく・・香月の人生方向は決まった。

「母さん、書齋に今から行くから、コーヒーを頼むよ」

書齋に通されるのは、初めての事であった。

「ほとんど書齋に人を招き入れる事は無いんだよ。ほら・・色々資料とか、論文とかがあるだろう？どうしても敬遠せざるを得ないからね」

「光荣です」

香月は緊張しながら、勧められる椅子へ腰掛ける。

「こんな事を言つて良いかどうか・適切では無いが、君と私は言わば、親子の白川門下生。嘗て私が君と同じような立場であつたように、君と私の関係もそうありたいと思うのだよ」

「これ以上無いお言葉です。嬉しいです。教授」

尊敬している桑原教授に、最大の言葉を貰つた香月は感激した。

「君は、不思議な力を持っている。優秀な学生は他にも拓さん居るが、君には無限の可能性を感じるのだ。」

「俺なんか・もう目一杯ですから・そんな才能はありません」

「いやいや、君が自分の才能に気が付いていないだけだ。あ・そうだ・急な話なんだがね、今週の金曜日に、私の本の出版記念パーティーがある。君の今後の顔つなぎの為にもどうかね？何、堅苦しいものではない。彼女同伴でも構わないから」

「はい。お伺いします・あの・少し質問させて貰つてよろしいですか？」

「うん？何だね？」

「窓際に飾つてあるアルバム写真ですが・隣の方はひよつとして日下清次郎氏ですか？随分お若い時の写真のようにお見受けしますが」

「何だ・・日下君を知っているのか？輸入雑貨を扱う会社をやっているが、大学時代の山岳部員としての付き合いだから古いよ。一番の親友だ」

「そうなんですか！」

「何だ・・凄く嬉しそうだが、君にとってどんな繋がりがあるんだね？」

「はい・・俺は趣味として、又研究として鳩をテーマにしていますが、日下氏は競翔鳩協会の名誉理事であり、このS工大で研究するのに、日下部氏と言う方のご尽力でも協力を頂きました。又、かつて白川氏が使翔していた、競翔鳩白川系と、日本鳩界を二分する、日下系の作使翔者です、かねてより是非お会いしてお話を聞かせて頂きたいと思って居りました」

「ああ・・彼が鳩を飼っている事は知っていたが、そうだったのか。いやあ、何から何まで奇遇があるね。そのパーティーには、彼も来るよ、そう言う事なら一席設けようじゃないか」

「本当ですか！感激！感激です！」

「はははは。君は、やっぱり不思議な子だね」

桑原教授が笑った。

「有難う御座います！」

「それなら、私もお願いしようかな」

「はい！何なりと」

「家内がパーティーには出るんだが、最近腰の方が余り芳しくなくてね。どうだろう・君、彼女を連れて来ると言う事だから、目下君との席は退屈だろう、少し彼女にお願いして家内の相手をしてやって貰えないかね？君達が構わなければ、今晚ここで顔つなぎと言う事で一緒に食事をしよう」

「それでは一度戻ってお伺いします！」

思わない奇遇がここにあった。香月の進路を示唆してくれて、助言も頂いた。そこには何の派閥エネルギーも存在しない、本当に家族と言えるような暖かいものを感じたのだ。香織は大感激で勿論二つ返事でOKした。それは、急速に身近になった香月との結婚の文字も見えるからであった。愛田、咲田の結婚式と言う事に影響されたからかも知れない。

「まあ・綺麗なお嬢さん。嬉しいわ、こうして若い子達に囲まれて」

何度も会食している間柄の香月だが、香織が初めて加わって、花が咲いたような楽しい夕食となった。

「そうかね。今春短大を卒業して、保母さんに」

「一年間、実習がありますけど」

「川上さんは、子供さんが好きなのね」

「はい。夢なんです。私は一人娘ですし、姉妹も居ないので、大勢の子供達と一緒に遊んだり、学んだ

り・・・そう言う仕事に憧れていました」

「貴方達が結婚して拓さん子供を作れば、それも楽しいわよ」

「そうなるの良いですね。うふ・・・(笑顔で)」

一遍で知己のように打ち解けた晚餐であった。香月は本当に夢を見ているような一日であった。大きな、大きな出会いが又始まる。

三日後の金曜日だった。香月は、香織と共に正装をして、パーティーに出席していた。香織は、桑原夫人と奥のテーブルに座っている。香月は落ち着かない様子で、各界の著名人達の中で、日下氏を探していた。まだ到着はしていない様子であった。桑原教授の挨拶が済み、香月も香織達のテーブルに戻り、雑談が始まった頃、桑原教授が、白髪頭の口髭を生やした男性を連れてテーブルにやって来た。直立不動で香月は立ち上がる。日下氏であった。雲の上の存在のような競翔界の第一人者が、とうとう香月の前に現れたのだ。

「紹介しよう、香月君。日下君だ」

「初めまして。競翔をする者として、是非お会いしたいと常々思つて居りました。お会い出来て光栄です」

緊張して、硬い表情の香月であった。香織が少し微笑みながら、桑原婦人の顔を見ている。

「日下君、この子は香月君と言つて、三年ぶりにS工大の現役学生で、それも二つの博士号を取つた青年だ。まだ二十歳の若者だよ」

「ほお・・天才学者だね。初めまして。競翔もやっていると云う事で、実は・・桑原君より予備知識を貰つて調べたよ、君の事。競翔の方でも、非凡な成績だねえ」

「恐れ入ります」

桑原教授が言う。

「実はね、別室を用意してあるんだ。今日は時間を君と日下君にも取つて貰っている。心ゆくまで話し合いたまえ。私は、客人との挨拶が終わつたら行くよ。済まないが川上さん、ここで家内の話相手になつてやつていてくれるかな？」

「はい、勿論です。楽しいんですもの、奥様とお話していると」

「イギリスへ渡つて戻つて来ない娘より、身近に感じるわ。私も楽しいわ、ほほほ」

香月は一礼をすると、案内される別室へ日下さんと入った。既にテーブルには、食事の用意も出来ていた。

香月の感激は言うまでも無い。日下氏は座るとすぐ、

「そうそう・・・君は、あの白川さんの連合会所属だったね。白川系はどうなっているの？現在」

「はい・・・川上氏と言う私の師匠でもあり、白川博士の一番弟子でもありましたが、故人の遺志により、白川系を引き継いでおります」

「以前より、強豪鳩舎で名高い人だが、近年の活躍は特筆すべきものがあるね」

「はい」

「君の主流血統は何かかな？」

「ノーマンサウスウエル系、勢山系、ブリカー系、ハンセン系、シューマン系です」

「シューマン系と言えば、白川氏が日本へ初めて導入した血統だね」

「はい、ご存知でしたか」

「無名の鳩舎から、導入していきなり若鳩で、西コースの千キロを優勝した事で当時話題になっているよ」

「その選手鳩二羽が私の鳩舎に居ます」

「成るほど」

「ところで、私に対して以前より会いたいと希望してくれていたそうだが、それはどうしてかね？」

「はい、日本鳩界を二分する、日下系に興味を持っていました。血統について調べましたが、是非お会いしてご質問をと思つて居りました」

「日下系は門外不出・・・その血統を調べたとは私も興味深い、伺おうか」

日下氏は、ここにこししながら香月に聞いた。

「はい。日下系基礎鳩十六羽の中で、雪風系源鳩日下〇号が居ますが、血の濃い順に、日下ハナ号、日下カイ号、日下カマイシ号、日下アシベ号、日下タイジ号、日下パイン号、日下タマ号、日下ツリー号、日下カオル号、日下ゲンジ号、日下キヨシ号、日下メイジ号、日下クニ号、日下マル号、日下カガ号、日下タツミ号の順となります。」

「良く調べたねえ・・・うむ、その通りだ」

「血統固定方法について、どう言う方向性を持たれていますか？」

「ははは。流石に学者だね、鋭い質問だ。ただ・・・血統固定化についての方法は、学者の白川氏のような、科学的な分析に応じたものではない」

「はい・・・」

香月は、日下氏の次の言葉を待った。

「つまり・・・こう言う事だ。私の日下系とは、雪風系最高長距離鳩、雪風光風号を作り出す事にあつた。だから、雪風系の血を多く持った主流系の確立にある」

雪風光風号とは、日本で初めて千キロレース翌日唯一羽帰還優勝をした鳩である。

「日本初の、千キロ翌日帰還鳩ですね」

「ああ。私はこの手で雪風光風号を作り出したかったのだよ」

「その最も理想に近い鳩が、日下〇号ですね？」

「その通り。私が理想としたのは体型にある。それは競翔鳩と言うテーマを日本の地理風土にマッチさせ、小型化を目指し、徹底した管理主義を貫いた白川氏とは対照的でもある。私は体型重視、大型化をむしろ推進してきたのだよ」

「はい・・・日下系は長年競翔鳩として使翔されている、息の長い系統ですね」

「では・・・君が興味を持ったのは、日下系のどこにあるか、質問したいのだが」

「全レース型の息の長い競翔鳩であり、特に、超長距離に成績を上げております」

「成るほど・・・君の目指すものは長距離系にあるのだね？」

「日下系の真髄をそこに見ます。又、先ほど言われたような体型・・・特に立ち姿の美しい鳩群です」

「君は使翔して見たいと思っっているのかね？」

「いえ・・・使翔と言うより、私個人の香月系を作る上での参考にしたいと思いました。勿論導入したいと思う気持ちは吝かではありませんが、それは望んで可能かを考えるより前に、このような親子近親、兄弟近親、従兄弟近親と血の濃い交配を繰り返しながら、どうしてこんな優秀な成績を残せたのか。そちらの興味が勝っております」

「その近親交配を、君はどう見ている？」

次第に日下氏の視線が鋭くなつて行く。香月は確信を徐々について行つた……。

「血の行き詰まり……を見ました……が、それでもこのような圧倒的な成績を残しております。それは、日下系と言う血液の力強さにあると思います。生命力の強さと言うか」

「数々の著名鳩舎と出会い、賞賛の言葉ばかり聞いて来たが、君の視点は確信をついている言葉だ……恐ろしい洞察力と言わざるを得ないな、君は……」

そこへ桑原教授が入室して来た。

「盛り上がっているようだね」

「いやあ……天才的な学者と聞いては居たが、競翔家としても天才的な子だねえ……鋭い視点だ」

「はは……門下生の中でも、視点の鋭さは頭抜けている。どうだ？確信をつかれたか？」

大きな溜息をつきながら、日下氏は言った。

「私が競翔を中断したのは、確かに仕事も多忙だが、実は既に日下系は完成されて、これ以上望めない

と思ったからだ。近年の高速レースの中では、日下系は遠く白川系に及ばないし、既に改良の余地は無いからだ。歩留まり率は既に一割と言う有様なのだ」

「つくづく・・・血統と言うのは奥が深いですね」

香月も答えた。

「君がもし、日下系を導入すると仮定して、君自身は、どう作使翔するのか？」

「私の鳩舎には勢山系のすみれ号の孫（実在）が居ます。ブリクー系のエルパソ号の孫（実在）も居ます。ハンセン系のピネリー号孫、それにシューマン系のマミー号、リリー号が居ます。日下系をこれらの鳩の異血導入として、交配します」

「わははは。日下系を異血として使うと言うのか・・・恐れ入った」

「失礼は重々お詫び致します」

「いや、いや、何の。君の考えを更に聞きたいよ」

桑原教授はにこにこしながら、ワイングラスを傾けていた。

「日下系をこれらの鳩群の中の厳選した選手鳩・仮にAからEとして組み合わせ、それらの鳩を一切競翔に参加せず、一次基礎鳩群を作ります①。二歳になってから、これらの鳩群に今他鳩舎で使翔中で

すが、純ステツケルボード系の選手鳩群及び、現当鳩舎の現役選手鳩C群と交配させます②。二歳になると日下系と配合③。この③グループを選手鳩として使う三年計画で香月系第二次基礎鳩群を作る計画です」

「ほほう・・白川氏の「血の概論」を更に進化させようと言う、君の研究テーマ、「新血液概論」の道筋だね？それは」

桑原教授が言う。

「はい・・一生のテーマとしたいです」

「むう・それは日下系にとっては埋没するものでは無く、更に進化を遂げられる道であるとも言える。ステツケルボード系と言えば近年の飛び筋・それは導入が非常に困難だと聞いている。どう言うルートで入手したのかね？」

「日下部ペットシヨップの日下部氏が、直接現鳩舎に行つて、導入しました」

「今一度聞く。これらの鳩群の交配によつて、君の求める長距離鳩が完成すると思うのか？」

「分かりません。ただ・血の相性があつて、ステツケルボード×シューマン×ブリク×ハンセン系の試し腹として三交配の直子が、日下部氏が使翔し、昨秋のレースで、百から五百キロレースを、強豪風巻連合会参加レースで全部優勝しました。相性は大変良いと思ひました。更に、日下系ではありませんが、雪風光風号孫鳩と、ハンセン系、勢山系との交配は、栃木の花園鳩舎が活躍しておりますので、

問題無いかなと思っております」

「それも調査済みか……。では、何故又日下系に戻し交配をするのだね？」

「日下系が、名実共に日本を代表する系統だからです。その体型美、生命力。それを求める事は、競翔鳩にとって確実な進化だと思うからです。自分の思い上がりですが、日本固有の競翔鳩を作りたいのです」

「良く分かった。・私は君に日下系の未来を託したい」

「ええっ！」

香月は思っても見なかった言葉を日下氏から頂いた。

「本当ですか！身に余る光栄です」

「ただし・私が日下系を譲る条件が一つある」

「・・・何でしょうか」

「私の最後の競翔となった、GNレースの日下ピロ号の仔鳩を、是非レースで使って欲しい」

「日下ピロ号と言えばCH総合二十七位、GN総合四十三位となった現日下系最高競翔鳩ですよね」

「私の夢を果たせるとしたら、日下系と白川系を同一連合会の中で・それが自分で叶わぬ夢なら、君に託したいと言うのも本音だ」

「それ程までに・感動して涙が出ます」

香月の目頭が熱くなった。故白川氏もきつと同じ事を望んだ筈だからだ。

「分かりました。その前に私の事情もお話しておきます」

「うむ」

「私の鳩舎には実は、白竜号とネバー号の直仔が居ます」

「何！何と！」

驚く日下氏の顔を見ながら、桑原教授は目をくりくりさせた。何をこんなに驚く事があるのか・・・そんな顔であった。

「私が初めて白川さんとお会いしたその日に、両鳩の交配の卵を頂きたいとお願いしました」

「むう・・・両鳩は既に、死亡している筈。その仔鳩の事を詳しく聞きたい」

「はい・・・仔鳩はこの世で一羽限りです。何故なら白竜号は孤高で、激しい気性の鳩、白川氏は白川系とは異質である、アイザクソン系の白竜号の仔を得る考えは最初から無かったのと、自然交配でも無性卵しか得られていません。又、ネバー号は♀鳩でありながら、千キロ一回、千百キロ七回も飛翔した鳩、身体は疲弊し、又雄鳩を寄せ付けられない鳩でした。既に出会った時には十三歳を過ぎておりました」

「では？何故？」

「無理を白川さんをお願いし、ある方法によって唯一羽得る事が出来ました」

日下氏は香月の顔をじつと見た。・・澄んだ瞳の若者だ・・にこりとして、

「君の事だ・・。我々の考えが及ばぬ方法を考えたのであろう、敢えて理由は聞くまい。では・・何故その仔鳩を主体とした血統を作らないのかね？」

「紫竜号・・と名付けていますが、満四歳になりましたが、どの鳩も寄せ付けません。」

「ひよつとして・・君はレースに使っているのかね？」

「はい」

「むう・・してその成績は？」

「初レース千キロ文部杯で、日本記録全国総合優勝しました。一昨年のGP七百キロレースで総合八位、昨年のGCを当日唯一羽帰りで、総合九位です」

「稀有の銘鳩の仔鳩・・その遺伝子も稀代のものだねえ」

「紫竜号は今から花咲くであろう、資質を持っています」

「まだ競翔に参加させると言うのかね？では・・君がこんな重大な事を私に披露するその訳は？」

「私自身・・紫竜号を使翔させる事は重い十字架を背負っているようなものです。ですから、自分が出る最大限の競翔家としての使命をこの鳩に託したいのです」

「それは、この紫竜号を中心とした、競翔をすると言う意味かね？」

「今年は記録鳩のみの参加、来年の春は、紫竜号一羽だけの参加にしようと思っていました」

「それなら、先ほどの申し出は取り消そう・・・」

「いえ・・・逆にお願いします。日下系が、俺の鳩舎に導入できるなんて想像すらしていませんでしたので。しかし、日下系を使翔すると言う事は、俺の香月系を目指す上での大きな指標となる筈です」

「では・・・君が血統に加えている日下系をどう入手する予定だったのかな？」

「はい、栃木の花園鳩舎の雪風光風号直系群を導入して、雪風系の血を引く基礎鳩を得るつもりでしたし、既に打診して良い感触を得ています」

「つまり・・・私がやった手法を取ろうとしたか・・・？」

「はい・・・八分の六雪風系を作る三年計画とはその事です」

「ははは・・・君は完璧な人だ。感服したよ」

桑原教授も加わって一緒に笑った。

「ところで、私も提案がある」

「はい」

「ステッセルボード系を日下ピロ号に交配した直仔を、競翔に出して欲しいのだ」

「ステッセルボード系を導入すると言われるんですか？」

「ああ。私のイタリアの友人が、ステッセルボード系を導入して、サンセバスチャンNで入賞している。

そのメスのチャンピオンを一年間借りようと思う」

「・・・言葉がありません」

余りの日下氏の申し出に香月は戸惑った。

「作出可能な仔鳩は十二羽位だろうが、君が競翔で使って見て、それから種鳩へ何羽か残ったら回せば良い。君のような競翔界にとって、至宝のような人材が競翔を中断するのは誠に惜しい。それならば君の言う血統作りは、短縮化出きる筈だよ」

「これ以上無いお言葉を頂きました。感動で言葉が出ません」

この時期、香月を取り巻く友人、恩師、競翔家・・・・全ての人脈が出来たと行って過言では無い。日本鳩界の歴史をも動かせるかも知れない大きな青年だと、周囲も認識したのだ。香月は大きなステップの入り口に何かに導かれるようにこの時立っていた・・・。

愛田・咲田の結婚式が終わって、帰りの道中の事・・・香織が突如香月に言った。

「私・・・貴方の日程と合わせて、京子とアメリカ旅行に行く事にしたわ」

「え？聞いてないよ。それ」

「決めたの。でも、貴方の邪魔はしないわ。京子も大賛成だったから」

「・・・はは。君は驚かせるね、全く」

「ふふ」

愛田と、咲田の披露宴会場で、坂上達も来年卒業と同時にゴールイン、南米へ移住する話も本格的に進んでいると言う。既に、サークルは国外にも拡大しつつあって、大きな活動を展開していた。

競翔の方も香月を取り巻く環境は大きく変化し、今や、巨大な壁のように立ちふさがる川上氏使翔の白川系。次代へ次々とエース鳩が生まれ、日本競翔界の歴史を塗りかえようとしている。白川系の中でも厳選された飛び筋を使翔しているからで、無敵、無敗を誇った、ペパーマン系のパイロン号直系も、日本屈指の競翔家磯川の手によつて大きく羽ばたこうとしている。この二強に立ちはだかるのは、もう香月の天才的手腕を持つてしても容易な事では無い。昨秋がその例だ。佐野のVロビンソン系も既に証明されているスピードボード。緻密な飼育管理によつて、こちらも次々とエース鳩が出現している。香月の目標は、学業から、いよいよ本格的な競翔家の道へと向けられて行く。学業と両立しながらも、数々の成績をここまで達成して来た天才競翔家の足場は既に、構築されつつあった。

紫竜号

一方、紫竜号の内面にも変化が起きようとしていた。それは、満四歳を迎えた紫竜号の心の内面からふつつつと沸きあがるような、何かに突き動かされる、炎のような激しい感情であった。静の香月、動の紫竜号、人間と鳩と言う互いの立場が違えども、この世で出会った、巨星同士が激突する……。これから二年は、当に壮絶な道が待っているのだ……。

鳩舎内の最上段で、グーっつと紫竜号は喉を鳴らした。鳩舎内に居る鳩達が一瞬びくつとなった。

紫竜号「スプリント号よ。お前と今春は一緒のレースだな」

スプリント号「……それが何か……？」

眼光鋭く紫竜号がスプリント号を睨む。

紫竜号「お前達は、ご主人の望むままのロボットさ」

カズ・エース号「僕は、主人の期待を背負っている。それに報いるのがいけないんですか？」

紫竜号「小さいんだよ。お前達は……。カズ・エース号。お前は体力だけの能無しじゃないか」

カズエース号「ひ……ひどい！」

スプリント号「……紫竜号さん、その胸の傷どうしました？」

紫竜号「お前達の知った事じゃない」

スプリント号「隼にやられたんでしょ？それは……。知っているよ」
カズエース号「ええっ？」

鳩舎内の選手鳩達は一斉にざわざわとした。

紫竜号「……だつたらどうだと言うんだ」

スプリント号「あんたの事だ。単独で、別コースを辿り、危険な場所を通った……。その結果だと言っているんだよ」

スプリント号の口調が少し荒くなった。

紫竜号「……小僧……何が言いたい」

スプリント号「経験鳩と言うのは、集団で戻る事は、自分の身を守る意味でもある。ただ早く帰る事だけ要求されるのは、それこそ、体力自慢だよ。さつきカズエース号に、あんたが言った言葉だ。そっくりお返しするよ」

紫竜号「この猿真似の若造が……！」

紫竜号の目は爛々と輝き、一際大きなグーッとと言う声を上げた。

スプリント号「猿真似だつて？ふふふ紫竜さんよ・・・」

紫竜号「いいか、お前達の祖父や、お袋達はなあ、そこそこの成績をあげたかも知れん。だが？どうだ？四歳、五歳の俺と同じ年で、隠居の身だ」

スプリント号「それが、期待通り活躍出来た証じゃないか」

紫竜号「スプリント号よ。確かに高地訓練では、お前は俺の技を盗んだかも知れん。だが、昨春の四珀キロはどうだったのだ？」

スプリント号「話を戻すよ。それがあなたのGCの結果だろうって言っているのさ。俺達が目指しているのは、海の向こうの遠い場所だ。体力とは有効に使うもんだらう。競翔に参加させられる俺達は、親父達や叔母たちの栄光の歴史を手本として、自分の持てる力を有効に使って初めて評価が下されるんじゃないか。その証拠に一度だつてあなたの帰舎を主人が喜んだ事があるかい？俺は知っているんだ」

キュリー号（ハンク×ハナ号）「そうよ、主人に喜んで貰える事が私達の幸せ、生きる道だわ」

紫竜号「小せえ・・・お前達は所詮その器だけ。小せえよ、全く」

スプリント号「どちらが小さいのか・・・それは結果さ。全てね」

紫竜号「今年と同じレースを見ているが良い」

スプリント号「ふ・・・あんたと同じコースを辿って、死にたくないや。ははは」

紫竜号「何だとお！小僧！」

一際大きい声を上げた鳩舎内に、この時香月が入って来た。

「何だ・・騒々しいな、今日は」

香月は鳩舎内のざわめきを感じ取った。

一羽、一羽丹念に触診しながら、競翔鳩の状態を見て行く香月だった。最初に手に抱いたのは、スプリント号だった。

「うん・・良い感じだな。今年はGCHに参加するつもりだ。頼むぞ、スプリント号」

香月系の代表基礎鳩の中に、スプリント号が入っている。期待の程は一番だ・・。次に手に抱いたのは、カズ・エース号であった。

「良いね、カズ・エース号。ライバルもどんどん増えて、トップを取るの難しくなっているが、優勝は血統だと思っているよ。今期も頑張ってくれよな」

次々と、鳩に語りかけながら触診する香月だったが、突然鳩舎外から声がした。

「よお！」

振り向くと、芳川であった。

「浩ちゃん！」

東京で、就職していた隣の家の幼馴染、芳川であった。急いで鳩舎外に出る香月。

「どうしたの？急に」

「ああ。東京の会社に就職してたんだけどさ。辞めて戻って来た」

「ええっ?!」

「ま、色々あってさ。又その話はするけど、こっちで、もう就職決まったんだ」

「・・・そうなの。でも、俺は嬉しいけどね」

「はは。実は俺も、競翔鳩に興味が凄く沸いててさ。一男と一緒にやりたいなあ」

「それは、勿論歓迎するよ、浩ちゃんが俺の鳩狂いの火付け役だからさ」

「又・・・凄い鳩舎の大改造、大構築やってるよなあ。ここまで昇ってるとは思わなかったよ。あはは」

「ははは・・・家の中で話しようか？浩ちゃん」

芳川は、東京の大手電気メーカーに勤めていたが、海外転勤を断って、辞めたらしい。芳川の家は二人姉弟で、姉がもう嫁いでいるが、彼は長男であり、家は大地主でもある。会社を辞めた理由は、詳しくは言わないもののその家の都合が多分にあるらしい。彼の親父のコネもあって、役場の臨時職員として勤める事になったそうなのだ。香月に、又大きな協力者が戻って来た。四日後にアメリカ出張がある香月に、こんな出来事があつたのだつた。その間、鳩舎の管理を芳川が受け持つ事となり、やがて彼自身も香月鳩舎の一員として、大きな力となつて行く・・・。

香月のアメリカ講演四日前、川上氏宅での会話・・・香織は既に、香月が出発するこの二日前に旅立っていた。

「香織、橋本さんと女性二人だけで、大丈夫かい？」

川上氏は、これまで海外旅行を一度もした事が無い香織に、心配そうに言った。

「大丈夫よ、ちゃんと旅行会社にチケット貰つてるし、日程もちゃんと渡してあるでしょ？お父さんに」
「まあ・・・そうなんだがね・・・」

母親が笑いながら、

「大丈夫よ、もう子供じゃないんですから」

「そうよ、三日目には、香月君もアメリカに行くし、カリフォルニアで会うようにもなってるわ」

香織が言う。

「しかし、香月君は大事な講演があるだろう。香織と違って遊びに行く訳ではないからね」

「分かっているわよ。お父さん」

そんな会話をしながら、川上宅でも、既に時は流れて行った。急速に動きつつある周囲の中で、香月にとつても、アメリカ講演は、又新たな出会いをも、もたらす事になる。ようやく周囲は厳しい冬から、ほんの少し春の一陣の風を感じるような三月の事であった。その間、春の競翔は始まっていたが、香月は百キロ、二百キロと不参加。だが、香月は芳川と言う協力者を得て、既に春レースは始まっていたのであった。

掛川と共に乗り込んだ飛行機の中で、楽しそうに話し掛ける香月だった。一方、初めての海外講演で昨夜は一睡も出来なかったと言う掛川だったが、次第にその話に引き込まれて行った。

「へえ・・桑原教授の親友だったのかい。その協会理事さんは」

「ええ。凄い奇遇で、それもですよ。現役の選手鳩を種鳩として譲ってくださいると言うんですよ。もう最高ですよ」

「はは・・・こつちは、講演の緊張で昨夜は眠れなかったと言うのに・・・君はハイテンションだよなあ・・・でも、鳩の話をしている君はやはり二十一歳の若者だ。安心したよ」

「ははは。趣味と研究は別ですが、こう趣味と研究が重なってしまうと、自分でも不思議でたまらないですよ」

そんな会話の機中、既に今春の百キロレースは終了していた。東神原連合会の九千八百余羽の優勝は、川上氏が飾った。二位に磯川が入ったが、三位以下、十位まで九羽と言う大量入賞であった。白川系確立三十五年、最高の年になりそうな勢いで、まず百キロレースはスタートしていた。この間、芳川が鳩舎の管理を手伝う事になり、不在の香月の代わりに選手鳩鳩舎に入っていた。その時芳川は、頭上後方から、背筋が寒くなるような気配に振り向いた。

「え・・・？何だ・・・この鳩」

薄暗い、選手鳩鳩舎内最上段から、爛々と赤い目を光らせた紫竜号が、見慣れない侵入者に威嚇するような、射抜くような視線を向けていた。芳川は、その眼光、姿に恐怖に近いような感覚を持った。

「これが・・・鳩・・・？」

この時の様子を、帰国後の香月に芳川はこう・語っている。

「悪鬼の形相だった」

・と。不吉な芳川の子感、香月にとつても、異質の血である、紫竜号との壮絶なドラマを予言するようなものであったと言つて良い。紫竜号は九死に一生を得た・だが、その時から紫竜号の中に眠る激情を呼び覚ますような意識の変化が、沸き起こっていた。無性に紫竜号は、苛立っていた。それは何か自分では分からない。コントロール出来ない自身の精神へ対する苛立ちでもあった。

さて・アメリカへ渡つた香月は、最初の訪問地である、ロサンゼルスで、ハリリー・マクガイア博士に出迎えられていた。長身の長い顎鬚を伸ばした人だった。アメリカでは、有名な動物医学博士であった。

「How do you do, way, Doctor Kouzuki」

「It is honored that it can meet. Doctor Barry McGuire」

「Way, Doctor Kakegawa.」

「which has already been heard can meet, and fame is deep emotion.」

「Oh! It is the pronunciation of perfect English. Doctor Kakegawa.」

数年来の知己のように、たちまちの内に三人は意気投合して、ロサンゼルス大学獣医学部に向かった。午後からと言う講演で、二時間程香月は仮眠を取った。その香月の様子に呆れたように掛川は、脇で分厚い資料を忙しく整理していた。

講演は、二人とも大成功で、特に香月の講演では質問が集中した。横で掛川が難しい英語表現を通訳してくれたお陰で、無事にこなす事が出来た。

「やれやれ・・・」

緊張が解けて、掛川は、ソファーに倒れ込むように座った。

「掛川さんのお陰ですよ。助かりました」

「いやいや・・・。それより君って度胸があるなあ。質問して来た連中の中には、高名な教授が何人も居たんだよ」

「え・・・そうだったんですか、知らなかった」

「ははは。それも君らしいや。でも、そんな予備知識等必要は無かったようだね、君には」

バリー・マクガイア氏が、二人の所に、にこにこしながらやって来た。その晩、夕食に招きたいと言うのだ。勿論、二人は喜んで招待を受けた。

バリー・マクガイア氏の招待を受けて、驚いた事が二つあった。金髪美女のマクガイア氏の一人娘、メリー・マクガイアさんが、ハーバード大学に在籍中の才媛で、日本史に詳しく、日本語が堪能と言う事。そして、バリー・マクガイア氏が、小さい鳩舎だが競翔鳩を飼育していると言う事だった。この出会いは、より親密に香月達の訪問を歓迎するような一夜となった。

「おお！グレートだわ。香月博士。その年で、二つの博士号なんて」

「貴女の日本語の発音と、日本史に堪能なのにも感服しますよ」

賑やかな、一夜となつて、雑談の最中にバリー・マクガイア氏が、一羽の鳩を手にして、香月の前に。

「君が競翔家でもあると言う事を聞いたんだが、この鳩をどう思うかね？」

その鳩は、栗二引の綺麗な鳩であった。しかし、香月の眉が曇った。そしてしばらく香月は触診していたが・・・

「・・・ミューゲですね、病気に掛かっていますよ」

「え・・・？」

予想外の答えに、マクガイア氏は驚いた。この鳩をどう思うかと、自信を抱いて来た鳩に対する香月のそれが答えだったからだ。

「重症には到ってませんが、マクガイア博士は農園をお持ちですか？」

「あ・・ああ。麦畑を三ヘクタール持っているが」

「それが原因でしょうね。ただちにこの鳩を隔離して、クレゾール等で鳩舎内を清掃して、飲料水には少量のヨードチンキを入れて下さい。病鳩には、ルゴールを五十から百倍に薄めて、あげて下さい。鳩舎の餌には、玄米、牛乳に浸したパンなどをしばらく与えて、麦等は、極力減らして下さい」

次々と指摘する香月の言葉に、マクガイア氏は戸惑いながらも、鳩舎に向かった。後から香月が、呆気に取られたような、掛川とメリーがその場に居た。鳩舎内の十二羽の鳩を全て触診した香月は、

「もう一羽居ました。幸いまだ発症していませんが、発症したら助かりません。治療を急ぎます」

慌てて、マクガイア氏は、放鳩籠に二羽を入れて、鳩舎内を掃除し始めた。楽しい筈のパーティーが、一変して、大騒動になったのだった。ようやく、落ち着いたのは、夜の十時前。流石にマクガイア氏も疲れた表情で、ソファーに座り込んだ。改めて、香月の迅速な処理と、動物医学的判断の鋭さに感心した・・と言うより、この高名な教授にして、香月の医者としてのレベルの高さを非常に驚いた様子。そ

れは、メリーにとつても感激するような、出来事であった。

「いやあ……。私には全く気がつかない異変であった。どうして、病気に気づいたのか教えてくれないかね？」

「いえ……。このお宅にお邪魔する前に、広大な麦畑を見ました。ひよつとして、この辺りで、取れる麦を多食させているのでは？ 鳩を飼われていると聞き及んだ時に、推理致しました。更に鳩舎の構造と、宅地の環境側面、又湿潤な土地柄を見て、まず鳩を見る時に、病気を疑って見ていました。十三羽の鳩舎の中で、二羽感染していましたが、その一羽を偶然にも博士が抱いて来て無かったら、発見は困難であつたと思います。感染して症状が出れば、まず助かりません、空気感染もする恐ろしい病気ですから」

「あ……。ああ。何て事だ。動物学者たる私がそんな事も分かつて無かつたなんて」
「いえ、見るからに健康そうな鳩達で、血統的にも優れていると思います。更に、鳩舎内の殆どが若鳩ですから、感染し易い環境が出来たようです。」

「君にね、自慢の鳩を見せて驚かそうと思つた、茶目つ気が、自分が驚かされたよ」

メリーが、言う。

「素晴らしいわ。香月博士。その蒞蓄は一体どうやって？」

「高校生の時に白川博士と言う、亡くなられましたが、短い時間でしたけど、色々鳩の病気については

教えて貰いました」

「おお！白川博士？あの博士と交流があったのかい？」

マクガイア氏は、驚いたように言った。

「はい。」

「そうなのか。素晴らしい博士だった。私が尊敬している日本の学者だ」

「私の目標でもあります」

バリー・マクガイア氏、メリー・マクガイア氏の交流はこうして出来たのであった。その時掛川は緊張の糸が解けて、用意されたベッドで、深い眠りにについていたと言う。

この縁で、深く香月に心を揺り動かされた、*メリー・マクガイアは、香月の残り五日間現地案内者として、強引に同行する事となる。それは香織を巻き込んだ一大騒動として。

*だが・・紫竜号物語を綴る今、これらの出来事は必要なく省略したいと思っています。

アメリカへ渡って三日後、香月達は、ジェームス木原と言う、日系のS工大出身者の教授と会う事になった。講演が終わる時刻に、ジェームス木原氏が香月を出迎えた。濃い眉毛の日焼けした顔だが、独特な雰囲気を持った、異才。そんな印象を受けたジェームス氏の理論は、談笑の中でも流石に鋭く、実践に基づく症例と、臨床実験の披露は、香月にとっても貴重な意義ある内容であった。その理論の中

で、香月が耳に止まった事がある。何故か、心に響くような気持ちになって、香月はまだ十分に頭の中で理論構築出来ないまま、半解の言葉に出していた。

「あゝ・ミスター・ジェームス木原」

「はい、何でしょう？香月博士」

「先ほどの理論はとても素晴らしい内容で、自分にとつても大変有意義でした。その中で、ある一節が妙に心に残るので、どう・お伺いすれば良いか考えて居りました。英語の表現が難しいので」

「OH！日本語でOKよ。香月博士」

「それでは・先ほどの理論の中で、条件反射と、反復訓練、そして集中学習と言う一節がありました」

「はい。理解が難しいですか？」

「いえ、凄く明解に解説されています、良く分かりました。集中学習と言う事について、もう少し詳しく聞かせて頂けたらと思うのですが。つまり、反復から学習した事を更に、集中学習へと移行して、その能力を更に高めると言う過程に於いての障害です」

「障害？その意味を理解し難いが・」

ジェームス氏は困惑した顔になった。

「申し訳ありません。まだ頭の中の整理が出来ないまま質問しました。つまり、反復学習では、知識として犬は認識していると仮定すれば良いのですね？」

「うむ・・・。知識、理解として見るのが正しいと言える。それだけ犬には高い知能があるのだから」

「この反復は、条件反射を高度化したものであつて、命令された事に対して理解出来ていると言う事ですね？」

「YES。その通りです。ほぼ完全に従うようになるでしょう」

「この時点で、犬は命令された事に忠実に、機械的に理解するのであつて、次の段階・・・教授の言われる集中学習とは犬が命令した事に対して、理解を示す段階と思つて良いのでしょうか？」

「大筋はそうです。しかしながら、私はその道の専門家ではない。君の求める質問に満足出来る答えを出すのは、難しそうな論理追求だね・・・ははは。それでは、少し視点を變えて、ある一定期間集中学習する事によつて、犬本来の持つ知能が、ごく稀な一例だが、教えた以上の理解を示すケースがあつたそうです。この集中学習とは、知能を高める訓練と解釈すれば、どうか？」

「良く分かりました。障害とは、理解力が定かでない犬が、集中学習で、混乱しないかと言う疑問でした」

「ははあ・・・やはり、その先まで見越しての質問だったか・・・。流星に君の視点は違ふね」

このアメリカ講演は、又香月に大きな一歩を残した。残り二日間の日程を自由行動として、掛川は、メリーの案内で、ニューヨークに先に出発する事となり、香月は、橋本・香織組と、一日を過ごす事になった。これは、香月に大きな関心を寄せているメリーに対する、掛川の気遣いでもあつた。・・・と言うよりも、掛川自身が、メリーに好意を持ったと言うのが正確でもあつた。後に掛川とメリーは結婚す

る事になるのだから・・・。

「よお！」

弾んだ声で香月が声を掛けた。足早に向かつて来るのは、橋本・香織の二人だった。

「どうも！」

明るい声で、橋本が言う。これまで楽しい旅の日程だった事の証明のように、二人とも華やかに会話が弾む。

「ねえ、どうだったの？講演」

香織が聞く。

「ああ、大成功だった。素晴らしい博士達とも出会えて、有意義な日程だったよ」

香月も明るく答えた。

「ねえ・・・香月さん。香織とも色々話したんだけど」

橋本が言う。

「うん・・・？」

「あのね、ここから近い所に教会があるのよ。知ってる？」

その言葉に香月は大きな声を出した。

「あ！ああ・・・そうなんだ！そうだったんだよ。俺は大事な事を言っただけじゃなかったね」

むしろ、橋本・香織の二人が顔を見合わせた。

「橋本さん、今から香織と結婚式をあげたい・・・立ち会ってくれるかい？」

「え・・・ええ。香月さん。貴方・・・私達の話を知ってたの？」

「え・・・？何の話？香織・・・突然だが、正式に俺の妻として、ここで結婚の誓いをして欲しい」
「は・・・はい・・・」

まさに以心伝心とはこの事。香月も香織も、全く同じ事を考えていたのだ。
香織の目から、大粒の涙が零れる。

「良かったわね、香織。ちゃんと、香月君は今度の旅行の意味を分かってくれた。友人として、これ以上に無い喜びだわ。私が二人を見届けます」

教会について、神父さんの前で、誓いの言葉を述べる香月・香織であった。香織の指には、香月が用意していた、結婚指輪が入れられる、香月の手にも。橋本京子が手を叩く。二人は、ここで、終生の誓いをしたのであった。(以下省略)

メリーは次の日に、香月達と合流したが、指に入れられている指輪を見て、すぐに悟った。

「おめでどう！香月博士、そして、香織さん」

掛川が、そつとメリーの肩に手を回した。メリーは、掛川の腕に少しもたれかかった。一日の出来事が、急激に運命を変えて行く。不思議な出会い。不思議な旅は実は、今から始まるのだ・・・。
アメリカから戻って来た香月は、出来上がった鳩舎に早速種鳩を移した。芳川も手伝っていた。

「古木を使って、大工さんも急ピッチでやってくれたよ。良い鳩舎になったよな、一男」

「うん。俺の設計通りにやってくれたよ」

「なあ・・何で現役最高選手鳩である、スプリント号を急に種鳩鳩舎に移すんだい？」

芳川が聞いた。突然の意外な選択・・誰の目にも明らかだった。

「頭が良過ぎるんですよ、この鳩。確かに今春のレースに間に合った調整が出来てれば、参加したでしょう。何しろこの鳩舎のエースですから。でも、無理ですよ。今春は今からじゃ間に合わないです」

「けど、カズ・エース号は一男の言う通り、二回の百キロ訓練をしたぜ。どうして、スプリント号には訓練をしなかったんだ？」

「うーん。香月系を固定化するのに必要だから・・と言う部分が大きいかな？」

「ふーん。競翔素人の俺だから、詳しい事までは分からんよ。ま、君の鳩だ。俺がとやかく言う事でも無いしな」

「それで、どうでした？これまでの連合会の成績は」

「ああ、立会いに二回行ったんだけど、川上鳩舎が連続優勝をしているよ。一男が出かけた三百キロ合同杯でも総合五位に入ってるし、総合十三位にも入賞している」

「やはり・・この勢いはペーパーマン系でも止められないか・・」

「いやいや・・。磯川鳩舎だったら、これまでのレースに全て上位入賞しているよ。他にも佐野鳩舎、

渡辺鳩舎、高橋鳩舎も良いよ」

「それは承知してるんだ。ただ・・・トップを取る鳩は血統・・・川上・磯川鳩舎には、そう言う鳩群が既にひしめいている」

「うーん・・・果てしない、競翔欲なのかなあ・・・やっぱり、一男もそうなのかい？」

芳川がぼつりと言った。

「浩ちゃん。俺も、川上さん達もそんな競翔はしていないよ。見ていてくれるかい？一緒にやろうよ、ね。」

「ああ・・・」

芳川にとっては、あの初レースの感動を香月が既に忘れてしまったのでは無いか・・・そんな疑問があった。それは自分自身の、人生にも影響を与えた、あの感動を感じ続けたい為に・・・だから、香月を手伝っている自分が居る。

あの頃の粗末な鳩舎からは一変し、素人目にも明らかに違う素晴らしい選手鳩達。一緒に面倒を見た、源鳩パバ号は今も健在だ。感動を貰った、初レース、初優勝の「ピン太号」も威風堂々として、種鳩鳩舎に居る。その陣容は当時と比べようも無い。しかし、この期間までの断片的な手伝いはあったが、ほぼ全般的な空白の中で、香月が繰り広げて来た、競翔の歴史を芳川自身は知らない。現実の鳩舎には、

無数のエース鳩達が存在し、そして、新たに建築された、選手鳩舎にはこれから作出された、雛達が収容される事になる。芳川が香月の留守中や、これまでの一ヶ月間を観察して来た、旧選手鳩舎の現役レーサー二十羽の中から、スプリント号を初めとする、キング号、クイーン号等一級の鳩達が、種鳩舎に移されるのを見て、何故か寂寥感が湧いていた。芳川はこの鳩群は、どんな雄姿を見せて帰還するのか、それを見て見たかったと言う気持もある。この時、芳川は香月にある提案をしたのだった。

「なあ、お願いがあるんだが、一男の所の旧選手鳩舎が空になったら、俺にくれよ」

「え・・・？」

香月は意外そうに芳川の顔を見た。

「俺もさ、その時に鳩を飼いたいんだ」

「浩ちゃんが望むなら、構わないけど・・・どうして・・・？一緒にこの鳩舎で、やる事は出来ないの？」

「勿論それまではやるよ。でも、一男が求める香月系は、俺には関係無い事だから。俺は俺の競翔を楽しんで見たいんだ」

「・・・浩ちゃんがそう言うなら。で？もう決めてるの？この鳩舎の中の鳩から」

「ああ。川上さんの血統の鳩が良いな。でも、それは、一男の所からじゃない。もう、入会届は出して来たし、川上さんからも旧主流の選手鳩からの仔鳩を貰う事になっているんだ」

「・・・驚いた。浩ちゃん・・・」

一つの流れが、少しずつ変化していた。それは、芳川の人生にも初競翔が大きな影響を与えている事を、示すものであった。

この会話の後、香月は川上宅へ向かう事になる。それは前夜、両親に打ち明けた、香織との結婚の報告であった。突然の事で昨夜遅くまで話し合った香月達であったが、とうとう根負けして、川上宅へ両親が行く事になっている。その川上宅でも、同様の会話があった。しかし、香織の強い意志には根負けした。両親が望むのは、二人が暮らす時期、環境を整えて・・・それは、世間一般の親と同様な思いからであった。

夕方到着して、和室に招かれた、香月一家と、川上一家が談笑していた。

「ははは・・・めでたい事で、祝福するのが親ですが、余りにも突然、事後報告となれば、やはり面食らうのが当然。お互い驚きましたねえ」

「誠に申し訳ない。ただ・・・二人の言い分を聞いてみると、我々が間違っているのかと言う錯覚を覚える。ただ、一男は、やつと自分の進む方向が見えたばかりの人間です。生計を立てるのは今からで、親としては、二人の同居は認める事は出来ない。そう言えば、同居⇨結婚ではない、婚約した二人が人生の出発を誓いあったのが結婚。そう言う形をまず求めての結婚ではないと言うのですから」

「親としては、色々世間体もある。結婚と言う儀式は、二人が考える程簡単なものでは無い。そっちの

披露宴については、二年待ってくれと言う。何故かと聞けば、生計を立てる器が出来てからだと言う。なら、今の婚約のままの形で良いじゃないかと言えば、やはりそうじゃないんだと……。昨夜から同じ問答の繰り返しですよ。無論、この結婚については、我々だって、祝福するし、こんなに理解ある両親はきっと他には居ない筈……。ははは」

川上氏はそう答えて笑った。

「お父さん、川上香織としてでは無く、香月香織として生きる。それが私の一番の幸せです。お願いします」

「俺はまだ半人前の人間ですが、人生のパートナーとして、香織さんを選びました。終生の誓いをしたからには、この二年間で、必ず、皆さんの前で、堂々と結婚披露宴をしますから」

「・・・で・・・？それが、籍を入れる事にどうしてなるのかな？」

川上氏が聞く。

「はい。籍を入れて・・・ただ、俺には、人生設計がまだ出来ていません。同居するには、後二年待って欲しいのです」

「それが・・・分からのだよ。今の婚約の形と比べてどう違う？」

そこで香織が言う。

「お父さん、川上香織でこれから生きる二年と、香月香織となって生きる二年は、全く違います。それは、もう婚約の関係では無くて、彼を支えるパートナーとして生きる事だから。私達は浮付いた気持ちで、突然挙式をしたのでは無いの。私もこの二年で、自分の道をしっかり見つけるつもりだから」

「ふう・・・昨夜から何度問答した事だろう。どうですか？お母さん達の意見は」

川上氏が困惑しきった顔で、言った。

恵子さんが言った。

「この娘を今日まで見てきて・・我ままで、負けん気が強くて・・でもね。香月君と言う最高の男の子が現れて。私達はきつと、おめでとう！つて叫びたい位の心境なのよ。それは、香月君のご両親も同じ事でしょう。こんな良縁は無いわ。だからこそ、親として精一杯の祝福をしてあげたい、その形を求めたい。けど、この二人は、そんな形よりも、もう同じ空間の中で、同じ夢を歩んでいる。それは、もう純粹で、その気持ちも私達は分かってあげたい・・ねえ、貴方、香月さんご両親。二年間ですが、花嫁修業に出す気持ちで、それぞれの環境が整うまで、披露宴を延期して、見守りませんか？」

「そう言って頂ければ。親として、無常の喜びです」

香月の両親が手をついた。川上氏もとうとう、最後に認めた。それは父性を持つ感性であろうささやかな抵抗でもあった。

気持ちでは十分に理解していた事であった。この日より、香月一男・香織の人生が始まる。

この頃、選手鳩鳩舎内では、紫竜号が猛然と暴れていた。中に居る二十数羽の鳩達に突然襲い掛かっていた。その様子に芳川が慌てて、紫竜号を捕まえようとしたが、激しく抵抗し、芳川の手からは血が滲んでいた。

「な・・何なんだよ・・この鳩は」

芳川は紫竜号に、恐怖心すらこの時抱いた。

香月が戻って来たのは、深夜であったが、芳川が帰宅を待ちかねていたように家に訪れた。

「ど・・どうしたの？浩ちゃん」

驚く香月だった。

「遅くに済まん。少し話がある。時間をくれよ」

「うん・・ま、上がって酒でも飲む？」

香月の部屋に入ると、すぐ母親が酒とつまみを持って来た。そのまま、もう寝ろよ・・母親に言うと香月は芳川と向かい合った。

「で・・？どうしたの？浩ちゃん」

「今日ね、選手鳩鳩舎で、凄い争いがあったね。どうも、紫竜号が中心に暴れたようなんだ」

「え・・？それで？」

「とにかく、分けたんだよ、紫竜号と他の鳩。鼻コブから血を流している鳩や、目尻を腫らしている鳩も居た。止めようとして、ほら、紫竜号の嘴にやられてさ、この通りだ」

芳川は自分の手を見せた。真つ赤な切り傷と、蒼染みた痕があった。

「むう・・こんな騒ぎは無かったのに、今まで。何でだろう・・」

「とにかくさ・・あの紫竜号ってのは、怖いよ、俺。何て言うんだろう・・意思を持っているような底知れぬようなオーラを感じるんだ」

「・・これまで、殆ど紫竜号は無意識の中で、本能に導かれるまま競翔に参加して来たんだ。でも、それは、自分でもコントロール出来ない才能を放出するように。けど、今、紫竜号は自身の力で変わるう

としている。その時なのかも知れないね」

「そんな・・あんな鳩に人間のような感覚があるとは思えないが・・あ・・あれ？今気づいたけど、一男、お前、結婚指輪なのか？それ」

香月の指に入っている指輪に芳川は気づき、言う。

「ああ・・」

「ふうん・・とうとうあの美女と一緒にになったのか。すると今日はその話だったんだね、悪かったな、こんな時間に」

「ううん。浩ちゃん、こつちに戻って来てくれて、又一一緒に鳩を飼えるなんて夢のようだよ。俺の方こそ、色々面倒かけて悪かったよね」

「あのさ・・あの紫竜号は、一男にとって、不吉な予感がする・・これからもあの鳩を競翔に参加させるつもりなのか？正直に聞くよ？」

「・・二年・・香織と一緒に住むのを待ってくれと言った。俺がその二年待つてと言ったのは、紫竜号の使翔の為だ。その為、突然だったけどスプリント号には早い決断をした。まだまだ現役の、一級の競翔鳩を今引退させるのは惜しいと思うし、選手鳩としての優秀さも認識しているが、引退させるのは、その体型や、骨格・・香月系を作って行く為に、種鳩としての必然性が、あるからなんだ。でも、紫竜号には、才能を持て余している自身のジレンマを強く感じるんだ。超長距離鳩としてのその資質を、

俺は開花させてやりたい・・・」

「そうか・・・なら言おう。川上さんの家で、色々聞いて来た。香月君がこれからも紫竜号を使翔させるというなら、その参加レースに自分の鳩舎の主力を集中させると」

「えっ・・・？」

香月は、少し驚いた。

「誰にも、未来を予想など出来はしない。その冒険に紫竜号の身を置くと言うなら、全力で阻止すべきだ・・・とね」

「何で・・・？」

香月は視線を上げて、淋しそうな表情になった。

「川上さんが言うには、それは、香月君の為でもあり、紫竜号の為でもある。競翔に聖域を作るとするなら、犯してはならない事がある。それは、人間が作った勝手なルールで、その鳩を評価してしまう競翔界の中で、香月君のやろうとしている事は恐らく紫竜号にとって過酷なものになるだろう・・・って事。

何故なら、俺は川上さんに紫竜号を見せた。そして、川上さんは、紫竜号を優しく抱いて・・・そして涙を零した。何故だか分かるか？一男。こんな深い傷を負って、それでも競翔と言う危険な冒険の旅に向

かわされる、紫竜号の運命に泣いたんだよ。何でこんな傷を負ってまで、紫竜号は羽ばたかねばならない？俺は、その時思ったんだ。一男は、心底競翔家になっちまったのかなって・・・」

「・・・浩ちゃん・・・今は・・・俺の気持ちを理解して貰おうなんて思わないよ。でもね、一つだけ聞いて。俺は自分の鳩舎のピン太号や、グランプリ号、スプリント号、キング、メッシュ・・・。どの鳩よりも今は紫竜号を愛している。そして、紫竜号は、俺に託くされた優しかった白川のじいちゃんの大変な宝なんだ。失うのが怖いんだ・・・だから・・・だからこそ・・・その為に俺は鬼になって訓練をしているんだ」

涙声になって、反論する香月に、芳川は今日のところはそこまでにしようこの話は・・・と言ってこの夜は帰った。だからこそ、競翔に参加しない方を選んだ川上氏の心情に、芳川は同感した。何故、そんな辛い選択を香月が選ばねばならないのか・・・今、何故紫竜号が暴発しているのか・・・不思議な運命の中に自分も巻き込まれている事を感じては居た。

鳩舎内の紫竜号は、無性に苛立っていた。それは、今春自身との決着をつけようと思っていた、スプリント号の突然の種鳩への引退にある。むしろ、その引退を誇りにさえ思う、スプリント号への怒りと、自身の持つて行き様の無い気持の矛先が、鳩舎内の全選手鳩達に向けられたからだ。残るエース鳩は、短距離のカズ・エース号や、若い鳩達だけ。紫竜号は、自身の底から湧きあがるような、どうしようも無い激しい情念の中に居た。

朝早くから起きて来て、鳩舎内の選手鳩の一羽、一羽を丁寧に見た香月だったが、最後に紫竜号に目を向けた。薄暗い鳩舎内から、香月を見下ろし、爛々と光る目で、射抜くように見つめる紫竜号。

「・・・何時からだろう・・・。紫竜、お前が俺に敵意に近いものを持ったのは・・・」

香月は紫竜号を見つめながら、呟いた。少なくとも、あの事故までは、紫竜号の目には、敵意は無かった。その目は、白竜号の、あの厳しい目さえ凌いでいる。香月は紫竜号には、この朝、触れなかった。

そしてその数日後、日下協会理事長より、六羽の種鳩候補が送られて来た。どの鳩も素晴らしい記録鳩ばかりだった。川上氏と一緒に触診をする香月だった。

一番目 名をファースト号 BCオス

百キロ二、五位 二百キロ優勝、三位 三百キロ二位 四百キロ優勝 五百キロ三位 七百キロ二位
(総合四十六位) 千キロGC優勝(総合三十九位) 五位(総合百八位)

二番目 名をセカンド号 Rメス

二百キロ二位、三百キロ四位、四百キロ二位、五百キロ優勝、六百キロ三位、七百キロ四位、千キロC
H優勝(総合八十二位)

三番目 名をサード号 RCメス

百キロ優勝・二位、三百キロ三位、五百キロ五位、六百キロ三位、八百キロ優勝(総合二十九位)、千

キロ記録、千キロ優勝（総合六十八位）

四番目 名をフォース号 RCオス

四百キロ二位、七百キロGP二位（総合六十三位）、千キロCH優勝（総合二十四位）五位（総合百八十九位）

五番目 名をファイフス号 Sオス

百キロ三位、三百キロ三位、四百キロ六位、六百キロ二位、九位、七百キロ十位、千キロGC優勝（総合七十三位）

六番目 名をシックス号 BWメス

六百キロ二位、七百キロGP三位（総合九十八位）、八百キロKC二位（総合四十六位）、千キロGC優勝（総合十九位）

年の順に、ファースト号、次にセカンド・サード号が次年度産、フォース・ファイフス号が次々年度産、最後の鳩がシックス号と一番若く、木下氏が鳩レースを中断した年にあたる。ファースト号が、ピント・グランプリ号の同年産と、非常に若い鳩ばかりであり、木下系の最高選手鳩達でもあった。川上氏が唸った。

「・・・これ程までの一級選手鳩が贈られようとは・・・体型・この成績。最高の鳩達だね」

「まさか・・・ここまでの鳩が俺の鳩舎に来ようとは、予想だにしていませんでした」

「この鳩達の仔鳩をそのまま競翔に使えば、活躍するのは保障されているようなものだね」

「あ・・・いえ、この鳩群は、俺の鳩舎の第一交配源鳩群になります。この子孫・・・何羽が残るか分かりませんが。全てストックして、再来年から仔鳩を作出しますから、その仔鳩達が三年後に使翔する事になります」

「ううむ・・・。それが、君の現役最高レーサーのスプリント号を引退させると、関係がある事なんだね。しかし・・・一競翔家としては早く結果が見たい、そう思うのは、卑しい考えであろうか？」

「いえ・・・凄く当然であって・・・しかし、それは即ち、日下系を俺が使翔するのであって、香月系ではありませんから。」

「その考えには賛同したい・・・だが・・・私は出来有れば・・・白川系との同一連合会での活躍も見たい・・・そう思うのは、私の感傷だろうか・・・」

「全く・・・同じ事を俺も考えました。そして・・・それは・・・日下氏も同じでした。実は、今秋に間に合うように、日下氏は日下ピロ号の直仔を作出されています。その鳩達がこの隣にある、新築の鳩舎に収まるのです。管理は芳川さんがします。」

そこまで聞いて、川上氏の目が少し潤んだ。

「そうか・・・君はそこまで考えていてくれたんだね、嬉しいよ」

「いえ・・・俺もこの話が実現するなんて思つてなかつたですから、日下さんのご提案に深く感銘致しました」

「素晴らしい競翔家だね・・・。私からも是非感謝申し上げたい。・・・ところで、今日君に呼ばれて立会いに来たついでに、私から少し話もあつたんだ」

「・・・それは紫竜号の事ですね？」

「うむ・・・君はどう考えているのか、現時点での考えを聞きたい。それは芳川君から聞いた、紫竜号現役続行と言う、君の意思を再確認した上での事だ」

「その前に・・・何故紫竜号について、それほどまでに川上さんご自身が、使翔法に対する疑問を持たれるのでしょうか。一体・・・何が白川のじいちゃんと川上さんの間にあつたのでしょうか？それをお聞きしたいのです」

「敏感で鋭敏な君の事、言わねばならない時が来たような気がする・・・。少し良いかな？君の家の中で話そう」

「はい・・・」

香月は何かを感じていた。それは、紫竜号の話をする時の川上氏の顔が、憂いを含んだ表情になって居る事。それは、これまで、香月が語り、川上氏から語られた別次元の話であるように思えたからだ。

芳川に宣言するような、紫竜号阻止の意図はどこにあるのだろうか・・・と。

「俺はこれまで、お伝えしてきました。それは、スプリント号が若くして、種鳩になるのと、紫竜号現役続行とは、比例しない話なんです。スプリント号はこのまま春の競翔に出すより、香月系主流源鳩、全ての基礎鳩として欠かせない鳩だからです。だから引退させました。ですが、もう完成されているスプリント号に比べて、大怪我を負いましたが、紫竜号は、まだ競翔鳩として、未完成。その能力の半分も出し切って居ません」

香月は少し悲しそうな顔で、川上氏の顔を見つめた。それは師匠の同意を求めるような、視線でもあった。

「何から・・・話そう・・・紫竜号については、飼い主である、君が一番良く知っている筈だ。そして、それは君の言う通りだろう。敢えて、白川氏の遺児であるとか、至宝とかの言葉は使わない。それは、別次元での話になるからだ。いっそ、あの怪我で、紫竜号が、現役引退してれば、私はもう何も言う事も無かった。その訳は白川氏がまだ得られぬ、白竜号、ネバー号との仔鳩の将来さえも危惧して、君に託そうとした事、競翔家としての果てしない欲望の末に、辿りついた途方も無い夢の中へ迷い込んでしまった・・・魔道に君を巻き込みたくない・・・そんな感情を知っているからだ」

「途方も無い夢？魔道・・・？」

「白川氏は、自身の競翔の生涯の中で、一羽の最高傑作を生み出してしまった・・・それは君が何度も認めた、ネバー号の資質である。それは、彼自身が得た、数多い選手鳩のどれもが、色あせるような、最高傑作でもあった。事実、その稀世の資質は証明されている。ところが、君はその資質さえ、一瞬で見抜き、白竜号さえ、凌駕すると言った。その時、氏は私に託したのだ。「もし、白竜・ネバーの仔が非凡であったなら、お前が香月君を魔道に迷い込まぬよう、見守ってくれ」・・・と。そして、その危惧通り、紫竜号の資質は、恐らく、ネバー号すら、超えてしまったような底知れぬ力を秘めている。磯川君、私、そして、君がそれを見抜いている筈なんだ」

「・・・ネバー号と同世代、時代の・・・そう言う次元的なものとは、比べようがありません」

「いや・・・君がはつきり認識してなくても、それは、君が使翔すると言う限り、きっと、災いをもたらすだろう・・・芳川君は、紫竜号を怖い・・・そう表現したよ。紫竜号には得体の知れない意思が支配しているような気がする」

「・・・教えて下さい・・・魔道とは何ですか？じいちゃんの危惧した内容は何ですか？」

「ネバー号を得た白川氏は、この一羽を中心とした、特殊な猛訓練を繰り返す事になる。そして、その手腕は、今、君が行うような奇抜だが、科学的なものでもあった。その結末は、その時期の白川系の選手鳩が、ごく少数しか現存していない事実でも承知の事と思う。その中で、君が指摘する通り、本来超長距離鳩である、ネバー号は、比較的高分速の出る、GCHレースに集中する事になる、その非凡さは千キロ以上八回連続連合会優勝の記録を見ても明らかだ」

「・・・でも、それは、白竜号がGNで・・・」

「ああ、伏兵であった白竜号は、訓練によって開花した怪物だ。だが・・持つて生まれた天分の才は、ネバー号にある。それも計算された訓練によって、鍛えられた稀世の鳩へと育てて行く過程が見える」
「何故、同レースに出さなかったのでしょうか？そこに川上さんが言われようとする謎があると思います」

「見抜いた通りだ。白川氏には、その時ネバー号しか見えて無かった。それは、ネバー号による千キロ以上の大レースの完全制覇、グランドスラムの目標によるものだったからだ」

「ま・・まさか一羽の鳩で？」

「ああ・・そのまさかだ。白川氏は稀世の鳩ネバー号を使翔して、千キロ以上の国内最大四レース、全て一桁優入賞のグランドスラムを狙っていたんだ」

香月の顔は、青ざめた。

「そ・・そんな事を・・？」

「氏が恐れたのは、君が第二のネバー号を手にする事。そして、それは、競翔家を魔道に引き込むキートとなる。君にそんな事を味合わせたくないと言う気持だった。交配を許可したのも、敢えて君が仔鳩など手にする事も無かるう、又卵を産んでも、無性卵・・そんな予想を覆すような、君は天才的手腕を發揮して、白川氏の思惑すら覆そうとしたからだ。事実、紫竜号は、ネバー号に成り得る鳩として生まれ育って来た。既に、百キロ文部大臣杯全国総合優勝、七百キロGP総合八位、千キロGC総合九位と超

非凡な成績を上げている、その記録は不得意な距離に向かわざるを得なかった、ネバー号を凌ぎ、GNレース二年連続総合優勝を達成してしまった、伏兵GCH白竜号に打ち砕かれた白川氏の野望・晩生ながら運命のような二年連続快晴開催となった、GNでの幸運とも言える高速レースの結果に、まだまだ、これから本来の力を發揮出来る鳩でありながら、引退してしまった白竜号の生涯の悲運もある」

「なんと言う・・・」

香月の目から涙が滂沱と零れる。そして・

「ああ・・・なんと言う事。ネバー号の最初のGCHレースが悪天でなかったら、又鍛え上げられ、その理知的なるがゆえの方向判断力がなかったら、恐らく栄冠はネバーの頭上であった筈。なんとと言う運命、巡りあわせなのだろうか・・・」

「え？今・・・何と言ったのか？」

川上氏が驚き、香月の顔を見た。

「白竜号は若鳩。その凶抜けた体力であるが故に、好天候の中、快速で飛び帰りました。一方ネバー号の参加レースは悪天、突出した方向判断力ゆえに、その幅広い副翼で、高空から飛び帰ったに違いありません。ですが、迂回を重ねた結果として、白川さん見れば、結果として不本意な成績であったのでし

よう。しかし、その延べ距離、帰舎時間を計算すれば、間違いなくダントツの一位であった事でしょう。人間が作ったルールの中では、優勝では無かつたけれど……。しかし、それも運命なのでしょう。ネバー号は又……。既に、その時点では鍛え上げられて、殆ど体を完成させていた。だからこそ、ネバー号にとつては不運でもあったのだと思います」

「君は……。それを見抜いていたのか……。じゃあ、だからこそ」

「仰る言葉は理解しています。でも……。紫竜号は白竜号でもネバー号でもありません。紫竜号なのです。そして遅咲きのその資質は、白竜号の血筋を引いていると見え、今から力を発揮します。俺は、紫竜号の資質を引き出そうとはしていません。むしろ、逆に資質を抑えこもうとさえしています。何故なら、紫竜号を使翔するのは、白竜号、ネバー号に約束した、俺の務めのような気がしてならないんです。そして、その逆作用は、紫竜号をその資質故に失いたくない、俺の精一杯の抵抗なんです。そんな気持ちと必死に戦いながら、白川のじいちゃんの悲願への無念を引き継ごうとは俺は思わない。競翔の結果を追い求めて、紫竜号を使翔しようとは思わない。そんな俺の使翔がもし間違いと言うのでしたら、紫竜号を川上さんがお引き取り下さい。お約束します」

川上氏の目からも涙が零れた……。この日、香月の本心を初めて知った事で、川上氏もその香月の心情を理解した。その気持ちがある限り、香月が第二の白川氏にはならないと思った。だが……。この許可が、香月を、そして紫竜号を翻弄する岐路に変わろうとは。この時点では誰も思わなかった。

この春季四百キロレースになって、芳川が香月鳩舎の代理として、二十四羽の鳩を持ち寄り場所へ持

つて来ていた。その芳川が新人と言う事で、実はこの籠の中に紫竜号が参加させられているのを、他の会員達に気づかれる事も無かった。香月は、契約する製菓会社との打ち合わせもあつて、毎日多忙な日々を過ごしていた。紫竜号が香月にとつて、災いをもたらす鳩なのかと言う事を危惧しながらも、芳川は香月を見守つて行こうと決心をしていた。この時磯川が、自信満々に連れて来た鳩がパイロン三世号・奇しくも同放鳩車のブロックに入れられていた。

連合会主催の単独放鳩地であるこの四百キロレースは、参加鳩舎、鳩数も少なく、九百羽余りであったが、その中では全国的に名が知れ渡り、銘鳩大鑑にも記載されているパイロン三世号は、他の鳩を圧倒するような威風堂々のオーラを放っていた。紫竜号は、パイロン三世号に近寄つた。そして、眼光鋭くこう言い放つた。

「よお・・・このレース、俺と勝負だな」

「おっさん・・・スプリント号の所・・・見かけた顔だが・・・それより、あんたの所のスプリント号はどうした？」

「ふん・・・引退しちゃったよ」

「そうか・・・悪いが、俺のライバルは、スプリント号と、タンギ号だけ。おっさんも、精々頑張るんだな」

パイロン三世号は意にも返さなかった。

紫竜号の当面の気持ちの切り替えは、パイロン三世号に向けられた。このレースを制する鳩は、重要なこの後のレースを左右する。それは、紫竜号自身が、敏感に感じていた。

この時、川上氏と芳川が、香月との主役交代の形で、少し離れた所で会話をしていた。

「ああ、この前君は不在だったが、日下さんの鳩が来たので、立会いついでに、香月君と話をした。危惧は覚えるが、彼の考えはしつかりあるので、私も賛成する事にしたよ。少なくとも、白川氏のような境地には至っていない」

「・・・今はそうかも知れません。ですが、一男自身、それ程まで、白川氏が危惧した立場には今居ないとしても、何かが怖い・・・見えない意思があるようで・・・紫竜号の為だけに、二年間競翔を続けると言う一男の気持ち、純粹であれば有る程今後の不安の方が大きいです」

「見守ろう・・・君のような兄貴分がいてれば、きっと大丈夫だよ」

不安な気持ちの日増しに強くなつて行く芳川だった。身近に居るからこそ感じる、香月が紫竜号に賭ける思いが伝わってくるからだ。

その不安の第一幕が、スタートした。それは、紫竜号が屈辱的な試練を浴びるレースでもあった。曇天の空、高く舞い上がるとうする紫竜号だったが、その体は意思に反して、重く動かなかった。

「ど・・・どうしたんだ・・・」

その横目で、

「ふっ・おっさん、せいぜい頑張りな」

パイロン三世号は、一気にその差を離すと、視界から見えなくなった。

重い体は、紫竜号の傷を癒す為に香月が筋肉訓練を施した為だ。同時に香月は、長距離を照準に、短距離から徐々に体を絞る事に目標を置いていた。その狙いは、紫竜号の浮力を抑止する事。紫竜号は、体から湧き上がる香月に対する憎悪の炎で一杯になった。しかし、その類稀な方向判断力で、突如紫竜号は真横に進路を取った。山超えのルートを辿るのだ。体は重い。だが、今の紫竜号には執念のような感覚があった。俺を潰す気なら、挑戦してやるぜ・紫竜号はそう思った。

紫竜号は直角にコースを取って、直角三角形のような岐路コースを辿る事になった。三角形の斜辺の距離が短い事は、当たり前であるが、その斜辺はじぐざぐで山道を縫うように進む為に、紫竜号が選んだコースと比べて実は遜色が無かったのであった。紫竜号は本能で、瞬時にそれを判断したのだ。それは、母鳩ネバー号から受け継いだ天才的なレーダーと、勇猛果敢な白竜号の気性でもあった。紛れも無く、紫竜号は英傑二羽の血を濃く受け継いでいるのだった。だが・先頭を飛び帰る、パイロン三世号は、当代一のこれも英傑、スピードボードだ。パイロン三世号は他鳩群を大きく引き離し帰路を急いでいた。この時の紫竜号との距離差は、実に三十キロも離れていた。互いに山を挟んで、見えない戦いが



繰り広げられていたこの頃、香月鳩舎では、芳川と香月が話し合っていた。当日、日下ピロ号と、アメリカチャンピオンのステッケルボード系のメス、カリ―号との一腹目の仔鳩二羽が巣立ちを迎え、到着したからだ。新しい選手鳩舎に入れられる二羽。芳川が競翔家として、デビューする、最初の管理鳩であった。興奮して、多弁な芳川がそこに居た。

「うーん。目が良いよなあ・・・。これこそ、当代一の仔鳩だろう」

「予想外に小振りだから、期待が持てそう」

「小振りと期待がどう比例するの？」

「間違い無く、超長距離系だと言う事だよ」

「ふーん。紫竜号とは違うねえ」

「あれ？紫竜号の今はそうんだけど（体が大きい）、仔鳩の時は小さかったんだよ」

「そうなの？すると、紫竜号は超長距離鳩な訳だね」

「そう、典型的な」

「今日の四百キロには、磯川鳩舎のパイロン三世号が参加されていたね。川上氏は主流を五百キロに持って行くようだ」

「良かった・・・」

「何が・・・？」

芳川は、その言葉の意味を追い切れない。

「紫竜号は、自分の前を飛ぶ鳩を許さない、常にトップを戻る鳩。でも、超スピードバードのパイロン三世号とは比べようも無いから・・・今の体では」

「そう・・・敢えてしたんだろ？一男が」

「うん、敢えて」

「分からないよ、一男の紫竜号に対する異常な訓練、そして、紫竜号の人間不信とも言えるような、抗戦的な態度」

「俺にも分かってないんだ。紫竜号にどうやれば良いかと言う、その答えが」

「まあ、その話は置いといて・・・とにかくさ、一男の助言は得るが、任せて貰えるんだね？こっちの管理は」

「うん。浩ちゃんが、又自分の鳩舎を持ちたいなんて言い出さないようにね」

「はは。そうなりたいね。これ程の鳩を見てれば」

初めての競翔当時そのままに、再び一緒に空を見上げる二人だった。刻一刻と鳩達が帰舎する時間を迎えていた・・・。

もう空を見上げる時間帯になっていた。今年の初参加レースになる、香月鳩舎の全鳩が参加されたこの四百キロレース。短距離のエース「カズ・エース号」も、勿論参加されていたが、長距離鳩有利のこ

のレースでは、期待はされていなかった。この四百キロレースは、GPやその後続く、長距離レースのステップ。短距離鳩には不利と言える地形でもあった。その二人の頭上に姿を現したのは、昨秋の記録若鳩の一羽だった。

時間は一時五十分。まあまあ、の帰舎タイムだった。

「早い？」

芳川が尋ねる。

「どうだろう……。良い線には言っているとは思うけど。何しろ、磯川鳩舎が主力を投入しているからね」

香月は、明解な答えは出さなかった。

その一番目から、間髪を入れずに戻って来たのは、紫竜号。

芳川が声を上げた。

「おお！紫竜号！」

香月が驚く。

「え・・・？」

香月がゴム輪を外して、タイムをしたが、紫竜号を抱いたまま、じつと眺めている。

「どうした？一男？」

芳川が尋ねる。

「・・・とんでも無い奴だ。紫竜号。又・・・無茶したな」

「何が？」

「・・・気流に乗れない体だから、想像するに、この時間に戻れるって事は、全く別のルートを辿って来た事になる」

「何故分かる？」

「主翼を傷めているから・・・」

香月は紫竜号の左の主翼を芳川に見せた。大羽の先端が裂けていた。

「本当だ・・・」

「断定は出来ないが、飛び立つ時に他の鳩と接触した事も考えられなくは無いけど、それなら、この体重増の体では、エース級の若鳩にはスピードでは敵わない筈。紫竜号は別ルートから、恐らく山頂からの下降流に乗ったに違いない」

「そこまで見抜くのか・・・競翔家と言うのは。本当に科学者だな、お前は・・・」

そう言う話の間に、三羽次々と戻っては来たが、タイムはしなかった。夕方になって、香月に又医薬品会社の担当から電話が入り、芳川が開函場所に行く事になった。合計、二十四羽中二十二羽が当日帰舎していた香月鳩舎であった。

結果は、早く集計が終わって、芳川が改めて、香月鳩舎の代理人と言う事で会話が始まった頃、

「えー結果は磯川鳩舎が、百キロレースから続く五連勝です。優勝鳩はパイロン三世号です」

「凄いなあ・・・パイロン三世号は幾つ目の優勝なんだね？」

高橋会長が磯川に聞いた。

「連合会では、七つ目・・・かな。総合は一つ」

「現日本競翔界で、最高の競翔鳩だよ」

小谷氏が形容した。

「そんな事は無いですよ。今日のレース、四位に入賞している、香月鳩舎の紫竜号が居る」

芳川はドキッとしました。

「確か・・文部杯全国優勝の鳩だったよね」

渡部氏が聞いた。

「そうです。GP総合八位、GC総合九位の鳩です」

磯川が答える。芳川は、磯川がこれ程までに紫竜号を評価している事を知って、少し驚いていた。この世界に足を踏み入れたばかりの芳川には、まだ会話の中心が見えなかった。

「確かに素晴らしい。けど、パイロン三世号の成績には及ぶまい、今期の成績次第では、CHの称号も

検討されているじゃないか」

小谷氏が言うが、磯川は首を振りながら答える。

「パイロン三世号は自分でも自慢するんじゃないですが、最高の出来の鳩ですよ。でも、紫竜号とは比べる次元が違うんですよ。確かに成績はパイロン三世号の方が良いかも知れませんが、しかし、紫竜号は、過去全ての参加レースに入賞している。それも全て優勝を狙える上位。参加レースは少ないけど、この入賞率は頭抜けている。更に、この鳩には体を覆い隠すような副翼と、飛びぬけて長い主羽がある。俺が思うに、秘めた力には、計り知れないものがあると見ています」

そこへ川上氏が、参加した。

「随分・・磯川君は、香月君の鳩を観察してるんだねえ」

「川上さんはどうですか？そう思いませんか？」

磯川が聞く。

「今や・・連合会ではCH、GCH、GCH、GNレースの三大レースに一桁入賞を果たす勢い。確か

に紫竜号は素晴らしい。その通りかも知れないが、あくまで、競翔鳩は資質よりも結果で判断される。と、なれば、紫竜号は今、君の使翔するパイロン三世号と比べては、下に位置しよう。ま・君が注目するのは、結構なんだが、今年の私の鳩舎にも、西コース千キロ一桁入賞の鳩群も居る。次の五百キロには私も主流を参加する。君も注目してくれるかな？」

わはは・会員達の間が和んだ。確かに・・・そう言う意味では、紫竜号は、GP総合八位が光るだけで、GC総合九位の成績では三大レースと比べると、評価点はやや低く、非凡ではあるが、これらの鳩群と比べては幾分見劣る成績でしか無かった。

その中で、芳川が帰り際に川上氏に耳打ちした。

「・・・ほお・・・では、今期、この後の紫竜号の参加は、微妙なのか？」

「ええ・・・主翼の二枚を傷めていますので、そんな事を言っていましたね」

「・・・ふうむ・・・紫竜号には、先天的にトップを義務付けられるような、そんな宿命があるのだろうか。」

常にトップを形成する血・・・それは、ブレーキをかけた続ける香月の目論見とは相反するものだった。紫竜号は悔しくて、鳩舎内で喉をぐうぐうと鳴らしていた。同鳩舎内の四百キロ二位鳩。のちのアルマ号に負けた悔しさも、手伝っていたからだ。

「俺の実力はこんなもんじゃない。何故主人は俺を鞭打とうとするのだ・・・」

その言葉に、カズ・エース号が言う。

「スプリント号の言葉を思い出したらどうですか？」

「何だと？」

紫竜号が喉を鳴らした。

スプリント号は、種鳩鳩舎に移る事を誇らしげに言った。

「紫竜さん、俺はどうやらあっちへ移される様だが、あんたがあっちの鳩舎に移る事は決して無いだろう。期待を背負って競翔に参加するのは、あんたには苦痛だろうが、俺は自分の使命を全う出来る喜びで、それを果たして来た。あんたはどうだ？一度たりと、主人があんたを喜んで迎えてくれた事があつたかい？思い出して見るが良い。俺は知ってるんだ」

と・・・

初レースから、今日まで、紫竜号が帰舎して、にこやかな顔で香月が迎えた事は確かに一度も無かつた。

「どうです？今日も迎えてくれましたか？」

「うるせえ！若造！」

このレース、カズ・エース号は自鳩舎の中で、四番手に戻った。香月は嬉しそうな顔で、迎えた。のちのアルマ号もそうだ。賛辞を送ってくれた。紫竜号はどうだ？選手鳩にとって一番大事な羽を傷めて、例えトップ集団に戻ろうとも、彼等のように主人は評価してくれない。この先のレースをふいにしてしまったかも知れないのだから・・・。

芳川が家に戻って来ると、香月が待っていた。

「御免ね、浩ちゃん。無理言って」

「いやいや、色々勉強になったよ」

「で？今日の結果は？」

「ああ、君が、二位、四位だった。優勝は、磯川鳩舎で、あのパイロン三世号だったよ」

「流石だよ、最高の仕上がりの状態だ。現役最高競翔鳩だろうね」

「皆もそう言ってたよ。でも、磯川君は、君の紫竜号とは比べられない・・・そんな高い形容をしていた」

「えっ・・・磯川さんが・・・？」

「ああ、資質、成績。結果として、パイロン三世号が評価されるが、紫竜号の次元はもっと高い所にあ

るのでは？そう言う最大限の評価だよ」

「一流の競翔家だからね、彼は。紫竜号の生い立ちに敏感に迫っているのかも知れない」

「少し、寒気がしたよ。川上さんが茶化してくれたんで、場は持ったがね。でも、今年は、もう駄目なんだろう？紫竜号は」

「うーん。厳しいよね、今の状態じゃ。この鳩だけは、俺のデータにまるで入らない。自分が間違っている気がいつもするよ」

「川上さんは一男を天才競翔家と言っている。俺も見ていてそう感じるが、紫竜号に関しては、磯川さんと一男の認識は、まるで同じ。そう言う意味で、やはり別次元の鳩なんだろう。一男が翻弄される程、やはりこの先俺は、不安を感じざるを得ない」

芳川が自宅に戻って、香月が、鳩舎の中へ入る。

「紫竜号・・・お前に、俺の意思が通じるのは何時の事だろうね」

紫竜号は、香月を見下ろし、爛々と輝く目で、睨んでいた・・・。

次の週の五百キロレース。香月は今期初めて自分で、持ち寄り場所へ出向いていた。すぐ人だからが出来たが、香月が持ち込んだのは、カズ・エース号を初めとする、十羽の鳩達であった。川上氏はこのレース、二十連合会総合レースとなるのだが、大羽数参加で、八十九羽もエントリーしていた。今期の

川上氏は、短距離よりも中距離から徐々に集中して、狙っているような・・そんな考えが見て取れた。香月は短く会釈しただけで、すぐ閉函規正、そして放鳩車は出て行った。

「寄るかね？」

川上氏はそう言ったが、香月は、

「いえ、戻って書物の整理がありますので、今日は帰ります」

「そうか・・。」

佐野が早口で、香月に告げる。

「凄いよ・・川上鳩舎、長距離鳩の主力を全部このレースに集中させているよ。俺もタンギ号を参加させているけどね」

「新放鳩地のせいですよね」

「ああ、もの凄い羽数になるんじゃないかな。最終的には二十五連合会になって、二万三千羽は超すよ
うだ」

「そうなんですか！それは凄いなあ」

「何で、君は四百キロに全部持つて来たの？」

「調整が、そこしか無かったからですよ。何しろスタートが四百キロなんで」

「色々大変そうだね。ま、明日は天気も良さそうだしね」

そう言つて、この夜は帰路につく香月であつた。明日は芳川も、帰舎を同時に待つ事になる。

連続投入となつたカズ・エース号だが、今期のこのレースで、引退。やはり種鳩として鳩舎を移される事に決まつていた。四百キロレースでは、この鳩が初めて着外に沈んだが、短距離の銘鳩に位置するような素晴らしい成績をこれまで収めていた。五つの優勝、一つの総合優勝。近未来の競翔は、中距離主体になつて行くだろう。香月、川上氏の一致した意見だつた。だが、香月は自ら、超長距離系を目指す。

絶好の晴天の中、七時に放鳩された鳩群……。予想通り素晴らしい高分速続出のレースとなり、香月鳩舎の一番手はやはり、カズ・エース号だつた。芳川の興奮した声が響く。タイム寸前上空には、五十羽程の群れが、一分間隔で通り過ぎて行つた。香月鳩舎にも続々と鳩が戻り、二時までに八羽が帰舎すると言う、スピードレースになつた。香月は、カズ・エース号一羽だけタイムを打つた。

開園規正には、香月が今期初めて行つた。高記録に賑わう、持ち寄り場所には香月の周囲に学生競翔家達が集まり、助言を求めていた。香月は学生競翔家の憧れであり、又先生でもあつた。磯川は少し遠巻きに座つて、その様子を微笑みながら見ていた。ようやく一段落した頃、磯川が香月の所に近寄つた。

「よお！」

「あ、お久しぶりです」

「凄いよね、今日のレース。分速二千メートルw p超えているって話だよ」

「凄いレースになったもんですね、殆ど上位はコンマ秒、数秒単位でしょう」

「ああ、総合は間違い無く、東神原連合会だと言う事だ。こうなると、君のエースは有利だよね」
「いえいえ、分かりませんよ。この混戦のレースでは」

香月は、確かに有終の美を飾る、カズ・エース号の上位を確信していた。

「で、さあ、話は変わるけど、君の紫竜号の今後の予定は？」

「それが・・・四百キロレースで、主翼の左側大羽を傷めちゃったんですよ」

「そうなの・・・？具合は、どんな感じ？」

「先端七ミリが切れたような状態ですね、二枚」

「その程度か・・・切れば？」

「えっ・・・！」

香月は、磯川の提案に少し戸惑った。

「ここで立ち止まらず鳩じやない。今年は千キロを参加しとかなきゃ、来年が無くなるだろう？」

「磯川さんの提案は、分かります。それは考えて居なかった事ではありませんが・・・」

その会話を聞いていた川上氏は、少し厳しい顔で二人の会話に入った。

「それは・・・理屈ではそうだろうが、短距離ならともかく、長距離に参加させる鳩には、過酷なもの。まして、片翼だけの切断では、浮力バランスが崩れる。両方の羽二枚。計四枚は、極度の負担では無いか。そんな案には賛成しかねるな、香月君は選択しないだろうね、勿論」

強い言葉で、川上氏は迫った。

「あ・・・はあ」

香月は、そう言う言葉を発せざるを得なかった。磯川は少し、不満そうな顔をした。

「お言葉ではありますが、紫竜号の場合、豊かな副翼があります。大羽二枚の先端が少し短い程度では、殆ど影響はありませんよ」

「そう・・・断言出来るかな？君はそうするとして、実際にどんな些細な状況においても、絶対だと、言

い切れるのか？」

「それは・・・鳩レースに絶対はありません」

「なら・・・最大危険度を削除するのが、競翔家じゃないか。君の言うのは挑戦であり、冒険だ」

「確かに・・・仰る事は正論ですよ、川上さんの姿勢にも感服します。けど、紫竜号には、そうすべき運命があるんじゃないでしょうか？」

食い下がる磯川にはらはらしながら、周囲が見守った。川上氏の表情はいつに無く厳しかった。

「・・・どう言う意味かな？」

「では・・・何故出生を川上さん、香月君が隠しているのかは分かりませんが、白竜号、ネバーマイロード号の仔として、その天分を紫竜号が受け継いでいるからと言ったらどうですか？」

「な・・・」

川上氏と香月の顔が凍った、周囲の会員が集まった。

ざわざわと、この場はレースの結果を待たずに騒がしくなった。

「どうです？否定されますか？もう隠しても無理ですよ。はっきりした証拠もあります」

磯川が、血統書を差し出した。周囲の驚きは、最高潮に達した。ここで、香月はとうとう、正直に話した。

「今更隠しようも無い事ですし、だからと言つて、紫竜号が競翔に駆りたてられる必要性とは、結びつきません」

郡上氏が、溜息まじりに尋ねた。

「では、何故今まで内緒にしていたの？」

「紫竜号は・・・得られようとして得られた鳩では無いんです。気まぐれな神のいたずらか・・・そんな奇跡の仔鳩誕生を白川さん自身も、想定しては無かった。なのに・・・紫竜号がせめて、凡庸な鳩であつてくれたら、これ程、俺も苦悩する事も無かつた筈だし、ここで皆さんに大騒ぎされる事も無かつたと思います。内緒にする気なんて気持ちには無かつた・・・でも、初レースで、日本記録全国優勝をした紫竜号の、競翔鳩としての将来を思う時、それは、環境として静かに競翔を続けさせてやりたい・・・そう思いました。で、無ければ、恐らく紫竜号は周囲の雑言によつて、潰されていたと思うんです」

川上氏が続けた。

「白川さんと、この香月君の交流を知っている私は、どう言う思いで、この香月君が紫竜号を育てて来たのか分かってるし、故白川さんからの遺言もある。考えても見たまえ。日本鳩界を代表する、超銘鳩同士の仔鳩。この唯一の血を使翔すると言う事が、どれ程大変な事なのかを。だから私は助言し、今まで隠して来たのだ。いずれは素性も分かるだろう。でも、それまでは、そっとしておいて欲しかったんだよ」

磯川の顔面が蒼白になっていた。

「申し訳・ありません。ただ・悪意として暴露したのでは無い事を分かって下さい。俺は、川上さん、香月君と同様に、紫竜号の資質を認めています。それは、得ようとしても得られない、孤高の気高さと、素晴らしい筋肉、理想的な体の紫竜号に惚れたからです。それ故に、是非これからも活躍して欲しいと思う気持ちで言ったんです」

集計を終えた、会長達と、佐野を交えて、紫竜号を中心とする談義が始まった。

「ここに居る会員に言っておくが、口外は無用。香月君、川上君の気持ちを察してやれよ」

高橋会長の言葉に、黙って会員は頷いた。

「さて・・磯川君、その気持ちは純粹だと言う事にして、君の提案の真意はどこにある？」

高橋会長が言う、先程の話を聞いていたようだ。

「今、大羽先端を切れば、これから先のDC、VC等千キロレースには間に合うと思いました。典型的な超長距離鳩である、紫竜号は来年のGNには完璧な体になって、一番力を発揮する年代。その為香月君は、紫竜号を体が出来るまで、素質を温存する方法で、能力をこれまで、抑えて来たんだよね？」

恐るべき、磯川の慧眼。それは川上氏すらそう見て無かった。香月が頷いた。まさに、三国志のどちらが仲達か孔明・・競翔界のライバルの目は、鋭かった。

「君達は・・我々の常識や視点を遥かに超えている」

高橋会長、郡上氏、小谷氏が唸った。

「来年の為に、今期の千キロがあると言うのか？」

川上氏が聞いた。磯川も聞く。

「そうです。今年の方が、選手鳩存命か、否かの見極めでしょう。違うか？香月君」

香月が答える。

「そうです。紫竜号は自らをコントロール出来ません。その苦しみは、今脱皮するか、終わるかの瀬戸際です。競翔鳩に結果としてついて来る榮譽の記録の為に競翔を続けるんじゃないんです。俺は、その素質を百パーセント引き出してやりたい。それが、白川さんに報いる為である。そう思って居ます」

場は再び静まり返った。高分速に沸く五百キロレースの開函の夜では無い雰囲気であった。

佐野が、少し間が開いた後、こう言った。

「最終的には、香月君の判断なんですよ、それは。磯川さんよりもっと前から、紫竜号の生い立ちについては、俺も知っています。理由は、今香月君が言った通りです。紫竜号を使翔するのは、やはり香月君を置いて他には居ません。稀代の銘鳩達が残した遺児として、紫竜号の価値を見るのは、人間の勝手な思惑では無いでしょうか。自然に、より自然に、香月君は紫竜号の成長を願ひ、俺達もその気持ちを分応援して来ました。お願いです。鳩界の至宝と言う目では無く、香月君がこの一羽に向ける気持ちを分

かつてあげて下さい。この通りです」

佐野の暖かい友情の言葉に、自然に拍手が沸いていた。川上氏は、もう、何も言わなかった。

五百キロレース・川上氏が「白雪号」にて二万八千四百七十六羽中総合優勝を連合会新記録で飾った。二位にも「白兼号」総合二位。「白兼号」は秋の西コースV C千キロ総合三位の鳩でもあった。又英傑が生まれた。恐るべき白川系の血筋、連合会のメンバーは唖った。しかし、連合会三位には、カズ・エース号が入賞。総合でも十位に入った。素晴らしい短距離のエースも、これが最後。有終の美を飾る事となった。

その後、六百キロ、七百キロGPと続き、香月は、四百キロ二位のアルマ号で、GPレースを連合会さん位、総合二十四位に入賞させた。アルマ号には、来年千キロ挑戦の道が残った。七百キロGPの優勝は、佐野鳩舎のレビン号がこれも秋の菊花賞総合三位の鳩で、総合五位に食い込んだ。素晴らしい銘鳩が佐野鳩舎にも又誕生していた。二位が川上鳩舎、総合七位、三位がアルマ号、四位が磯川で、パイロビクトリー号（総合二十八位）・以下略。

東神原連合会は、今や日本競翔鳩界をリードする立場に立っていた。

主要競翔鳩の殆どが、種鳩鳩舎に移った香月鳩舎には、続く八百キロKC、九百キロQCと参加する鳩は居なかった。

その競翔の合間の中で、香織と出かけたのは、日下部ペットショップであった。香織がやはり一年後保母さんとして手伝う事となり、ようやく市の認可を受けて、そちらの打ち合わせも兼ねていた。日下

部氏は、早速香月を手招きした。

「よお、待ってたんだ。悪いけど、ちよつと鳩舎の方を見てくれよ、ドクター」

香月はA薬品会社の委託ドクターとなつて、いよいよ獣医としての活躍が始まる。

日下部氏が手招きしたのは、実は全然目的が違つていたので。香月が笑つた。

「なあんだ……。仔鳩の出来ですか。あははは」

「ふふ。良い口実だろ？あつちは、あつちで、今打ち合わせ中だしね。俺も少し君の意見を聞きたくて」

「良い出来ですね、ハンク×ステッセルボードの直仔。ミューとの交配も良い出来だ……」

着々と香月系の基礎鳩は作出されていた。

「来たんだらう？日下氏から、日下ピロ号の直仔……。どう？この仔鳩と比べて」

「比較は出来ませんよ。ステッセルボード系が二分の一とは言え、こつちは、シューマン系がまだ強く出ている。」

「秋には、その実力が分かるね。君の鳩舎から参加させるかい？」

「いえ……。それはありません。この仔鳩達は基礎鳩達と違つ、試し腹な訳ですから……。申し訳ありません」

んが、日下部さんの所で、使翔して下さいよ、今秋も。お願いします」

「はは。それは勿論結構な事だよ、昨秋は五連勝。今春も、もう三つも優勝している、先の合同五百キロレースでも、連合会優勝、総合百七十六位に入っている。尤も・君の連合会のような成績は到底無理だがね。この連合会の位置じゃ」

「無理を言います。とにかく三年後の春には、第三世代を使翔させる訳ですから、相当数のストック種鳩が出来るのです。その仔鳩達の中からどれだけの歩留まりで、残って来るか。それまでは、日下部さんの所での生きたデータが欲しいのです」

「ああ、分かっているよ。俺の鳩舎はやはり、オペル系で行く。それは、これから先も変わらないよ。ただ・・圧倒的だよ、この血筋の鳩達の方が。あははは」

「色んなタイプの鳩が作出されてきて、それから、一群のグループ分けをして、データを取って、血統書を眺め・・これからの十年間はあつという間でしようねえ」

「ふふ、年寄り見たいなセリフだね、若い夫婦にや、今からじゃないか」

「又、披露宴の時には、お知らせしますから」

「そんなの当たり前じゃないか。俺達は、家族なんだからな」

日下部氏との関係、川上氏との関係。周囲の環境。香月は確かに恵まれていた。

この時、香月の脳裏にあるひらめきのようなものが走った。それは、誰もが考えが及ばないような計画であった。その実行をこの時香月は、決心したのだ。それは、周囲を巻き込み、香月自身も極限の状態

に追い込まれるようになるとは、この時、考えもしなかった。

GCHレースとなった。香月鳩舎の参加は一羽。紫竜号が四百キロからの大ジャンプで、千百キロGCHに参加させられていた。主翼の先端は、磯川の提案通り少し切り込まれていた。それによって、紫竜号の飛びぬけて長い主翼からして、影響が出る程の事では無かった。香月は、紫竜号をどのレースに投入するかで、決定を悩んでいたのだが、今期の競翔が磯川も言っていたように、終わったのでは無かった。このレースが紫竜号にとっては、初めての長距離メジャーデビューとも言える。香月はこのレースまでに、紫竜号の贅肉を殺ぎ落とし、初めて完璧とは言えぬまでも、十分なコンディションで、このレースに参加させていた。

この日の紫竜号は、気負い過ぎる程気合が漲っていた。その同じ籠の中で、パイロン三世号が声を掛けた。

「よお、おっさん。又会ったな。久し振りだな」

「お前か……。今度こそ借りを返してやるぜ」

「ふふ。気の早いおっさんだぜ。海を渡るのは初めてかい？」

「二度目だよ。お前こそ、大丈夫かい」

「ふふ・・はあっはっは」

パイロン三世号は笑いながら、紫竜号から離れた。

パイロン三世号は前年CHレースで、総合十位になっている。前年のGP総合三位と、今春の四百キロも優勝している。並みいる参加鳩達中でも突出した鳩だ。周囲の鳩達からそのやりとりの様子を失笑が漏れていた。しかし、紫竜号の意欲は益々高まって行った。

その頃鳩舎では、二回目の日下氏からの子鳩が到着していた。今度も素晴らしい出来の子鳩だった。芳川が上空を飛ぶ、先に到着した仔鳩を指差して、にこやかに言う。

「見てご覧よ。もうあんなに高く舞い上がっている。今は、鳩舎も淋しいけどさ。すぐ一杯になるよね。」
「うん。種鳩鳩舎には全部入らないからストックバードとして、色違いの私製管を作っているよ。秋には、競翔家芳川のデビューだね」

「ああ。実を言うと、一男がこつちを任せてくれるって聞いてから、自分の鳩舎は考えは無くなったよ」
「狙い通りだ」

「うん？俺は一男の手の内だった訳かい？」

「俺はね、浩ちゃんと一緒に競翔をしたかった。それだけだよ」

「ああ、俺も実はそう思っていた。ただ・・一点を除いてね」

「紫竜号は、もう競翔に参加したよ。結果が出てから判断してくれよ」

「何かが・・起る・・そんな気がするよ、俺にはね」

芳川は、表情を曇らせた。

その二日後、悪天を避けた放鳩は、午前七時と言う比較的遅い時間となって一斉に大羽数が羽ばいた。「体が軽い」紫竜号は思った。無駄な筋肉を殺ぎ落とした紫竜号は、自分の自由に動く理想とする体に満足していた。一直線に先頭集団に張り付く。

「お・おっさん。無理するなよ。ははは」

パイロン三世号、見慣れた顔の白川系鳩群が、先頭を飛んでいた。どの鳩よりも先へ・紫竜号は、単独トップに立つ。見る見る集団を引き離し、曇天の空に消えて行った。早い・他の鳩群は思った。紫竜号は圧倒的な速さで飛んで行く。見慣れた風景が見えてくる。前年飛び帰ったコースだ。

その頃、香月の家に川上氏から電話が入った。川上氏は、このGCHレース前のCHレースで、白兼号で優勝、総合十九位に入った。今年も好調であった。次々と素晴らしい鳩群が生まれる白川系は、日本鳩界のトップとして、今や磐石な地位を固めていた。それは、川上氏の手腕が、一層白川系を磨き上げたのだ。

「七時の放鳩だったよ」

師弟の関係は、既に義理の親子となった関係よりも、深かった。信頼し、尊敬し、信頼されてもいた。「紫竜号もGCHレースには、最高の状態で、参加出来たね。大羽を切ると言う私としては不満で、万

全な状態じゃないが、放鳩車に積み込む前に触ったら、最高の状態だった。磯川君じゃないが、確かに：紫竜号を眺めたら、どんなチャンピオンも色褪せるよ。私も実は、紫竜号のファンなんだ。ネバー号の再来・それ以上かも知れない」

「紫竜号には振り回されますが、一番このレースが良い状態だと思います」

香月も肯定した。

快調にその頃紫竜号は飛んでいた。霧の立ち込める津軽海峡を躊躇する事無く、一直線に飛び越える。あの悪夢の昨年を忘れるかのように・紫竜号は知っていた。唯一当日一羽帰りの自分が、トップに立ってない理不尽を味わった事を。紫竜号は更に加速をし始めた。もつと先へ・もつとだ。曇天の空、驚異的なスピードが紫竜号を押しに行く。気流は紫竜号を運んだ。紫竜号の資質とは底から止めどなく溢れる才能の泉だ。その本能は、自らコントロールするのでは無く、自然に湧き出るような力となって、發揮されて行く。今の紫竜号の体は、ほぼ完成の域にあった。海峡をどの鳩よりも一番に渡りきった紫竜号。その先に昨年南下した、あのコースが見える。紫竜号は思った。

「こつちを飛ばば、早い」

紫竜号に恐怖心は、無かった。本能が、迷う事無く、南下コースを取った。紫竜号のこの選択は、実は間違っては居なかった。曇天の中、隼等の視力は効力を弱める。紫竜号の本能は、死への恐怖を上回

った。しかし、どこかで、紫竜号の脳裏には、昨年が出来事が引きずっていた。低空を飛ぶ紫竜号。そして、圧倒的に他を引き離す紫竜号に少し油断が生じたのは、この時であった。低空で、無風の状態で業を煮やした紫竜号が、陸地に急角度を取ったのだ。山際に進路を取る事で、上昇気流に乗り、家路までの飛翔を加速する事。この選択もやはり、紫竜号として間違ったものでは無かった・・が・・。高山に向かう途中で、紫竜号に異変が起った。自分の位置を突如見失ったのである。

「ど・・どこだ？ここは・・」

紫竜号は、旋回をする、それは何度飛んでも、同じ位置に戻る。自分は狂っているのか・・紫竜号は思った。そこは、*地磁気がずれる鉱山の跡地だった。この選択が、一分遅れていたか、早かったなら・・紫竜号の千百キロ唯一羽当日帰りの、日本記録レコードでの総合優勝は確実であっただろう。それ程紫竜号は、充実していたのだ。

*隻眼の竜 *閃きの中で

体力、気力、知力。当に最高の出来でもあった。紫竜号は、急降下を始めた。一端、羽を休ませて、休息を取る為に・・しかし、その地は、紫竜号に更なる試練を与えた。硫黄の噴出する大地。紫竜号は、再び上昇。この時紫竜号は思った。自ら、冒険する事の危険を。意を決した紫竜号は、高く高く舞い上がった。ようやく紫竜号に、明るい日差しが射したように、自鳩舎の位置が又見えて来た。紫竜号は再

び、海に向かった。が、その時海からは、低気圧による激しい雨と、強風が吹き始める。紫竜号は、低空を飛びながら、民家の見える上空に向かった。これ以上、羽が濡れたら危険・そう思った紫竜号は、民家の屋根下で、羽を休める事になった。既に、夕闇が迫っていた。この大幅な、紫竜号の迂回の中、パイロン三世号、白川系一群は、安全な空路を辿り自鳩舎まで、既に二百キロ地点まで戻っていて、そこで羽を休めていたのだった。大きく迂回した紫竜号は、前半稼いだ距離も貯金を使い果たして、鳩舎まで、三百キロの地点。この百キロの差は、もう挽回不可能。雨足は強く、明け方まで、止む事は無かった。夜間飛行する事も紫竜号には選択出来なかつたのだ。薄明るくなってから紫竜号は家路を急いだ。少し雨に濡れた体は重く、上空に上れない。羽ばたきを助ける風は吹かない。紫竜号の歯車が狂っていた。一方開けた平野部を戻るパイロン三世号達は、ゆっくり飛び帰っていた。今更慌てて帰る必要など無いからだ。先頭に行く鳩群は皆無。しかし、次第にパイロン三世号は、少しずつ距離を白川系鳩群に離されて行く。

白川系の五羽が、スピードを増したのだ。スピードでは叶わない。パイロン三世号は真南に進路を変えた。少しずつレースは変化して行く。圧倒的有利とは、どの鳩も言えない。近距離の鳩舎に有利に傾く、この千百キロGCHレース。白竜号のような圧倒的なスピードが無ければ、最遠隔地の東神原連合会が、総合優勝を手にするのは容易な事では無い。総合一桁と総合優勝では、全く価値が違うのだ。その圧倒的不利の情勢は、又刻々変化しつつあった。紫竜号は、突如折からの風に高く舞い上がっていた。鳩舎まで、一直線の距離に迫った時、前方に一羽の鳩が見えた、鳩舎方向に急降下する紫竜号。

「おおっ！」

振り返った、パイロン三世号が身震いした。猛スピードで、急降下してくるのは、あの「おっさん」と形容した鳩。

「よお、若造。まだそんな所に居たのかい」

紫竜号は、その横をすり抜けた。逆転・この不利を紫竜号は、三度ひっくり返したのだ。だが、その過ちを彼自身は知る由も無かった。紫竜号は食いつぶしてしまっただ、この時、自身の才能を・。

紫竜号が鳩舎に到着したのは、午前九時四十分。打刻をした香月だったが、その余りの姿に驚いた。紫竜号の全身はずぶ濡れ、羽毛は剥がれ落ち、主翼を完全に傷めていた。紫竜号に風が吹かなかつたら、飛ぶのもやつとの状態だったかも知れない、昨年負った傷口はぱっくりと開き、千百キロGCHをいかに、この鳩が無謀な飛翔をしたか、香月は悟った。傷口を消毒し、主羽を三枚ずつ香月は抜いた。紫竜号をしばらく舎外に出さない為だ。

午後になって川上氏から電話が入った。

「やあ。どうだね？」

好調のようで、川上氏の口調は明るかった。

「はい・・何とか午前中に戻って来ました。でも、紫竜号は自分を壊してしまったようです」

早い帰舎の割りには沈んだ香月の言葉に、川上氏は尋ねた。

「・・・どう言う・・事かな？順を追って説明してくれるかい？」

「はあ・・・今晚俺が行きます。鳩時計も預けなきやいけないし、その時地図でご説明します」

そう言つて電話を切ると、芳川に電話した。芳川は勤務であつたが、午後から戻つて来るようになっていた。

・・・昼から戻つて来た芳川が驚いた。

「わあ・・・どうしたんだ・・この有様・・」

紫竜号の体に真つ赤についた赤チンを見て、芳川は驚いた。見事な絹のような羽毛もぼろぼろ、主翼も短くなつていた。

「主翼三枚は駄目だから、抜いたよ。それより、見てよ・・・この傷・・・」

「どうして、こんなになるの・・・？」

「もう・・・どうしようもないね、紫竜号は自分で、自分を潰そうとするんだ」

吐き捨てるように香月は言った。

「もう、これで、年貢の納め時・・・良い機会と思えば良いさ」

芳川は安心したように答えた。

「ああ・・・もう、呆れたよ、紫竜号」

香月は疲れた表情で、言った。

「で・・・どうなの？この紫竜号の帰舎は・・・」

「ああ・・・さつき川上さんの所の帰舎が、余り詳しく聞けなかったんだけど、五羽が殆ど同時刻だったらしくて、十一時前とか言ってたなあ・・・」

「それで、紫竜号は？」

「タイムはしたよ、九時四十分頃だと思っけど」

「それじゃあ、早いじゃないか！」

芳川が大きな声を上げた。

「そんなもん・・もうどうでも良いや・・」

香月の緊張の糸は切れているようで、吐き捨てるような口調で香月は言った。順位には全く感心を示さなかった。それ程、紫竜号に対して、全てを裏切られる思いがしたからであろう。

「今度こそ死ぬよ、紫竜号。次のレースで」

香月はそう、紫竜号に向かって言った。その言葉を理解できる筈もなく、疲れた体を鳩舎内で休めていた紫竜号だった。

香月の苦悶が始まった。それは、悉く裏切られ続けた紫竜号との残り一年を予感するように・・。

そして・・一週間後、GCHレースの発表が行われた。紫竜号・・GCHレース三万九千六百四十二羽中総合優勝。絶賛の嵐が吹き荒れる。最遠隔地での総合優勝だった。雑誌社の写真を、香月は無理を承知で、差し替えて貰った。とても、現状では見せられない体だからだ。出生も全国に知れた。これは

もう隠しようも無い事だった。しかし、あらゆる取材を、多忙を理由に香月は断り続けた。このレース、磯川のパイロン三世号も連合会二位、総合九位に入賞、文句無しのCHの称号を得る。紫竜号にも打診はあったが、延べ飛翔距離が少ない事で、見送られた。が、銘鳩大鑑には記載される事に。香月は時の人となったのだ。川上氏は三位から七位を占め、総合十七位、二十八位、四十六位、六十八位、九十位、佐野がタンギ号で、八位、総合九十七位、高橋鳩舎が九位、総合百二十六位、郡上鳩舎が十位、総合百八十七位・他。

最終GNレースは、郡上氏が、優勝、総合三十一位、川上氏が二位、六位、浦部が、三位、磯川が四位、小谷氏が五位、佐野が七位、高橋鳩舎八位、渡部鳩舎九位、西条鳩舎十位と、連合会では、総合三十一位を筆頭に、それぞれ、二十六位、三十五位、四十位、四十八位、五十六位、六十四位、七十一位、八十九位、九十九位と入賞をした。

この春のレースはようやくファイナーレとなったのだ。しかし・喜ばない男が二人。香月と川上氏・それぞれ違う視点で、初めて師弟の間に見解の相違が生じていたのもこの頃だった。

「だから・それは無謀なんだ」

険しい顔で、川上氏が言う。

「しかし、紫竜号が終わるかどうか、最後に俺は賭けたいのです」

香月が食い下がる。何があつたのだろうか。何時もの師弟の会話では無かつた。

「既に、GCH総合優勝と言う金字塔に輝いて、これ以上紫竜号に何を望むのか」

「紫竜号にとつて、これが終りとは思えないからです」

「君は・・・私と約束した筈だ。ネバー号の悲劇を又君は作るつもりなのか？」

少し悲しそうな表情になつて、川上氏は聞いた。雑誌社等からの電話、ひっきりなしに香月の所に訪れる訪問者の応対に明け暮れる毎日に、香月は疲れきつていた。そして・・・紫竜号は、今・・・川上鳩舎に居る。

大きく香月はかぶりを振つた。

「来年・・・もう一度だけ、紫竜号を参加させたいのです。どうか・・・」

川上氏は、ぼろぼろに傷ついて戻つて来た紫竜号を、半ば強引に香月の所から引き取つた。それは、現在の香月鳩舎の状況を見れば分かる通り、師匠としての心遣いからだ。それには香月は心底感謝していた。しかし、この行動は川上氏に微妙な心の変化をもたらしていた。川上氏自身、紫竜号に魅せられたのだ。磯川がそうであるように、白川氏が、ネバー号に魅せられたように・・・この偉大な競翔家にし

て、非の打ち所が無い競翔鳩の紫竜号には心を惑わせるものが確かにあった。

「紫竜号の目はまだ・・死んでいません」

香月が重ねて言う。

「見るかね？・・私の鳩舎の中で、今ルピー号（旧川上系群勢山系の品評会総合一席の美鳩）と番になつている。あの穏やかな表情の紫竜号の目を見たまえ。私も実を言うと、もう手離したくない程紫竜号に惚れこんでいるのだ」

気持ちを川上氏は隠さなかった。それが、師匠の要望なら、香月も否とは言えないだろう。

川上氏の後について、香月は鳩舎に向かった。

種鳩鳩舎の一角で、確かに仲むつまじい、紫竜号とルピー号が居た。穏やかな表情だった。決して香月鳩舎では見られなかったシーンで、雌鳩を寄せ付ける事の無かった、紫竜号の異変に香月も少し驚いた。

「どうだ？紫竜号は、これでも戦場に出向く顔かね？カップリングが成功すれば、やがて仔鳩も得られる。この仔鳩達を君が使翔すれば良いじゃないか」

川上氏はそう言った。しかし、香月は紫竜号をじつと凝視していた。抜いた主翼が少し伸び始めている。

「紫竜・・・一時の休息を楽しむのは構わない・・・だが、お前は、その沸き起こる激情を誤魔化しているだけ・・・」

そう呟いた香月の視線の先で、紫竜号の目が爛々と輝き、再び鋭い眼光が放たれた。

「お・・・おお・・・そ、そんな・・・」

川上氏が、震えた。

「楽しむが良い、紫竜号。お前の生涯の中で、こんな美しい雌鳩と過ごす一時の至福の時間を。だが・・・お前は、きつと・・・きつと・・・」

溢れ出る涙を香月は隠さなかった。その時初めて、川上氏は自分の何十倍も紫竜号を愛する香月の心情を悟った。自分のつまらない感情等吹き飛んでしまうような深い愛情で、失うかも知れない辛さと必

死で戦いながら、香月がこの紫竜号を育てて来た事を。

「済まなかった・・香月君。この通りだ」

川上氏は、自分も涙を流した。そして、香月の手を握った。理屈では無い、経験でも無い、それは人間と動物と言う枠を超えた、情念の世界。人はすぐ結果を求めようとする。その宝を崇め奉ろうとする。棚に陳列して眺める事を至福とする事は、人間たる俗物感情・・。だが、競翔鳩は、生きているのだ。短い生涯の中で精一杯戦いながら生きているのだ。香月は競翔家だ。誰よりも鳩を愛する競翔家なのだ。紫竜号の燃え尽きない、その情念は例え、この先この鳩自身を失う事になろうとも・・、香月はもう、その辛さと決別していた。その事を川上氏はこの時悟ったのだ。

「来年・・どれ程怪我を完治させられるのか分からないが、私は自分の競翔人生の全てを賭けて、紫竜号を治して見せる。そして、私とルビー号は愛情で接し、全力で、再び羽ばたこうとする紫竜号を阻止する。それが私の最後の抵抗であり、使命だ」

香月と川上氏は、固く約束を交わした・・。

遙かな未来へ

香月と香織が住む新居が建造されていた。この春レース後、ようやく二人の生活が始まる。S工大教授として、研究、教鞭、講演を行う傍ら、獣医として忙しく駆け回る日々を過ごす香月だった。

芳川使翔の日下ピロ号の仔鳩は、秋レースの百キロが三位、二百キロ二位、三百キロ二位、四百キロ六位、五百キロ七位、六百キロ九位、七百キロ四位、総合六十七位と大活躍を見せた、十二羽参加で、十一羽が残り、頭抜けた競翔鳩としての資質を見せた。秋レースは、川上氏の白川系が、百キロから七百キロまで全て優勝、圧倒的な強さを誇っていた。一方西コースの五百キロでは磯川が優勝、六位を独占、七百キロでは佐野が優勝、昨年を引き続き、総合五位に入賞。最終千キロVCでは、川上氏が優勝、総合二位に入った。三強は変わらず、その中で、日下系が少ない参加羽数で全参加レース入賞を果たした事は特筆ものであった。体の出来る三歳以降に力を発揮する日下系だ。期待の持てる若鳩が作出されていた。香月は期待以上の成績に喜んだ。ステッケルボード系の交配は、実に上手くいったものである。日下氏も同様に喜んでくれた。

そんな中、香月の所へある団体から手紙が入った。それは、鳩レースが動物虐待に繋がると言う文面であった。慌てて香月は川上氏の元へ走った。

「ふむう・・・こう言うヒステリックな抗議や指摘は、我々にとつては、強く否定したいのだが、GNレースのドキュメンタリーと称してTVが放映した事に端を発したようだ。エスカレートする前にどう

にかしなれば・・・」

川上氏は、大急ぎで高橋会長に連絡を取ると、会員に緊急招集を掛けた。臨時の連合会の会を催したのだ。

その席上で、会員達は激しくその団体の事を非難したが、所詮一連合会で、解決出来る話ではない。香月が日下協会理事を訪ね、解決策を模索した。日下氏はただちに協会誌に長い論文を掲載。そして、香月も紫竜号を題材とした論文を掲載。その内容について異例のTV放映が行われ、動物愛護団体を自認するメンバー達との対話が企画されると言う慌しい流れとなった。

参加したのは、日下氏、川上氏。そして香月が動物博士として参加。団体は、五名のメンバーが参加していた。

「最初にお尋ねします。貴方達が行っている鳩競翔とはどんなものですか？」

川上氏が答える。

「鳩を愛し、優れた帰巢能力を磨き上げる我々はトレーナーです。競翔とはその訓練の成果です」

「優劣を競う事が大前提で、つまり順位至上主義ですよね？その実態は、一握りの優位の個体だけを求める、淘汰主義では無いですか？」

「競翔とは、遠距離で争うものもあれば、短距離で行うものまで様々です。その中で、失踪鳩が出るのも事実ではあります」

「貴方は競翔界でもトップ競翔家として名高い。貴方にお伺いします。貴方は、スタートを今年何羽の鳩で競翔に望み、何羽最終的に残りましたか？」

「比較は適当ではありません。各地、各条件によつて、一概に導き出される答えではありませんから。ちなみに、私の鳩舎で言えば、昨春百二十七羽スタートしまして、最終的に百一羽が戻つて来ました」

「それは、他の鳩舎と比べてどうですか？多いんですか、少ないんですか？」

「悪い数字では決して無いと思います」

「それなら、鳩レースは百羽参加させて、半分も戻つてくればよい、そんな動物を使い捨てにするようなもの・・そう断定しても構いませんか？」

「待つて下さい。貴方達はヒューマニズムか何かは知らないが、競翔のただ、一元的な見方しかしていない。そこにある競翔家の愛情や、努力をまるで知らないから」

川上氏は少し顔を上気させた。そもそも、こう言う論議は不毛なものだ、香月はそう思った。そこで香月はパネルを出して、競翔鳩の骨格、知能、能力を説明し始めた。不要！時間の無駄だ！乱暴な意見が飛び交う。そこで、香月は団体にこう質問した。

「それでは、私の方から質問致します。貴方達は動物をどう自分で捉え、理解していますか？」

「人間社会にあつて、本来動物は弱肉強食の世界に生きるものが、勝手な思惑によつて愛玩動物、つまりペットとして扱われている。即ち、野生で無くした彼等を守り人間にとつての友、家族としての地位として捉えている」

「成るほど。つまり自分の都合の良い動物は、愛玩で、一方は食する為と分けているのですね？」

そんな事は言っていないだろ！激しい抗議が起つた。

「どんな動物にせよ、生きる為には食せねばなりません。あの動物は可愛いからと言つて、殺してはいけない、この動物は賢いから大事にするんだ。それこそ、人間たる勝手な所以でしょう。良いですか？貴方達の中には競馬を楽しむ方も居られますよね？」

「ああ・・・？」

何の関係があるんだ！又激しい抗議が起つた。

「動物を育てるのは科学じゃありません。競馬と言うものが、一部の優秀な馬を賞賛するように、競翔の世界にあつて、我々の一部にはそう言う勘違いしている者も居ないとは言いません。ですが、愛情無くして、競争鳩は育ちません。絶え間ない努力無くして、現在のような競翔鳩の歴史は無いんです。一元的な見方でもつて、貴方達に競翔鳩の何が分かると言うのです。数多くの競翔鳩には私製管を入れて

います。GNレースに参加する鳩は前年までに千キロ以上飛翔した鳩に限られています。それでもなお、厳しいレースで、落伍する鳩が居ます。でも、ここまで育てた鳩を失いたくない競翔家なんてどこにも居ません。それだけを捉えて、切捨てするような乱暴な意見は取り下げて下さい」

厳しい香月の意見に、先ほどの激しい野次は少し治まったが、

「でも、事実は事実だろう。鳩の多くは外敵の危険にもさらされている」

「そう言う面は確かにあります。しかし、それが鳩競翔を否定する言葉にはならないと言っているのです」

(しかし・／@☆・・・)

議論は尽きなかった。最初から敵視している団体との和合などはなから無駄だったのだ。しかし、一応の形を持って、この団体に対する話合いの形で、一端は終息する事となる。だが・・・この意見交換の場で、厳しい反論をした香月に対して、団体から厳しい注目を浴びる事となる。香月に新たな局面が生じたのだった。

「来たまえ」

川上氏から電話が入った。紫竜号の放鳩の日が来たのだ。紫竜号とルビー号の卵はやはり無性卵だった。

隔離鳩舎の前に立った川上氏は、静かな口調で言った。

「驚くべき事だがね。奇跡的な回復だったよ。ほぼ健康状態を取り戻していると思う。こうして見ると、君が年月をかけていかに、ここまで紫竜号を育てて来たか、深い愛情が私にも実感出来たよ。もう・・・何も言うまい。」

「良く・・・ここまで・・・深く感謝致します。全ては川上さんのお陰です」

「二度と君には渡すまい・・・そんな事を思った日々もあった。この穏やかな紫竜号の顔が、彼自身の幸せとするなら、もう、それで良いじゃないか・・・私はそう思った。ただ、君がここまで施して来た訓練がこの体を作り上げた・・・それは、紫竜号を競翔鳩として育てて来た意味で、君に最終的には帰属するものだろう。最後の挑戦をしたい。私も、競翔家として、せめて・・・」

「はい・・・でも、今の紫竜号が完璧な体に回復したとしても、俺を主人とは認めないでしょう。その責任は負わねばならないと思います」

「君は・・・一体・・・」

その瞬間・・・紫竜号の穏やかな表情が一変し、香月を睨むすさまじいその眼光に、身震いした川上氏だった。香月も紫竜号も、見詰め合ったまま微動だにしない。

香月君は、一体、紫竜号にどんな厳しい訓練を強いて来たのだろうか。川上氏は思った。

一羽と、一人の天才。交わる事の無い、感情・感性・・・互いに飛び散る火花が見えるようだった。

「では・・・良いんだね？紫竜号を今から放して」

「ええ。お約束した通りです。紫竜号が俺の鳩舎に戻れば、今期、CH、DC、GNレースに参加させます。ここへ戻れば、川上さんの所で飼って下さい」

「例の団体等は、激しく君を非難するだろう。鳩界関係者さえ、疑問を投げかける者が大半だろう。それでも、君は無謀としか見えない挑戦をする事になる」

「責められるのであれば、それはそれでも構いません。しかし、それを成し得る事が出来る鳩は、紫竜号を置いて他に居ません。又、それが、白川のじいちゃんが残した夢であったとしたら、やはり紫竜号は白竜号、ネバー号の無念の思いにも報いてやらねばならない。紫竜号は、その為に俺に託された・・・そんな気がするのです」

「何度討論して来ただろうか・・・この事を・・・しかし、今私は思う。君と白川さん、白竜号、ネバー号は運命の出会いをしたのだと」

川上氏は紫竜号を抱いて外へ出した。ルピー号も一緒に。川上氏には驚く程従順に・・・穏やかな表情の紫竜号であった。静かに川上氏は言った。

「紫竜号・お前にはもう分かっている筈だ。お前には憎しみしかあるまいが、その激情と引き換えに、何度も死地から救つて来た、香月君の深い愛情を。お前にとつて、一番の理解者が香月君である事を……未練だ……惜しい、実に惜しい……これ程の競翔鳩を手放すかも知れないこの瞬間が……しかし、私は放鳩しなければならぬのだ……さあ……安息を選ぶか、試練を選ぶか、お前に任せる」

潤む目で、優しく紫竜号を撫でる川上氏。紫竜号の表情が緩んだ気がする。

夕方四時ジャスト。運命の分かれ道だった。寒い一月の冷気の中、紫竜号は大空目掛けて解き放された。続いてルピー号。

まっすぐ西の空に向かった紫竜号が、一度視界から消える。

「やはり……無理か……」

そう思った川上氏の眼前に、紫竜号はその姿を見せた。

「おお……！」

紫竜号は、ルピー号と何度も川上鳩舎の上を旋回する。

「もしかしたら・・・」

川上氏は感じた。だが・・・何十回の旋回の後、ルピー号との別れを惜しむように、最後に上空高く舞い上がった。ルピー号が到底ついて来れない高空へ・・・そして見えなくなった。

肩を落とした川上氏の前に、別れが分かるのか、力無くルピー号が舞い降りた、何度も何度もぐうぐうと喉を鳴らし、泣いているような悲しい声だった。川上氏はルピー号を抱いた。

「許しておくれ・・・ルピー号。こうなる事は分かっていたのだ。お前の愛情は深く紫竜号には届いていない。しかし、止めようの無い運命の力によって、紫竜号は限りない飛翔へ旅立ってしまったのだ・・・」

ぼろぼろと涙を零す川上氏に、黙って一礼をすると、香月は家に戻った。

夢語る時、人は遠くを眺める眼差しで、童顔のようになって・・・そして言う。

「俺は何時か・・・私は何時の日か・・・」

香月と紫竜号は夢を語ったのでは無い。共に夢を見たのでは無い。運命に導かれ、翻弄されたのだ。だが、類稀なその才能は、しっかりと現実を見つめ、才能に溺れ、自らを壊す事は無かった。堅実な土

台を作つて来た。

春・・日本鳩競翔界に、どよめく大記録が誕生する。

「奇跡の超銘鳩の仔「紫竜号」、昨年度GCHレース総合優勝に続く、CHレース当日唯一羽帰り三万四千五百六十八羽中総合優勝！」

大騒ぎの中、次のDCにもエントリーされている事を知り、周囲が愕然となる。激しい団体からの抗議があつた。しかし、川上氏、香月は、平然としてなお、こう言つた。

「驚くのはまだ早い。次のGNにもエントリーしている事を知れば」

その爆弾発言に、非難の声、驚嘆の声が猛烈に上がる。

時を同じくして、川上氏から手記が発刊される。その手記の中で、これまで、全く見えなかつた鳩レースの世界、鳩に接する競翔家の愛情、そして香月少年との出会い、恩師との別れ、怪物紫竜号との深い愛情に包まれた、香月の飼育法、訓練、愛娘との結婚・・読む者は涙した。それは、一冊の本を超えて感動するドキュメンタリーであつたからだ。

団体からの抗議も、まるで、意に返さぬように、静かな笑みを浮かべながら、香月達はこう言つた。

「総合優勝なんて、人間の価値観ですよ。それを求める為に競翔をしているわけではありません。誰よりも深く鳩を愛し、そして歩んでいるのです。共に・・・」

日下氏はこう語った。

「愛無くして、競翔は語れず。努力無くして銘鳩は、誕生せず・・・」

DCレース、一万七千六百三十二羽中、当日帰り日本記録で、連続総合優勝の快挙が達成されたのは、十日後の事であった。

香月は、今度は絶賛された。天才競翔家だと。見事な手腕であると・・・。

二週間後に迫る、GNレースについては語りませまい。所詮は作者の一人よがりの文章。作者は字を知らず、文章を知りません。きっとどこかで、紫竜号は、皆さん達競翔家の手によって飛んでいるでしょう。

紫竜号は、このGNのレース中、こう思った。

「白い・・・白い雲が見える・・・ああ、優しい主人が待っていてくれる・・・早く帰らなきゃ・・・」

紫竜号がどうなったか・もし知りたい方があれば、*閃きの中でをお読みくださいませ。

完